
ラブハンド

hisasi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブハンド

【コード】

N3230I

【作者名】

hisasi

【あらすじ】

女の子のお腹の肉を追い求めた男の話です。

「ラブハンド」とは俗に言う「ラブハンドル」の事です。

如何わしいようで、実は純愛なんです！

お腹のお肉（前書き）

実は「ラブハンドル」という言葉を聴く前に、「ラブハンド」という言葉と、話の後世は出来ていました。偶然の一致。

でも、世の中ってそんなもんですよね。アイデアだって良くかぶるし。

でも、これを小説に取り上げる馬鹿な男は私だけでしょう。ちがうか！

お腹のお肉

『ラブ・ハンド』

人間は男と女、二つの性で成り立っています。人類が火を手に入れて、粘土板に文字を刻みこみ、大洪水に飲み込まれる前から、男と女で成り立ってきました。

いや、男好きの男もいれば、女好きの女もいるじゃないか、という方もいるでしょう。

確かに、長い人間の歴史にはそんな話も多々ありますが、それらの話は他に譲りまして、これから綴る話は女を愛する男の話です。

そう、何千年も前から、色々な事情がありつつも、男は女を愛してきました。ほとんどの人は疑う事はないと思いますが、中にはそんな事は信じられない、とおっしゃる方もいるでしょう。ただ、そんな事を言う人でも、一組の男女が、(一時的とは言え)愛し合ったからこそ、そこに存在している事を思い出してください。それに、そうでなければ、こんなに世界中に人間がはびこっている訳がありません。

人は人が好きなのです。

もっと言えば、男は女の事を好きなのです。

色々な女性がいて、色々な魅力があります。男性は、女性の魅力に気づくことで、自分の中の女性の好みを知り、自分を知っていきま

す。もちろん、僕もその一人です。

僕も女性の事が好きです。

はい？

君は女性の何が好きなんだって？

まあ、焦らないで下さい。それを今からお話していくんですから。

女性の何が好きなのか？

女性が何しているのが好きなのか？

女性のどの部分が好きなのか？

女性の一番好きな所は何なのか？

色々な女性の魅力があるので、まったく迷ってしまいますが、僕の女性の好みは一言で言えます。そう、僕が女性の体の部分で、どこが一番好きかと聴かれたら、すぐにこう答える事が出来るでしょう。

「ラブ・ハンド」

初めて聞いた方もあると思うので、詳しく説明しましょう。

それは、女性達が常に気にしているであろうし、体のスタイルを気にする上で、とても重要な所でもあります。どんなダイエット本にも、この部分を抜きにして書かれている本は無いだろうというほど、女性達には気になる部分でありましょう。なぜなら、この部分は、痩せたい人には一番厄介で、取り除くには一番時間がかかり、尚且つ、気にしていないとすぐに元に戻ってしまう、そんな憎むべき所だからです。

体のスタイルを気にしている女性なら誰でも気になるその場所は、体の中心、お臍の両脇、腰骨の上。要するに、お腹の周りについていて、腰の骨の上に乗っているお肉。

そう、腰の横から横に飛び出る皮下脂肪の事です。

この場所は、女性なら一度は気になった事があると思います。いや、一度ならず、今でもずっと気にしている方もいるでしょう。嫌いで嫌いでも仕方なくて、できる事なら切り取ってしまいたいと思っている人もいるかもしれません。

でも、聞いて下さい。

僕の考えは違います。女性達の感じるその部分の評価と、僕の評価は違うのです。

女性達の求める理想のウエストとは、括れていて、無駄がなく、す

らつとしてゐる状態だと思ひます。そう、モデルや、女優さん達みたいな。

確かに、そこまで体を磨き上げ、努力し維持していく努力は感嘆に値します。

しかし、僕にはまったく魅力には感じられません。僕に言わせれば、そんなのはまさに神への冒瀆です。

僕の愛する「ラブ・ハンド」

それは、勿論はみ出ているのは当然として、触って柔らかく、艶があつて張りがあり、プツクリして弾けそうに、腰骨の辺りから包み隠さず顔を出してゐるような、あのお肉が、僕の女性の一番好きな所なのです。

わかりますよね？

今の女性達の様な細い腰じゃないんですよ。

僕の求めているのは、お肉のある腰なんです。

例えば、女の子がジーンズを履いていますね。そして季節は夏、少し丈の短めのTシャツを着てゐるでしょう？そんな女の子が、自車で自分の隣を通り過ぎた時、サドルに乗つてゐるお尻の両端に目を凝らしてください。そして、ジーンズの上にはみ出るお肉が、Tシャツの裾からかいま見えたら！

「ラブ・ハンド！」

そんな光景に出くわしたなら、僕はいつぺんに幸せな気分になつてしまふんです。そして、その瞬間の映像を目に焼き付けて、一日中思い出しては幸せな気分になつてしまひます。めつたに見れない、貴重なショットに胸が熱くなつてしまひます。

そう、めつたに見る事が出来ないのです。

女性達は、ダイエットに励み、腰の肉を目の敵にして、せつせとせつせと汗を流しています。貧乏人からセレブまで、さまざまな方法でこの腰肉を落とそうと必死です。そして、あろう事かその成果が

確実に上がっていて、最近の女性達のウエストは細くなる一方です。超音波や、脂肪吸引なんか持ち出されてはそれも仕方ないかもしれませんが、技術の進歩はすさまじいのですから。

そして、そんな事をしていない人ですらも、腰の肉を隠そうと必死になっています。彼女達が腰肉を見せるなんて事はいたしません。残念ながら。

ここで言っておきたいのですが、僕は別に病気でやせている人に、無理に肉を付けるほうがいいとは言っていませんよ。命が何よりも大事です。自分の命を無駄にしてまで、僕の好みのようになってくれ、とはとても言えません。どうしてもお肉を付けられない人が、無理してお肉を付ける事は、僕の望む事ではないんです。

まあ、そんな事してくれる人はいませんけどね。

そうそう、僕がただのおデブちゃん好きだという人も出てくるでしょう？とにかくお肉が好きなんだろう、って言う人です。体外の人がそう思いますけど、そうじゃあないんです。確かにお肉は好きですが、おデブは僕の好みじゃあないんですよ。お肉が好き、って言ったって、特に好きなのは腰肉ですし、まあ、太ももなんかも好きですけど、やはり、腰に乗ったお肉が好きなんです。おデブな人って言うのは、まあ、全体的に太っているでしょう？パンパンになっている脛とか、弛んだ顎とか、三段に分かれて垂れ下がったお腹とか。これははっきりしてます。

まあ、僕はその人達の事をどうこう言うつもりはありません。それは、その人達が自分で決める事ですし、勿論、病気になってやせるのが困難な人に、僕がこんな事を言うのはまったく失礼な話ではありません。許される事ではありません。しかし、僕が言いたいのは、ただ、お肉がある人が、お腹を出せば僕が満足するかといえ、違うと言う事なのです。

そう、それが言いたいのです。

要するに、脂肪の質が違うということ。おデブな人につく脂肪は内臓脂肪で、そんなお腹を見せられても、僕に喜びはおきません。

内臓脂肪で大きくなっているお腹は、男の人のお腹を見ればよくわかると思います。男の人のお腹は、大体内臓脂肪で大きくなっています。もちろん、女の人も例外ではありません。そんなお腹では、真のお腹の美しさは出てきません。

真のお腹の美しさに必要な脂肪、それは皮下脂肪なのです。

内臓脂肪のないお腹に乗っている皮下脂肪があつてこそ、いい「ラブ・ハンド」は作られます。しいて言えば、太った人がダイエットを始めて、徐々に健康的に痩せていき、足首や二の腕が痩せて、顔のたるみも取れて、勿論内臓脂肪なんかは消えてなくなったのに、お腹の回りにだけは程よく皮下脂肪が残っている状態の女性・・・。そんな女性こそは、いい「ラブ・ハンド」の持ち主だといえるでしょうもちろん、そんな事をしなくても、小さい時からちゃん育てられていればいい「ラブ・ハンド」を持つ人はいるでしょうが・・・。

でも一ついえる事は、そんなお腹は自然のおりなす美だと言う事です。

それは、まさに芸術・・・至高の美なんです。

さあ、想像して下さい！

そんな女性がいて、胸元あたりまでしかないタンクトップを着て、ベルトをきつく締め、ジーンズのホットパンツを履いているとしましょう。そんな女性が腰をひねらせて、ベルトの上にお肉を載せながらこちらを振り向いたとしたら。その腰の肉を想像してください。たまりませんでしょう？

それが見れたら、僕はどんなに幸せでしょうか。

そんな女性達が巷にあふれて、いつでも眺める事が出来たら。

日本女性達が、みんな僕の考える「ラブ・ハンド」を持つようになったら。

僕にとってはパラダイスじゃあないですか。

しかし、今の女性達は、どんどん細く、どんどん括れていき、どんどんスリムなウエストになっていくようです。

時代は僕の好みとはどんどんかけ離れていつているのです。

何とかしなければ！

どうにかしてこの「ラブ・ハンド」を広めていかなければ！

いや、「ラブ・ハンド」を持つ女性達を増やしていかなければ！

僕の中で、そんな思いが日に日に強くなっていきました。いや正確には、どうやら幼い頃からそんな事を思っていたようなんです。

僕が生まれたのは、冬の寒い日で、午前中だったと聞いています。

病院には父親と幼い兄二人、そして、祖母が来ていたそうで、些細なアクシデントもなく、元気に生まれたそうです。三人目と言う事もあって、母は慣れていたのでしょう。大きく生んでくれて、僕はすくすく育っていつていきました。

僕は覚えていないのですが、はいはいをする様になった時、僕の行く方に待ち構えていた母の胸に飛び込まず、お腹に飛び込んだり、おっぱいを吸った後に必ずお腹の上で寝たそうです。

「^{たけし}武士。あなたはほんとにおかしな子だったよ。お風呂に入れた時だって、あたしのお腹を握って離さないんだから。何でかって不思議に思ったものだよ。それに、あたしだけかと思ったら、良子おばさんとか、多恵ちゃんとかにも。武士にお腹の肉摘まれたって言って、多恵ちゃんなんか武士とお風呂に入るのやだって言ったのよ。あと、おばあちゃんだって」

母は小さい頃の僕を思い出すと、必ずこの話を織り交せてきます。まだ小さい時にそんな事を言われても、そんな事があったのかと思うだけでしたが、今思えば、なるほどと頷いてしまいます。小さい頃から僕はお腹の肉に興味があったのです。

それが僕の初めての「ラブ・ハンド」体験でありました。ただ、僕

が「ラブ・ハンド」を自分の中で意識したのはもう少し後になります。それまでに、幼稚園の先生のお腹に触りまくっていたとか、初めて会う女の人のお腹は必ず触ったとか、何かとあったようですが、自分の中で確信があったというか、自覚したというのは、物心つく時期と重なっていて、小学生の頃です。

それは、小学四年生の夏の事でした。

体育の授業をする前に、生徒達は運動場に並んで座っていました。三クラスが男女二列になって、ジャージ姿の川原先生の話をしているのです。川原先生は僕の担任の先生で、三十五歳独身、長身のスポーツマンで、隣に立っている四組の鈴木先生の事が好きと言う事になってました。

川原先生は、これからするリレーの説明を、生徒達にいつもの大きな声でしていました。生徒達は、生徒達の指導に厳しい河原先生に怒られまいと、ちゃんと話を聞いています。

しかし、僕は先生の話なんか聞いていないで、違う事に集中していました。

何をしていたかと言うと、ずっと、ずっと、斜め前に体育座りしている恵美ちゃんの事を見ていたのです。正確には、背中を丸めて座っているのです、体操着がパンパンに張り裂けそうになっている恵美ちゃんの腰のお肉でした。体操着越しなのですが、腰にお肉が乗っている様子が僕の目には見えたのです。凄く気になって、先生の話なんて、まるで耳に入ってはいなくて、ずっと恵美ちゃんの腰を見ていました。

僕はその時、初めて女の子に触りたいと思ったのです。

それくらい彼女の腰肉は、プックリとはみ出していました。

「武、どうしたの。先生にまた怒られるよ。話し聞いてなよ」

隣から肩をこつかれて、不意に僕の妄想の世界は壊されました。声をかけられた方を向くと、北村愛子きたむら あいしが僕の方を見ながら先生の方を指差していました。この女の子は事あるごとに僕に突っかかってくる奴で、三年生の頃から一緒のクラスになっていました。

「何でも無いって。ガリ子には関係ないだろ」

僕はそう言つて、また恵美ちゃんの腰を見ました。恵美ちゃんが動くたびに、腰の肉も動きます。

「恵美ちゃんの事、好きなの？」

唐突な北村の言葉に、僕は慌てて弁解しました。突然、何を言っているんだらうか、このガリガリ女は。

「ガリ子、黙れ。お前には関係ないだろう」

そしたら、運の悪い事に、後ろの陽介君ようすけが話を聞いていたんだなあ。

「武士、福田の事好きなの？ そうなの？ おい、武士、福田の事好きなんだって！」

「ち、違つよ！ そんな事ある訳無いじゃん！ こいつが勝手に言うるだけで」

「先生！ 小田切君が、福田さんの事を好きだそうです！」

陽ちゃんがでかい声で、そう叫びました。当然、三クラス全員が、僕の慌てふためいて赤くなった顔を見ました。あろう事か、僕は愚かで馬鹿な事に、勢い余つて、立ち上がってしまったいました。

当然、前で話している川原先生と目が合います。

「武士！ 何やってんだ！ 話を聞いてる！ 立ち上がるんじゃない！」

先生の顔は怒つていて、怒られた僕は、口をつぼめながら座りました。クラスの皆は、くすくすと笑つていて、可哀相に恵美ちゃんは赤くなつて小さく俯いていました。それに、なぜか、クラスの女子達は僕だけに冷たい目線を送ってきていて、かなり気まずくなつてしまったのを思い出します。

しかし、今思えば、あの日から僕の「ラブ・ハンド」を求める旅は始まったのかもしれない。

恵美ちゃんの事は忘れません。

ある意味、初恋だったと言えるでしょう。

まあ、その日から彼女から避けられはしたのですが……。

ただ、この時から、僕の中で女の子に求める事が定まっていったと思います。

なので、それからの僕といえば、クラスの男の子達がスカートめくりをしている時に、一人だけ女の子達のお腹を突いていました。

小学生の話（前書き）

本人は至って真面目です。きつと。

小学生の話

当然、女の子からは嫌われていきました。

不思議なんです、女の子はスカートめくりをしている男の子とは話せても、お腹をつつく僕とは口も聞いてくれない始末なのです。それを、僕には理解出来ませんでした。どちらも同じ事だと思ったからです。

「おんなごころが、分かってないね」

とは、北村愛子から言われた言葉です。

しかし、僕はめげずに女の子のお腹を追い続けました。子供心に純粹に、お肉を求めたのです。勿論、自分のお気に入りのお腹の持ち主だけです。まあ、お気に入りといっても子供なので、少し太めの女の子であれば誰でも良かったですが。ちびっ子ながら僕も男なので、細身の女の子には何もしませんでした。しかし、おかしな事なんです、クラスの女子全員から嫌われていました。北村愛子がよく、僕がどれだけクラスの女子から嫌われているか報告してきましたが、その時の僕はまったく、気にもとめませんでした。鼻で笑って相手になんかしなかったのです。

そう、あんな事があるまでは……。

あれは、僕が六年生になったばかりの事でした。その日、僕は日直をしていて、朝のホームルームの為に、教壇に立っていました。朝のホームルームの進行は、日直がすることになっているからです。まあ、たいした事はしないのですが、係りの仕事なので仕方ありません。僕はその時、また同じクラスになっていた北村愛子と一緒に皆の前に出て、朝のホームルームの進行をしていました。確かその時、北村は黒板に何やら書いていたと思います。

僕はと言うと、決められた通りホームルームを進めようと、一生懸命口を動かしながら担任の鈴木先生の横にいました。鈴木先生が進行役をサポートしてくれるので、まあ、先生の言う事を聞いていれ

ば、誰でも無難に進められる事になっていました。

鈴木先生は優しい女の先生で、川原先生の恋人だ、と言う様に生徒には認識されていて（本当は違っていたのですが、当時生徒達はそう信じて疑いませんでした）、比較的大人しめの音楽の先生でした。普段いつもうるさい生徒達を、上から叱り付ける事もしなかつたし、なかなか美人だったので、クラスの皆は先生の事が好きで、人気がある先生でした。もちろん、僕も鈴木先生の事は気に入っていました。

その日だって、まだこのクラスになって始めの頃で、自分が日直になるのもこのクラスでは初めてだったので、緊張していたのは事実でしたが、先生の言う通り張り切つてがんばっていたんです。それはもう、僕なりに真面目に頑張っていたのです。

しかし、終わりに近づくと、今までに無い緊張に包まれてきました。何故なら、鈴木先生は、いつも朝のホームルームが終わると日直と握手する事が分かっていたからです。僕にとつて、大人の女性に触れるのはその時はなかなか恥ずかしい事でした。その事を考えていたので、あまりの緊張の為か、僕の深層心理がおかしな作用したからか、よからぬ考えが僕の頭に閃きました。何でそんな事を思っていたのか、自分でもよく分からないのですが、一言で言えば、子供だったからと言うしかないでしょう。

ホームルームが終わつて、先生は僕に握手を求めてきました。

僕のすぐ横に先生がいます。僕はすかさず手を伸ばしました。先生は笑顔で待っています。しかし、ここで僕の手は、先生の右手にはなく、それをすり抜けて無防備な左わき腹に向かったのです。

僕の指は、Ｔシャツ越しに、先生の腰のお肉を摘みました。

「・・・柔らかい・・・」

そう思つて、僕は先生の顔を見ました。

鈴木先生の顔は、笑つてはいませんでした。そこには、今まで見た事の無い形相をした鈴木先生がいました。そして、目があった瞬間、僕の顔に衝撃が走りました。

その時僕は、天国と地獄を一瞬で味わい、そして、大人の女性の怖さを知ったのです。

僕を叩いた後、先生は我に帰って心配そうに僕の頬を擦りましたが、教室は大爆笑に包まれました。僕の痛みをよそに、後ろで北村愛子も笑っています。お肉の感触も忘れてしまっただけで、それ以来、なんの断りも無しに女の子のお腹を触る事はしなくなりました。女性の怖さの一端を、垣間見たのかもしれませんが。

鈴木先生は、僕が卒業するまで僕の近くに來ると、当然のようにお腹を警戒するようになりました。もう、そんな事必要ないのに。僕がそうだったのもあなたのせいなのに。

その時、小学生の僕がそう思ったか思わないのか、それ以来、僕のお腹に対する興味は別の方向に進む事になります。どういう方向に進んだかと言うと、それは、女性のお腹を触ると言う方向では無く、お腹を好きな同志を求めようとする様になったのです。

ただ、その頃には僕も、中学生になっていました。

僕が行った中学校は、その地域の小学校三校の生徒が集まっていたので、同じクラスには僕に初めて会った人も多数いました。なので、僕が女の子に嫌われた過去や、お腹を触ったりしていた事を知らない人だらけでした。要するに、僕は大人しくしていて、変な事をしなければ、女の子に嫌われる事は無く、普通の中学生として生きていけたということです。女の子に興味を持ちつつも、部活に勉強にがんばっていけば、普通の中学生として、僕も普通の高校生になれていたのかもしれませんが。

しかし、やはり、自分を偽っては、人は生きられないのかもしれませんが。

いや、初めのうちは、偽れるものでした。

中学生になると、その緊張からか、環境が変わるからか、皆自分が小学生であった事を忘れてしまっただけで、僕がへんてこエロ小学生だった事は皆忘れてしまった様でした。

僕自身が制服をきっちり着こなしていたからかもしれませんが。制服

を着ると、皆同じ様に見えるから不思議です。僕も真面目な友達も一緒くたに、溜まりに溜まった生意気工口中学生として扱われてしまふんですから。

まあ、他の人から見ればそうかもしれません。

今の僕が中学生達を見たって、そう思ってしまうのですから。僕だってそうだったのでしよう。

とにかく、中学校に入ると、僕はなるべく女の子には話しかけないで、男の子とばかり話すように心がけました。

入学してからしばらくは、僕は猫をかぶっていたといえるでしょう。とにかく、僕がお腹の肉好きだ、と思われぬように細心の注意をしました。中学生ともなると、女の子に関する話題が大半を占めているのですから、そのような話題がいつ何時口から出てくるかわからないのです。まあ、小学校からの友達もいますし、男の子とはすぐ打ち解けられるのが僕の得意技でしたから、そのせいかどうか、男の友達はずぐ出来ました。

そう、誠也君もそのとき友達になった一人でした。

誠也君とは同じクラスで、一学期に班が同じになって、何と無く話したような気がします。何がきっかけで僕らが仲良くなったのかよく分かりませんが、とにかく思い出せないほど一緒に遊んでいました。部活も同じサッカー部で、まあ、僕が半ば強引に誘ったのですが、よく一緒にボールを磨いたものです。

勿論、女の子の話もしました。他の帰る方向が同じな一年生四人と、部活が終わった後に歩きながら帰った時の事です。

「岡田ってさ、好きな女の子とかいるの?」

こう切り出したのは、僕を先生に売ったあの陽介でした。陽介も同じサッカー部に入っていました。ちなみに、岡田っていうのは、誠也君の苗字です。

「え?女の子?な、なんだよ急に」

「だから、好きな奴がいるかって事!」

「そりゃあ、気になつてる子はいるけど」

「誰？誰？誰よ？同じクラスの女か？」

そう話に加わつてきたのは、隣のクラスの真ちゃんです。

「別に、お前らに言うことないよ。なあ、武」

誠也君に話を振られて、僕はそれに同調するように言葉を出しました。

「そうそう、誰が好きだつていいじゃないの」

その時は、僕も彼が誰が好きかなんて聞いてはいませんでしたが、なんとなく話を合わせておいたのです。すると、周りにいた三人が目を細めてこちらを窺つてきました。

「お前は福田が好きなんだろう？」

案の定、また陽ちゃんがいらぬ事を言つてしまいました。皆が僕の方を見て口を歪ませます。

あろう事が、誠也君も驚きの目でこつちを見てきました。

「福田！？」

そこに居た皆が口をそろえて顔を見合わせ、驚いたように言いました。

「お前、どうかしてるよ！あんな豚饅頭のどこがいいんだよ」

「マジ、どうかしてるよ。明らかに二人分食べてるだろう。あれは真ちゃんと、禄ちゃんは言つた傍から笑い転げていきます。禄ちゃんと言つるのは真ちゃんと同じクラスで、同じサッカー部の間禄太です。」

「武士は昔から目がおかしいからなあ。二組の相沢とかも気になつてるんでしょ？」

さらに陽ちゃんが続けます。確かに相沢さんのお腹は小学校の時よく追つ駆けて触っていました。幾分ふつくらして足鈍だった相沢さんは、とっても触りやすかったのです。

陽ちゃんの言葉に、皆の笑いに火がついて、さらに増していきます。誠也君もお腹を抱えて笑っています。僕は慌てて弁解しました。

「違つ、違つ。二人とも違つよ。ぜんぜん、好きじゃないよ！」

「武士はあんなに太つちよ達がいいのかよ？俺には分からないなあ？」

「だから違つて。陽ちゃん、いい加減な事言つなよ！一言だつてそんな事言つてないよ。福田も相沢も興味ないつて」

「じゃあ、誰が好きなんだよ」

僕は考えてしまいました。

何しろ、その時は本当の意味でどの女の子が好きかなんて考えた事が無かつたからです。

女の子はむしろ怖い存在でしたし。

話すといつても、たまに同じクラスの北村愛子と悪口を言い合うか、最低限必要な事をクラスの女子とする位でした。

しかし、ここで誰もいないといつても誰も信じてはくれないでしょう。このままでは、僕はやっぱりお肉が好きで男として噂が広まり、女の子に嫌われ、そして最後にはきついお仕置きが待っているのです。それだけはどうしても避けたいことです。

確かに、中学校の中で気に入っている腰肉の持ち主はいました。

まあ、特に先輩なのですが、それをこいつらに言つても何を言われるか分かつたものじゃありません。何故なら、どちらかと言つと、福田や相沢達と同じような見栄え人達だったからです。まあ、腰肉が基準なので仕方ありません。

ここは自分の考えと違つ、無難な、しかも人気のある人を言おう。そうすれば、僕は変な好みの持ち主ではなくて、ミーハーな当たり前の好みの持ち主と言つ事になる。そうすれば、こいつらも納得するだろう。中学生の僕は、とっさにそう思いました。そして、僕の頭の中に、中学で一番人気のあるであろうと言われている、バスケット部の一之瀬先輩が浮かびました。

「じゃあ言つけど。誰にも言つんじゃないぞ。絶対だぞ！」

皆笑いながら、僕の話聞いてきました。

「もつたいぶるなよ。早く言えよ」

「じゃあ言うぞ。俺は一之瀬先輩が好きだ。うん」

僕の言葉に、皆いつせいに笑い出しました。真ちゃんも、禄君も、お腹を抑えてもだえます。陽ちゃんなんか笑いながら、僕の肩を叩いてきました。しかし、誠也君は笑わないで様子を見ていました。

「お前ら笑うなよ！俺が誰が好きだろうと構わないだろう」

「武ちゃん、一之瀬先輩は無理だよ。だって、三年生だし、凄い美人で人気あるじゃん」

「そうそう。皆、狙ってるんだから。先輩達が言ってたよ。確かに、すげースタイルいいけどさ」

「胸もあるし」

「俺は、お尻がいいと思うよ。うん」

「真ちゃん、彼女いるじゃん。お尻持ってるじゃん」

肩掛けかばん越しに、僕は真ちゃんに突っ込みました。真ちゃんは、入学早々同じクラスの女の子と付き合っていました。対して、その頃の僕には、女の子と付き合うと言う事がどんな事かよく分かりませんでした。なので、よく分からない事を口走ってしまいました。何とか話をそらそうとしたのかもかもしれません。

「それとこれとは別でしょうが？武ちゃん、そんな事言ったら一ノ瀬先輩から嫌われちゃうぞ」

「うるさいよ。しかし、彼女は明るくて、笑顔が可愛いし。性格が好きだなあ、俺は」

僕は一ノ瀬先輩と話した事は一度もありませんでした。当然、性格なんて知りませんが、そんな事でも言わないと信憑性がないと思っただけでしょう。

中学生の僕の頭は、超スピードフル回転です。

「性格ねえ？だけど、一ノ瀬先輩には彼氏がいるって、誰か言っていないかったけ？バスケ部の誰かだっけ？」

「そうだっけ？そんな人いるんだ。じゃあ、武ちゃん、もう駄目じゃん」

「何！そんな事言うわけ」

僕は自分が、本当は一ノ瀬先輩の事を何とも思つて無いにもかかわらず、その時は本気になつて反論しました。

「いや、武だつたら彼氏いなくても無理でしょう。ねえ、武？」
陽ちゃん言葉は、いつも心に突き刺さるものがあります。

僕は偽りの気持ちに乗ってしまうかのように、反論しようとした。
た。

すると、今まで何も言わなくて聞くだけだった誠也君が、突然口を開きました。

「それは言いすぎだろうが。武が一ノ瀬先輩を好きつて言うならそれでいいじゃんか！誰かがとやかく言う事ないだろう。お前らおかしいよ！そんなこと言うべきじゃないし、応援しようつて気にならないか？」

その言葉に、皆笑つている口が閉じて、何と無く気まずい雰囲気の流れてしまいました。いつになく真剣な誠也君の言葉に、僕は心を打たれました。僕の嘘にそこまで言つてくれなくても思いつつても、僕に対する友情を感じました。こんなに僕の事を大切に思つてくれているのか、友達と思つてくれているのかと、恥ずかしくも嬉しくなつていきました。

中学生になりました。(前書き)

まさかとは思いますが、これて実話じゃ・・・

なんて思った人！そのまさか・・・。

中学生になりました。

それからと言うもの、僕と誠也君はさらに親しくなっていくたと思
います。

それからの僕は、誠也君に心を開いていました。

だから、思ったのかもしれませんが。

こいつだったら、僕の事を分かってくれるかもしれない。僕が、女
の子の腰のお肉に興味があるって事を、誠也君だったら分かってく
れるだろうと思ったのです。

だから、僕は、誠也君にその事を告白しようと思いました。

あれは、一年生の秋だったと思います。学校の授業が終わって、僕
は誠也君と教室を出ました。いつもみたいに、ゲームの話やラオモ
しかかった漫画の話で盛り上がりながら、そのうちに体育館の前にさ
しかかったので、僕はそのコンクリートの階段に座り込みました。
誠也君もつられて隣に座ります。

僕ら二人以外は、辺りに誰もいませんでした。二人の横顔を、オレ
ンジ色の夕日が照らします。

「誠也、俺、誠也に言いたい事があるんだ」

「おう。どうしたの？そんなかしこまっちゃって。何？」

「今まで隠していた事なだけ。誠也になら言ってもいいかなっ
て思ってたさ。お前とは隠し事したくなくてね。お前も俺に隠し事な
いだろう」

「お、おう。そうだ、俺もお前に聞いて置きたい事があるんだ」

「え？何、何？何聞きたいの？」

「まずはお前だろう。俺に何隠してたの？言ってみなよ」

僕は唾を飲みました。何せ半年以上隠してきたち自負がありますか
ら、いざ言つとなつて、緊張してきたのです。しかし、僕は勇気を
持って口を開きました。

「笑わないでくれよ」

僕は少し勿体つけましたが、一呼吸すると口を開きました。

「今まで皆にも言わなくて、隠してきたんだけどさ。俺、実は……」

もうひと息付いて、そして、思い切り口を開きました。
「俺！女の子のお腹の肉が好きなんだ！腰に付いてるお肉が好きなんだ！」

かなり力んでそう言う僕を、誠也君は、この馬鹿はいったい何を言っているんだ？と、まじまじと見ていました。その顔はけして笑ってはいませんでした。困惑しているのは確かだった様です。今思えば……。

ただ、その時の僕といえば、やっと本音が言えた反動か、次々と言葉が出てきてしまい、誠也君の事などそっちのけでした。

「昔から女の子の腰のお肉が好きなんだ。いや、もちろん触ったりはしてないよ。いや、正確には小学六年になるまでは触ってた。でも、中学になつてからは触った事なんて無いんだ。本当だよ。でも、やっぱり触りたい。お前も触りたいだろ？」

「お、う、うん」

誠也君は、ぎこちなく頷く様な素振りを見せました。

「そうだろう。触りたいよなあ。でも、それはいけないんだ。嫌われちゃうから。俺にも分かってる。本当に、中学生はいい腰肉持ってるよ。小学生とは、ぜんぜん違うんだよ。先輩達の腰は、あれだよな、なんか同級生とは違うもんな」

「一ノ瀬先輩とか？だろ？」

「一ノ瀬先輩？お、おう、そうだな。まあ、うん、そう言う事だよ。うん、なんていうか」

「そうだよな。お前は、一ノ瀬先輩が好きなんだもんな。俺、お前が北村の事好きかと思ってたよ。お前が、そういうのが好きなら、北村は好みじゃないもんな。そうだよな？」

「お、北村愛子？違う違う！何言ってるんだよ。そんなはずないじゃん」

「そつだよな。じゃあ、俺からも言つぞ。あのな、俺・・・」
何時になく誠也君が真剣な顔をしました。僕は一つ息を飲んで、彼の次の言葉を待ちました。

「俺は北村の事が好きなんだ」

僕は誠也君の目を見ました。その目はもうそれは真剣です。と言うか、血走っていました。僕は何も言えずに頷きました。

「彼女の事、初めて見た時から気になってたんだ。だけど、なんか北村ってお前とよく話してるし、その、お前も楽しそうに話してるからさ。好きなのかもって思つて。でも、違うんだよな」

いつもは口数の少ない誠也君が、やけに饒舌でした。

「違うよ。あいつとはよくクラスが同じになるだけで、そんなんじゃないんだって。ぜんぜん違う。だけど、誠也。お前が、北村を？！お前、結構格好いいんだし、サッカーだつてうまいんだから、もう少し、何て言うかな、可愛い子の方がいいんじゃない？ウチの中学にだつて、もっと可愛い子いるだろう？」

そんな僕の言葉に、誠也君は力強く首を振ります。

「いや、北村より可愛い子なんていないよ。自分でもびっくり何だけど、こんな気持ち初めてなんだよ。彼女いつも明るいし、その、スタイルいいし、何より性格が俺にあつてると思つんだ。それに、あの子猫みたいな目、俺、凄く好きなんだよ」

「おお、そつか、そつだな」

と、相槌をしつつも、それまで恋をした事無かつた僕は、誠也君の気持ち分かるはずありません。まあ、僕が彼のその気持ち分かるまで、もう少し時間がかかります。

でも、初恋に舞い上がっている誠也君は、さすがのように僕に応援してくれるように頼んできましたので、僕も出来る限り協力すると約束しました。どうやらそれで、誠也君の心も少しすっきりしたようですし、僕も気持ち楽になった事は確かでした。何しろ、お互い、初めて自分の隠し事を共有できる友達が出来たのですから。少なくとも僕には、こんなに希望が広がっていた時期は、無かつたかも知

れません。

でも、その関係も長くは続きませんでした。

誠也君は、僕の前からいなくなってしまうたからです。

冬休みが過ぎたあたりに、両親の都合とやらで、遠くに引っ越してしまっただけです。何か、僕にはあまりに突然で、手紙とか書く知恵もなく、いなくなるのが寂しすぎたのでしよう。と言うか、なぜか裏切られたような気持ちになってしまって、誠也君とは特別なお別れをする事が出来ませんでした。

それ以来、彼とは連絡を取っていません。

二年生になるとクラス替えになって、新しいクラスメイト達が出来たので、友達関係もまた変わってしまった、誠也君が好きな北村愛子も隣のクラスになって少し離れました。誠也君が北村に、告白したとかしないとか、少し噂に聞きましたが、北村も僕に何かを言うて来る事も無く、僕も聞かなかつたので、真相はどうなのか僕にも分からないままでした。

そんな僕も二年生になると後輩も出来て、勉強も部活も忙しくなってくるので、日々を追うごとに誠也君の面影も薄くなっていきました。でも、誠也君ほど心を許した友達も現れることはありませんでした。確かに、陽介とか、長く付き合っている友達もいましたが、いかんせん口が軽いので秘密なんかとても言える仲ではありませんでした。

だから、僕がお腹のお肉が好きでたまらないと言う事は、また自分の中にしまわれる事となりました。

ただ、二年生になって色々学校にも慣れてくると、友達がエロ雑誌やら、ビデオやらを色々持ってきたり、見にいたりして女の情報が飛躍的に増えるようになり、世の中には自分が思ってるより色々な種類の腰肉が存在する事を知りました。

視覚的なのですが、僕の中にも、女性の腰肉にも色々な形がある事を知る事によって、どんな腰肉が自分にとっていいものなのかと言う事が、大まかながら出来てきて来る様になりました。ただ、少

し不満だったのですが、友達が持つてくる写真の中の美女達の腰は、細く無駄のないものが多く、友達もそれがいいと言う事を言っていました。

ほぼ、圧倒的と言っていいでしょう。

僕も頑なまでに自分を出す事をしなかつたので、友達の前では皆の好きそうな人をいいと言い、一方で、自分の家では比較的好い腰肉を持つている女の人が載っている雑誌を持っていたりしました。ただ、当時は、自分好みのジャンルの雑誌が無かつた事にかかなりの不満があつた事を思い出します。

世間と僕のグラマラスの基準の溝はまだかなりの隔たりがあつたのです。

まあ、田舎ですので少ない情報量しかありませんし、インターネットも普及していない時代で、何しろ僕も中学生だつた事もありますから、それは仕方ない事ではありました。

今とは少し、事情が違つのです。

そんな感じで、中学生の僕は徐々に女性に関して知識を深めていき、むつたりなりにませませも深めていき、男の情けない部分も覚えていく事になりました。そして、そうなつてくるとそろそろ実践に移したくなるのが年頃の男の子と申しまして、それは僕も例外ではありませんでした。

まあ、それまでには準備段階が少しあるのですが……。

中学生も半ばになると、そろそろ同級生でも恋の花を咲かせる奴らが廻りに出来て来て、

あの陽ちゃんや、禄ちゃんも一年生と付き合つたりしてしまい、なにやら恋のムードが僕の周りを包み込み、思春期臭の取り巻く僕の中学校を席巻していました。

しかし、僕はどうしてかなかなかそのムードに乗る事が出来なくていつまでたつてもそんなカップル達を横目で見てることしか出来ませんでした。

勿論、僕だつて他の女の子達もよく見ていました。

まあ、中学生ともなると、女の子も大人になっていくので、見所は一杯です。それに加えて、友達から性の情報が入ってくるので、僕の頭はもう想像で一杯になっていきました。

勿論、僕は女の子には触る事はありませんし、女の子ともあまり話す事はありませんでした。何しろ、それで酷い目に遭っていますから。

しかし、そんな僕にも恋の嵐が吹き荒れたのです。

それは今でも忘れた事はありませんが、初めて女の子と付き合う事になったのです。

僕に初めての恋人が出来たのは、三年生の学園祭の時でした。

夏休みも終わって、三年生は受験が近づいてきてソワソワし始める頃で、僕もサッカー部の総体をまあまああの成績で終えて、受験に備えている頃でした。しかし、不安を抱える三年生とは裏腹に、学校のムードは騒がしく、一、二年生を中心に学園祭に向けて大忙しでした。

僕も去年とは心持が違うものの、お祭り好きの血が騒いでしまって実行委員なんかを引き受けてしまったもんだから、忙しい日々を送っていました。

何故か北村愛子と実行委員をする事になってしまって（三年生の時にまた一緒にクラスになっていました）、昔みたいに悪口言われるかと構えていたのですが、彼女は一足先に大人になっていた様で、もう僕に色々言ってくる事は無くなっていました。

僕もどうせ女の子と組むなら北村の方が話せるので、まあ、僕らは実行委員として仲良く頑張ったのです。何しろ最後と言う事もあり、北村はかなり気合を入れて学園祭に取り組んでいました。僕もそれに引きずられるような形で仕事に取り組む事になって、まあ、今までに無く色々な人と関わるようになっていました。普段あまり喋った事無い女の子とも一緒に作業したりとか、後輩の面倒見たりとかして、自分でもよく分からない祭り熱に浮かされて、その時の僕は

かなりの意気込みを持って取り組んでいたのです。

あるう事か、この僕が音頭を取ったりしながら、皆で学園祭に向けて声を上げて頑張っていたんですから。

そんな事もあってか、北村ともそれまで喋った事無いような話もするようになり、なんか不思議な一体感がありました。

学園祭が始まるまでに、どうしてもすぐ仕上げなければならぬコメントがあつたりして、夜に差し掛かるまで教室で作業していた時とかに、ペンキとか塗りながら喋ったりしたのを思い出します。あの時は、放課後も結構日が沈みかけていた位に、先生や他の学園際の準備に終われる生徒達に混じりながら、家庭科準備室の前の廊下で作業していたと思います。僕が北村と一緒にあって、もくもくと作業を進めていると、彼女はいつもどおり不意に話し出したのです。

「武つて、高校どこ受けるの？」

脚立に上りながら、僕の上の所をペンキで塗っていた北村が、その細い腕に似つかない大きな刷毛を操りながら、トライアングルみたいな声を掛けてきました。その時僕は、体育祭に使う登場口の柱の真ん中辺をせつせとペンキで埋めていたのですが、手を止めてそれに答えました。

「うーん。東高かなあ。近いし」

北村は手を止めて、僕の方を見てきました。

「へー。結構進学校じゃん。大丈夫なの？」

「まあ、先生は何とかなるって言ってたけど。今から、しっかり勉強するよ」

「ふん。まあ、武つて、頭おかしいけど、成績は悪くないもんね」「それは褒めてるのか、貶してるのか、どっちなんだ？まあいいけど。お前はどこに行くの？北村、何気に頭いいもんなあ。私立とか行くの？」

「うーん。まあ、大体は決めてるよ。でも、今はそれより、最後の学園祭をしっかりとしないかね。最後なんだから。格好良くしないと」

「何だよ、高校の話すんじゃないのか？まあ、いいけどさ。それにしたって、お前、最後、最後って、最後言いすぎだよ」

「だって、本当に、最後じゃん。中学生活だって、後残り少しなんだから」

北村はそう言うなり脚立から降りて、下にある赤色のペンキを足そうとしていました。何気なく北村の顔を見ると、ほっぺに赤い筋が付いていて、僕はそれが何かとても気になったので、何も言わないで拭いて上げました。

「な！何するのよ！」

「いや、汚れていたから、拭いてあげようと思って。あんま落ちないな。伸びちゃった。悪い、悪い」

「馬鹿！そんな汚いので拭いて、落ちる訳無いじゃん」

北村は怒ったように僕から顔を背けると、いそいそと脚立に上って、ペンキを塗り始めました。

「まだ顔が赤いぞ。洗って来いよ」

「い、いいのよ。後で洗うから。それより、早く仕上げないと終わらないよ。急ぎなさいよ」

そう言くと、北村は急に無言になって、ペンキを塗りたくり始めました。なので、何だよと思しながら、僕も少しふて腐りながら言われるままに登場口用の四角い柱を赤くしていきました。

すると、しばらくして、また、北村が口を開きました。

「武って、今、彼女いないよね？」

「え？何？」

突然の質問に不意を突かれて、僕は思わず北村を見上げてしまいました。すると、北村はやっぱりこっちは見ないのですが、言葉荒げに同じ質問をしてきました。

「だから、彼女いないよね？」

「俺？いないよ？お前は？」

「私もないよ」

「ふーん。そうか」

「そう」

「そうだ！そう言えば、誠也覚えてるだろ？二年になる前に引越しちゃった。一年の時クラス一緒だったじゃん？おっ、話聞いている？」

「え？聞いている、聞いている。誠也君でしょ、覚えてるよ」

「そう言えば、お前誠也から告白されたとか噂されてたな？あれ、本当なの？」

僕がそう聞くと、北村はすぐには答えませんでした。すぐに、僕が答えを促すように北村の顔をうかがうと、仕方ないかの様に口を開きました。

「うん。本当よ」

僕はびっくりして、北村の顔を見上げました。

「マジ？じゃあ、お前ら付き合ってるの？」

「ううん。岡田君とは付き合えないって断ったの」

「マジで？あんな格好良くて、真面目で、サッカーうまいやつ、なかなかいないぜ！どうしてだよ？」

「だって、岡田君、引越しちゃうって言ってたし。それに・・・」

北村がそう言いかけると、向こうから僕を呼ぶ声がしました。女の子の声です。

「小田切センパイ。もう、終わりましたあ？」

大きな声で僕に呼びかけたのは、二年生で吹奏楽部の夏目優子ちゃんでした。僕らと同じく学園祭の実行委員で、一緒に残って作業しているメンバーの一人でした。彼女は僕が実行委員になってから親しくなった女の子で、何かと僕に話しかけてきてくれて、なんて言うか妹分みたいになっていました。

小さなこいのメロディ（前書き）

読む人が読めばきつとわかるんだらうなあ。

いえ、こっちの話です。

小さなこいのメロディ

何しろ彼女から積極的に話しかけてくるので、いつの間にか、変に女の子に苦手意識があった僕も彼女に馴染んでいて、普通に会話するように間柄になっていました。

そんな彼女が、廊下の向こうから僕らの所まで走ってやって来たのです。

「あつ、北村先輩。お疲れ様です」

優子ちゃんは、脚立に乗っている北村に挨拶しました。北村も同じ吹奏楽部で、優子ちゃんと同じトランペットを担当しているので、優子ちゃんとは仲良しでした。

「なっちゃん、もうすぐ終わるよ。あと半面だけだから」

僕は笑顔になってそう言うと、せつせとペンキを塗りました。

「もう、遅いから、武士先輩、先に帰ったかと思えましたよ。よかった、帰ってなくて。さあ、早く帰りましょう。何なら、私も手伝いましょうか？」

「いいよ、いいよ。すぐ終わるから。あまり近寄ると制服汚れちゃうから。ペンキ付いちやうよ。なあ？」

僕は北村に話を振りました。

「うん」

北村はそう言って、ペンキを塗っています。

「だから、もう少し待ってて」

「じゃあ、向こうで待ってますね。友達と話してますから。あつ、武士先輩、帰る時、声かけて下さいね！」

そう言うと、優子ちゃんは僕にニコツとして、向うの方に行ってしまいました。

多分僕はその時に、かなりにやけていたと思います。彼女と話していると、和んだんですよ。

「可愛いよね、優子ちゃんって」

「え？」

「何でもない」

北村は、脚立から降りてすぐそんな事を言ってきました。そして、そう言うなり急に、周りのペンキなどを片付け始めました。

僕は、そんな事気にしないで、残りの反面を塗りたくりました。

もう、あと少し塗れば、この柱は完成なのですから。

「後少しだから。お前、先着替えてとけよ。あっ、新聞紙捨ててね」

僕がそう言い終わらないうちに、北村は黙って床の新聞紙を拾い始めました。

「私先に帰るから。あんたも遅くならないうちに帰るのよ」

「待てよ。皆で一緒に帰ろうよ。帰り道同じなんだからさ。なっちゃんも待ってるし」

「うーん。やっぱ先に帰るよ。ちよつと用事があるんだ」

「そう。それじゃあ、仕方ないなあ。気をつけてな。明日また早く来るだろう？」

「うん。あんたも来るんでしょ？」

僕はペンキを塗りたくりながら答えました。

「当たり前だよ。じゃあな、お疲れさん！」

北村は何故か僕の頭を叩くと、「お疲れ」と言いながら荷物を持って、帰っていきました。何だか、その時こいつとは友達に慣れそうな気がして、そして、もつと早く彼女と打ち解けられたら、この中学生活も楽しくなつてたんじゃないか、と思つたのを思い出します。やはり僕も、皆との別れを感じていたのかもしれない。

そんな事を思いながら、その日、僕は優子ちゃんと帰りました。

この優子ちゃん……。

実はこの子が、僕の初めての彼女でした。

待ちに待った学園祭はすぐにやってきて、皆それぞれに楽しく、一

生懸命過ごしていました。生徒達の熱気が校舎を赤く染めるほど、その期間だけ中学校が活気に包めれている様で、当然実行委員の僕も大忙しでした。あつという間に開催期間の二日が過ぎていき、お祭りもあれよあれよと言う間にクライマックスに差し掛かっていきます。

学園祭の閉幕式が終わる頃になると、辺りはすっかり暗くなっていて、グラウンドの照明の明かりが校舎に引き上げていく皆を照らします。

体操着姿の生徒達は学園祭の余韻に浸っていて、校庭にはキャンプファイヤーの残り火があり、何人かが片付けをしているのが見えました。中には泣き出している女の子もいたりして、そんな光景を見ながら僕もなにやら考え深げになっていました。

中学での学園祭も、これで最後なのです。

そんな事を思いながら、友達と玄関に差し掛かった所でした。

突然、僕らの目の前に、女の子達が現れました。

僕らは歩みを止め、その子達を見ました。僕らの前に現れた女の子は三人組で、その真ん中にはあの優子ちゃんがいきました。両端にいる子達は、いつも優子ちゃんと一緒にいる吹奏楽部の後輩でした。

優子ちゃんは僕の目の前に来て、何やらもじもじしています。すると、横の二人が優子ちゃんの腕を押して、僕の方に押してきました。僕の友達二人は、お互いに目を合わせると、「後でな」と言って、僕の肩を叩いて、玄関の中に行ってしまうました。

僕は一人そこに残り残されて、目の前にいる優子ちゃんと向き合いました。勿論、優子ちゃんのすぐ後ろには、お友達が控えています。体操着姿が可愛いらしい優子ちゃんは、もじもじしているのを止め、ちゃんと僕の方に向いてきました。両手を胸の前に重ねて指を動かしながら、少しうつむいた感じで僕を見ってきます。

僕も何やら緊張してきて、何を言っ言いか分からず、黙って彼女を見ていました。

すると、優子ちゃんはもう一歩僕に近づいてきて、口を開きました。

「先輩！」

「ひゃい？何？」

僕の声も上ずります。

「私、ずうっつと前から、先輩の事気になっていました。実行委員の時、初めて話せて嬉しかったです。だから、だから、だから、私と付き合ってください」

優子ちゃんのほっぺが、ほんのり赤みさしていて、その震えそうな声に、僕の心は共振していました。何やら、理解できない感情がこみ上げてきて、恥ずかしいような、嬉しいような、とにかく僕は言葉にしようと思いました。

「僕も、君の事、好きだ！」

自分の気持ちも確かめぬままに、言葉が先に飛び出していきました。しかし、どうやらその言葉は優子ちゃんの心を捉えたようです。優子ちゃんは涙を流して、僕の胸に飛び込んできました。

「先輩！私、嬉しいです。先輩も好きだなんて言ってくれるなんてこれ、交換してください」

そう言うと、優子ちゃんは自分のしていた、青色の鉢巻を僕にくれました。彼女は僕の胸の近くで、目をきらきらさせながら、僕の方を見ています。

僕は興奮で何も考える事が出来ずに、自分の持っていた赤い鉢巻を、彼女の頭に巻いて上げました。今だったら、お前は何をしてるの？と言いたくなりますが、手が勝手に動いてしまったのだから仕方ありません。キャツキャツ、とはしゃぐ彼女を尻目に、彼女の友達二人は啞然として僕らを見ていました。

しかし、恋する乙女とお馬鹿さんの目には二人以外映りません。まあ、お馬鹿さんはお馬鹿さんなので、しばらくして、やっぱりお馬鹿なことをしてかしてしまうのですが……。

その次の日は優子ちゃんと一緒に帰る事になっていたのですが、彼女は校門の前で僕を待っていました。僕は友達に冷やかされながらも彼女の方に行き、横に並ぶと友達達に手を振りながら、僕らは笑顔

で学校から離れていきました。僕はその場で隣にいる彼女の手を握りたかったのですが、友達が見てると思うと恥ずかしくて握れませんでした。

彼女の方をちらちら見ると、彼女も恥ずかしそうにしていました。なので、裏道に入ったらささず手を握りました。

正直、それまで一言も喋ってはいなかったため、彼女も驚いたと思います。でも、彼女は何も言いませんでした。そして、そのまま何も喋らず彼女を家の近くまで送りました。

彼女の姿が、玄関のドアの中になくなるまで手を振りながら見送って、僕は自分の家に向かいました。

僕は歩きながら、自分に彼女がいる実感を味わっていました。

これが彼女なのか！

話には聞いていたけど、これが彼女と言うものなのか！

僕の頭の中で、優子ちゃんの顔が飛び回ります。

「生きてて良かった。母さん生んでくれてありがとう」

心の中で僕は叫びました。今思い出しても、痒くなる位、恥ずかしくなります。

まあ、それから何日か、僕らは手をつなぎながら帰る様な事を続けていました。まあ、学校があるからそんな事しか出来ません。

中学生ですし。

しかし、日曜日はすぐにやってくるものです。日曜日といえば二人とも休み。と言う事で、僕も彼女をデートなんか誘って見ようと思いつきました。

ドキドキしながらも、さっそく電話で誘ってみたら、彼女もノリノリな感じでしたので、僕のテンションは土曜の夜から上がりっぱなしでした。三歳上の真ん中の兄貴に色々聞きながら、お古のシャツなんかを借りたりして、生まれて初めてのデートの準備をしました。

彼女がどんな服着てくるだろうか？とか、

どこにご飯食べに行こう！とか

お酒はここで飲んで後は・・・とか

中学生の僕には、そんな事もちろん考える願望も余裕ありませんでした。

何しろ、彼女の事を考える事よりも、とにかく自分の事で精一杯だったのです。

次の日の朝、うきうき気分の僕に、今からデートに行く事を知っている真ん中の兄貴が色々吹き込んできました。やはり、年長者は経験豊富といえますか、僕の知らない女性の知識を色々知っていたので、兄貴は楽しそうに色々それを吹き込んできました。

しかし、僕の頭に残っていたのは、

「公園のベンチで、間が出来たらすかさずキスだ！」
と言っ言葉のみでした。

僕の髪の毛をセットしながら、兄貴は他にも色々アドバイスをくれた様なのですが、僕の頭に入っていた言葉はそれくらいしかありませんでした。そんなに急にはスキルは身に付かないものなのです。とにかく、僕は待ち合わせのバス停まで走っていきました。

バス停には腰の曲がったおばあちゃんが先にいて、ペンキの禿げかけた同じ様にくたびれたベンチに杖を突いて座っていました。田舎のバス停ですのでたいした設備はありませんので、僕は吹きさらしのそのベンチに座りながら、おばあちゃんの横に挨拶しました。そして、その後僕がした事は、兄貴からもらった五百円玉を財布に入れる事でした。

あまり手持ちのない僕に、兄貴の心意気がしみてきます。

それからしばらく、隣にいたおばあちゃんに飴玉とかをもらいながら、僕が落ち着き無く待っていると、遠くから彼女らしき人影が現れました。

彼女が、遠くから手を振っています。

僕も手を振りましたが、少しして目を見開きました。

手を振っていたのは、確かに彼女でした。そう、お供を連れて・・・。

ビックリした事に何と彼女は、お母さんを連れてきていました。目を点にさせながら、それでも元氣よく手を振りましたが、内心へんな緊張がしてくるのは隠せませんでした。

彼女も緊張していたのか、僕の近くに来るとお母さんの顔を見ながらはにかんでいます。

初めて会う彼女のお母さんは、若くて綺麗な人でした。

「娘を宜しくね。気をつけて行ってらっしゃい」

彼女のお母さんにそう言われて、緊張した僕は、頷く事しか出来ませんでした。きっと彼女のお母さんも緊張していたと思います。

それでも、彼女から手を繋がれ、ガチツと結ばれながらバスに乗る二人を、彼女のお母さんは微笑ましいものでも見るみたいに優しい眼差しで見送ってくれました。遠ざかるお母さんを見ながら、彼女は手を振り、僕は隣で不謹慎にもワクワクして来ました。

隣の映画館に行くだけだから、そんなに遠い旅ではないのですが、自分の中ではアフリカの未開の地に行くみたいで、それくらいの緊張感がありました。

何しろ、初めての事だったから仕方ありません。

ただ、その時これから彼女に失礼をする自分を知っていれば、彼女のお母さんに泣いて引き止めるように言ったのですが……。

一つ言えることは、娘を心配する親を尻目に、僕はかなりはしゃいでいた、という事です。

ただ、それは僕だけではなく、彼女も一緒の様でした。僕のワクワクする気持ちは、彼女にも伝わっていったのか、彼女もいつになくはしゃいでいました。

そう言えば、彼女が綺麗なエナメルの靴を履いていて、口紅にはピンクのリップクリームが塗ってあったり、髪の毛を少し巻いていたりにしていた事を、今になって思い出します。

彼女もやはり気合を入れていたのでしよう。

お馬鹿な僕はそれを別に取り上げるでもなく、今から見る恋愛映画の事ばかり話していた気がします。

そして、僕らは二人してルンルン気分で映画館に入りました。

その時見た映画は、まったくよく出来た映画で、主人公がヒロインと一緒に海に吞まれて行く時には、彼女も僕も涙が止まりませんでした。

その瞬間彼女がしつかりと僕の手を握り締めた事が、その時も今も一番印象に残っていて、まるで、自分達も物語の中にいるかの様な映画のワンシーンを撮られているような感じになったのを覚えています。

まあ、そんな自分達に酔っていたのかもしれない。調子に乗っていたと言って良いでしょう。

高校生になりました(前書き)

考えても見てください。あなたの近くにこんな奴いました？

え？いた？

シーー！！！！黙っていてください！

高校生になりました

映画を見終わったあと、僕らは近くの公園に行きました。

二人の映画館でも余韻を引きずりながら、気分よく歩いていました。決して花が咲き乱れる時期ではないのですが、僕らには花畑が見えていたと思います。まあ、少なくとも僕には。

そんな僕の頭の中で、兄貴の言葉がフラッシュバックします。

「公園のベンチ、間が出来たらキス！」

僕は鼻を膨らみながら、はやる気持ちを押さえつつ、公園内の販売所で売っていたソフトクリームを優子ちゃんに買ってあげました。彼女はとても嬉しそうに、ソフトクリームを受け取りました。

二人で公園のベンチに座って食べていると、無性に胸がざわつきます。よからぬ衝動が、また僕を貫きます。むくむくとした黒いものが、僕の心の中で首を擡げてきたのです。

何でも食べるのが早い僕は、彼女が食べ終わらないうちにソフトクリームを食べ終わり、彼女がそれを食べるのを見ていました。

僕のすぐ横で、彼女は夢中でクリームを舐めています。

ほんとに至近距離なのです。

僕の胸は早鐘のように、ビートを刻みます。

彼女を上から下まで見て、やはり、一点で目が止まりました。

もちろん、お腹です。そう、腰のお肉です。

優子ちゃんは僕の彼女。見ず知らずの人でもないし、手も握っている仲です。それに僕の事好きなんだし、これは僕が触ってもいい状況じゃないんだろうか？むしろ、それで僕の事が分かってもらえて、仲が深まっていくんじゃないだろうか？

僕の頭の中のコンピュータが、かなりの確立で来るべき薔薇色の未来を予想しました。

そう言えば、ポツチャリした子のお腹は触った事あるけど、こんなに細い女の子のお腹の肉は触った事が無いじゃないか。

そんな事考えた事も無かったし、ましてや、中学に入ってから女性のお腹に触れた事なんて一回も無いのです。あああ、トランペットで鍛えられたお腹なんか、触れる機会なんてあるだろうか、いやない！

彼女の余分なものが付いていなそう、健康的で、すらりとしたお腹や腰の辺りを見つめながら、僕はそんな事を思っていたのです。そう思った瞬間、僕の中で欲望が洪水となって流れ出しました。

そして、僕は迷わず彼女の腰肉をつかみました。それも縦に。

親指と人差し指と中指で。

あの時の彼女の顔は、今でも忘れる事が出来ません。

ソフトクリームを食べる彼女の口は止まり、すばやくこちらを見ました。

その時僕は、彼女のとても柔らかい肉を指の先で堪能して、満遍な笑みを浮かべていたと思います。

優子ちゃんの腰肉は、思っていたよりもお肉があり、僕の頭の中の物差しはぶっ飛びました。

「何・・・、してるんですか？」

優子ちゃんの震えた声が、僕の耳に入りました。

「なっちゃんって、いいお肉してるね」

僕はそう言つて、やさしく微笑みました。

僕にとっては、これ以上無い最高の褒め言葉です。

しかし、彼女の反応は、僕にとって思いもよらないものでした。

彼女はいきなり、持っていたソフトクリームを僕の鼻にねじ込み、懇親の力を込めてビンタしてきたのです。

僕の鼻に、これでもかとクリームが詰め込まれたかと思われると、それが一気に排出されました。僕は、心底びっくりして、何も言えずに彼女を見ました。

すると、彼女は、今まで僕が聞いた事の無いオクターブの声で叫んできました。

「先輩の馬鹿！死んじゃえ！」

そして、彼女は大泣きしながら、僕をそのベンチに残して走り去って行きました。

それから僕が覚えていたのは、彼女の後姿だけでした。

僕は啞然として、しばらくそのベンチの背凭れにも垂れていました。当然、その後には彼女の家に電話しても取り付いてもらえず、それどころか、彼女のお父さんからは女の子の接し方について一時間くらい説教をされました。

その時は、こちらから電話を切る分けにも行かず、僕はただ謝るばかりでした。

電話口で泣きながら謝っている弟に、何かかと思った兄貴達がやってきて話を聞いてきたので、僕が馬鹿正直に事の顛末を話したら、慰められるどころか馬鹿にされ、拳句にそれをお母さんに言いつけられてしまいました。

当然、僕はお母さんから怒られる羽目になりました。

「今度そんな変な事したら、叔父さんの病院連れてって、金玉とつてもらおうよ！」

僕はお母さんのこの言葉に、縮み上がる他はありませんでした。お母さんのお兄さん、僕のとつての叔父さんは外科医だったので、母親のその言葉にかなりの信憑性が当時僕にはあったので、それは相堪える事になりました。

それに加えて、今まで何の悪評も立つ事は無かった中学生活の最後に、やっぱり小田切はお腹の肉が好きな奴なんだと言うレッテルを貼られ、それだけでなぜか変態と言う事になり、僕は女の子から嫌われる事になりました。

最後の最後に、中学校の女子全員に嫌われる様になるとは思いもよりませんでした。

本当に、女の子には一人でも変な事をするものではありません。僕

と彼女だけの問題が、全女子と僕の問題までになってしまおうのですから恐ろしいものです。

ただ、まあ、男子からは変に面白がられて、特にサッカー部の後輩はなんか慕ってくれました。

「武先輩なら、いつかこんな事してくれると思ってました」とか、

「伝説ですね、伝説的変態ですね」

とか言ってきて、今まで見せてきてない僕の一面を見せれたようです。

当然、僕と優子ちゃんの仲は修復する事なんて無くて、それ以来卒業まで顔を合わせる事ありませんでした。

どうやら、（いや、かなり故意に）避けられていたみたいです。

しかも、あるうことが優子ちゃんは北村愛子に僕の相談をしていたらしく、皆の噂になった後に北村から、

「女心が分かってないね」

と、ぼつりと言われてしまいました。

何か妙に腹立たしかったのですが、全て自分のせいなので仕方ありません。

卒業する時も、後輩の彼女達と別れを惜しむ友達や、女の子達に囲まれる同級生を尻目に、僕は不貞腐れるしかありませんでした。誰か一人くらい、僕の制服のボタンを貰いに来るかと期待していましたが、案の定、誰も貰いに来てくれなかったので、悲しくなった事を思い出します。

ああ、僕が安易に彼女のお腹を触らなければ、こんな事にはならなかったろうに。

そんな卒業式の帰り道、僕は結構早く咲いていた桜に呟きました。

僕、もう、お腹を触っちゃだめですか？と・・・。

そんな心の傷を追いながら、僕も高校生になっていくのでした。

僕が受験した高校は、家が近いという理由で、公立の東高でした。

まあ、あんな事もあったので、僕がやる事といえば勉強くらいしか

ありませんでしたので、高校には難なく受かりました。だから、受験は問題なかったのですが、別の問題と言うか、ビックリした事に、北村愛子も同じ高校を受験していました。

彼女が言うには、東高には全国クラスの吹奏学部があるらしくて、そこでトランペットを吹きたいと、推薦枠で僕より先に合格してしまっていたのです。

まあ、何もその事で僕が受験先を変える必要はないので、僕は最初の志望校を選んだ訳ですが。

同級生や、他の友達達も、それぞれの高校に散ってしまいました。

まあ、何人かは北村みたいに、同じ高校に進みましたが。

それでも確かに言える事は、とにかく、また、僕の事を知る人がいない環境が訪れたと言う事でした。

期待に胸を膨らませ、希望に満ちた新入生達の笑顔の中、人が賑わう高校の正門をくぐった僕は、硬く心に誓ったのです。

女の子の腰肉とは、関わらないようにしよう、と。僕の高校生活は、こうして幕を開けました。

今度こそ、まともで、真面目で、変に思われない人間になるんだ！

僕は、春休み中、その事ばかり考えていたおかげで、いい作戦を思いついていました。

その作戦とは、「人と仲良くならない、喋らない！」と言うものでした。人と喋るからぼろが出てしまうのです。特に女の子とは絶対喋らないようにしましょう。極力、男とも喋らないようにして、深くまで仲良くはならないようすれば、僕は中学の様にはならないと思っただのです。本来人見知りでもないし、どっちかって言うとお調子者な僕ですが、ここはあえて、皆を避けて、いつも一人でいるような感じにすれば、女の子も別に僕のことを気にする様な事はないだろうし、男友達すら近寄る事も無ければ、僕が腰肉を好機だって事がばれる事も無い訳です。

優子ちゃんとの事が、僕を必要以上に臆病にしていたと言う他ありません。

何もそこまで皆から離れる事は無いだろうに、とはその時は考えませんでした。確かに、男友達と話す時だって、そんな事を自分から言わなきゃ言い訳ですから、そこまでしなくてもと思うのですが、その時のぼくは若いと言うか、極端というか、そうする事が問題解決になると思ったのでしよう。

まあ、作戦通りと言うか、そっけない態度を取る僕は、教室では独りでいる事が出来ました。要するに、僕が腰肉好きだと言う事はクラスの誰も知らない状況になったのです。ただ、部活には入りました。

体を動かす事は好きですし、馬鹿な事を考えないでボールだけを追っかけていたかったし、そっちの方が精神都合上良かったのです。そうでなくては、とても高校生活をまともにも過せないと思ったのでしよう。実際、教室でまともにも口を聞かないなんて、結構なストレスではありましたから。

ただ、その反動が知りませんが、部活には精力的に打ち込みました。まさに、ボールとお喋り状態です。周りの人にはよほどのサッカー好きだと思っていいたらしく、担任の先生なんかは、よくそれを話題に声をかけてきました。

「おう、今日も部活か小田切！お前、よく頑張ってるな」

「はい」

「まだ、半年しかたってないから、大変だろ？」

「まあ、はい」

「一年の時は皆そうだよ。今年はいいとこまでいきそうか？サッカー部は？」

「はい」

「そ、そうか……。まあ、頑張れよ」

「はい」

「先生、応援してるからな！」

「どうもです」

とにかく担任の先生は、よく僕に話しかけてきました。

僕も先生には腰肉の話なんかする事は無いので、変な事を言う気使いは無かったのですが、何と無くいつもどおりの感じで接していました。

そんな態度がそうさせたのかは知らないのですが、先生は僕がふさぎこんでるから誰とも打ち解けられないのだと思っただらしく、中学校に先生に相談の電話を入れていた事を、かなり経ってから後で知りました。

そんなように、先生やクラスの人達ともあまり馴染んでいかない日々が続くのですが、物事は自分の思うように行かないものです。どう言う訳か、僕に興味を持つ人が現れてくるのです。人は、誰かが一人でいることを許さないのかもしれない。もしかしたら、先生に何か言われたのかも入れません。クラスの人気者や、クラスの人ではなくても授業が一緒になると、違うクラスの人が話しかけて来たのです。不思議な事が起こるものです。

そして、その中の一人に、渡辺由香という女性がいたのです。

彼女と初めて会ったのは、僕が休み時間に、人目を避けるように非常階段で本を読んでいた時でした。

突然、日の日差しが遮られたかと思つて顔を上げると、ペットシヨップのゲージの中を見るみたいな目をした彼女が、僕のすぐ目の前に現れてペルシャ猫みたいな声で話しかけてきたのです。

「こんにちわ」

僕はドキリッとして、彼女の顔を見ました。

彼女は僕の目を見ながら、笑みを浮かべながら僕の横に座つて、短めのスカートを払いのけました。もちろん、その時の僕は彼女の事を知りませんでした。名札の色から彼女が二年生である事はすぐに分かりました。彼女が、大きなピンク色の口を一杯に広げて笑いきりくりした目で僕を眺めるので、何故か僕は彼女に警戒感を感じませんでした。

僕がぐくりと飲み込むと、彼女は鼻歌を歌うみたいに声を出しまし

た。

「君、いつもここにいるよね？」

確かに、僕は休み時間になると、いつもこの非常階段で本を読んでいます。誰も来ないし、喋りかけてくれる人がいるクラスにいると、調子に乗ってよからぬ事を口走りそうでしたし、いつまでも意固地に無反応を貫き通すのも、さすがに気まずかったです。ただ、僕の頭はその時理論的思考なんかとても出来なくて、彼女のいきなりの登場と、それに続く質問に自分がどうしていいか分からないでいました。

「どうしたの？お口、きけない？」

諭しかけてくるようなその言葉に、僕は顔を赤くして目を逸らしました。なんか、彼女があまりにも僕とかけ離れているような存在に見えたのです。とは言え、元来負けず嫌いで天邪鬼な僕は、落ち着いたふうを装って、真面目ぶった声で答えました。

「ここ、静かで、本を読むのに最適だから」

僕がそう言って彼女の目を見つめると、彼女は驚いたように目を見開きながら、今度は僕の読んでいる本に視線を向けてきました。

「何の本読んでのの？なんか難しそうだね？」

そう言って首を傾げる彼女の、シャンプーだかコロンの香りが、僕の鼻腔を攪りました。「は、帆船の歴史ってやつ。船の本なんだ」

「ふん。船が好きなんだ」

彼女は、僕の持っていた文庫本に、血管が透き通って見えそうなくらい白い手を伸ばして、二隻の帆船が描かれているその表紙を覗きました。

「好きって言うか、なんか面白そうだったから。多分、親父が買ってきたんだと思うけど」

「ふん。本、よく読むの？」

「まあ、時間があるんで」

「そっか。でも、触れてるって事は、きっと好きだからだよ。そうだよ。私、本あんまり読まないんだよね。漫画はよく読むけどさ」

自分の言った事に頷きながら白い歯を覗かせる彼女の横顔に、僕はすぐ好感を持ってしまいました。

「僕も漫画、すごく読みますよ。家に満喫みたいになった地下倉庫があるし」

漫画の趣味のかぶらない三兄弟のコレクションは、家のガレージ兼倉庫の半地下で山のように詰まれている、いつも母親と喧騒の種になっていました。

「うそだあ？作り話でしょ？」

彼女は大口を開け、目を細めて笑いました。

「本当ですつて。そりゃまあ、大型店舗並みとは言わないけど」

棒がそう言っても、彼女は疑いの笑みを向けてくるので、何と無く腹立たしくなりました。

「まあ、どうでもいいですけど。てっ言うか、僕になんか用ですか？」

僕がそう言い捨てると、彼女は笑うのを止めて、急に真顔になりました。そして、ゆっくりと、その可愛らしい口を開きました。

「君、いつも一人でいるよね？」

そう言つと、彼女は悪戯っぽく笑いながら、僕の目の奥を見てきました。

僕は心の奥が覗かれたみたいでなんか恥ずかしくなりながらも、それがなんか嫌で少し強がりしました。

「一人が好きなんですよ」

「でも、部活は行つてるじゃん。放課後、校庭で走ってるの、私見かけるよ」

「え？」

僕の事見てる？僕はさらに強がりしました。

「か、体を動かすのが、好きなんですよ。中学でもサッカー部だったし」

「ふーん。でも、ここに一人でいる事無いじゃん。もしかして、友達いないの？」

彼女はそう言っつて、また悪戯そんな笑みを向けてきます。

「い、いない事無いですけど。何だかいきなりだなあ、何でそんな事聞くんですか、初対面なのに」

「だって、気になるんだもん、君の事」

「え？」

僕は、彼女の顔をまじまじと見ました。

この人は、何を言い出したのだろうか？

初めて会っつて、初めて話したと言うのに、いきなりすぎじゃありませんか？

僕は動揺を隠しきれませんでした。

「私、渡辺由香。宜しくね」

年上の女性は初めてです！（前書き）

誰だって年上の女性にメロメロンになったことはあるでしょ？
それですって。え？私は女性だって？

じゃあ、仲良くしてください（笑）

年上の女性は初めてです！

何も言えず唾然としている僕を見ながら、彼女は喋り続けます。

「サツカー部のマナージャーのユッキーとは仲良しなの。よくサツカー部の練習も見てるし。君の事も、無口で笑わないけど、よく頑張ってるなあ、と思って見てたんだよ。小田切君」

「あ、ありがとうございます」

僕は、顔が熱くなるのを感じました。その尋常じゃないほどの熱は、僕の思考回路と自意識の限界地を突破させて、訳の分からない領域にいざなっていました。

当然の事ながら、ぼくは彼女と目を合わす事が出来ませんでした。

その時、無常にも遠くで、予鈴が鳴り響きました。

「あ、もう行かなきゃね。小田切君、今日練習あるでしょ。見てるからね」

彼女はそう言うと、スカートを一ヒラヒラさせながら立ち上がった、両手でお尻のほこりを払いました。そして、非常階段から僕の目の前に少し歩き出して、振り向きざまに大きな声でこういつてきました。

「何か、可愛い声だね。想像してたのと、違ったぞ！」

そう言うなり、彼女は走り去っていきました。

取り残された僕は、売れた柿の実みたいに赤くなりながら、彼女の白い足を目で追っていました。

その日、午後の授業に身が入らなかったのは、言うまでもありません。

初めて声をかけてくれた年上の女性、渡辺由香の顔で、僕の押さえつけていた感情のたがが外れ、思春期のささくれ立った頭は一杯になっってしまったのです。とにかく衝撃的でしたから、自分じゃどうする事もできないので、どうしても顔がにやけっぱなしになってしまいました。隣の席に座るクラスメイトにそれを指摘されても、ま

まったく気になりませんでした。

だって、年上の女の人からあんな事言われるなんて思いもよりませんし、それより何より、渡辺由香は、間違いなく可愛かったのです。どう、鼻屑目に見ても、類まれ無き可愛いさなのです。

そんな彼女が、僕の練習を見ていたなんて。

さっき話した言葉が、頭の中を駆け巡ります。何であんな可愛い先輩が、僕に声をかけてきたのだろうか？とか、部活中の僕をどこかで見ていたの？とか、色々な疑問が頭に浮かびました。もちろん背景は桃色です。

ただ、クラスメイトにさえ沈黙を取り続けていた僕ですから、それを誰に言う訳でもなくて悶々と、しかし、湧き上がる感情に少し酔いしれながら、はやくはやくと放課後が来るのを待っていました。

勿論、授業が終わるとすぐに、部室に急ぎました。

いつも以上に気合が入っている僕に、すでに来ていた同じ一年生の部員達も少し戸惑ってるようでした。それはそうでしょう。いつもなら無口で無愛想な僕が、いきなり明るい声で皆に挨拶してくるのですから、おかしく思うのも無理はありません。

でもそんな事気にもしないで、誰よりも早く着替えて部室から出て、急いでグラウンドまで向かうと、まず始めに彼女の姿を探しました。

どこかで僕の勇姿を見ているはずです、何しろ、直接本人がそう言っていたのですから。

しかし、彼女の姿はありませんでした。

ただ、僕は落胆はしませんでした。まだ、二年生は授業が終わっていないみたいで、マネージャーの由紀子さんもいませんでしたし、他の二年生もまだみたいです。なので、僕はとにかくはやる気持ちを抑えながら、かなりの神経を彼女の搜索に使いながらも、他の一年生と練習を始める準備をしていました。

こんなにドキドキするのは、優子ちゃんに告白された時以来だと言えるでしょう。

だから、明らかに挙動不審な僕は、校庭の隅から隅、あっち、こっ

ちに目を光らせながら、僕の事を気になっている年上の人が表れるのを待ちました。

しばらくして時間になると二年生や三年生の先輩達が続々と現れてきて、同じぐらいの時間にマネージャーの由紀子さんも来たのですが、どうしてか、どこにも彼女の姿は見当たりませんでした。

僕はおかしいなあと思い、少し彼女の事を心配してしまいました。もしかしたら、何か事故があつて来る事ができなくなったのかも？そんな事がふと頭をよぎったりして、僕の胸が不安に覆割れそうになりましたが、その前に練習が本格的に始まってしまいました。一年生はまだ基礎的な練習が多くて、単調な動きばかりやらされるのですが、僕はそれに集中する事ができなくなりました。どうしたつて、彼女の事が気になってしまい、いつも出来ている事さえミスしたり、合間ができたら探してしまったり、まあ、その日の僕は使い物になりませんでした。

散々な練習が終わつた後に、二年生の先輩達に彼女の事を聞こうかと思いましたが、寸でのところで止めておきました。何しろ、あまり口を開かないキャラに思われていました僕が、あんな可愛い先輩の事を聞いたりしたら、たちまち冷やかしの対象になってしまいます。そしたら・・・先輩達にそんな事されたら・・・きつと僕は、その反動で本性を露にするに違いありません。そしたら、僕の高校生活も、中学の二の前になってしまいます。

ですからそんな事も出来ず、僕は意気消沈して家に帰りました。勿論、帰つてからも、頭の中は彼女の事で一杯です。いつもだったら、無愛想に帰ってくる僕が、ニヤニヤしながら帰ってきたのでお袋もビククリしていました。

ただ、家に帰って時間が経つた事もあつてか、今日の出来事を冷静に考えてみて、僕は一つの結論を見つけ出しました。

要するに、僕はからかわれていただけなのだ、と。

始めは五%未満だったその疑いは、十分ごとにその割合を増している、最終的に九十%に達していました。十%だけまだ期待している

のは、僕が若かったからとしか言いようがありませんが、とにかく、寝る前には淡い期待が、自己嫌悪に変わっていました。

僕は、なんておめでたい男なんだ！

あんなに可愛い人が、無口で喋らない、見方によっては暗くも見える僕の事を気なってるなんて！そっちに考える方が、おかしい話じゃないですか。突然話しかけてくるのだって、よく考えてみなくても怪しいもんです。僕は枕に顔を押し付けながら、今日の出来事は、彼女が友達とした罰ゲームか何かだと思おう事にしました。

ああ、何て僕は間抜けなんだ！

それと同時に、こんな事で惑わされちゃいけない、明日からもまた同じ日常を心がけるんだ。そうしないと、また僕は変態の烙印を押しされてしまう。そう自分に言い聞かせたのです。

暗い中横になっていると、次から次へといらぬ事が頭に浮かんできてしまったので、その夜眠りについたらのは夜中の三時を過ぎていました。

次の日の昼休み、僕は眠たい目をこすりながら、また昨日と同じように非常階段で本を読んできました。太陽が雲間から覗くので、とってもいい日差しが降り注いでいて、昼寝するのにだってもってこいな状況です。昨日の今日ということもあり、僕はただ、今日が平和に過ぎていく事だけを思いながら、家から持ってきたランボアの詩集を読んできました。

すると、打ちつばなしのコンクリートの階段の踊り場に、頭をつけて寝そべっていた僕に、近づいてくる人影がありました。

誰かと思って顔を上げて見て、僕は飛び起きました。

なんと、また彼女が現れたのです。ほぼ、昨日と同じ時間でした。彼女のピンクの可愛い唇がプルプルと弧を描き、クリクリした目が体を硬直させた僕を捕らえると、透き通るような太ももをひらひらしたスカートで隠しながら、こちらにまっすぐに歩いてきました。

「小田切君！みーつけた！」

そう言った彼女を見た瞬間、僕の心臓は高鳴り、持っていた本を落としそうになりました。昨日までの彼女に対する疑いが、頭からすっかり吹き飛ばされていきます。

すかさず、僕も笑顔になつて、それに答えてしまいました。

「こ、こんにちわ」

見る見る赤くなつていく僕の顔に、彼女は気がついたでしょうか？

「こんにちわ。隣、いい？」

僕がそれに答える前に、彼女は微笑みながら、僕の隣に腰掛けました。昨日と同じ、彼女の髪の毛のシャンプーの匂いが僕の鼻腔をくすぐります。それだけで体中の血が沸き立ってしまい、くらくらするのを押さえながらも、僕は彼女の顔を見ました。

明るい日差しに照らされて、彼女の肩まで伸ばした髪の毛が茶色く透けています。真珠みたいに白い肌の頬が、少しだけ赤みをさしていて少し幼く見得るのですが、あんな細い喉から出てくると思えない声と合いみると、それがギャップとなつて何とも言えない印象を感じてしまいます。

彼女の可愛さを一言で言うとしたら・・・ヴィーナス。

まあ、僕はただ、こんな近くで、彼女の顔を余すところなく見る事が出来ている自分が、信じられませんでした。

「どうしたの？」

何も言わずに、鼻息だけ荒い僕の顔を見ながら、先輩は笑いました。

「いついえ？その、別に・・・」

僕は慌てて目を逸らしました。でも、また横目で見ていました。

「昨日、部活中、グラウンドで私の事探してたでしょう？」

彼女は僕の方を見ないで、太ももにお腹を付けながら、上履きをいじくっています。

「え？」

僕は言葉に詰まりました。頭の中で、色々なハテナが駆け巡ります。

「小田切君。なんか、きよろきよろしてたもん」

肩と太ももを触れ合わせながら、彼女はそう言うと、僕の方を上目遣いで見てきました。

「いや！そんな事……。」「
ある……。」

強がってみても、動揺は隠し切れません。僕は、恥ずかしくなって、下を向いてしまいました。

きっと、彼女はどこかで僕の事を見ていたのです。そして、昨日の僕は明らかに少し挙動不審でした。

僕は、ずばり、心を見透かされたような気持ちになりました。

「ほんとにー？」

悪戯っ子の目で、彼女は笑っています。僕はなんか腹立たしくなつて、少し乱暴に反抗、要するに逆切れしてみました。

「昨日、先輩来てなかったじゃないですか！」

僕が彼女の方を見てそう言っても、彼女は何も言わないで、ただ、笑った目で僕の方を見えています。

「いなかっただしょう？昨日は？」

僕がさらに言葉をかけても、何も言わずに、嬉しそうにこちらを見に来るだけです。ぼくは、なんか腹立たしさを通り越して、困ってしまいました。

「一体どうすりゃいいんだ？」

逃げ出す変わりに、僕は彼女から目を逸らしました。

すると、彼女が口を開きました

「見ていてほしかった？」

呟くように優しく、彼女は僕に尋ねてきました。

その瞬間、張り詰めた糸が切れたとでも申しましょうか、僕は何て言うか、へんてこな気持ちになってしまい、真顔で彼女の方を向きながら、口から気持ちが素直に出ていってしまいました。

「はい」

僕がそうつぶやく様に言つて、大きく頷くと、彼女は顔を手で押さえながら吹き出して、太ももの間で体を揺らしながら、笑いを堪え

だしました。

僕は、慌てて取り繕います。

「あー！いや、嘘、嘘！ぜんぜん、そんな事ないっ！俺、ぜーんぜん、気になってなんか・・・」

いくら後から言っても、取り返しはつきません。彼女はと言うと、ちらちらこつちを向きながら、声を出して笑っています。

僕の体中の血は完全に抜けきってしまいました。

頭は真っ白になり、本能だけしか残されていなかったため、僕はそれに従ってこの場から逃走を試みようとして、立ち上がるつもりです。すると、彼女は笑うのをやめて、僕の手に自分の手を重ねました。

「キミ、マジ、カワイイ！」

彼女のその言葉が耳に入った瞬間、僕のテンションは一気に最高潮まで達し、少し浮かした腰もその場に着地しました。たぶん、脳味噌がとろけて鼻から出ていたと思います。

彼女の言葉に反応して、瞬間的に沸点に達した血液がビククウエーブを作ったので、とても彼女の顔なんて見れません。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、彼女は堰を切ったように喋りだしました。

「小田切君って、何か、イイ！カワイイよ！昨日だって、私の事、練習中ずっと探してたもんね。私、理科室からずっと見てたもん。

きよろきよろ、きよろきよろ、探しちゃってさ。ホント、カワイイヤツめ」

そう言つて、彼女は僕の体をタッチしてきました。

その感触が、こだまのように僕の体を反響します。

僕は何故か笑いが止まらなくなってしまい、それに釣られて彼女も一緒に笑い出しました。僕らはそこで、何かを通じ合わせたのです。そして僕は、この女に完全に心を奪われました。

この出来事があったから、僕は休み時間を彼女と過ごす事が多くなりました。

この非常階段に集まって、僕が彼女の知らない面白い本とか漫画を

教えたり、彼女の好きなミュージシャンの話をしたり、まだ小学生の彼女の弟の話や、僕の兄貴達の話をしたり、以前の僕にとってはかなり楽しい時間を過ごしたのです。

僕はまだ、ヒヨっ子一年生でしたし、一つだけ年上とは言え、先輩は大人の女性に見えたので、もう、ただ、ひたすらすがりつくように甘えました。そして、彼女はそれを受け止めてくれていたと思います。何と言うか、思い返せば男兄弟の僕は、女性への接し方が少し変だったのかもしれませんが。

でも、そのおかげか、僕の生活は瞬く間に変わっていきました。彼女と喋っているうちに、僕の心の籠が外れてきたのでしょうか。次第に、入学当時に決めていた事なんてすっかり忘れて、自分からクラスや部活の友達と喋る様になりました。担任の先生もびっくりするくらいのvarietyようで、人格が変わった、と言うか、元に戻っただけなのですが、誰とでもよく会話をするようになりました。たぶん傍から見たら、相当な変化だったと思います。そう、まるで使用前、使用後みたいなの……。

こんな僕の様子に、始めは戸惑っていた皆でしたが、男子とはすぐに馴染んでしまい、女子とは少しですが、打ち解けるようになりました。

それもこれも先輩と会えたからで、僕の中でも彼女の存在は大きくなっていきました。

要するに、僕は恋をしてしまったのです。

彼女と会う度に、僕は彼女の事を好きになっていきました。僕と会う時の彼女は、いつも明るくて、楽しそうでしたし、僕の方はその数倍楽しく、それに、彼女は僕のやる事なす事の大体を面白がってくれて、僕の紹介する全ての物を気に入ってくれましたから、僕らの関係はいい方向に向かっている事を、しっかりと確信していました。廊下ですれ違う時だって、僕が声をかけると快く返してくれますし、二年生の女友達にも紹介されました。かなり恥ずかしかったけど、何か気持ちがいいもので、渡辺由香の知り合いだと言う

だけで、皆の見る目が違うような機がしていました。

勿論、男の先輩にも紹介されて、二年生の知らない人とも知り合えるようになりました。皆、由香先輩と親しそうに話していて、彼女にとってもそれが普通なような感じなので、彼女の人柄を確認する日々だったのですが、反面、僕にはつらい日々でした。彼女が二年生の男の先輩と親しそうに喋っているのを見ると、何か気持ちがざわめいてしまうのです。僕の知らない彼女を、このチャラチャラした男達は知っているわけで、勿論、彼女が僕に自分の全て言ってくる訳でもないのです。僕は彼女の事を、少ししか知りません。

僕は、高校生にして、言い知れぬ、「嫉妬」と言う感覚を覚えたのです。

こんなに女の人を恋しく思い、自分だけのものにしたくなつた人は、由香先輩が初めてだったのです。僕は自分の部屋のベットの所で、訳の分からない感情に、幾度もだえたか分かりませんが、その事に自分で気がついた瞬間、僕は彼女の気持ちを確かめずにはいられませんでした。

それは、十一月の終わりの事でした。

前の日に迷っていた気持ちに整理をつけ、決意を決めていた僕は、由香先輩を呼び出しました。放課後、冷たく乾いた風の吹く中、手で冷たくなつた頬を暖めながら下駄箱の前で待っていると、廊下の向こうに彼女の姿が見えました。冬服の制服に、チエックのマフラ―、白い息が冬でも潤っているピンクの口元から出ています。彼女は僕に気づくと、白いハイソックスを履く白い足が寒そうに駆けて来ました。

透き通つた黒い瞳が、クリリと僕の方を見えています。

「待った？なんか、今日寒いね？白い息出てるよ」

「ぜんぜん。先輩だって、白い息出てるよ。まあ、寒いから早く行くこうよ。」

先輩は、小さい足を、小さなローファーに納めます。

「なんか、一緒に帰るの久しぶりだね」

「何言ってるんですか。初めてですって。何人かで帰った事は歩けど・・・」

「そうだっけ。何かそんな気がしないなあ。ふふふ。じゃあ、今日も行こうか！」

そう言つて、彼女はマイクを握るかつこをして、軽く口を尖らせてハミングしました。

何日か前に彼女の友達達と一緒に帰った時、僕もカラオケに連れて行かされたのです。あのときの事を言っているのでしょうか。

彼女は無類のカラオケ好きでした。

「先輩、カラオケ好きだなあ。うーん、カラオケか・・・」

僕は、軽く苦笑いしました。それと言うのも、彼女の友達が無類やり僕の名前でカードを作ったり、すぐにお酒も飲みだして、そのお店で暴れまわったのが思い出されたからです。何故か、僕が店員さんに謝つていて、気まずい思いをしました。彼女はウケていたけど。最近気が付いたのですが、彼女の友達は何と無く自分とテイストが違うのです。要するに、そりが会わないのですが、僕はそれを彼女には口にしませんでした。

そんな僕の心なんか、気にも留めない様子で、無邪気な笑顔を向けながら彼女は僕の顔を見ていました。

「いいじゃん。私、武士君の歌、聞きたいよ。まあ、私も凄い歌いたい気分だけど」

先輩のこの一言を聞いた時、僕の顔は、急激に赤くなっていたはずです。

何故なら、この前カラオケに言った時、彼女が言っていたのです。

僕の声が素敵だった！

ファーストキス（前書き）

覚えてますか？初めての・・・。

そうです。あの人とですよ。

うたっちゃいそうですね。初めてのチュウ
誰がうたっていたのかな？

ファーストキス

彼女に言わせると、轢きつけられる声だそうで、まあ、よく歌はうまいと言われていましたけど、彼女に褒められると、それはもう格別です。

それを聞いて、僕がとてもご機嫌になったのは、言うまでもありません。

「よし、すぐに行きましょう！今日は、僕が払っちゃうから！ハハハ」

「急に元気になっちゃって。へんなの」

二人は、笑いながら校門から出ました。人もまばらな校門から出ると、学校の敷地内からはみ出ている木々の色付いた葉っぱが、周りの道路を色々な色で敷き詰めていて、ひらひらと葉っぱも落ちてきます。僕らはその道を、歩いていきました。

「何か、秋っぽいね。落ち葉の落ち方がさ」

僕がそう言うと、彼女は隣で白い歯を見せました。

「何？詩人？」

「詩人って！詩になってないでしょ、今のじゃ」

「そう？何か、武士君が喋ると、何でも詩を喋ってるように聞こえるのは、私だけ？」「たぶん、先輩だけです」

「ふーん」

「先輩、歌好きだから、詩も好き？」

「私？うーん、あまり考えた事ないなあ。歌が好きなのは、歌う事が好きただけだし、大声出すと気持ちいいじゃん」

「そっか」

僕は少ししょんぼりしながらも、ちよつと口ごもって、言葉を続けました。

「う、歌ってる時の、先輩の声ってさ・・・、なんて言うか。結構、可愛いつて言うか、何か、いい感じだと思つと言うか、その、気持

ちが現れているよね」

僕の言葉に、彼女はじつと僕を見てきました。

「それは褒め言葉？急に変な事言ってる。まあ、いいけどさ。武士君の歌声だって、私はすごくいいと思うよ。普段話してる声と違って、聞いた時、何かびつくりした。ふふふ。普段は何言ってるのか、よく分からないのよね」

先輩はそう言っただけで笑ってしまいました。僕は、彼女の笑顔を見ながら、胸の高鳴りを抑えるのに苦労しました。

先輩と二人きりで、カラオケボックス……。

これは、考えてみたら、ありえない展開ではないですか。それまでの、僕の行動予定では、どこか公園でも行っただけで、告白しよう、としかなかったので、カラオケだったら、密室で完全に二人きりで、その後どんな展開が待ち受けているか、考えただけでもドキドキものです。それに、彼女が僕の声を入っていると聞いて、告白しやなし、告白と言えば、ラブソング、ラブソングと言えば、告白じゃないですか！何て、いい流れなんだ！

かなりの期待が、すぐそこに待ち受けている事は間違いないです。僕の頭の中で創造の二人が激しく動き出す前に、いつの間にか僕らはお目当てのカラオケ店に到着していました。

カラオケボックスに行ってみると、夕方まで学校の終わる時間帯になつていたので、近隣の高校生で溢れていました。色々な制服の女子高生や、僕よりも学年が上らしき男子高校生達がロビーに座っていて、それぞれに、順番を待っているようでした。ロビー中の喋り声と、BGMと、部屋から漏れてくる音が混ざり合っていて、騒々しくて、受付も一人しかいないらしく、だいぶ混雑している中、僕は由香先輩を一人入り口付近に残し、受付に向かいました。前に三組くらいいて、一人しかいない受付係は結構奮闘してがんばっていました。が、やっぱり受付に時間がかかってしまいました。

僕は、イライラを抑えて、由香先輩を待たせました。なあ、と思いつつ、ながら来た方向に帰っていくと、由香先輩がソファに座っていて、

しかも、僕の知らない男と話しているのが見えてしまいました。彼女は、僕が戻ってくるのに気づいていないのか、何やら楽しそうに話しています。

しばらく立ち尽くしながら見ていると、彼女と喋っていた男は連れ呼びかけに応えて、すぐに彼女から離れていきました。

そいつが言ってしまうと、僕はすかさず彼女の法に向かいました。

「時間かかったね。少し待つのかな？」

彼女はいつもの感じで、何事もなかったかのように僕に話しかけてきます。僕は心の動揺を抑えつつも、顔を引きつらせながら彼女の隣に腰掛けました。

「うん。ちよつと待ちそう」

「そっか、混んでるもんね」

彼女はそう言つて、右手に持っていた携帯電話を、鞆の中にしまいました。何故かそれが、隠すように見えてしまった僕は、聞かずにはいられなくなりました。

あの、男の事を。

「さっきの人、先輩の知り合い？」

僕は、男が去つていった階段を見ながら、出来るだけ平坦な口調で聞きました。

「あの人？ぜんぜん知らない人だよ。なんかトイレの場所聞いてきたの。私に聞いたって分からないのにな」

彼女はいつもの事と言いたげに、「可愛らしい鼻をこちらに向けてきました。」

そう言われてしまうと、これ以上突っ込めなくなつてしまいました。

僕は彼女を横目で見ながら、心にモヤモヤした物が現れてくるのを感じました。くしゃみが出そうで、出てこないみたい、あのモヤモヤ感です。その理由は分かっていますが、今は考えないで、封じ込める事にしました。そのモヤモヤも、今までの彼女への思いも、この後に決着をつけるのですから、その時にぶちかまそうと思ったのです。

僕がそう思つて拳を握り締めて受付を見ていると、男子校の制服を着た奴が三人いて、ちらちらこつちを見ているのに気がつきました。辺りを見回すと、僕の隣にカップルがいて、そのカップルの男も、ちらちらこつちを見ていました。

僕は体を持ち上げ、由香先輩をそいつらから見えなくなるように体をひねらせて、彼女の顔を見ました。なんか他の男に由香先輩を見られると、由香先輩が穢れていくように感じたのです。

長い睫毛やし丸い小鼻を眺め、彼女は僕だけのものだなんて思いながら、その優越感を背中から放出させました。

「もうすぐ係りが来るよ」

僕はやさしく彼女に声をかけました。彼女は微笑んでいます。

「別に大丈夫だよ。退屈じゃないしさ。君の動きがなんか面白いから」

「え？そう？」

「うん」

「なら、良かった」

彼女は笑いました。

「まったく、遅いなあ。なんか時間かかりすぎちゃ……。あつ、303ですか。お、お願いします」

突然、男性の店員が僕の背中から声をかけてきたので、僕は慌てて振り向いてしまいました。店員は無表情でマイクを持った籠を持ちながら、僕達を部屋に促しました。彼女は、堪えるようにクスクス笑っていたので、僕は頭を掻きながら、案内の店員の後ろに付いていきました。

部屋は薄暗く狭くて、三人座ったら動けなくなりそうなし字型のソファがあり、入った瞬間に、壁にタバコが染み付いた様な臭いが鼻を突いてきました。ソファの前には部屋をさらに狭くするようなテーブルが置いてあり、その上には食事のメニューと、分厚い選曲集が二冊、無造作に置いてありました。

早速、僕達がそのソファに腰掛けると、男性店員はドリンクの注

文を聞きながら、テーブルの上にマイクの入った籠を置きました。そして、僕らのウーロン茶二つの注文を聞くと、彼はすぐに部屋から出て行きました。

僕は、自分のコートをハンガーにかけた後、すぐに彼女のコートを受け取り、丁寧に壁にかけました。彼女のコートから香る匂いが、僕の鼻腔をついてきます。振り向く僕の顔が、にんまりするのを防ぐ手立てはないと言っていいでしょう。幸いな事に、彼女はリモコンの画面を見ていて、自分が歌う曲を選んでいきます。僕はL字型のソファの角に腰掛けて、暗がりの中、リモコンの明かりに照らされる、彼女の横顔を見ていました。そして、ときぱきリモコンを扱う彼女を見ながら、頭の隅で自分が歌う歌を考えていました。

まあ、そんなに時間はかかりません。僕が歌える歌なんて数曲しかなくて、カラオケでは、いつも決まった歌しか歌わないのですから。

「はい。武士君も」

そう言って彼女はリモコンを僕に渡すと、テーブルの籠からマイクを取り出しました。それと同時に、店員が入ってきて、ウーロン茶を二杯テーブルの上に置きました。僕はその一つを彼女の前に置き、自分はそれをとるなり、一口飲みました。喉がからからだったので。

すると、テレビ画面が変わり、彼女選んだ曲が流れ出しました。今人気の歌手の、新曲を選んだようです。

「この曲、好きなの」

イントロが流れている時に、彼女は一言そう言うと、画面に目を向けて歌いだしました。ゆっくりと情緒的なメロディーに載って、遠くにいる彼を思う歌詞が、由香先輩の少し低いけど、よく伸びて透き通る声を通じて、僕の耳に流れ込んできます。由香先輩はほんとに歌い慣れていて、なかなか聞き応えがありました。この曲の、彼を思う女の子の気持ち、僕の胸に染み込んできたら、何か、それと自分の気持ちと重なる部分を感じてしまい、自然に由香先輩の横顔を見てしまいました。

そんな僕の視線を感じてはいない様子で、彼女は一生懸命歌っています。

マイクと彼女の唇が、付くか付かないか位に近づいているのが、薄暗い中でもしつかり僕には見えましたし、閉じたり開いたりする唇は、まるで歌詞と曲以上のものを僕に訴えかけている様に感じられてしまいます。ずっと見ていたせいでしようか、サビを歌い終わつた位で僕の視線に気づいた彼女が照れたように笑いながら、僕のためのまえにあつたりモコンを手で僕の方に押ししてきました。

僕はそれを受け取ると、胸の中で暴れまわるどきどきを押さえながらも、鼻の穴を全開に広げながらリモコンの画面を覗きこんで、自分が歌う曲を選びにかかりました。

途端に、彼女の歌声がまた部屋に響いてきました。

ああ、どうしよう。何を歌えばいいんだろうか？ぐつと来るような由香先輩の胸に響くような、ああ、一杯局はあるけど、どれを選んでもいいか分からない！だけど、僕が歌える歌なんてほんの少しじゃないか。ああ、こんな事なら、事前に練習しとけばよかった。それより、早く話を切り出さないと。でも、とりあえず一曲歌って、それからの方が・・・いや、歌う前に言っても・・・、ああ、どうしよう。

僕の中で今までにない焦りがこみ上げてきて、頭が真っ白になっているうちに、彼女は歌を歌い終わってしまいました。

それに気がつくと、その場を取り繕うように、僕は思わず声を上げました。

「うをおー！いいーやばいくらい、うまいなあ！」

僕の歓声に、先輩は笑った目をしながら、恥ずかしそうにマイクを置きました。

「ほんと！ありがと。今日初めて歌ったからさ。これ、いい曲だね」

「先輩が歌うとさらにいいよ。俺も気に入った」

「本当ー？また、うまい事言っちゃって。それより、曲入れた？」

「えーと・・・」

「何、まだ入れてないの？早く入れないと、また私歌っちゃうよ」

「ちよ、ちよっと待つて。はい。入れた。今入れたよ」

「よろしい。あつ、渋いの選んだね」

僕は何も言わずに、リモコンを先輩に渡しました。それと同じくして、画面に僕が選んだ曲の映像が流れ出しました。画面に、一昔前のファッションのカップルが海辺を歩いている映像が流れ出してきたので、僕は一つ深呼吸をしました。この曲は僕がカラオケに来るといつも歌っている曲で、かなり前に流行った曲なのですが、このバンドは僕が一番のお気に入り、いつもよく聞いている、自信のある曲でした。まあ、本当は、僕の歌えるラブソングはこれしか無かったのですが。

ただ、これしか思い浮かばなくてとっさに入れたとは言え、今の僕の状況と、この曲の歌詞とは偶然にも一致したものでした。要するに、この局は好きな女の事を愛していると、前面に伝える曲なのです。なので、どうしたって彼女への自分の気持ち、胸の奥から絶え間なく込み上げてきましたが、僕はそれを直接彼女にぶつけないで、画面の方だけを見つめていました。

しばらく続いたイントロが終わりかけになると、画面の下に貸しが浮かんでます。

僕は歌いました。

僕の気持ちと、歌の歌詞は一緒です。否が応でも気持ちは乗っている、僕の口からは自然に言葉が出て行きます。何回も歌っている歌ということもあり、画面の文字を目で追わなくてもすらすらと声が出て行きます。自分でも信じられないくらい伸びのある声で歌え手、それがどんどん調子をよくしていき、それが最後まで続いていきました。

僕がマイクを置くと、すぐに彼女の拍手が聞こえました。

「やっぱ、武士君、いい声してる。響いてくるもん。よいよい」

弟をあやすお姉さんみたいな声で彼女がそういつて、隣にいる僕の

頭を撫でてきました。

僕の本能が、その瞬間に目覚めました。

オスになった僕は、衝動的にその手を力強く握って、彼女の体を抱き寄せました。

「え？」

五センチと離れていない所に、彼女の顔があります。

「武士君、どうしたの？」

少し怯えた目をしている彼女を、僕はじっと見つめます。

「痛いよ」

僕は握っていた手の力を弱めると、彼女の手を離しました。そして、言いました。

「先輩、俺、先輩の事が好きだ」

体が少し離れた彼女は、逃げ出すでもなく何も言わずに僕を見ている。僕は続けました。

「先輩は俺の事、どう思ってるの？」

僕の心臓は爆発寸前です。彼女の声を聞くまでの時間が、すごく長く感じられました。僕の十センチも離れていない所に彼女の顔があった。完全に僕の気持ちは伝わっているはずです。

彼女は、じつと僕の顔を見ていました。

その顔は、僕が今まで見た事が無い様な表情になって、可愛らしいと思った目が、いつの間にか女の目になって、怪しく歪みました。

そして、気がつくと、僕の手を彼女が逆に握り返してきました。温かい彼女の手のぬくもりが、僕の手に伝ってきます。僕があまりの事に体を強張らしていると、彼女の顔が、少しずつ僕の方に寄ってきて、膝、太もも、肩の順に徐々に体がくっついていきました。

僕の頭はもう、真っ白になって、眼は彼女の唇しか見えません。

なおも近づいてくる彼女は、僕の腕と脇の間に手を通してきて、僕の目の前に顔を持ってきました。

彼女の息が、僕の顔に当たります。

静かに、しかし荒々しく息をしている彼女と、まったく息をしてい

ない僕。

彼女は、目を瞑りました。

僕の唇を受け入れるかのように・・・。

僕の脳味噌の思考回路は泊まっていたましたが、動物的本能の部分は活動していたらしく、体は自然に動いていきました。

僕は目を瞑り、そして、ゆっくりと彼女の唇に自分の唇を重ねました。

「?!」

触れた瞬間に、やわらかい彼女の唇の感覚が僕に伝わってきます。神経の全てがそこに集まり、唇が僕の脳味噌と直結されているようでした。次の瞬間には、腕が動いてそれは彼女の体にへばりつき、柔らかな触感間を感じながら強く抱きしめました。

僕は、今、自分がしている事がとても信じられなくて、本当に起きている事だとは思えませんでしたが、彼女の体温がそれが現実だと訴えていました。

どれくらい、彼女とそうしていたでしょうか？

僕は目を開け、彼女の唇から、僕の唇を離しました。

知らない間に、僕は彼女の頬に手を回していました。僕の手の中に彼女の可愛い顔が納まっているのです。僕は手を腰に回し、少し顔を彼女から離しました。彼女も僕の腰に手を回して、こちらを見えています。

「由香先輩・・・」

僕は力無くそう呟きました。

すると、彼女は何も言わずに頷き、また僕の唇を求めてきました。

苦い思い出は笑える（前書き）

男には決めなきゃなん時がある！

バッチ来い！しかし、出来ない事が多いんだよね。

とほほ。しかし、若いときなら笑えるよ。うんうん！

苦い思い出は笑える

結局、由香先輩から明確な答えは求める事は出来ませんでした。僕の中では、間違いなく彼女は僕のものである事が決まっていた。何しろ、彼女からキスしてきたのですから、彼女は僕に事が好きに間違いないと思ったのです。まあ、今考えても当然です。なので、それからの彼女と僕は、前よりも踏み込んだ関係になり、そして、何度もカラオケに通いました。

そんな事をしてるうちに、二人の関係も深まり、僕は当然のように自分の彼女として先輩に接して行きました。僕はもちろん有頂天です。

こんな事があって、僕は前以上に積極的な人間になりました。そして、世界で一番の幸せ者だと信じて疑わないうま、季節は十二月になって行きました。

十二月も後半になり、クリスマスが近づいてくると、僕は浮かれ気分になって行きました。それまで、クリスマスに彼女はいた事はありませんでしたが、今年は相手がいるのです。確認はしませんでした。僕は当然、由香先輩と過ごすものと思って行きました。彼女なので、彼氏の僕と過すのは当たり前でしよう。皆、そうしているのだし。僕はそればかり考えていて、プレゼントも十二月に入るなり考えて、シチュエーションまで考えて、準備万全の体制で待ち構えて行きました。彼女の慶ぶ顔まで浮かべるほど、僕は浮かれポンチになって行きました。

しかし、それもつかの間の事でした。僕は信じられない事を聞いてしまったのです。

それは、部活の先輩からでした。

部活が終わった後に、僕が部室でいつも通り着替えていると、急に彼女と同じクラスの先輩が話しかけて来たのです。

「小田切さあ、お前、渡辺と、仲いいよなあ？」

この先輩は結構面倒見のいい先輩でした。

「は、はい。最近、まあ」

「まさか、付き合っていないよなあ？」

僕にはやけて、付き合っている、彼女は僕のもんなんですよ、と言いかけたとき、その先輩が畳み掛けるように喋りだしました。

「付き合っただけだとは思ってないよ、あいつにあまり近づくとやばいぞ」

先輩が真顔でそう言ってきたので、僕は思わずスットンキョな声を出してしまいました。「ひへえ？」

僕は先輩の言葉を、理解できていませんでした。

「あいつさ、有名なんだよ。男を弄んじゃうの。一年の時からそりゃあ、凄かったよ」

それを聞いて、僕はすぐに言葉が出ませんでした。何を言い始めたんだ、この人はと思っっている僕を尻目に、その先輩は身振り手振りを交えて言葉を続けました。

「だってさ、教育実習に来てたやつをさ、あいつが誘って、惚れさしといて、捨てたらしくてな。どうやらこれが本当らしくて、同じ教育実習生に泣いて話してたって有名なんだよ。三年生の中でも、そんな事された人が何人かいるらしくてな。結構有名なんだよ。まあ、確かにあいつ顔は可愛いし、性格もあんなだから友達になるにはいいけど、本気になつたら痛い目見るって話だよ。まあ、可愛いけどな。もしかしたらと思っただけだな。一応、お前も後輩だからさ、相手は何人も男をたぶらかしてるらしいからさあ。それに、他の学校にも痛い目見た奴がいるって噂だしさあ。ん？おい！小田切聞いてる？」

その時の僕は、完全に自分を自分でコントロール出来ていませんでした。その先輩の顔を鬼のような目で睨みつけ、どんな言葉も耳には入らなかつたと思います。だから、先輩が僕の名前を言った瞬間、何かの糸がブちっと切れてしまいました。気づいたらその先輩に飛び掛っていました。

それに気がついて、周りにいた皆が止めるまで、僕はその先輩の服をつかんで離しませんでした。何かを言いふらしていたと思います。が、それも定かではありませんでした。ただ、気がつく先輩の服が大きく裂かれて、腰の辺りから垂れ下がっていて、僕の手の中にはその服の布が握られていました。先輩はビツクリして、慌てて僕から離れていきましたが、僕はしばらく何人かに組み伏せられて押さえつけられるまでじたばたしていました。

そこにいた上級生に事情を聴かれても、答える事なんかできないで、僕は逃げるようにその場を後にしました。

次の日、僕はサッカー部の顧問の先生に呼び出され、僕が掴みかかった先輩と一緒に説教されてしまいました。僕は飛び掛った理由をちゃんとさえ言えず、先輩も何も言わなかった。先生はそれ以上二人を問い詰めませんでした。先輩からはいやな事悪かった。後から言われて、僕も冷静になっていたので、謝りましたが、やっぱりその先輩ともばつが悪くなり、僕もなんか馬鹿らしくなりました。だったので、その日にサッカー部を辞めてしまいました。

そして、退部届けを出した翌日の放課後、僕はまた由香先輩を待っていました。

クリスマスも近くなって、学校では男女二人組みが目立ち、仲良く話しながら校門から帰っていくのがどうしたって目に付きます。

僕は下駄箱の横に立ちながら、部室である先輩に言われた事を思い出しました。

まさか彼女がそんな事してただなんて……。

僕にはそんな人だとは、どうしても思えません。彼女が平気で人を誑かし、面白がっているなんて考えられません。

僕の気持ちを踏みにじっているだなんて……。

何回も彼女と話し、唇を重ねて、僕らは分かり合ってきたはずなんです。彼女の口から真実を聞くまで、僕はそのことを受け入れられません。ちゃんと僕が問いただせばきっと、彼女は否定するはず。

その時の僕には、その自信がありました。
そんな僕の揺れ動く心を、知ってか知らずか、彼女は下駄箱にやつて来ました。

廊下の奥の方から、女友達と三人でこちらに向かって歩いてきます。僕は迷っている心を落ち着かせようと、ひとつ息を吐きました。そして、頃合を見計らって、僕は先輩達の前に姿を現しました。

先輩達は、三人とも僕の方を向いて、先輩以外の二人は互いに顔を見合わせました。先輩はいつもの笑顔で僕の顔を見てきます。

僕が何も言わずに由香先輩だけを見ていると、他の二人は先輩にさよならして、僕の脇を通り抜けていきました。

僕はそんな友達には目もくれず、由香先輩から目をそらさないでいました。

後ろで、なにやら話している二人の声が聞こえましたが、僕は気にしないで彼女に近づいていきました。

「どうしたの？部活行かなくていいの？」

僕は何も言わずに、さらに近づいていきました。

「なんかあった？珍しいね、木曜日に会うなんて」

彼女は、革の鞆を、お尻の上に両手で持ちながら、僕の方を見てください。

「ちょっと、聞きたい事があるんだ」

僕は、低い声でそういいました。

「何、どうしたの？」

彼女は少し不安げな顔をしました。

「とりあえず、帰ろうよ」

そう言っつて、僕は自分のほうの下駄箱に向かいました。彼女も何も言わずに、自分の下駄箱に行きました。

玄関を出て山の方を見ると、夕日が沈みかけていて、校舎の窓ガラスがオレンジ色に染まっています。カラスの鳴き声とともに、校舎の間を抜ける風の音がして、外に出た二人の顔を撫でてきました。

彼女は僕の斜め後ろに来て、僕の腕によりそって来ました。外には、

この時間には珍しく誰一人いなくて、僕らは何も喋らないまま校門を出ました。

僕は、この時点で特に何も考えていませんでした。

とにかく、彼女の本当の気持ちを知りたい、ただそれだけを思っていました。横で何も知らない、いつもの彼女を見てみると、部室で聞いた言葉はまったくのとんでもない事のように感じられ、疑いを持っている自分の方がおかしくすら感じられます。

すると、彼女は校門を出てすぐ、僕の手を握ってきました。僕が彼女の手の冷たさにびっくりして、十度斜め下を見ると、彼女も僕を見上げていました。

「武士の手、あったかいね」

彼女は白い息でそう呟きます。

寒くてもかさついていないピンク色の艶のある唇、冷たい風に揺れる睫毛、曇りの無い透き通った可愛らしい目、彼女の全てが僕の視界を埋め尽くしてきました。そして、彼女の目の笑い皺を見ているうちに、僕にある感情が湧き上がってきました。

僕は、彼女の手を力強く握ると、その手を強く引つ張って、足早に歩いていきました。

しばらく何も言わずに彼女を引つ張って行き、僕らがいつも使っている駅の近くに來ると、僕はいつもの帰り道から外れて、別の道を進みました。

いつもの様子と違う僕に気が付き、おかしく思った彼女が、僕の手を引つ張り返してきました。

「何でこっちに來たの？帰らないの？」

彼女はそう、聞いてきます。

「付いて來て」

僕はそれだけ言うと、さらに彼女の手を引つ張りました。

「話があるんでしょ？さつきから何も話してないじゃん。何話したいのよ？」

そう言つて彼女が立ち止まるので、僕も歩みを止め、彼女の方に振

り返りました。

「いいから、付いて来て！」

また僕が歩き出すと、彼女は不満そうにしながらも、付いて来ました。なので、僕はどんどん進んでいき、また、少し歩いていくと、また彼女が歩みを止めました。

「ここは・・・」

彼女が言いたい事はよく分かりました。

僕らの目の前には、派手できらびやかなホテル街に続く入り口があったからです。僕は彼女の声が聞こえない振りをして、彼女を強引に引っ張って歩き出しました。

もう、薄暗くなってきたいて、埃まみれのネオンが怪しく光りだしています。呼び込みのお兄さんや、ティッシュ配りのおじさんの間を僕は進んでいき、何軒も連なるいかわしい飲み屋や、刺激的なお店の間を抜けて行きました。制服姿の僕らを見る視線にあおられ、彼女は自然に僕にくつついてきました。僕は幾分緊張しながらも、自分の気持ちがあへし折られないようにと、胸を突き上げながら通りを歩いていきました。

そして、歩きながら、ぶつきらぼうに、少し戸惑った顔をしている彼女に話しかけました。

「俺、この前から凄く考えたんだ。俺は先輩に言ったよね？俺の気持ち」

僕は彼女を見ると、彼女は潤んだ瞳で見返してきました。そして、頷きました。

「でも、ちゃんと先輩から答えを聞いてなかったよね」

彼女は何も言いませんでしたので、僕はさらに言葉を続けました。

「でも、キスもしたし。だから俺は付き合っていると思うてるんだけど、なんか、ちゃんと気持ちを聞きたくて」

僕はゆっくり、でもしっかりと伝わるように話しました。こんな状況でこんな事聞くなんてかなり場違いとは分かっていたのですが、二人だけで静かな所でなんか聞く勇気がその時は無かったのと、一

気に答えを決めてしまいたいという気持ちだが、僕をこの場所に向かわし、こういう事を口にさせたのでしよう。

彼女は、僕の方を見ずに、前の方を見ていました。

「どうなの？先輩は、俺の彼女だよな？俺、確かめたいんだ」

僕は聞こえるように、彼女に言いました。

すると、彼女から僕の手をとって、勢いよく走り出しました。

いきなりの事に頭を働かせることもできず、ただびくりした僕は彼女に導かれるままに一緒に走りだしてしまいました。彼女は僕の腕を引きながら、おじさんや客引きやらの間を僕を導くように駆けて行きます。僕は彼女の揺れる髪の毛と後姿を見ながら、いったいどこに向かっているのだろうかと思いつつかと思いつつその通りを抜けていき、駅の反対側に通じる地下通路に入って行きました。

通路にいる人たちの間を次々と抜けながら、僕らはまた地上に出て、線路沿いに少し進んでいきました。そして、小さな小道に入って少しすると、彼女は立ち止まりました。

「ここは・・・」

走ったせいで息を切らせながら、僕はそう呟きました。目の前には古びた平屋の旅館風の建物があつて、入り口あたりにひとつ電灯がついていました。先輩の方を見ると、彼女も「ハアハア」息を弾ませながらも、カラオケ店で見せたような、ゆがんだ目で僕の方を見て、怪しく口をゆがめました。

「制服姿じゃ、あんなとこ、入れないんだよ」

彼女は僕の手を握りながら、目の前の建物に入って行こうとします。

「ちよ、ちよつと待って！」

僕は慌てて彼女の腕を引っ張り返しました。すると、彼女は怪訝な顔してこちらを見返してきます。

「何？入らないの？」

僕は戸惑いを隠しながら、声を出しました。

「いや、そうじゃないけど、なんか、その、抵抗とかしないの？なんか、躊躇とかするもんじゃない？それを・・・」

彼女は不思議そうな顔をします。

「どうしたの？ここなら制服でも入れるんだよ。おばあちゃんが入れてくれるの」

彼女の言葉に、僕は信じられなくなりました。

「って言うか、どうしてこんな所知ってるんだよ！」

彼女は明らかに困惑しています。

「何でって、武士君があんなとこ歩いて、あんなこと言うから。私、てつきり・・・」

「いや、そりゃ、そうなんだけどさ。でも、なんか、これって、おかしいぞ。先輩、何って言うか、俺・・・。」

彼女は、明らかに不満そうな顔をしてきました。そして、僕の手を勢いよく離し、少し離れると、鋭い眼差しをぶつけてきました。その目は「怒」の光を放っています。

僕は突然の事に混乱しながらも、頭の中で考えをめぐらしました。確かにこういう事をして、確かめたかったんだけど、そうじゃなくて、嫌がってほしかったのに。ああ、何で先輩はこんな場所知ってるんだ。しかし、こんなチャンス逃す事は出来ない。だけど、だけど、何か違う気がするぞ。やっぱり、先輩は・・・。

頭の中で色々な考えが浮かんできましたが、最終的に部室でサッカー部の先輩に言われた事が浮かんできて、それが僕の口から出て行きました。やっぱり、これを確認するまでは、どうしようもありません。

「俺、聞いたんだ。先輩、他にも男がいるんだろ？俺の事、からかってるんだろ？」

彼女はびっくりしたように口を開けました。まるで、まったく違った事を言っているかのようにでしたが、僕は声を荒げながら続けました。

「色々な男と、ここに来てるんだろ？だから、いろいろ知ってるんだ！別に、先輩は俺の事が好きじゃないんだ。だから、ちゃんと答えてくれないんだ。そうだろ？」

彼女は驚いたような目を僕に向け、何にも言わずに見つめてきました。

「色々な男がいるのに、俺の気持ち知っているのに、俺のことからかって楽しんでたんだろ！」

僕がそう言い終ると同時に、彼女がそれを強く否定してくれる事を願いました。そして、また笑って二人で手をつないで帰ることを・・。

しかし、彼女は笑いもしないで、怒ったように切り裂くような声を出してきました。

「そつよ！」

その言葉は僕の脳味噌を立てに切り裂きました。

「え？」

彼女はさらにまくし立てました。

「あなたの思ってる通り！あなたが言った事は全部ホント！私は君の事からかって楽しんでたの！」

僕は力なく呟きました。

「う、嘘だろ・・・？」

「本当よ！一人でいる君を見て、なんか声かけて遊んじやおうと思つたの！君に声かけたらどうなるか知りたくて、面白がつてた！」

僕は彼女の事を呆然と見ながら、何も言う事は出来ませんでした。

すると、彼女は僕の手をとって、今度は何か抑えたような、優しくに語り掛けてきました。

「あなたが私の何を知ってるか知らないけど、今こうして二人でいるんだから、それでいいじゃない。あなたは私の事が好き。そうでしょう？」

僕は体を動かす事が出来ませんでした。

「武士、よく聞いて。確かに、始めはそうだったけど、君と話しているうちに、本当に好きになつてたの。あなたの声が好きだつて言つたのも嘘じゃない。あなたの顔も好き。今は、あなたの事大好きよ。」

彼女の目は涙ぐんでいるようにも見えました。でも、僕の耳は何も受け付ける事はできませんでした。

「嘘だ！」

「信じてよ！だから、あなたが望むなら、私、いいよ。」
そう言つと、由香先輩は僕の手を優しく握つてきました。

しかし、僕はその手を振り払つてしまいました。何故でしょうか？
しかし、振り払ってしまったのです。

すると、由香先輩の顔が急激に雲つていき、目から涙が溢れてきました。僕はその涙にいてもたつてもいられなくなつてしまいました。が、その時、彼女の強烈な叫び声が響きました。

「ほんと、信じられない！馬鹿！私がこれだけ言つてるのに、こんな事して！信じてくれないだなんて！あんたは私の事ちつとも分かつてないんだ！お前なんか一生童貞でいろ！」

彼女は僕をすごい形相で睨み、持っていた鞆を僕の腕に激しくぶつける、振り向きもしないで駅に向かつて走り出していきました。残された僕はただそこで立ち尽くしているしかなくて、その日どうやってうちに帰ったかすら覚えていません。ただ、確かな事は、僕は号泣して帰つたと言つ事です。

友達っていいね（前書き）

一番の財産はお金じゃない！友達だよね。

しかし、自分は友達に何が出来ているのだろう。何も出来ていない。

ああ、情けない。でも、そう思っているのが友達って証拠かもね。

友達っていいね

その日以来、僕は抜け殻と化してしまいました。そして、それから彼女とは顔を合わせることはなくなりました。と言うよりか、学校に来て僕が机から離れられなくなったと言うか、ずっと机の上での抜けた炭酸飲料みたいにぼけっとしていて、一步も教室から出なくなっただので、由香先輩と会う機会がめったになかったのです。あまりの僕の変わりように、クラスの友達が何人か話してきましたが、僕は相手にする気も起きないほど、へこたれていました。学校に行けていたのが不思議なほどでした。

クリスマスもあつという間にきました。当然過ごす相手もいないので家族と過ごし、終業式もなんとなく終わってしまいました。

そう、僕はまったく何にも無い男になってしまったのです。

サッカー部を辞めなければ、年明けの新人大会に出場しただろうし、その為に冬休み始めから朝練をしていたはずなのですが、腑抜けた僕は何もする事もなく、家でゴロゴロしていました。今更サッカー部に戻る事も出来ませんし、そうかと言って他の部活に入りなおすなんて事も考えられませんから、僕は高校一年にして、高校生活の楽しみ的大部分をすっかり失ってしまったのです。

由香先輩の事も考えるとつらくなるのですが、どうしたって考えてしまい、僕は布団の中で後悔の思いを巡らすしかありませんでした。今更どうする事もできないので、苦しみは増すばかりです。

僕はこの時、本当の意味の失恋を経験したのかもしれない。でも、その時の僕は、布団の中で、もう、ただ苦しむしかなくて、溜息とともに魂を放出していました。

しかし、持つべきものは幼馴染！

誰から聞いたのか知りませんが、こんな落ち込んだ僕に、中学の同級生の陽ちゃんや真ちゃんなんか、声を掛けてきてくれたのです。今でも覚えています。

十二月の三十日の夜の九時半、僕がやっぱり自分の部屋で、現実逃避の本なんかを読んでいた時でした。一階から母親の声が聞こえてきて、僕の友達から電話がきていると、しきりに繰り返し叫んできました。

気が立ちっぱなしの僕は、うるさいなあと思いつながら、二階にある電話に転送してくれ、と叫びかえし、電話機の方に向かいました。子機が両親の部屋にあるのです。

その時の僕は、自分に連絡してくる友達の顔が誰か浮かばないまま、僕は受話器をとりました。

「もしもし？武か？」

誰が受話器の向こうにいるか、すぐわかりました。

「陽ちゃん？どうしたの？」

「おお、久しぶり。お前、大晦日の夜、暇だよなあ。まあ、暇なのは知ってるんだけど。それでさ、真達と話してただけど、初詣行こうぜ！」

陽ちゃんは受話器の向こうで、息巻いています。

「え？夜中行くの？」

「当たり前じゃん。お前、去年はなんか、独りになりたいたか何とか言っ行って行かなかったけどさ、俺らは皆で行くのは二回目なの。今年はお前も行きたいだろうと思ったからさ。声かけてみたんだけど、当然行くだろ？」

僕は、このありがたい提案を、受け入れる事にしました。

正直、こいつと友達でよかったと思いました。

「お、おお、まあ、陽ちゃんがそこまで言うなら、俺行くよ。何時？何時に集まるの？」

「ようし、そう来なくちゃな。中学校の前に九時に集合だぞ！チャリで行くからな。宜しくな」

そう言うと楊ちゃんは電話を切り、僕は一階に降りていきました。久しぶりに中学の友達に会う事になって、僕は一人嬉しくなっていました。卒業して以来なかなか会う機会がなかったのですが、あい

つらの顔を見ると思うと、自然に心が弾む反面、落ち着いても来ました。明日を待ちどおしくなっている自分自身に、何故かおかしくなって笑っていると、偶然通りかかった母親が心配そうにこっちを見てきました。

僕は母親に愛想笑いを浮かべながら、すかさず、僕はお風呂場に逃げ込みました。

次の日の夜、僕は愛車のロードレーサーに跨って、学校に向かいました。

今夜向かう神社は、僕達の中学校のすぐ裏手にあつて、そこら辺では一番有名な所でした。初詣の時期には毎年何万人も訪れる所なのですが、その日もかなりの人が訪れていて、大通りに出ると歩道は人で一杯でした。学校に向かう途中の通りにも、初詣に向かう人達が歩いていて、僕は彼らの歩く方に向かって夜風を切つて、ペダルを漕いでいました。冷え切った風が、僕の頬の熱に当たり、どんどん砕け散っていきます。そのたびに僕の熱は奪われていくのですが、ぜんぜん苦にはなりませんでした。

時間びつたり学校に行つてみると、もうすでに何人が集まっています。

祿ちゃんに真ちゃん、そして、陽ちゃん。三人の隣には、同じクラスだった米山順子と北島冴子もいました。久々に会う面子に、自然に顔が綻びます。

僕は校門の脇に自転車を置いて、四人が詰まっている場所に行きました。

すると、米山順子が僕に気づいて手を振ってきました。

「あー！武士だあ！久しぶりい！」

一斉に、皆が僕の方を振り向きまします。それに答えて、僕は皆に手を振りながら、駆けていきました。

「久しぶり！皆、早いなあ。これで全員？」

「真ちゃんが首を振ります。」

「まだ、もう一人来るよ。」

北島冴子が、僕に向かってそう言いました。

「え？誰が来るの？」

僕がそう言つと、僕の前に立っていた楊ちゃんと真ちゃん、そして米山順子が僕の後ろに向かって手を振りました。

「お、来たぞ。遅いぞ！」

「ごめん。ちよつと、手間どつちやつて。さあ、早く行こう」

知っている声でしたので、僕が後ろを振り向くと、そこには北村愛子がいきました。

グリーンのマフラーを首に巻き、茶色のコートを着て僕の後ろに立っていて、すぐに女の子二人のほうに言つてしまいました。

北村とはクラスが離れていて、彼女が部活で忙しいのもあつたので久しぶりに顔を合わせました。そのせいもあつてか、僕は彼女によそよそしい態度をとつてしまい、顔を見ても気まずい思いがありましたので、彼女にはただ「よう！」と言つただけで、まったく話しかけないままに、皆と一緒に神社に向かって歩きだしました。

神社に向かつていく途中、他の皆がどんどん歩いていってしまうので、何故か僕は北村と二人で皆の後を追つていく形になりました。

僕は、しばらく何も言わないでいたのですが、久々に面と向かつているのに話さないのもおかしいと思つたので、しばらくしてから彼女に話かけました。

「何だ。お前もいたのかよ？」

僕が歩きながら前を向いてそう言つと、彼女は待ち構えたように答えました。

「皆が集まるなら、私もいなきゃでしょ？それに、去年もこのメンバーだったよ。あんたはいなかったけど」

「ああ、そう。いいじゃん、今年は来てるんだから」

「まあ、何があつたんだかねえ、去年も今年も」

そう言つて、彼女は溜息をつきます。

「うるさいなあ。色々あるんだよ」

「ふーん」

また沈黙が始まりましたが、神社に近づくにつれ、急に周りにも人が増えてきて、屋台の列なんかが見えてくると、なんとなくまた前みたいな雰囲気、北村と話すようになりました。

高校生になってからちゃんと話していなかったのもあり、学校の問題を交わしながら、自然に会話が弾んでいき、僕らは時々笑い声を立てながら歩いていったのです。

だいぶ人が増えてきたので、前を歩いていた陽ちゃん達を見つけると、はぐれないようにと皆一つに固まりながら、小さな通りにひしめく人ごみの中を掻き分けていきました。すると、人の歩みが止まり、大きな塊の中に入ると、やがてその人の塊が大きな通りに合流して、大きな門をくぐると、僕達は神社の中に入れた事が分かりました。

遠くの方に神社の本堂に行く階段が見えますが、大通り一杯に人がいて、僕達は1歩ずつしか進めなくなりました。

七人で固まりながら、それぞれいろいろな話をしつつ、僕らはその人の流れに乗って、境内に向かって歩いていきました。僕はと言うと、隣のようちゃんとサッカーの話をしていて、北村は他の二人の女の子と話していました。

「ところでさ、お前高校で北村と話したりしてないのか？」

陽ちゃんが、僕に聞こえるくらいの大きさの声で喋ってきました。

「え？うーん。まあ、最近はあるまりなあ」

「そうかあ、何か、あいつ心配してたぞ。あいつが高校入ったぐらいに電話が来てよ。学校に入ったら、武士性格が変わっちゃったみたいだって。喋んなくなつて、暗くなつちゃった、って言っててな。まあ、その時は俺、何でも無いよって言ったんだけどな。あいつはそんな玉じゃない！って言ってやったけど」

僕が頷き、手の平を差し出すと、楊ちゃんが僕の手の平を軽くはたきます。

「案の定、後で北村からさ、なんかあいつ元気になった！って連絡来たのよ。そしたら、十二月も半ばだよ。また連絡あつてさ、武士

がまたおかしくなつたつて言う訳よ。それで、俺が初詣に誘おうつて言ったの。しっかし、お前はいい友達持ったもんだよなあ。心配してる奴がいるんだから、ありがたく思えよな」

僕は何も言わずに、楊ちゃんの話聞いていました。楊ちゃんは話し終えると、じつと僕の方を見てきましたが、それ以上何かを言うことはありませんでした。

僕は、少し前にいる、北村の顔を見ました。なんか楽しそうに、真ちゃんと喋っています。

「あいつそんな事話してたんだ」

僕は彼女の後姿を目で追いながら、心の中でそう呟きました。

お参りの列が徐々に動いていき、僕らもやつとお賽銭を投げれる所まで来る事が出来ました。僕は何か、複雑な気分のままお参りをする事になってしまい、特に何もお願いも出来ませんでした。大切な人が現れますようにと五円を投げ入れながら、一応祈っておきました。皆、それぞれにお祈りをしていて、北村も何か願っていたようです。

そして、神社の階段を下りる頃には、僕らは新年を迎えていました。十六回目の年始まりを、皆と祝う事が出来たのです。

僕らはなんかテンションが高くなりながら、神社を後にしていきます。

神社から帰ってくる途中で、真ちゃんが自分の家で皆でお酒を飲む事を提案してきました。真ちゃんの家には親父さんもおふくろさんもおいるのですが、毎年遅くまで起きてないから、絶対もう寝てるからって、皆で新年最初の集まりを楽しもうと言ってきたのです。すぐに皆それに乗り気になって、急いで真ちゃんの家に向かいました。行く途中に真ちゃんの家近くのコンビニに寄り、皆それぞれにおつまみを買った物籠に入れましたが、さすがにお酒は買えなくて、僕は紙コップなんかを買いました。

心配そうな顔をした様ちゃんが、お酒どうしようかと言うと、真ちゃんがお酒は任せると言いはったので、皆、真ちゃんのお酒を信

じ、それをにわかに期待して、うきうきしながらコンビニを後にしました。

真ちゃんの家は、造園業を営んでいて、なかなかはぶりも良かったので、部屋も庭もかなり広い家に住んでいました。大きな、檜造りの日本建築の母屋と、暗闇に姿を現す植木が静かに僕達を向かい見せていました。

真ちゃんの親に気づかれないように静かに玄関に入ると、皆、忍び足で二階にある真ちゃんの部屋に上りました。両親は一階で寝ているらしく、電気はまったくついてなくて、ひっそりしていました。が、僕らのテンションは上がりっぱなしです。

抜き足、差し足、真ちゃんの部屋のドアの前まで来ると、真ちゃんは小声で、

「先に入って。ちょっと、下から酒取ってくるから」

と言って、一階に下りて行ってしまいました。なので、僕らはドアをあけて、真ちゃんの部屋に入りました。電気を付けると、12畳はありそうな広々とした部屋が現れました。

「ひつろいなあ。真ちゃん、いいところに住んでるねえ」

北島冴子がそう言って、勉強机の椅子に座ります。陽ちゃんは当たり前のように炬燵のスイッチを入れ、エアコンのスイッチも入れました。緑ちゃんもハンガーに自分のコートをかけて、女の子のコートを受け取っていきます。

「さあ、炬燵に入りなよ。寒いべ」

その声に、外の寒さにうんざりしていた女の子達も、炬燵に足を入れてきました。皆それぞれにくつろいでいると、ドアの向こうから階段を上ってくる音がしたかと思うと、勢いよくドアが開きました。ドアの外には真ちゃんがいて、両手一杯お酒を持ちながら、仁王立ちしていました。

「酒、持ってきたぞー」

彼はそう言うと、みんなが足を突っ込んでいる炬燵の上に、満足そうな顔をしながら音を立ててお酒のビンを置きました。持ってきた

のは焼酎の瓶と、白ワインと、赤ワイン。それに、ウーロン茶でした。皆、置かれたお酒と勝ち誇ったような真ちゃんの顔を見ました。「真ちゃん、これは・・・」

「すごいだろ？家にある酒っぽい、とりあえず持って来た。親父のバーカウンターにあったやつなんだけど、適当に持ってきたから飲んでよ」

皆、同時に溜息をつきました。

「私、焼酎なんて飲んだことないけど」

「俺も！」

「なんだよ。でも、ワインあるじゃん」

「ビールないの？」

「えー、あるにはあるけどさあ。これじゃだめかな？」

「ビール！ビール！」

女の子の大合唱が始まります。

「分かったよ。ちょっと待ってるよ！」

真ちゃんは困った顔をして、すぐに下りていきました。その背中を目で追いながら、僕は開け放たれた扉をしめました。

「これなんて読むの？ラ、タシエ？1982。有名なのかな？」

さっそく、北島冴子がコタツテーブルの上にあつた赤ワインを持ち上げながら、ラベルをじっと見ています。

「うーん、知らないなあ。俺、ワインなんて飲んだことねえもん。どれどれ」

楊ちゃんが、北島から勢いよくワインを取り上げます。隣にいる緑ちゃんも、首を突っ込みます。

「知ってる？赤ワインはボトルによって産地がわかるんだよ。これは、撫で肩ボトルだから、ブルゴーニュだねえ。ボルドーは肩が張ってるのさ」

「へー、緑ちゃんよく知ってるねえ？」

北島がろくちゃんの話に、食いついてきます。気を良くしたのか、緑ちゃんがワインを取って、ボトルをまじまじと見て、さも詳しくそ

うな素振りをしました。うやうやしく瓶を見ながら、独り言のように呟きます。

「なんかこのボトル、冷えすぎてるなあ。少し温めないといけないんだなあ。赤ワインは常温で飲むんだよねー。まあ、知ってる人はね」

そう言うと、禄ちゃんは、赤ワインを乱暴に炬燵の布団の中に入れました。

「どうしたの？そんなとこに入れて」

「通は常温だって、俺の親父が言ってたんだ。少し温めてるの」

「ふーん。そうやって飲むんだ、ワインって」

「まあ、あまり美味しいもんじゃないけど。親父がよくコンビニで買ってくるもん」

「俺の親父は焼酎よく飲んでるよ。こんな一升瓶じゃなくて、なんかパツクに入ってるやつだけだ」

楊ちゃんは。焼酎の瓶を持ち上げ、ラベルを見ます。

「もり・い・ぞ・う？見たことないなあ？あけてみつか」

そう言うと、陽ちゃんは勝手にその焼酎の封を開けて、紙コップに注ぎました。

「なんか、変な臭いだなあ。親父と飲む焼酎と違うや。たいした酒じゃないな」

陽ちゃんはそう言うと、紙コップに入った酒を飲み出しました。

「何か、変な味だけど、何か、旨いぞ。飲む？」

そう言うと、陽ちゃんは紙コップを炬燵の上に並べ、それにどんどん注ぎだしました。そして、皆の分注ぐと、それを配ってきました。否応無しにどんどん、皆にそれを進めてきます。

「まだ真ちゃん来て無いんだから。陽介、止めなつて」

北村が釘を刺しますが、楊ちゃんは構わず飲み続けます。あきれれる北村の横で、北島と米山は禄ちゃんの勧めで、さつそく焼酎を飲み始めました。初めての焼酎に、北島はむせてしまいました。米山の方は大丈夫なようで、水を得た魚のようにぐんぐん飲んでいきま

す。その様子を禄ちゃんも面白がって、どんどん米山のコップに注いでいきました。北島も、我慢しながらも飲んでいて、僕もそれに釣られて、自分の紙コップに口をつけました。小さいころにおばあちゃんに食べさせられた、ほしいもの様な味が口に広がり、アルコールが鼻から抜けました。

「おお、もう始めてんのかよ！俺を待てよ、ビールも持ってきたのに」

明らかにコンビニの袋に入った缶ビールを、さっきと同じように炬燵の上に置くと、袋の中からビールを取り出して座りました。

「あたし、これ好きなの」

北村はそう言うと、袋の中からビールを取り出しました。

「じゃあ、かんぱーい！」

禄ちゃんが音頭を取ります。

「おい、声でかすぎ！親父が起きるだろ。起きたら何言われるかわからないんだから。」

「硬い事言わないの。真も飲もうよ」

北村が、真の缶ビールに、自分の缶ビールを当ててにっこり笑います。

「禄ちゃんも知ってるだろ。俺の親父怖いんだから、起きてきたら電気消して、眠るふりするからな、皆いいな！」

真ちゃんがそう言うので、みんなはとりあえず返事だけしましたが、またすぐ飲んで騒ぎ始めました。家に来るまで威勢の良かった真ちゃんが、皆の盛り上がる様子に、今度は嘘のようにびくびくしているのが僕にも分かりましたが、飲み始めてしまったのですぐに気にならなくなりました。

密室はなにかある(前書き)

ドキドキしちゃうよね。未だにドキドキしちゃうよー！

いや、今はドキドキしたらいけない気がする。怒られる気がする。
でも、ドキドキしちゃういたいよね。

そっぴんぽんぽん...

密室はなにかある

まあ、真ちゃんも諦めたようにビールを飲み始めたからですが。僕は笑って、真ちゃんの肩を叩きました。すると、真ちゃんは肩をすくめました。

陽ちゃんや女の子達はもうかなり顔が赤くなっていて、北村も珍しく、少し酔っているようです。禄ちゃんは暖めていた赤ワインを取り出して、真ちゃんが持つてきていたワインオープナーと悪戦苦闘しています。真ちゃんが力を貸そうとして、ワインをあげようとしたら、コルクが折れてしまいました。みんなそれを見て大笑いです。コルクは瓶の口の奥にあるらしく、禄ちゃんがあわてて取り出そうとしますが、結局取ることが出来ず、諦めた禄ちゃんはコルクをそのまま押し込んでしまいました。

「そうやって押し込むものなの？」
少し回らない口調で、北島が聞いていると、禄ちゃんは少し怒ったような口調で答えてきました。

「まあ、ちよつと違うけどさあ、飲んじゃえば一緒だよ。たいした違いなんてないさ。どうせ安酒だろ？」
真ちゃんがその言葉に食いつきます。

「何？親父の酒を馬鹿にするなら、飲まなくていいぞ！」
「いやいや言葉のあやだよ。おつ、なんかいい香りがする。真ちゃんもどうぞ」

禄ちゃんは紙コップにワインを注いで、真ちゃんに渡します。そして自分のコップにも注ぐと、二人でいつせいに飲みました。

「渋い！？何だこれは、なんか想像してたのと違うよ。親父、こんなの飲んで楽しいのかなあ？なんかいっぱい集めてみたいけど」
そう言うと、真ちゃんはまたビールの官に手を伸ばしました。同じワインを飲んだ禄ちゃんはと言うと、首をかしげながら、またワインを自分の紙コップに注ぎました。

そうこうして、みんな何事もなく、楽しく飲んでいると、廊下の方からなにやら足音がしてきました。

それに気がついた真ちゃんがあわててリモコンに手を伸ばし電気を消しすと、皆もそれに合わせてその場に伏せました。

一瞬の沈黙が流れます。

すると、ドアが少し開き、部屋の外の光が差し込んできました。

僕は息を潜めて、顔を炬燵の布団に押し当てました。

何時真ちゃんの親父さんの声が響くかとびくびくしていましたが、何の音もしないでドアは閉められました。そして、階段を下りる足音が聞こえてきたので、真ちゃんは部屋の電気をまた点けました。

「びつくりしたね」

女の子三人が、顔を見合わせます。僕は体を起こして、飲みかけのビールに手を伸ばし、口に含みました。いきなり来た緊張に、なんか喉が渴いたのです。周りを見ると、陽ちゃんが床の伏せたときにこぼしたポテトチップスを片す傍らで、米山がそれを手伝っています。僕の隣にいた北村は何やら雑誌を見ているし、紙コップを持った祿ちゃんは、酔っ払いと化した北島の話の頷きながら聞いています。真ちゃんも、僕の後ろでなにやら探し物をしているようです。時計を見ると、もう二時半を回っていました。

しかし、眠る気配なんてこの部屋には流れてなくて、今日はこのまま朝を迎えるのかなあ、なんて思っていると、また誰かが階段を上ってくる音が聞こえました。

「皆、寝たふり！」

真ちゃんが小さくそう言つて、電気のスイッチが押され暗くなると共に、皆その場に伏せました。

僕も、また炬燵の布団に顔を埋めます。

また部屋の中が静かになると、やけに外の音が聞こえるもので、外にいる人がドアの前まで来ているのがはっきりわかりました。それに加えて、自分の心臓の音も聞こえてきて、暗闇の中でゆつくりと時が流れます。僕は息を吞みました。すると、思いもよらないこと

が、そこで起きました。

僕の左手の平に、誰かが手を重ねてきたのです。

僕は、どきりとして一瞬体をかすかに震わせましたが、その手は僕の手の平の上で、握るでもなく、動くでもなく、ただ重ねたまま、動かないでいました。次第に、その手の温もりが、僕にも伝わってきます。余りの事に、僕は手を握り返すことも、振り向いて誰か確かめることも出来ず、ただ布団に顔を埋めていました。

部屋の外の人は、ドアを開けるでもなく、そこにたたずんでいるようで、誰も動き出そうとはせず、部屋は暗いままで。僕は自分の手の上に、誰かの手を重ねたまま、このとても長く感じる一瞬を過ぎました。

とっ、外の人が歩いて去っていく音がすると、同時にその手もさっと引かれ、僕の手からその重みが除かれました。

そして、再び電気が点きました。

しかし、僕はそのまま伏せていることにしました。

そのまま、頭の中を整理しようと思ったのです。頭の上を、真ちゃんがまたいで行きます。みんなはそれぞれに何かをしているようで、後ろから色々な音が聞こえてきます。「武、寝ちゃったみたい」

北村の声が聞こえます。

「寝かしときな。それよりこれ見てよ」

陽ちゃんの声が聞こえます。

「何々？あつ、中学のアルバムじゃん」

僕の頭の中で、この部屋の鳥瞰図が浮かび、僕の手に手を重ねてきた人物の割り出しが始まりました。僕の正面にいる陽ちゃんと北島一番遠くにいる米山と禄ちゃんはまずあの時動いたとは考えられません。考えられるのは、僕の隣にいた北村か、後ろにいた真ちゃんだけです。

その二人しか考えられません。

僕の頭は、クエスチョンマークで一杯になりました。

なぜ故、その二人が僕の手の手を重ねてくるのだろうか？真ちゃん

が僕の手を？何を考えているんだ、あの男は。明らかにおかしいだろう。じゃあいつたい……。

もしかすると、北村が……。

もしかしたらあいつが僕の手を。でも、まさかあいつに限ってそんな事するはずが無い。あいつはそんな事をしてくるような奴じゃない。

そんな事をするって事は、いったいどうしようとしたのだろうか？毒でも盛ろうとしたのか？まあ、それはいくらなんでもないだろう。では、何であんな感触が、僕の手にしたのだろうか？

確かに、誰かが僕の手の上に、手をおいてきたのです。僕は確かに酔っ払ってはいました。それは間違いありません。

でも、幻なんかじゃないです。

ただ、いくら考えてもその時は、明確な答えがいまいち浮かんできませんでした。

真ちゃんにしろ、北村にしろ、いったいどんな理由で手を乗せて来るのかが分からなかったので、僕は寝た振りをしながら、頭をめぐらせて答えを求めました。

でも、お酒のせいでしょうか、僕は不覚にも、答えの見つからないまま眠りに落ちてしまいました。

お酒のせいか、とてつもなく深い眠りが起こってしまい、僕が起きたころには昼過ぎになっていて、女の子は勿論、禄ちゃんも陽ちゃんもいませんでした。僕が起きると、真ちゃんが、部屋の後片付けをしています。

「おはよう。みんな帰ったの？」

よく真ちゃんの顔を見ると、左の頬が異様に赤くなっています。真ちゃんは無言で頷きました。

「どうしたの、その顔？」

「親父に殴られた。」

「どうして？」

真ちゃんはゴミ箱にゴミをねじ込んで、机の上の空き瓶を指差しま

した。

「親父の酒、なんか大切なヤツだったみたいで、朝起きたらいきなり殴られたんだよ。信じられないよな、たかが酒だよ。たった三本飲んだくらいで殴らなくてもいいのにな。」

真ちゃんは顔をさすります。僕は、痛そうなのその顔を見てかをゆがめました。

「皆、朝方までいたんだけど、親父に怒られる俺を見たら、早々に引き上げてったよ。」

「そんな事があつたの？ぜんぜん気が付かなかったなあ。そうかあ、悪い事しちゃったね。皆で、また買い直した方がいいかな？」

真ちゃんは首を振ります。

「いや、そんな事なくていいよ。なんか、親父、もう手に入らないとか何とか言ってたし。まあ、怒ったらそれ以上は言わない人だから、親父は。気にしないでいいよ。」

「そうは言ってもなあ。じゃあ、今度真ちゃんになんかプレゼントするから。本当にごめんな。」

真ちゃんはやりとして、空き瓶を持ち上げました。

「まあ、期待しないで待ってるわ。皆にも謝られたけど、俺は気にしてないから。それより、また飲もうぜ。うちでも、どこでも。」

「おお、そうしよう。今度は俺が、酒用意するよ。」

真ちゃんは笑いながら、階段を降りて行こうと、ドアの方に向かいました。その時、僕は昨日の疑問が浮かんできて、真ちゃんに謎を解いてもらおうと声をかけました。

「真ちゃん、昨日、二回目に電気消したときさあ、俺になんかした？」

真ちゃんは、変な顔してこたえます。

「はあ？何言ってるの。何かする訳ないだろが。電気消して、伏せてたよ。」

「そつだよな。いや、何でもないんだ。気にしないで。」

「変なの。」

そう言うと、真ちゃんは階段を降りていきました。僕は頭を掻きながらねっころがって、天井を見ました。

世の中、よく分からない事が起こるものです。

真ちゃんの家での一件以来、学校で北村を見かけたら声をかけるようにしました。

それまでは、クラスも違ったので顔を合わす機会もあまりなかったのですが、冬休みが終わり、学校が始まりだと、挨拶くらいは交わすようにしました。

ただ、彼女は吹奏楽部が急がしそうで、僕に構ってる暇なんかないらしく、外で遊んだり、特別に会ったりは無論しなかったのですが、僕はと言うと、部活も行かないし、彼女もいないので時間がたつぷりあるくせに、勉強なんかやる気にならず、将来の事も何にも考えていなかったの、学校が終わると本屋に行くか、兄貴のギターでコードの練習をするとかしていました。

まったく貴重な青春時代を、ほぼ一人で悶々と過ごしていたといっ
ていいでしょう。

まあ、おかげで楽器が弾ける男の一員になり、どうしようもない知識を得る事は出来ました。まあ、それがその時目立って役に立つことはありませんでした。文化祭に何かでも、生徒のバンドが出たりして皆の注目を集めていましたが、その時の僕にはまったく興味がありませんでした。まあ、バンドを組む人がいなかったのと、単に恥ずかしかつたためなのですが。その時の僕の考えでは、音楽は自分で楽しめればよかったです。

そう、そんな時でも、僕は「ラブ・ハンド」の事は忘れてはいませんでした。

むしろ、由香先輩の一軒が会ってから、それにのめりこんでいったと言えるかもしれません。それも、論理的にと言うか、もっと、学術的にそれに向き合っていたと思います。色々な本の知識を集めて、自分の中の「ラブ・ハンド」と言うもののあり方を構築していったと思います。印象に残っているのは、二年生の時にした美術でした。

二年生になり、勉強のレベルが高くなつて主要科目の成績が落ちる一方になつても、美術の成績は落ちませんでした。僕が粘土で造つた「女性の腰の像」はコンクールの特別審査員賞を取り、成績は一番良かったと思います。まあ、実技だけなのですが。

その時のやる気のない僕の成績は、学年でも最下層に位置していて、三年になる頃には、先生達にも見放されたような状態になってしまいました。

なので、まあ、僕がする事といつたら、本を読むか、ギターをかき鳴らすか、寝るか、「ラブ・ハンド」の事を考えているかしかないのですから、どうしようもありません。

ただ、その時には進路指導教官になつていた、一年の時の担任の先生だけは、僕の事を可愛がつてくれました。先生は政治、経済が専門の社会科の先生でしたが、三年生の時の僕の受け持ちでは、論文の授業をしていました。テーマに沿つて自分達が思っている事を文章にして、それを先生が採点してくれるのですが、なぜか先生は僕の思つてる事を気に入ってくれて、僕の書く事を良く褒めてくれました。

馬があつたとしか言いようがありませんが、僕もその先生の事を信頼するようになりました。

そして三年の夏休み前、先生が出したテーマは「異性の特徴とその相違」と言うもので、これを見た瞬間、頭のスイッチが入つてすらすらとかけている自分がいました。

今まであつた「環境問題と自分の未来」とか、「少子化と年金問題」なんかよりずっと魅力的なテーマですし、何より僕の人生のテーマでもありました。言う前もなく、僕は「女性の腰の肉」について熱く書きました。まだ、「ラブ・ハンド」と言う名称は自分の中で無かつたので、女性の腰肉について論文にしたのですが、こんなに考えが自分の中で纏まっていることがもなく、期日より実に三日も早く先生に提出しました。ただ、その間他の事はしていませんから早いはずなのですが、まあ、僕の「ラブ・ハンド」に対する思いは

すべて書き現したつもりでした。僕は先生を信頼していましたし、何より書いているうち止まらなくなってくるのですから仕方ありません。

進路を決めるよ いつの日か(前書き)

人生で選択ってとても重要！特に進路は重要！

大学にいけたら行っておいた方がいい！きっと後でそう思うんだろっ。

でもね、後悔しない選択は後悔しないと分からないのです。人生積み重ね。

何事も経験なんですよ。自分の決めた道を突き進むのみ！

進路を決めるよ いつの日か

それを先生に提出できたのがとても満足で、いい気分で過ごしていると、翌日、先生に呼び出されました。

先生は、放課後に準備室に来るように言ってきたので、皆が下校するなか、僕は準備室まで向かいました。少し暗い廊下に、準備室のドアの窓ガラスから明かりが漏れています。僕は前まで行くと、ノックしてドアを開けました。先生は椅子に座って何かを読んでおり、僕に気づくと、僕を自分の隣にある椅子に座らせました。

「先生、どうしたんですか？」

先生は、今読んでいた紙を、自分の机に置きました。覗いてみると僕の書いた論文のようでした。先生は眼鏡をはずし、眼鏡拭きで片方づつ拭きながら、口を開きました。

「これ読んだけど、小田切らしくて、面白かったよ。」

「本当ですか？」

先生は笑います。

「まあ、俺には理解できないけど、お前の熱意は感じるものがあった」

「そうですね。まあ、自分の気持ちに直になったらこうなった、って感じですかね」

「そうかあ、まあ、論文としては合格点を与えられるかどうかと言うところなんだけども、お前のこれを読んだらな、俺も一人の教師として、どうもお前の進路が心配になっちまってなあ」

先生はじっと、僕の顔を見てきます。

「はあ。そうですね」

「お前も、もうすぐ進路を決めなきゃならん。今の成績だと、大学は少し厳しいんじゃないかと思うのよ。もうすぐ進路指導も始まるから、担任の大島先生とも話すことになると思うけどな。お前、そこんどこ、実際どう思ってるの？」

いつになく真剣な言葉の響きに、僕の心の糸が張り詰めます。

「まあ、そうですね。色々、考えてますけど」

すぐ分かるような誤魔化しは、ベテラン教師には通じなかったようです。

「そんなようには思えないけどなあ。かと言って、悩んでるようでもないし。お前将来何になりたいのよ？」

僕は考えこんでしまいました。正直、具体的に何になりたいなんて事、今まで考えた事は無かったからです。しかし、先生は核心を突いてきました。

「まさかとは思いつけど、これに書いたような事を、広めていきたいなんて思っていないよな？それが夢だなんて言わないよな？なんか、お前にしてはやけに素直に書いてあったから。ちよっとそう思ったんだけど」

僕は先生の目を見ました。

その通りかも。

僕は無言で先生に訴えました。先生は明らかに、呆れたような表情になりました。

「お前は馬鹿か？俺も十五年も教師やってるけど、そんな事がやりたいなんてやつ初めて会ったよ。今言つてやる！すぐ考えを改めなさい！お前がそんな事目指していても、実現なんかしないんだから。本当にへんてこな考えだけど、お前にとっては夢なんだろう。ただだな、夢は所詮、夢に終わるんだよ」

「でも先生。俺、なんか出来そうな気がするんだけど」

僕がちいぢやな声でそう言うと、先生は頭を抱え掻きながら、僕の方を見ました。

「あんな、卒業したらお前どうすんのよ？どうやって生きていくつもりだ？仕事しなきゃ生きていけないんだぞ。女の腹追っかけたって、自分のお腹は満たせないんだぞ！分かっているのか？うちの高校の卒業生の大半は大学に進学して、その後、就職するわけだ。まあ、残りの奴らは専門学校なんかに行って、それぞれ専門の道に行く。」

高校卒業したら何もしないなんて奴は二人か、三人だ」

僕は頷きました。それは分かっているつもりです。

「何で皆が大学に行くのか、お前わかるか？それはな、どう考えても、進学した方が、その後の生活に有利だからだ！いいか！就職っていうのはな、お前が考えているより、甘いものじゃあないんだぞ！」

先生の言葉が、僕の胸に染み込みます。

「じゃあ、俺どうしたらいいんですか？」

先生が僕の肩に手を置きました。眼鏡の奥の目が真剣です。

「勉強しなさい」

僕はゴクリと唾を飲みました。先生は続けます。

「そして、大学受験をして、大学に進むんだ。今からなら何とか間に合う。必死でやれば、大丈夫だ。お前はもともと頭がいいと、俺は思ってる！」

「でも、大学行けば、女の子にお肉を付けれるんですか？」

僕が声を張り上げると、先生は呆れたように下を向きました。

「はぁー、お前は何、寝言を言ってるんだ。そんな事もう忘れるんだ。いいか、勉強出来ないヤツは女にもモテないぞ！これは本当だ」

「じゃあ、先生はモテたんですか？大学時代にモテたんですか？」

「なあ！それとこれとは話は違うんだよ。これは、はお前の問題だろうが。俺は嫁さんがいればいいの」

「そんなの嘘だ。僕は、世界中の女の子に、いいお腹の肉が付けばいいと思ってますよ。一人だけなんてやだなあ」

「うるさいなあ。ほんと、口だけは達者だな、お前は。そんなんじやあ、一人の女も見つけられないぞ。大体、どうやってそんな事するんだよ。お前はどうやって女の腹に肉を付けようってんだ？」

先生が、僕を突き放すようにそう言いました。

もちろん、僕にはどうするかなんて考えはなくて、先生を納得させるような言葉が出ないでいました。そんなこと今まで考えたこともなかったから無理はありません。

しかし、ふと、先生の机の上の書類の山に、料理の専門学校のパンフレットがあり、それをみた僕の頭のコンピューターが高速回転しました。

一つのセンテンスが、いくつもの記号と結びつき、僕に答えを導き出してきました。瞬間的に、僕にアイデアが浮かんできて、それが口から出てきました。

「料理やりますよ！ようは肉をつけさすなら食べさせればいい訳だから、料理人になればいいんです。僕、ずっとそう思っていました。お菓子なんかもいいかもしれないですね。そうです、僕は料理人になりたいんですよ」

僕が目をランランとさしてそう言うと、先生はびっくりしたような目で、僕の顔を見てきました。

「はー」

先生は大きな溜息をついて、頭を抱えました。

「何て言う馬鹿な事を言ってたんだ、お前は！何言うかと思ったら、そんな事考えてたなんて。俺、本当に胃が痛くなってきたよ。大体その理由は何なんだ。馬鹿にしすぎだぞ、お前。先生にも料理人の知り合いがいるけど、それはもう厳しい世界なんだぞ。お前が思ってるより、ずっと厳しいんだぞ」

「そんな事分かってます」

僕はまったく分かってなかったのですが、この時は、自分の未来が開けた気がして、少し大きな気になっていました。

「先生、僕は料理人になるって決めたんですから、それでいいでしょう？立派な・・・シェフになるつもりです」

僕はその場に立ち上がりました。先生は僕を呆れた様に見上げながら、また一つ溜息をつきました。

「まあ、お前がそう言うなら仕方ないかもしれないけど。どうしてもって言うなら、俺はこれ以上色々言うつもりはない。まあ、お前はなんか面白いもんもってると思ったから、この先何にも考えてなかったら、もつたいたいと思っただよ。要するに心配でな。でも

まあ、進むべき道があるって言うなら、それでいいと思うよ。いったん決めたら、ちゃんとやりとうすんだぞ！」

「はい！ありがとうございます。俺、がんばります」

「じゃあ、もう、行っていいぞ。気をつけて帰れよな」

「先生、さようなら」

僕はそう言つて、ドアの方に向かいました。

「おう。さようなら。また何かあったら俺に話に来いよ！」

僕は準備室のドアを閉めながら、先生に言った言葉を反芻していました。

俺が料理人？

まあ、悪くないかもな。僕はこの時、自分の進むべき道を決める事になったのです。

それからの僕の行動は、まあ早いものでした。

とりあえず色々な調理師学校のパンフレットを集め、比較検討してみました。様々な歌い文句が各料理学校にあつて、僕も迷つてしまつたのですが、ある事が決め手になり一つの学校に選ぶ事が出来ました。それは、調理と製菓が両方学べるスイストパツクがある学校で、二年間学ぶ事になっていました。これなら、僕の目指す事が全て取り入れられますし、何よりパンフレットには「女生徒多数」と書いてあつたのです。調理をして、お菓子も作る女性が、それを食べる事が嫌いな訳がありません。きっと、彼女達はいい「ラブ・ハン」を持つているはずですよ。

僕はすぐに資料を取り寄せて、申し込み用紙にすべて記入した上で、親にこの話をしました。当然、いきなりの僕の申し出に両親はびっくりしていましたが、僕の熱意に押される形で、何とか二人を納得させる事には成功しました。すぐに、担任の先生にも僕の進路を告げると、先生はまずは安心したような顔をして、納得したようでした。まあ、何とか収まつたと思つたのでしよう。

こうして、僕の進路は皆より少し早めに決定しました。

だから、夏休みになり、クラスの皆が夏期講習に行つて勉強に励ん

でる間、僕は地元の洋食店に通い、料理を覚えてもらいながら、なお且つお金も稼いでいました。時間をもてあましている僕は、本来なら八時間しか働けない所を何とかその店の料理長に頼み込んで、朝から晩までお店にいさせてもらい、せつせと働いたのです。一度目標が決まったら、わき目も振らず突き進むのが僕の性格なので、それはもうがむしゃらに、貪欲に働きました。そのためか、調理場の掃除から野菜の下処理なんかの細かいとこまで、その料理長に教えてもらえる事が出来て、いつの間にか気に入られるようになっていました。料理の事なんて右も左も分からない手探り状態で、初めてのバイトと言う事もあって社会の規範すらよく分かっていない僕を、その料理長は怒りながらも、きちんと教えてくれました。なので、僕も何回もやっているうちに料理をする事が楽しく感じられて、夏休みが終わる頃には料理長の合格点がもらえるほどのオムレツを作る事が出来ました。

まあ、初めの先生、いやこの業界で言うならお師匠さんが良かったと言うほかありません。こんなに自分に何かをしてくれる人は、世の中にそうたくさんはいないでしょうし、会えたら運がいいのでしようが、その時の僕は、まだその有り難味は実感出来なまま、ただがむしゃらに調理場を駆けていました。

そんな感じで、僕は料理の世界に一步踏みは入れる事となりました。先に明かりが見えれば、歩みだすのは簡単な事で、僕は夏休みが終わった後も、学校が終わってはそのお店に行き、学校にいる時は料理関係の本を読むという生活が始まり、僕の専門学校への準備は着実に進んでいきました。もちろん、家にいる時です。

そんな僕の姿に、両親も先生達も安心したらしく、もう進路に関して色々言ってくる事はなくなりました。まあ、その頑張りの裏にある、僕の「ラブ・ハンド」に懸ける情熱は理解出来てはいないようでしたし、感ずいてもいないようでしたが。

色々ありましたが、こうして僕の高校生活は過ぎていき、やがて、三度目の冬を迎えると卒業する事になりました。

卒業式の後、北村が話しかけてきました。

彼女は、東京の大学に、またもや推薦で受かっていて、音楽の大学に進むようでした。

「おい、武士、いつごろ東京に行くの？三月には行かなきゃ行けないんでしょ？あんたも」

制服姿がやけに大人っぽくなっていて、後ろに結んでいる黒髪が、なんかアンバランスです。片手に卒業証書が入った筒を持って、もう片方には大量の花束を抱えています。

「何か、凄いね」

僕は花束を指差します。彼女は少し微笑んで、花束に鼻を寄せます。

「後輩達がくれたの。綺麗でしょ？」

三年生になった彼女は、吹奏楽部の部長をしていました。部内ではなかなか人気者だったようです。

僕は、鼻を嚙って、小石を蹴ります。

「そうだね」

「はー、あんたもサッカー部辞めなきゃ、花ぐらいもらえたらうだね」

北村は腰に手を当てながら、困った子を見るような目で僕を見てくださいました。

「俺はいいんだよ！それより、俺、東京にはぎりぎりで行くかな。

バイトしないとならないしさ。そうだ、そう言えば結構近いんだよね、俺の学校とお前の大学。もしかしたら、向こうで会つかもな、

偶然」

彼女はきりつとした目で、僕を見つめてきます。

「馬鹿言わないでよ。あんたとなんか会わないし、知らないよ。あんたこそ、寂しくなって私に電話してこないでよね」

「う、うるさいよ！そんな事するわけないだろ！ま、まあ、元気で暮らせ！俺は力になれんからな」

僕がそう言つと、彼女は舌を出して、卒業証書で僕の頭を殴ると、女友達が待っている中庭に行つてしまいました。僕から去っていき

ながら、彼女が遠くで何か言ってるようですが、他の生徒達が僕らの方に騒ぎながら飛び出してきたので、何を言っているか聞き取れませんでした。

僕は何も言わずに、その場から歩き出しました。そして、校門の前まで来た時、僕は校舎の方に振り向きました。別に頭の中で何かを考えていた訳ではなかったのですが、何故か心が締め付けられる感じがしました。特別良い思い出もないし、むしろつらい思い出の方があつた高校でしたが、いざこうして去る事になるとひとつ頭を下げてみたくなる気もします。まあ、頭を下げてみても、別に、校舎が僕に何かを言う事は無いのですが。

その代わりとっては何ですが、偶然通りかかった涙もろい男友達が僕に飛びつき、抱きしめてきました。何かそんな事されると、感傷的な気分が移ってきて、やっぱり僕も寂しいのかも、何て思ってしまったものです。

僕はその光景を目に焼き付けると、高校を後にしたのでした。

春休み中の僕はというと、せっせとバイト先に通い自分の腕を磨いていきました

このバイト先で得た一番のものと言えば、料理長の言葉でした。何より心に響いたのは、

「料理の前では誰もが平等だ。自分が料理に対してやった事、全てが自分に帰ってくるし、自分自身が全部現れてしまうんだ。だから、嘘もつけないし、誤魔化しも出来ない。常に、自分と向き合っていないかなければならないんだ」

と言う言葉で、これを聞いたとき、少し怖さも感じましたが、若かった僕は、自分なら絶対出来るとも思ったものです。

でも、進学の時期が来ると、そんな料理長とも離れ離れになる事になりました。

僕がその料理店を去る日、お店の皆が集まってくれて送別会を開い

てくれました。お店が閉まった後、一緒に働いていた先輩達や、ホールのバイトの人、料理長夫婦や常連のお客さんも何人かいて、未成年ながら僕もご相伴に預かり、一緒になって飲み交わしました。そして、もう遅くなっただけでお開きになりかけた時に、料理長が僕に一振りの捌き包丁をくれました。新品なのですがちゃんと研いであって、明らかに料理長が僕のために研いでくれたものだとは分かりました。

「いつでも戻って来いよ。待つてるから。むこうに行っても、こいつを使って色々なもん吸収して来るんだぞ」

僕は、涙がこみ上げてくるのを抑えられず、人目もはばからず泣いてしまいました。ただ働いている所の従業員と言うだけの関係にもかかわらず、ここまでしてくれた料理長の心意気が、僕の心の奥の部分に染み渡っていき、料理の道に進む確固たる決意を固めさせたのです。

この店にいる限り、僕は「ラブ・ハンド」の事以外の何かで動かされて、料理をしている事が出来たのでした。要するに、単純に料理する事が面白くて、「ラブ・ハンド」の事を考えなくなっていました。僕は「仕事」と言う、違った興味をここで初めて得られたため、当初の動機を忘れてしまったのです。まあ、その余裕が無かったからと言ってもいいのですが、その時の僕は、自分の中の内なる力を掘り出した喜びと、期待で一杯になっており、女性のお腹の肉の事など考えないくらいに、料理という事に没頭していたのです。

まあ、働いた料理店が男所帯で、女性がいたとしても料理長の奥さんくらいしかいなかったのですから、迷いようが無かったのは確かですが……。

しかし、春の訪れと共に氷が溶けて水になり、大地に染み出し川に注がれるように、専門学校に入学した僕のその心も、女性の熱に解かされる事となりました。

専門学校に入る（前書き）

料理はいいよ！物事の何かを分かりたい時、料理を作ってみてください！

「料理は人」
いい言葉です。

料理にあなたが現れるでしょう。そして、味を見ればすぐに結果が分かります。

専門学校に入る

学校に入ってみると、クラスの半分は女生徒で、何しろ一緒になって講習を受けたり実習を受けたりするのですから、ほとんど一日中一緒にいる訳です。これで、何も起きないはずはありません。それに、僕の場合は友達になった男の影響と言つか、彼女達と積極的に交流をもつ事になってしまいました。その友達と言うのが大倉君おおくらと言うのですが、なかなかの美男子で、背も高くて明らかに女に慣れているやつで、実際、入学当初からその片鱗を見せていました。

その大倉君は、僕と同じクラスで、出席番号が隣だったので、初日に席が隣どうしになったのですが、初めての一人暮らし、初めての授業で緊張している上、教室という場所で一人でいる事に慣れてしまっていた僕は、彼の事を特に気にもしていませんでした。しかし、この大倉君という奴は、初対面だと言うのに何の躊躇いもなく僕に話しかけてきて、事あるごとに声をかけてき始め、そして、色々なプロフィールを聴いてもいないのに自分から喋りだしてきて、いつの間にか僕の事も聞いてきました。この大倉君、天性のテクニクというか、相手の何かしらの話題を見つけると、それを自分の話も織り交ぜながらどんどん紡いでいき、いつまでたっても話が止まらなくする事にかけては天才でした。そして、何より彼の話を聞いているうちにこちらも面白くなってるので、どうしたって僕も笑ってしまい、話に乗っかるようになりました。そうこうしていくと、自然にこちらからも話を持ち出してしまふことになり、その日の授業が終わるころには、僕らはすっかり打ち解けていました。

そして、とにかく飾らず気さくなこの男は、何日もしない間にクラス中の人間と友達になってしまい、僕も彼に引きずられるようにクラスの皆と仲良くなっていきました。何しろ大倉君は格好良いし、楽しいと言ふ事で、女の子の方から彼の周りに集まる始末なのです。もちろん、他の男達も集まっては来るのですが、大概、彼の隣には

僕がいたので、自然と僕もその中に入っていき、大倉君を交えて彼女達ともよく遊ぶようになっていきました。

この大倉という男、実に女性の扱いに慣れており、隣でいて感心せずにはいられないくらいで、僕は隣にいながら彼をよく観察して真似をしていました。大倉君は人の心を捕らえるのが上手いと言うか、乗せ上手と言うか、とにかく彼の周りはいつも賑わっているのです。ただ、大倉君は勉強は熱心ではなくて、大体いつも僕のノートを丸写しでしたし、実習なんかではバイト先で色々やっていたせいか、僕の方がおおむね彼より上手でした。魚を捌くとか、料理を仕上げるとかになると、彼はまるで僕の生徒の様に感心しながら話を聞いていましたし、僕が彼を手伝う事もしばしばでした。

ですが、やっぱりそれ以外は大倉君にはかないませんでした。僕らは学校以外でも一緒に遊んだり、同じバイトをしたりと、まあ彼には色々な事を教えてもらいましたし、色々な事を話したりしたものです。遊ぶ事に関しては、彼は僕の師匠でした。

二人でいる時は、大概彼が一方的に僕に話してくるので、彼が僕の気持ちを分かっているとは思えませんが、彼の事は嫌でも色々分かってくるので、僕には色々な彼の顔が見えてくるようになります。

例えば、彼がこの道に進んだ動機なんかも聞きましたし、夢なんかも聞きました。彼の父親はフランス料理のシェフで、都内に何店舗もお店を持っていました。蛙の子は蛙というか、それで、彼も同じ道を進むことを選び、将来はフランスでお店を持つのが目標だと、いつも僕に言っていました。

彼は僕の事も色々聞いてきました。要するに、僕が料理をするきっかけなどを聞いてきたのです。大概の人は、自分以外の人が、どんな目的で生きているのか知りたいものです。目標がある人なら、尚更その傾向はあるもので、大倉君の場合も例外ではありませんでした。彼の純粹で、しっかりした綺麗な動機に、僕は少し躊躇いと言うか、恥ずかしさを感じました。彼の動機には、裏付けさえバツチ

りなのですから無理もありません。確かに、今となつては僕が料理を面白く思つていて、取り組んでいきたいと思つて頑張つていても、一番最初の動機となると、まあかけ離れているからです。

何しろ、僕は女の腰にお肉をつけさせたいのが望みで、この世界に入ったのですから。

どんな事もきつかけに過ぎないとは言え、僕の料理をやり始めたきつかけは、色々な意味で口に出せるものではありませんでした。人と変わった事をする事が、どんな結果を及ぼすか色々経験してきたので、僕はこの時大倉に本当の動機を話しませんでした。なので、僕が何かそれらしい動機を彼に答えて話を濁すと、彼は何の疑問も持たないまま納得してくれて、次の瞬間にはまた自分の話しをし始めるのでした。

まあ、僕らはこんな真剣な話しもしてはいたのですが、彼がとにかく女の子が好きだったので、ほとんどの会話の中心は女の子の事でした。

彼を一言で言えば、和製ドンファンです。

とにかく、手が早い男でした。知り合つた途端、事あるごとに女の子を誘つては最後まで持ち込んでいくのですが、その後に特にその女の子達と付き合うでもなく、かと言ってギクシヤクするでも無い関係を作れる類まれな男、それが大倉君でした。その時の僕にとつて、彼の存在は、まるでカルチャーショックと言うか、常識破りの信じられないものでした。まだ、女の体も知らない僕にとつては、そんなに簡単に女性と寝る事が理解できなかつたのです。渡辺由香の影響もあつたのでしようが、そう言う事を大切にしていきたい気持ちだが、まだどこかしらにあつたのです。

しかし、大倉君は見事に僕の考えを打ち砕いていき、侵食していきました。

彼は女の心を知り尽くしているかのように、僕に女の子の落とし方を伝授していきました。僕は正直に、自分がまだ経験が無い事を彼に伝えていたので、大倉君の張り切りようは尋常ではありませんで

した。もちろん、皆にその事を言いふらすなんて失礼な事はしませんでした。それは熱心に女性を落とすテクニクを教えてくれたのです。この分野では、彼は完全に僕の師匠でした。

まずはファッション。彼は休みになると服屋に僕を連れ出しては、僕に合う服を選んでくれました。彼は実家に住んでいるんですが、自分の部屋に呼んで、持っている雑誌を見せてくれたり、古着をくれたりしました。それまでの僕はと言うと、まあそこまでお洒落に興味が無かったので、彼の部屋で行われる課外授業はかなり勉強になったとおもいます。まあ、そのおかげでバイト代は全部服につき込む事になりましたが……。

ただ、その甲斐あってか、僕の外見もそこそこ見栄えが出来てきてお洒落に心がけると言う気持ちになるようになりました。

彼が一番僕に言ってきたおしゃれポイントは、「清潔感を出せ」と言う言葉だったのですが、「いいもの着ても汚くしたら意味がない、だけど、安物でも綺麗に着こなせばよく見えるもんだ！」と言う事らしく、その時の僕は素直に彼の言葉を実践していきました。それに、「本物は本物」という言葉で、「小さくても、時計や下着靴下なんかの、小物は安物じゃなくて、本物を見に付ける！」と云っていたのも覚えています。まあ、家が裕福だったのでそんな余裕の発言が出来たのでしょうか、その言葉が僕に与えた影響は計り知れないものがありました。まあ、清潔にするのは料理をするものにとっても基本ですが、それが女の子に対するときでも及んでいくとは、そのときの僕は思っていなかったのです。

そんな当たり前とも言っ様な事から、ある種、彼の欲望むき出しの考え方、女に対しての哲学なんかを受け入れていくうちに、僕の物へ対する考え方が変わっていき、そして、女の子に対する考え方も変わっていく事になりました。

その時に、僕の心にセカンドウェーブが吹いてきたようです。

その風は、長年の疑問、「何故、僕の行為は女の子に嫌われるか？」という事の答えを導いてくれて、僕にもおのずとそれが理解できる

ようになりました。

僕がそれまで女の子にしていた事は、女の子の心を逆なでする行為で、大倉君が言うには、女の子にやっては成らない事の三か条の中に入っていました。

まずは年齢を聞きそれをネタにする事、他の女の子と比べる事、そして太ってるなどの容姿やスタイルを指摘する事。これらの事は、彼曰く、女の子に口に出していい事は起きないと言う事でした。

僕はそれを聞いて、背筋が冷たくなるのを覚えました。

僕が今までしてきた事、女性に対する欲望は、女の人を怒らすことに直結している事が、それで分かったのです。自分がしてきた事の間違いに気が付いたとき、人は何をやる事が出来るでしょうか？そうです、悪い事は、改め、忘れていく。幸いな事に僕はまだ若かったので、過ちが何であるかという事に気が付き、直していこう、と思える事が出来ました。

そんな僕が、女性に対して素直な気持ちになろうと思ひ、大倉君に女性と親しくするにはどうすればいいかと尋ねると、彼は僕に女性との会話、お喋りの大切さを僕に教えてきました。とにかく会話しない事には女の子の心は開かない、と言う事を僕に教えてきたのです。そして、彼はトークのテクニクも、僕に惜しげもなく教えてくれたのです。

その甲斐があつてか、しばらくすると、僕にも彼女が出来ようになりました。

バイト先で知り合つた三つ年上の女性で、名前を大城真弓と言いました。バイト先は居酒屋だったので、彼女はホールを担当していました。僕達よりも少し遅くに入店してきて、後輩に当たるのですが、何かと僕と喋っているうちに仲良くなつて、バイトの皆で飲みに行った晩、酔つた勢いで彼女の電話番号を聞きだしました。そして、次の休みにデートの約束を取り付け、大蔵君のアドバイスを取り入れつつ、なんとか付き合うまでこぎつけたのです。

まあ、彼女は普通の女の人でしたが、もちろん、僕よりは数段恋愛

経験がありましたので、彼女が出来てからその事しか考えられなかった僕は、彼女と初めて致す事になりました。

まあ・・・、やはり緊張しました。

でも、彼女の巧みなりードのおかげで、無事済ます事が出来たのでした。正直、あつという間の出来事でしたが、それからの心持といったら比べ物にならないものでした。自信に漲ると言うか、余裕が持てるというか、大人になった気分でした。

僕がそんな事を出来るまでになったのも、大倉君がいたからこそでしたので、次の日には彼にその晩の事を報告していました。僕は有頂天になって、彼にその事を言いました。その時の彼は、やや興奮気味になり、まるで自分の事の様に喜んで、僕を叩いたりしながら、彼女との話を聞いていました。僕は素直に彼に感謝して、そして彼女とは幸せになりたいと言う様な事を彼に言いました。不思議な事に、いたしてしまえますと彼女は僕のものだと言う気持ちが強くなってしまふもので、前より余計に彼女の事を大切に思ってきていたのです。

それからと言うもの、僕は彼女の部屋に入りびたりの生活を送り、以前の僕からしてみれば、大分ふしだらな生活を送っていました。大倉君の言いつけを守り、僕は自分の本当に気持ちを抑え、彼女のお腹には見向きもしませんでした。彼女は、まあそこそこのいいお腹を持っていたのですが、摘む事も、撫でる事もしませんでした。確かに、何度もいじくりたい衝動に駆られはしたのですが、僕は何かと世話を焼いてくれる彼女をとて大切に思っていたので、彼女が嫌がるような事は一切しなかったのです。

まあ、僕自身は少し無理をしていたのかもしれませんが、それでも僕らの関係はうまくいっていると思っていました。

しかし、彼女と付き合いだして二ヶ月位たった頃でしょうか、僕は見てはいけないものを見てしまったのです。

あれはもう、学校が冬休みに入っていて、久しぶりに帰った実家からこちらに戻って来た時の事でした。僕は、その彼女に会いに行っ

たのです。

僕が行く前に電話すると、彼女はいつもと同じように電話に出てきて、僕が来るのを待ってる、と言っていました。僕も久しぶりだったので、お土産に彼女の好きなシュークリームを買って行こうと、僕の家の近くにある彼女のお気に入りのお菓子屋さんで途中で立ち寄り、彼女の喜ぶ顔を思いながら、イチゴのシュークリームとカスタードとホイップクリームの二種類を買いました。

彼女の家と僕の家は、自転車で二十分くらいの距離なのですが、夜の冷たい風を受けながら、僕は自転車を漕いで彼女の家まで向かいました。そして、寒さに震えながら玄関まで行き、チャイムを鳴らすと、笑顔の彼女がドアを開けてくれました。可愛らしいパジャマ姿の彼女が、冷え切った僕を迎えてくれます。

一人暮らしの彼女の部屋は、女の子らしくイチゴのマットとかイチゴの柄のベットカバー、それにイチゴのクッションとか、男兄弟の僕には想像もつかないような色の部屋でしたが、それは何と無く受け入れていました。何しろ女の子の住んでいる部屋に上がった事なんかそれまで無いので、これが普通だと思っていたのです。僕はベットの前にある背の低いテーブルにお土産を置いて、イチゴ柄のマットの上に座りました。彼女はそれを見て声を上げて喜び、お茶を入れてくれました。

まあ、僕はその晩泊まる事になったのですが、彼女が先にお風呂に入っている時、突然彼女の携帯電話が鳴りました。どうやら、メールが来たみたいです。

いつもだったら気にならなかつたのですが、その日の僕は無造作に鏡台の上に置いてある携帯電話が、どうしても気になってしまいました。本当だったら、見てはいけなかつたのですが、彼女に対する信頼が僕を行動に移させました。

そして、僕は信じられないものを見てしまったのです。

彼女の携帯を手に取り、今来たメールを開いてみると、僕の友達の大倉君からメールが来ていました。頭の中にくるぐる？が飛び交い

ましたが、僕は恐る恐るそのメールを開いてみました。

そして、僕は、メールを見たことを後悔しました。

何と、僕が来る直前まで彼がこの部屋に来ていて、あるうことか僕の彼女と寝たみたいなのが書いてあるではありませんか！僕は気が動転しながらメールの返信履歴をを見ると、彼女が以前から大倉君に対して、いくつかハートマークがいつぱい入ったメールを送っていたのが分かりました。内容についてはショックすぎて覚えていませんが、とにかく僕は頭が真っ白になってしまい、気がついたら夢中で部屋を飛び出していました。

そして、冷え込みが激しい夜の街を、自転車に跨って全速力で自分の家まで漕いで行きました。

途中で無灯火点検のおまわりさんの検問がありました。僕は二人の警察官が止めるのも無視して突っ切って行き、叫び声を上げながら追いかけてくるその警察官達も引き離し、夢中になって走りまわった。

なぜか涙は出ません！

でも、胸が張り裂けるような、やりようのない怒りと憤りが、僕に湧き上がりました。

あの二人は僕をだまして、楽しんでいたんだ！

僕は彼女の愛を手に入れる事が出来なかったんだ！

信じていた友達に裏切られたんだ！

そんな思いが頭を巡り、家に着くと自転車を降りてすぐ、道端にしゃがみこみ吐いてしまいました。そして、部屋に着くと真っ暗闇の中、僕はベットに倒れこんで目を閉じました。

裏切りって一番勉強になる 人生のね（前書き）

まあ、大きくなれば色々あるってもんでね。

とにかく男の場合、女性を知るって事が一番大きいね。まあ、女性にとってもそうだよな。

しかし、この主人公は大丈夫かい？心配になってしまっなあ。

裏切りつて一番勉強になる 人生のね

それからの僕は、大倉君にも彼女にも何も言わず、二人から距離をとりました。

多分彼女は気付かれたのに気付いたのでしょうか、何度も電話を入れてきたのですが、僕は出ることもしないで、バイト先も辞めました。大倉君とは学校で会うには会いますし、席も隣なのですが、いつもと変わらないように接してくる彼に改めて問い詰めることもせず、ただ、距離をとるようにしました。彼も気づいていたのでしょうか、別に僕がいなくても彼の周りには人がいるので僕に構う必要がなくなったのでしょうか、特に何かを言うこともなくなって次第に疎遠になっていきました。僕は、もうありとあらゆるものが信じられなくなっていました。ここで地元の洋食屋の料理長の言葉が僕を支えてくれました。

「料理は嘘をつかないぞ」

この時、僕の信じれる事は、もう、料理だけでした。だから、失意の僕はもうがむしゃらになって、それまで以上に真剣に料理に取り組みました。フランス語の授業も取るようになり、もう一年目も終わりになりかけていましたが、なかなか優秀な成績を取るようになり、すさまじい勢いで二年目に突入しました。何しろ、考える事は料理だけですから、それは熱心に授業を聴き、隣で眠るクラスメイトを尻目に、必死でノートを取りました。実習なんかでも、先生が困るくらいに質問なんかして、誰よりも上手に早くやり遂げるようにしました。バイト先も、本格的な料理店を選んで、一足先に職場の雰囲気味わっていました。女性にも、遊びにも目もくれず、ただ自分の腕と知識を磨くことに一生懸命になったのです。

すると、料理長の言葉通り、僕はめきめきと腕を上げていき、周りの信頼も付いてきました。先生達も、皆に教える前に僕に指示を出

し、僕が自分の班をまとめるようになると、クラスの皆も僕を頼ってくれるようになりました。バイト先でも、先輩達は、そりゃあ厳しかったですが、店のセカンドシェフには見とめられて、色々な事を教えてくれました。「俺が店出したら、お前を引っ張っていく」とか言われて、凄く嬉しかったことを思い出します。まあ、やればやるだけ自分に返ってくる、という料理長の言葉が本当だった事を実感して、僕は一人きりで嬉しくなっていました。そうして、気が付いたら、僕はその年の最優秀生徒として卒業する事が出来ました。

当然の事ながら、僕の自信は揺ぎ無く高いものとなっていて、誰よりも自分が仕事が出来ると言う様に感じていました。逆に言えば、そう思っていないくは、そのモチベーションを保てられなかったのでしょうか。何もかもを懸けていた訳ですから。

まあ、学校では確かにその通りでしたし、どこで働いてもやっていける自信が自分の中でもかなりありました。なので、僕は当然のよう一番ハイクラスの就職先を選びました。東京にはかなりレベルの高い就職先の候補はいろいろあったのですが、自分に合う条件の所を考えていくうちに、一つに絞られました。

その就職先とは、その当時乗りに乗っていて、抜群の人気とレベルを誇るホテルレストラン「ラ・フィギュール・ドウ・ランジュ」でした。このレストランは高級ホテルのメインダイニングで、お客さん達の層もかなりのハイクラスでした。ホテル自体の方針が、高価格であるが高品質の物を沢山のサービスマンを使って、決め細やかなサービスを心がけると言うもので、ホテル自体の客室数も、レストランの席数も他のホテルと比べると少ないものでしたが、他の所では味わえないようなサービスを体験できると評判でした。

レストランだけ見ても、有名人やリッチな人達に愛用されていて、品質も折り紙つきという評判でした。このシェフは、フランス・リヨンの三ツ星レストラン「ル・フィル・ダレニエ」のオーナーシェフの片腕として働いていた人で、その店のシェフの推薦で東京に

派遣されたフランス人でした。調理場でもフランス語が飛び交うらしく、働いている人達は、皆フランス帰りの人達だと、会社紹介のページには書いてあったと思います。

自分が働くならここしかない！と決め込んで学校の先生に相談すると、ちょうど求人が来ていたので早速自分の書類を送りました。

すると、書類選考には難なく通り、次の二次試験に進める事になりました。

二次試験の内容は一般的な知識でしたが、高校生のときとは打って変わって勉強家になっていた僕はそれも難なく通り、三次面接まで進むことが出来ました。三次面接の面接官は三人いて、その中の一人は人事部の部長と言う事でした。そこで僕は、その面接官たちに自分の思いを正直に言っ、自分のバイト先での働き、どれだけこの会社に貢献できるかをはっきりとやや大げさに伝えました。すると、トントンと最終面接まで進んで行く事が出来て、最後は総料理長と一対一の面接となりました。

このホテルの総料理長は日本人で、年は六十歳に近くでしたが、とてもそんな感じには見えませんでした。和やかな表情をしながらも、初対面の僕に厳しい言葉を浴びせてくる総料理長に、急に先行きが不安になってしまいました。

しかし、老練なこの料理人は、まだ尻の青い僕の心を見透かしたのか、最後には色々な事を取り上げてくれて僕を持ち上げてくれたりしたので、僕は何やら訳が分からない気持ちのまま、最終面接を終える事になりました。面接が終わってから、急にそれまでの緊張が込み上げてきて、部屋を出る時になって足に震えが来たのを思い出します。

面接が終わった後、すぐに僕は両親に電話しました。

両親は僕の行く末をかなり心配していたのでしょうか、僕が面接が終わったと告げると、それしか言っていないのに、何かとても喜んでいました。まだ採用された訳ではないのに気の早い事だと思いつつも、僕の口ぶりから、両親にはいい感触だった事が伝わった

のでしょうか？ただ、電話を切る頃には僕自身も自信が出てきていたので、まあ、おめでたさは遣伝するみたいです。

そして一カ月後、僕は無事、採用通知を受け取りました。

四月になり入社を終えると、すぐ新人研修が始まりました。

新人社員は三ヶ月間はホテル内の各部署を回る事になっていて、それはあつという間に過ぎていきました。何しろめまぐるしいスケジュールを組まされていたので、考える間もなかったのです。そして、そうこうするうちに、配属先が決まっていました。

その年の新人社員は七人で、男が四人、女が三人でした。比較的ホテルとしては規模が小さいので、新人社員もあまり多い数はいないと持ったのですが、このホテルでは例年よりも多いという話でした。ただ、どの部署に配属されるかは上の人が決めるので、行きたくない所に配属されたら嫌だと幾分あせっていたのですが、決まってみれば望みどりの料飲部に配属され、なんとメインダイニングに配属されました。他の料飲部希望の新人社員もそれぞれの部署に配属されましたが、メインダイニングに配属されたのは僕だけでしたので、いやがおおにも僕のテンションは上がっていました。

だから、配属された初日に調理場の皆がビックリするくらい大きな声で挨拶して、逆にうるさすぎると怒られるほどでした。それくらい、やる気に満ち溢れていたのです。

しかし、僕のこの決意もやる気も、仕事が始まると共に一変してしまふ事になります。

まず、調理場に飛び交うフランス語が理解不可能でした。

それなりに勉強したつもりだったのですが、あまりの早さに何を言っているのか聞き取れないのです。それに加えて、何しろ周りの先輩達の仕事のレベルが桁違いなのです。一番年下の先輩でも二十五歳、セカンドシェフでも三十五歳で、全体で十二人の調理場だったのですが、なんと全員がフランス帰りでした。ホテルのレストランには定休日がないので、その人数でシフトを組んでいるようで、僕の休みも不定休でした。皆当然の様にフランス語を操っているので、

そんな環境に僕みたいなのが放り込まれると、まるで自分の存在がなくなつたみたいに思えてくるのです。それに、仕事の求める所が高く、とても今まで働いてきた所とは比べ物にならない感じで、やり方、考え方すべてが違うものでした。

そんな調理場を仕切るフランス人シェフ、ステファン・ガブロウは四十二歳、体があつしりしていて恰幅がよく、大きくて低い声がいっつも厨房に響いていました。薄金色の髪を五分に刈つてあつて、大きな顔についているクリクリした目で、そこいら中を隈なく見えます。もちろん、皆の動きをチェックするためです。

ガブロウシェフとは入社が決まつた時に一度会つたきりで、ちゃんとした話も出来ませんでした。勿論、僕が出来るフランス語は片言なので、会話なんて出来なかつたのですが、総料理長に紹介されて僕と一緒に働くと言う事は伝わつていたはずです。その時のシェフは笑顔で接してくれて、何かいい人でよかつたという印象でしたが、調理場に入ってみるとその第一印象は砕け散りました。

まず、優しくなんかなくて、絶えず大声で怒鳴り散らしていました。セカンドシェフにも、一番下の先輩にも、そして、僕にも顔を真っ赤にして怒鳴つてくるのです。殴つたり、蹴つたりなんかはしないのですが、とにかくすごい剣幕になつて手がつけられなくなるので、それだけで僕はすっかり萎縮してしまいました。僕はシェフが何を言っているのか理解できないので、シェフの伝えたいことの一割も伝わってなかつたのでそれほど精神的には応えなかつたのですが、その雰囲気と勢いだけでも僕は震え上がつてしまふのです。

周りの人達も、それは厳しいものでした。野菜の下処理や、片付け、食材の整理など、本当に基本な事は、今まで他のレストランでしていたので出来ているつもりだったので、ここではそれがまったく通じませんでした。野菜の扱い方や切り方も違い、そもそも見た事も無い野菜もありました。

先輩達は仕事に追われているので、僕はそれらを食材辞典を引きながら一つ一つ覚えていかなければならず、でも、その他にも掃除な

どの雑用に追われてしまうので、それすらもままなりませんでした。野菜の掃除の仕方にしる、そのきり方、扱い方にしる、先輩から一から教えてもらわなければならず、しかも、先輩がちゃんと認められたものしか使ってはもらえなくて、何度もやり直させられました。野菜一つの考え方が違うのです。

配属されてからというもの、朝早くから、夜遅くまで、ぼろ雑巾のように働きました。部屋には本当に寝に帰るだけで、週に一回ある休みも疲れて寝てしまうので、本当に料理漬けの日々に送ることになりました。それも、今までにないぴりぴりした空気に加え、コミニケーションが取りづらい環境に放り込まれてしまったのです。僕は一ヶ月もしないうちに、だいぶ参ってしまいました。

フランス語の方は何とか聞き取れるようにはなったのですが、今までの他のレストランだったらさせてもらったような仕事をさせてもらえないのに加えて、まったく先輩に自分の仕事を認めてもらえないのです。自分だってやれば出来ると思ってるのですが、何回もやり直しをさせられるのです。

まったく進展のない日々が続き、入社当初に会った僕の自信は、糸も簡単に崩されてしまったのです。本当に、逃げ出したくなりました。

しかし、そんな時こそ頼りになるのが友達です。こんな僕の状態を知ってか知らずか、古い知り合いから連絡があったのです。

その知り合いとは、あるうことか北村愛子でした。

ある日の夜、僕が仕事が終わってロッカーで着替え中に携帯を覗くと、いつもなら何にも変化の無いディスプレイに誰かからの着信があつて、それを開いてみると北村から電話が来ていました。

もう、時間は十二時を回っていましたが、僕は反射的に彼女に電話をかけました。

電話をかけながら、久しぶりすぎる北村の着信に、何事かと少しドキドキと胸が高鳴り、正直になんか嬉しく思いました。

何しろ、仕事を始めてから、親しげに話せる人なんて、近くにいなかったからです。

五回くらいコールが鳴ったでしょう、彼女は出ませんでした。

僕は軽くがっかりしながら、いや、非常に残念に思いながら電話を切り、そのまま暗い夜道を家まで歩いていきました。明日は休みなので、明日電話することにしよう、そう思いながら夜中の道を自転車で漕ぎだしました。

翌日、昼ごろまで寝てしまっていた僕を、電話の着信音が起こしました。画面には北村愛子の文字、僕は飛び起きて電話に出ました。

「もしもし、武？」

前から知っている北村の声が聞こえてきました。僕は半ば寝ぼけていましたが、とにかく返事をしました。

「う、うん。おはよう。北村」

「あ、寝てた？こんな時間まで寝てるのを見ると、今日は休み？」

僕は一つ欠伸をしました。

「うん。そうだよ。何？どうしたの？」

「うん。いや、どうしてるかなあと。武、就職したんですよ。私に教えてくれなかったでしょ。まあ、昨日おばさんに聞いて知ったんだけどさ」

北村はお袋とよく連絡を取っているなあと、中学生の時ちょっと思っていました、今でも連絡を取っていたとは知りませんでした。別にお袋からもそんな話聞いていませんでしたから、僕は少しびびりしました。

「ま、まあ、言っていないからな。ホテルでコックしてるんだ。まあ、何だ、忙しくしてるよ」

「信じられないけど、そうみたいだね。あつ、そうだ、おばさんとも連絡とってないんでしょ？おばさん、心配してたよ」

僕は余計なお世話だと思いましたが、お袋にまったく連絡を取っていないのは事実でした。

「忙しかったから仕方ないさ。今度、電話くしとくよ」

「そうしなよ。ところで、あんた午後なんか予定あるの?」

「え?別にないけど」

「じゃあ、会おうよ。久しぶりに武の顔見たくなつたし」

突然の誘いに、僕はにわかには緊張してきました。何しろ、ここ何ヶ月も昔の知り合いと誰とも会ってもいませんでしたし、話しすらもしていませんでした。

北村となんて、調理師学校に入学してから会っていませんでした。何回か電話で話したりはしましたが、それだけでした。

料理学校の新しい友達が出来て、あの彼女と知り合ってからと言うもの、北村とは何と無く疎遠になっていましたし、働き始めたら新しい環境になつたのもあって、そんな時間も無く、仕事に追われていたのです。

その反動があつたからか、ただ、寂しかったからか、僕は無性に北村に会いたくなってきました。でも、本音はそうなのですが、へんな維持があつて、僕はそれが彼女に分からないように答えました。

「いいね!会おうか。そうだなあ、どこで会おうか?俺はまだ学制の時に住んでた所にいるから。お前は?」

「何言つてんの、私はまだ大学生なんだから、同じに決まつてんじやん。じゃあ、三時に駅前で会おうよ。宝くじ売り場の所で待つてるよ。じゃあ、またね」

そう言うと、彼女は電話を切りました。

電話が切れた途端、僕はあわててシャワーを浴びようと、お風呂に駆け込んだのでした。

そうして、僕は久しぶりにお洒落な格好をすると、約束の時間十分前に駅に着いて、北村が言っていた宝くじ売り場の前に行きました。駅にはそれほど多くの人はいませんでしたが、宝くじ売り場の辺りには僕と同じように待ち合わせをしている人が、何人が立っていました。

思えば、もう二年近く彼女とは会っていません。

僕は成人式にも出なかつたですし、地元に戻った時でも、彼女とは顔を合わせなかつたので、もしかしたら見分けがつかないかもしれないと思うと、何か時間が過ぎていくを感じてしまいます。

僕が覚えている北村と言えば、高校の制服姿、それか、体操服姿。私服の彼女の姿なんてあまり見た事が無いので、とても想像できません。まあ、彼女は大学にも行っているんだし、こっちに着てしばらく住んでいる訳ですから、どう変わってるかなあと思いつながらニヤニヤしていると、僕の前を歩いていた女子高生二人組みに笑われちゃいました。

恥ずかしくて顔を赤らめた僕は、笑われた事なんか何事も無かつた様に遠くを見ながら、成人式に出た男友達が言っていた事を思い出しました。

まあ、その男友達とは陽ちゃんなのですが。

陽ちゃんが言うには、まあ、ほとんどの女の子の印象が変わっていたらしく（当たり前と言えばその通りなのですが）中学生の頃とは比べものにならない位大人っぽくなって、しかも綺麗になった女の子が沢山いたとの事でした。

東京であの事件があつて独りきりになり、暴走特急寸前で自暴自棄だった為、成人式になんか出たくなかった僕は、それを聞いて後悔こそしませんでした。残念になってその時の写真を見せてもらう約束をしたのを思い出します。その時の北村がどうなっていたかは話題にはなりませんでしたが、陽ちゃんの言葉を聞く限り、彼女にも何らかの変化が現れている予感を感じさせました。

考えてみれば、幼馴染と呼べる女の子は北村だけと言っても過言ではありませんが、今更彼女が変わった所でどうと言う事もありません。多少、化粧するくらいに決まっています。それに、女の子が変わったという話ですけど、何しろ出所はあの陽ちゃんですから、話半分、多くを受け止める事も無いのです。

就職しちゃってるよ、こいつ（前書き）

出会いがあれば別れもあり、そしてまた誰かと出会うのですが、

ずっと出合いっぱなしの人もいますよね。

そんな人がいたら大切にしましょう。

就職しちゃってるよ、こいつ

そんな事を思っていると、開札の方から何やら見た事がある顔が近づいてきました。

僕がその人を見ると、どうやら向こうも気がついたらしくて、こちらに向かって歩いてきます。

僕は動揺を隠せませんでした。目を疑いましたが、その人は北村愛子に間違い無かったのです。

肩まできれいに切りそろえられている少し茶色がかった髪の毛。それがきらきら風に揺れています。鶯色のニットの上に白いレースを羽織っていて、デニムのミニスカートには大きな銀のバックルのベルトをしていました。いかにも女子大生な装いをしていて、ピンク色のサンダルを履く細い足が、アスファルトの上で踊っています。

どう見ても北村なのですが、今向かってくる姿は、僕の想像を超えていました。

そんな僕を尻目に、北村は自分の顔の横で手を降りながら小走りに向かってきます。なので、僕も何も言わずに、硬い笑顔で手を振り替えしました。

近づいてくる彼女の顔を食い入る様に見ていると、北村が化粧をしているのがはつきりと分かりました。

何ででしょう？それくらい予想の範囲内だったのに、僕にはそれがひどく応えました。

小学校の頃から知っている北村愛子は、僕の記憶の中では素朴な感じの普通の女の子だったのですが、今僕の目の前にいる女の人はまるで別人です。

それほど濃くはないのですが、しっかりとファンデーションも塗ってありましたし、目元がキラキラして、睫毛がはつきりとしています。それに、唇もピンクで、しかもグロスで潤いに満ちていました。

正直、雑誌で見ても首を傾げないかもしれません。

そんな彼女が、僕に大きな声を出してきました。

「わー。武士、久しぶり！待った？」

声は前と変わらない、北村の声です。僕はまともに顔を見れませんでした。

「お、おう。いや、今来たところなんだ。何か、あれだ、その、天気良くて良かったねえ。晴天って感じ」

僕が取り繕ったように指を上に向けると、北村の表情が途端に和らぎました。

「そうね。そうだけど、武はなんか変わってないねえ。もっとやつれてるかと思っただけど。なんか、元気そうね。まあ、相変わらず頓珍漢だけど」

「まあね。北村も元気そうだな。大学まだ行ってるんだろ」

「当たり前でしょ。それより、立ち話もなんだし、どこ行こうか？ ご飯食べたよね？」

彼女はそう言いながら歩き始めたので、僕もそれに付いていきました。

「お、おお。そこら辺でお茶でもしようぜ。お前、甘いのが好きだろう。この辺に、うまいスフレがある喫茶店があるんだよ。北口の方なんだけど」

「へえー。知らなかった。いいねえ。そこに行こうか」

僕が彼女を通り越そうとすると、風に乗って彼女の香りが漂ってきました。大人の女の人がつけるような香水の香りを鼻腔に感じながら、僕は彼女を連れて、その店まで案内していきました。そのお店はこの界隈では有名なので、三時過ぎのこの時間は、きっと込んであるだろうなあと思っていって見ると、やっぱりなかなか賑わっていました。

ほとんどが女性客、主に近所に住む主婦達で、若い女性もそれほどいなくて、男性客は僕だけでした。でも、僕は家も近くですし、何しろお菓子が美味しいのでよく来てい他ので別に気にはなりません。

でした。それに、通っている分この店の店員ともそれなりに顔見知りなので、扉を開けるなり近くにいたイケメンウェ이터に挨拶が
てら声をかけました。そのウェ이터も愛想のいい笑顔で返事をか
けてくれて、僕らを案内してくれと、テーブルに向かいながら
北村が僕の腕を突いてきました。

「この店、よく来るの？」

僕は案内されたテーブルに彼女が来ると、申し訳程度に椅子を引い
てあげました。

「まあ、そこまで来ないけど、たまに来る」

そう言いながら僕も座って、メニューを広げます。

「このスフレは凄く美味くてね。しかも、いつも綺麗に上がって
んだ」

「へー、そうなんだ。私も近くに住んでるけど、初めて来たよ。武、
よく知ってるね」

「まあ、これも仕事の内って言うかな。色々な所に食べに行くから
ね。勉強だよ」

北村は僕の顔をじっと見てきます。

「一人で食べに行くの？」

僕はメニューから彼女の顔に目線を映しました。

「え？そうだなあ、そりゃ、そんな時もあるけど、店の若い女の事
も行くし、色々だよ」

僕は強がっていました。色々なお店に食べに行っているのは事実で、
学生の頃から事あるごとに色々な所に食べに行っていました。実は
それにお金をかけすぎて、成人式の時に帰るお金も無かった位でし
た。まあ、自暴自棄な時期でしたから。

ただ、食べに行く時はいつも一人でした。あんな事があって彼女も
作る気にもなれませんでしたし、職場では出会いを作る時間もあり
ませんでしたし、当然、友達とも行く気になれなかったからです。

まあ、要するに、逃げる為にそうしていた部分もある訳で、格好悪
いといえはそうかもしれませんが。

でも、北村にそんな事教えるのは何か癪に障ります。きつと、蒸し返して、うるさく言ってくるに決まっていますのですから。

しかし、思っていたほど、僕の言葉に彼女は反応しないようでした。「ふーん。いいもの食べてるんだね。仕事は、忙しいの？」

「忙しいってもんじゃないよ。かなり、ハード。何しろ、朝から晩まで動きどうし動いてさ、休む暇なんてないんだもん。でも、勉強にはなつてると思うけどね。少しは仕事も覚えられるようになってきたし。調理場の中はフランス語が使われてるからそれが結構きついでね。少しづつ覚えてる感じがな。でも、怒られっぱなしなんだ」

「そうなんだあ、大変だね。でも、頑張ってるなんて偉いじゃん！私ね、武が料理の道に進むって聞いた時、あいつ何考えてるんだろうって思っただけけど、少し安心した。ちゃんとやってるんだね。

こんなふうになるとはぜんぜん予想出来なかつたけどさ」

そう言つて、彼女は奥歯まで見えるくらい笑いだしました。

彼女の笑い声は昔と変わっていませんでしたが、しぐさはすっかり大人になっていて、それを見ていると僕は何を言っているか、よく分からなくなつてしまいました。

すると、ちょうどいいタイミングで、あのイケメンウェイターがこちらに注文をとりに来ました。

「注文はいかがいたしますか？」

大きな喉仏から、低音で良音の音が響きます。北村は一瞬で笑顔になると、機嫌の良さそうな一オクターブ高い声を出しました。

「オレンジとホワイトチョコのスフレとアッサムティーを下さい。

武はどうするの？」

そう聞かれても、僕はぜんぜん決めていませんでした。むしろ、彼女が決まっているのが不思議なくらいです。いったいいつメニユーを見たのでしょうか？

イケメンが僕の顔を覗き込んできます。

「チヨ、チヨコメントスフレとミルクティーをお願いします」

僕がいつもの組み合わせを言うと、イケメンは黙って微笑み頷いて、奥の方に消えて行きました。すると、それを目で追っていた北村が、彼が奥に消えたと同時に僕の方を見てきました。

「ねえ、武。あの人、カッコいいね。二十八くらいかな？武、あの人と仲いいの？」

僕は足を組み直します。

「別に、少しは話すよ。でも、あの人、確かに格好いいし、話すと面白い人だけどさ。まあ、何だ、北村がどうこう出来る相手じゃないと思うよ」

僕の言葉に、北村は明らかに気分を害したようでした。目が、怒っています。

「何？それってどういう意味？」

「だって、あの人、ゲイだよ」

あのイケメンが、この店のオーナーのオジサンとデキている事は、暗黙の了解と言うか、ほとんどの常連さんは知っていました。まあ、喋り方もなんとなくそっち系な感じでしたし、たまに来るオーナーとの様子を見ているとそう感じるのも不思議ではないのです。僕はその辺の事は何とも思っていないんですけど、やはり幼馴染には早めに教えておいた方がいいでしょう。

僕のその言葉に、北村は明らかにショックを受けているようでした。

「信じられない。あんなにカッコいいのに。もったいくない？」

「そうか。俺は別に構わないけど。個人の好みだろう。それより、お前って、男を見る目ないんじゃないの？そっか、お前の彼氏の話とか聞いたことないけど、どうなの？彼氏出来たの？」

僕は冷やかかし気味にそう言ったのですが、彼女は驚くほど反応しませんでした。

「別に、あんたに言う必要ないじゃん」

冷たく言い放たれると、食い下がりがりたくなるから不思議です。

「何だよ。久々に会ってその言い方はないんじゃない。人が話を広げようって言う気なのに、終わらしてどうするのさ。別に俺はお前

に話してもいいぜ」

「あんたの事なんて聞きたくない。大体、二年以上も連絡取ってこなかった人には話したくないよ」

「いいじゃん。今会ってるんだからさ」

「じゃあ言うけど、今付き合っている人はいるよ」

彼女はティーカップを口元に持って行き、香りをかいでから口に含みました。あっさり言われたのに、なんだか僕の胸に響いてきました。

「北村、今彼氏いるんだ」

そのフリーズが僕の胸の辺りに居座ってなかなか消化できません。

僕も、飲み物を口に含みました。なんだか足から血の気がなくなるようです。

「大学のゼミの人なんだけど」

「ああ、そう」

「なかなか真面目な人でね」

「ふうん。それで」

「向こうから、私に告白してきたんだ。」

「.....」

ちょうど僕の心の声が聞こえたのでしょうか？丁度あのイケメンウエイターが僕らのテーブルに焼きたてのスフレを持ってきました。

8センチのココットの途中で、香ばしく焼けているスフレが綺麗に膨らんでいます。まっすぐ四センチは高く膨らんでいるスフレの上に、真っ白な粉糖がかかっています。

あまりに立派なスフレに、今までの会話なんてすっかり頭になくなって、二人の視線は釘付け。心はスフレの虜です。

表面の茶色く香ばしく焼けた所をスプーンで軽く突き刺すと、さくつとした感触の後に、中からフワフワな生地が見えてきます。

僕は急いで、それをすくいました。何しろスフレは時間が命。時間が経つに連れ、生地が萎んでいってしまうので、ほんの一秒で状態が変わってしまいます。

ですから、すかさず口に入れます。

その途端、口の中にミントの香りとチョコの風味が舌の上で混ざり合い、まさに泡のように消えてしまいます。さらにフワフワしている所をスプーンで漉くうと、冷めない内にまた口に入れました。

このお店のスフレのポイントは、甘さを抑えてある代わりに、少しお酒が効いている所で、だから、全体で見ると結構な量がありますが、飽きる事無く食べれるのです。

北村の方もこの店の定番のオレンジスフレに参ってる様子で、口に入れるたびに喜びの表情を浮かべていました。何度も小さく手を振って、顔を揺らし美味しさを表しています。

「武、これホント美味しいよ」

「だろう。俺が不味い店に連れてくる訳無いじゃん」

僕は調子よく自分の鼻を弾きました。

「何か武がそんな偉そうに言っても、これを食べたらそんな気がしてきちゃうね」

「だからね、言ってるでしょ？俺は色々行ってるから、良く知ってるんだって」

「ふむふむ。そのようだね、武士君。じゃあ、これからどこかに食べに行く時には私にも声かけなさい。私も美味しいもの食べるの好きだからさ」

「おお、そうするか。じゃあ今度行くときは連絡するよ」

と僕が言うと、北村はニコツと笑って、またスフレをつついていました。

それ以来、僕は北村とはよく連絡を取るようになりました。

とは言え、相変わらず仕事が忙しくて、思うような機会が作れないままだったので、休みの日でも彼女と会う事はありませんでした。

大体の休日は、仕事の疲れが残って、どうしても寝て過してしまっからです。

その仕事の方と言うと、相変わらず床にはいつくばりながら調理場を駆けずり回ってる身でしたが、徐々にですが慣れてくるように

はなりました。先輩に怒られながらも、少しですけど調理場の流れが分かる様になってきて、同じ様な失敗も少なくなってきました。まだまだ、シエフには名前も覚えてもらえていませんでしたが、少なくとも調理場の一員とは思われるようになったようです。

まあ、僕がする仕事なんてほとんど雑用で、食材にしても何かの付けあわせを切る程度のものでしたが、それでも自分の関わったものがお客に出されていると思うと、少しは嬉しい気持ちになりました。それに、その時くらいからレストランのサービスマンを率いる長、メートル・ド・テルが何かと僕の事を気にかけてくれるようになって、それがきつい仕事の中でもとても励みになり、僕は何とかこのレストランを続けていく事が出来ました。

まあ、途中で何度も辞めてやろうと思ったりもしましたが、そんな時は北村に愚痴を聞いてもらったり（彼女は決して僕の事を慰めてはくれませんでした。いつも可愛げも無くケツを叩いてくるような事を言うてきました。）、ホテルの先輩に話を聞いてもらったりしてもらって、そのたびに頑張ろうと思って何とか乗り越えていきました。そして、ただ純粹に料理の事だけを考えて日々の仕事をこなしていくうちに、自分でも思いも寄らない早さで時間は経って行きました。

気がついてみると、このレストランで働き出してから二年が過ぎました。

そしてなんと、桜が舞う季節になると、僕も先輩になったのです。今年も新入社員が一人配属され、これで僕の仕事が減ると思いきや、僕も教える立場になってしまったのでますます仕事が忙しくなりました。でも、それで嫌になったというわけではなくて、先輩から任せられる事が増え、それをこなしていくうちに仕事に楽しさも覚えるようになり、何よりその後輩に頼られちゃったりするものだから、僕はなんか必要とされている感じがしていました。

それに、仕事場での認知度も上がったその頃には、ほとんどのサービスの人達とも仲良くなっていて、だいぶ年の離れた彼らには結構

可愛がってもらえました。どうも、奥手で真面目な青年に受け取られたらしく、色々な事を僕に教えたがっていました。

調理場で働く先輩達も同じなのですが、そうやって年上の人達と話していくうちに、仕事場以外での皆の人柄もようやく見えるようになって来ました。とりあえず、皆お酒が好きな人達ばかりだったのでとにかくよく飲み連れ出されたのですが、そんな時よく聞かれる質問が、それまで余計な事を考えていなかった僕に疑問を投げかけるようになりました。

その質問とはこれでした。

「武ちゃん、どうしてコックになったのさ？」

こんな事言ってくる相手は対外酔っ払っていて、別に対して深い意味は無かった様なのですが、僕はその言葉にすぐには答えられないでいました。

思い返してみると、何で僕がこの世界に入ったかと言うと、女の子にお肉をつけるためだったのです。

この二年間、そんな事は忙しい日常の中で、すっかり頭の中から抜け落ちていました。

完全に、動機はきつかけになっていて、僕は目的も忘れて料理の事を純粹に考えている自分に気がついたのです。

でも、だからといって相手に本当の事なんかいえないで（何しろ、皆料理が命の人達ですから、ほんとの動機を言ったら馬鹿にしてると思うはずです、確実に）、何かそれらしい事を言っていました。

まあ、ほとんどの皆が納得するような、例えば初めて食べたフランス料理に感動したとか、家で料理してたら楽しくなったとか、それっぽい事を言っていたのです。

じっさい僕自身も、そんな事を言いながら当初の目的よりも今楽しい事の方が大切に思えてきていて、世間の女の子にお肉を付ける事を、前よりもそれほど強くは思わなくなっていました。

確かに、女の人の腰の肉にはそれまでも目がいていたのは事実でした。

しかし、色々僕に起きたことが僕を臆病にしていたのもありますし、何しろ、忙しくてそんな気持ちにもなれないのです。要するに、機会がなかったのです。

しかし、入社して三年目、僕はまたその気持ちを取り戻す機会が訪れました。

それまでメインダイニングで働いていた僕でしたが、その年の春、僕は移動を命じられたのです。ある朝総料理長に呼ばれた僕は、なんと朝食&ラウンジの調理場で働く事を命じられました。

このホテルには調理場が五つあって、メインダイニング、宴会場、イタリアレストラン、朝食&ラウンジ&ルームサービス、そして社員食堂があるのですが、朝食&ラウンジの担当が急に何人が辞めてしまったので、ぼくが穴埋めに当てられる事になったのです。

確かにこのホテルの朝食やルームサービスは評判もよく、ラウンジも賑わっていたのですが、それは正直言つて僕のやりたい事とはだいぶ書け離れていました。総料理長にその辞令を言われた時は、自分に力が無かったからそんな所に廻されたんだと思つて本当にショックでしたが、総料理長は即戦力として期待しているからと僕に念を押してきました。とにかく人がいないから、少しでも役立つのを入りたい戸の事だったので、僕には納得が行くものではありませんでした。

とは言え、会社の決定でしたので僕は従わざるを得なくて、しぶしぶメインダイニングを去る事になったのです。

総料理長に内々の辞令を伝えられてから一ヶ月もしないうちに、僕は朝食&ラウンジの調理場に移動して、また新しい調理場で働く事になりました。

それまでより少し朝早くから来るようになり、このホテル自慢の一人に一皿の特別な朝食、バイキング形式などではない一つ一つオーダーを聞いて作るような朝食を作るようになりました。作る料理はオムレツや、スクランブルエッグ、目玉焼きとか、そのつけ合わせなど、およそフランス料理とはかけ離れていて、和定食もメニ

ユーにあるので味噌汁や出し巻き卵なんかも作りました。そして、朝食の時間が終わると、ラウンジとルームサービスを作る事になり、人もいない事も相まって、夜の十時位までびっしりと働かされました。夜中にもルームサービスはあるので、その時間に夜勤の人と交換するのですが、シフトを見ると僕も夜勤をする事になっていくみたいでした。人がいないうちだけという話でしたが、これでは辞める人も多いと思わざるをえません。

案の定、料理長と僕以外の調理場のスタッフは派遣社員なのですが、やはりあまり定着している人が少ない状況でした。この状況は厳しくてやりにくいと思いつつも、まあやるしかないと諦めた僕でしたが、すべて悪い事ばかりでもありませんでした。

重大な過ちに気が付く時　その人の器が分かる（前書き）

まあ、誰にだって過ちはあります。その後が大事ですよ。ね。
取り返せない過ちはしてはいけませんけど、攻める姿勢も忘れた
くない！

そう、それがバランスって事でしょうか？
若いってバランスが取れないって事なんでしょうね

重大な過ちに気が付く時 その人の器が分かる

それと言うのも、ここでは女の子が周りにたくさん働いていたのです。

ラウンジは全員が女性スタッフでしたし、ルームサービスの担当者も女性が多かったのです。そして、ラウンジの女の子達は総じて若い子が多いのでした。

女性マネージャーも三十五歳、社員の女の人は四人いるのですが、その人達もマネージャーより若く、大半を占めるバイトにいたっては学生も混じっているので十九歳の子もいました。メインダイニングのサービスには女性は一人もいなかったのですから、そういった意味でここはまるで逆の環境で、とにかく女の子と話す機会が増えたのです。

とは言っても、僕から進んで話に行く事は無く、初めは必要以上に喋る事はありませんでしたが、顔を毎日合わせているうちにどうしたって仲良くなっていくもので、休み時間や料理を出す時などに色々な女の子と話すようになりました。

特に若いバイトの子達とは年も近いこともあって、すぐに打ち解けるようになりました。それに、この調理場はメインダイニングのよくな敵しい雰囲気ではなかったため、どのスタッフも大概堅苦しくない関係を築いていて、料理長も比較的寛容な人でしたから、僕もある意味気楽に仕事をする事が出来ました。

そんな感じだったので、仕事もある程度やっていくうちにすぐに慣れたのですが、それがまた僕にある作用をもたらしました。気持ちに余裕が生まれてきたからでしょうか？

やはり、男としての性は無くす事が出来ないのでしょうか？

女の子と仲良くなった事が影響していたのかもかもしれません。

なんと、再び僕の心に「ラブ・ハンド」の炎が灯る事になったのです。

ある朝、僕は朝食係の女の子の為に、朝ごはんを作ってあげていました。

お客に出す質のいい卵を三個分使ったオムレツの中に、摩り下ろしたチーズをたっぷり入れたものを合間の時間にせつせと巻いてその子に出してあげると、彼女は喜んで平らげていきました。その子は結構ふくよかな体系で、制服のスカートからお肉がはみ出させながら、僕の作ったオムレツを食べていたのです。

それを見ていたら、何かとても自分にとって気持ちが良かったので僕はそれに味をしめ、今度はラウンジのバイトの女の子達に、余ったデザートを惜しげもなく与えてみました。すると、女の子達は声をかけた途端に、そのデザートをぺろりと平らげていきました。僕はそこで、お菓子も手がけていたため、お菓子に関してはある程度自由に出来たので、それからは事あるごとにラウンジの女の子達に与えていました。

女の子は甘いものが好きなので、いくらでも食べてくれるようになり、そして、そんな事をしてくれる人が今までいなかった事もあってか、そんな僕にとっても好意を持ってくれるようにもなり、話していくうちに、ますます、いっぱい食べてくれるようになりました。こうなってくると、僕の心の炎が大きくなってきて、本来僕がしたい事がしつかりと浮かんできたのです。

何しろ、今この時、高校生の僕がしようとした事が現実になっていたのですから。

僕は、笑顔でケーキを食べる女の子達の顔を見ながら、メインダイニングで働いていたときの気持ちなんかすっかり忘れて、自分の思っている通りに「ラブ・ハンド」が溢れ出すかと思うと、すべてが明るくなるような気になっていたのです。

しかし、事はそううまくいく訳がありませんでした。

僕がそんな事を始めてから一ヶ月位たった時分でしょうか、僕はいつものように余ったケーキをお皿に載せ、もっともっとお肉を付け

てくれよと思いながら、そのデザートを目に付く所に置いて、弾んだ感じでラウンジの女の子に声をかけました。

僕はまたすぐにお皿が空になるだろうと、心の中で一人浮かれていました。

しかし、彼女達の反応は僕の予想と反して、芳しくないものでした。いつもならすぐに、デザートの盛られたお皿に寄ってきていた女の子達が、その時はなんだか言って食べてはくれませんでした。

その時は僕も、まあ、こんな日もあるだろうと思って、樂觀視していましたが、状況は何日たっても変わらなくなって、今までちゃんと残さず食べてくれていたあのポツチャリした子さえ、食べてくれたとしても一口しか口にしなくなりました。

どうして女の子達は食べてくれなくなったのだろうかと悩んだ僕は、自分の作ったお菓子の味が落ちたから食べてくれなくなったと思つて、次はお客に出す以上に力をかけて試作という名目で、新作のお菓子を作ってみました。それまで培ってきた出来る限りの力を使つて、彼女達に食べてもらうために、寝る時間も削つて、僕は新たなスイーツを完成させ、それを空き時間に出してみたのです。僕が新たに作ったのは、洋ナシのシャルロットでした。

基本は洋ナシのムースを使うのですが、僕は女の子の大好きなチョコレートのムースを少しラム酒を効かせて使ってみました。そしてそれをふんわりしたビスキュイ生地の中に敷き詰め、ローストしたピスタチオクラッシュをまぶし、その上にシロップで煮た洋ナシの薄いスライスを載せます。仕上げにその洋ナシをバーナーで焼き色を付けて、ミントを飾れば出来上がりです。

僕はこれにかなりの自信がありました。きっと女の子達は飛びついて、我先にむさぼりだすに違いないと確信すらしていました。

だから、女の子達が十二分に食べても行き渡るように、二十センチのホールを三台も作り、シャルロットが足りなくならないように準備も万端でした。

調理場の料理を出す所にきらきらの洋ナシのシャルロットを置き、

近くにゐる女の子に声をかけると、僕の思惑通り、女の子達は黄色い声を上げながら僕の周りに集まってきました。新しいお菓子をみる彼女達の目は輝いていて、僕がそれを勧めると女の子達は万遍の笑みでスプーンを手に取り出しました。

もちろん、僕も負けない位の万弁の笑みを浮かべながら、僕のケーキを食べる彼女達を見ていました。きつと、見る見るうちに無くなつていき、女の子達はさらにほしがるに違いない。僕はその光景を想像しながら、自信満々に腕組みしていました。

しかし、彼女達は僕の予想を裏切るものでした。

何故かどの子も一口か二口だけ食べるだけで、それ以上は食べようとしませんでした。困惑気味に僕が感想を聞くと、皆大げさなくらいに反応してくれて、美味しいし、お客に出したら面白いよ、とは言つて着てくれたので反応はいいようなのですが、彼女達はそれ以上は食べないのです。

なので、結果的にはラウンジの女の子達全員が口にはしてくれませんが、まだ二台のお菓子が余ってしまい、彼女達に一杯食べてもらう事はできませんでした。

まあ、余ったそれはキッチンの男性スタッフと、ルームサービスの人達が食べてくれたのですが、男に食べてもらっても僕としては何の意味も無くて、はつきり言つてショックを感じました。

とは言え、筋金入りの「ラブ・ハンド」好きの僕は、それでも諦めずに、今度は賄い料理を作つて、それを女の子達に振舞いってみました。それも、結構揚げ物とかこつてりした感じの、いかにもいい「ラブ・ハンド」が付きそうなものを出してみました。

しかし、今度もこつてりしたものには手もつけてもらえず、どちらかと言うと付け合わせ的な軽いものばかり食べられるようになってしまいました。

明らかに、彼女達は少量しか食べなくなっていました。一人だけ、ルームサービスの女の子の人がめっちゃよくちゃ食べてくれましたが、彼女は体質的に太らないらしく、もちろん、痩せていて僕の気持ちを満

たしてくる存在にはなりえませんでした。

どの女の子に聞いても、別に美味しくない、とは言わないのですが、その場で、何でもつと食べてくれないのかなんて聞けないまま、失意の日々は続いていました。

しかし、やはり納得いかないと思ったので、僕はラウンジで一番仲のいい子を飲みに誘いだして、話を聞く事にしました。

やはり、直接聞く他は無いと思ったのです。

その、彼女は年上でしたが同期入社でしたし、正確的にもずばずば本音を言ってくるタイプだったのでうってつけでした。

なので、僕は仕事終わりに彼女を誘うと、近くの居酒屋に連れて行き、乾杯もそこそこに直接的に話を切り出しました。

「ちよつと聞きたいんだけどさ。俺、ラウンジの皆に嫌われてるかな？」

彼女はビールを飲みかけているのを止めて、僕の方を見ました。

「どうしたの、急に？何かあったの？」

「いや、何て言うか、最近、なんか皆食べてくれないって言うかさ・・・」

彼女は首を傾げます。

「何を？」

「だから、俺がよくお菓子とか、料理とか皆に出すでしょ？」

彼女の目が、大きく「？」になりましたが、僕は話を続けました。

「それをさ、前だったら皆一杯、残しもしないで食べてくれてたでしょ？若い子とかがさ。でも今じゃあ、そんな事ないからさ。ちやんと作ってるから不味いはずないし、残してるのは、要するに俺自身の問題なのかと思ってさ」

すると、彼女は噴出したように笑い出しました。

「何言ってるの？皆、美味しい、美味しいって食べてんじゃん。ラウンジの若い子なんか、小田切君が色々出してくれるからか、武さんは優しくて良い人だって言ってるよ」

「え？そんな事言われてるの？俺？イヤー、そうか、そうか。いや、

違うんだって、俺が言いたいの、ラウンジの女の子の食べる量がね、少なくなってるからさ。どうしたんだろうかと思ってね」

その言葉に、さらに彼女が笑います。

「小田切君も気が小さいねえ。そんな事気にしてんの。そんな事気にしなくてもいいじゃん。皆に振舞うって、その気持が大事でしょうが。それに、小田切君の作るのは美味いって」

「あ、ありがとう」

「何か意外だね。そんな事気になるなんて」

「いやね、そう言ってもさ、君だって最近食べるの少ないじゃん。前はがつつが食べてくれたのに」

「馬鹿ね。あんなに美味しいお菓子や料理、沢山食べたなら太っちゃうでしょうが。ただでさえ運動不足なのに。ああ！そう言えば、皆も最近、太った、太ったって連発してたなあ。休みの日以外、毎日調理場で小田切君が作ったお菓子や料理も食べてたしなあ。そりゃ太るわ。うん。まあ、美味しく食べて過ぎちゃったから、仕方ないけど」

「でもさ、美味しいならもっと食べればいいじゃん」

「何言ってるの？さっきから食べたなら太るって言ってるでしょう。ウエストのサイズが変わったら、ユニホームが入らなくなるんだから。それに、私も太ったら彼に何言われるか分からないわよ。ただでさえうるさいんだから、あの人。とにかく、太るのはまずいの。まあ、彼が太れて言うなら、まあ、考えなくもないけど」

「ほんと!？」

「いや、やっぱ。無理」

「何で？太ったっていいじゃん」

「今日はやけに頭悪いね、君は。女は美味しいものは食べたいけど、スタイルが変わるほど食べる気にはならないの。少なくとも、私はそうよ。まあ、ラウンジの子は皆そう思っているみたいだから、前ほど食べなくなっただろうけどね。あっ、ルームサービスの田村さんは別みただけだね。あの方は、どんだけ食べても太らない人

だからさ」

僕はこの言葉を聞いた時、頭がくらくらしてきました。女の子達は、美味しい料理やお菓子があっても、太るまで食べようとはしないだなんて。

まあ、考えてみれば当たり前と言えば当たり前の話で、どんなにカロリーが高い食べ物を食べても、一瞬で太るなんて事ありえない訳ですから、どうしたって徐々にするしかありません。でも、時間をかけていればいるほど、彼女達がお肉が増えていく事に気がつく時間も増える訳ですから、どうしたってうまくいく訳がなかったのです。

彼女達は、自分のお肉には敏感に反応するのですから。

僕はただ、自分の考えの甘さに愕然としていました。

彼女にそう言われるまで、僕はそんな単純な事にも気が付かなかったなんて、女の人を甘く見ていた自分の愚かさに、止めを刺されたかの様に打ちひしがれました。

隣にいた彼女は、反応が悪くなった僕を尻目に話題をラウンジにいる虫の好かない後輩の話に切り替えてきましたが、僕はと言うと相槌を打つくらいしかできなくて、頭の中は別な事にとらわれていました。

今まで僕が過してきたこの何年間は、まったく意味のない時間だと言う事に気がついたので。

じゃあ、一体どうしたらいいんだ！

きつと、どんなに僕が女の人に「いっぱい食べて、お肉を付けてくれ！」と言った所で、ほとんど、いや全ての女の人には僕の言葉に耳を傾ける事なんて無いでしょう。何故なら、その人にとって、僕の存在はそこまで必要ではなく、必要の無い人の言葉なんて、女の人には響かないからです。例えば、僕に彼女がいて、その人にどうしても太ってくれと頼んだとして、その女の子が、僕の事を本当に好きでその話を納得してくれた時は、彼女は食べてくれてお肉を付け出す可能性があるかもしれませんが、大切な人じゃない人にそんな

事を言われても、女の子達はきつと動こうとしないはず。少なくとも、このホテルのラウンジの女の子達はそうでしょう。

もし僕がその女の子達にお肉をつけさせたいと思ったら、十人以上の女性を本気で惚れさせて、尚且つ十分に愛情を注ぎ、たつぷりと食べさせて行かなければならないのです。

毎日、毎日、それなりに。

それは、考えただけで、僕の頭を真っ黒にさせるに十分でした。

僕は彼女と別れてから家に帰るまでの道すがら、ずっと考えていました。

確かに、料理を仕事とする事は一生を賭けるに値する事だと思えます。だからと言っては何ですが、当初は動機も目的も忘れるほど、この道で頑張ろうと一生懸命になりました。この仕事は、やればそれだけ身になりますし、一から作り上げていく事には喜びも感じられます。今では後輩もいますし、ホールに立つ人からも信頼を寄せられるようになりました。もちろん、料理長からでもあります。はっきり言って、やりがいがありました。

しかし、ぼくは気がついたのです。

さっき彼女が言ってくれた事に対する僕の落胆が、逆にどれだけ自分が「ラブ・ハンド」に情熱を持っていたかに……。

ただ、今のままでは駄目だと言う事ははっきりしていました。

料理じゃダメなのです。

当初の僕の稚拙な計画としては、女の子達を太らす為に美味しいものを提供する店を何店舗も出して、食べに来てくれた人を太らしていくつもりでしたが、すでに、こんな小さな規模で立ち行かない事が分かってしまいました。

その時僕は、「ラブ・ハンド」を広める為には、大きく路線変更をしなければならぬ事を悟りました。

まったく新しい道を進まなければ、僕の世界を形にしていける事は出来ないので。そうでないと、「ラブ・ハンド」を街角で見かける事も、夢のまた夢です。

僕はそんな事は嫌でした。

諦めたくありませんでした！

ただ、どうすれば言いかなんてアイデアすぐには浮かぶはずもなく、それでも仕事は毎日やってきてしまい、忙しさに先の事を考える余裕も無いのが現実でした。

まあ、確かに、仕事をしている分には職場で僕の事は認められていたもので、職場ではむしろ満たされていました。まあ、低賃金とか長時間勤務とか不満はあるのですが、女の子達とも仲はいいし（あれから、無理にカロリーの高い美味しい物を出すのは止めました）、調理場で僕は必要とされていましたから、この職場の事は好きでした。

しかし、僕の心が満たされているかと言えば、決してそんな事はありませんでした。何しろ、生まれてきてから叶えたい夢が、暗礁に乗り上げかかっているのですから。

もちろん、僕にだって、人がよりよく生きていくには日々の安定する事が大切で、実社会で働いて生活していく中でその事は十分に分かっていました。自分が考えている事は馬鹿な考えだと言うことも頭の中にあることはありません。

まあ、自分を客観的に見たら、「そんな馬鹿みたいな考え捨てて、仕事に励んだ方がお前の為だ！少しも考えるな！」と思う方が圧倒的だったと思います。ただ、そうは思うのですが、仕事中でも、部屋にいるときも、トイレの中でさえ、考えるのはどうすれば「ラブ・ハンド」が広まるかと言う事はかりで、寝る前に頭に浮かぶのは「ラブ・ハンド」のあふれる街角の風景でした。

そんな事を考えている日々が何ヶ月も続き、しかし、一向に答えは見つからないまま、僕はこのホテルで働きだして、四度目の春を迎える事になりました。

この年になると、人も増えてきたのに加え、ラウンジでの頑張りが認められたのか、また僕はメインダイニングに呼び戻される事になりました。

要するに、栄転、大抜擢です。

まあ、まっとうな料理人ならここで喜びを噛み締めるのでしようが、僕の心は複雑でした。メインダイニングに入れば、余計な事など考えてはいられません。頭に疑問がある状態で仕事が出来るほど、あそここの調理場は甘いものではないからです。やるなら覚悟を決めてやらなければいいものが出せるはずも無く、中途半端な気持ちではどちらもうまくいかないのは目に見えています。

まあ、僕に奥さんや彼女でもいたら話は違って、迷わずメインダイニングで頑張ったかもしれません。

しかし、背中に何も背負っていない身軽な僕は、迷わず辞退する道を選びました。

当然、総料理長を始め、色々な人達から何でそうなるんだと詰め寄せられました。まさか女の子の腰肉の為だとも言えず、煮え切らない態度を取っていました。会社の決定には逆らえないぞと人事の部長に脅されたので、それなら仕方ないと僕はホテルを辞める事を正式に伝えました。すると、途端に総料理長に呼び出され、お前はこのホテルに欠かせないとか何とか言われましたが、その時には僕の中でむしろ決意が固まっていたので、後ろ髪引かれる思いはありません。頭を下げて辞める事を伝えました。

それが、二十四歳の春の事です。

何かを閃いたら即実行！（前書き）

そのひらめきプライスレス！

誰のもんでもない、あなただけのひらめきを大切に！

しかし、ひらめきって誰かと被るんです。しかも頻りに

悲しいかな、早いもの勝ちなんですよ。さあ、どんどんひらめきを現そう！

何かを閃いたら即実行！

桜吹雪の中、僕は悠然と、新たな旅立ちに心躍らせながら、その職場を後にしました。

そして、今に至って行くのです。

僕は辞めてすぐに、北村愛子に連絡を取りました。

彼女は大学を卒業した後、音楽の先生になる為にも何度か公立学校の教員採用試験を受けていましたが、なかなか採用されないまま、こちらのピアノ教室に勤めていました。

僕が北村に電話して昨日ホテルを辞めたこと電話で言った時、彼女は僕がホテルを辞めた理由も聞かないで、すぐに「夕食と一緒に食べよう」と言ってきました。僕自身も無性に彼女の顔を見たかったので、僕らはその日の夜に落ち合う約束をしました。

約束の時間になると、待ち合わせ場所の駅の交番の前で待っていた僕の前に、彼女はやってきました。

季節的には春なのですが、今日は少し風が冷たいせいか、彼女は黒いジャケットを羽織って、黒いパンツにハイヒールを履いていました。何年か前に会った時よりずっと落ち着いた感じで、さらに女っぽくなったような印象を感じました。

僕の知らない間に、北村はすっかり大人になったようです。

「よっ、無職の武ちゃん」

彼女は来るなり、屈託のない笑みを浮かばせながら、そう言ってきました。

「何だよ。いきなりそれかい！」

「だってそうなんでしょ？仕方ないじゃない」

「そりゃそうだけどさ、もう少し労わりと言つかさ、そんな傷を突くみたいに・・・」

「はいはい。何があつたか話してみなさいって、色々あるんでしょ？」

「お前、会つて早々、こんな所で話すつていうんかい？お店予約してあるから、さっさと行こうぜ」

僕がそう言つて歩き出すと、北村は僕の背中を思い切り叩いて隣に並んできました。

通りには数え切れない位の人が歩いていて、一つの川の流れのようになつていましたが、僕達はその流れに逆らうかのように進んで行きました。

大通りから少し中に入った川沿いの狭い道に入り、最近見つけた魚の美味しい居酒屋に向かおうとすると、その川に沿つて見えなくなるほどずっと向こうまで植えてある満開の桜の木々が、根元に備え付けられている照明にライトアップされているのが目に映り、途端に僕らは息を飲みました。

桜の木々はコンクリートで深く仕切られた川をアーチ上に幾重にも覆つていて、枝という枝にまでその可憐で儂い花びらをびっしりと咲かせていました。ライトアップされた桜の道には、その魅力に吸い寄せられた見物人達の途切れない往来が寄り添い、また流れを作り出して、それら全てが静かに脈打つ生き物のようでした。

僕らはお互いに顔を見合すと、一呼吸置いて、その見物人たちの間を縫うようにして進んでいきました。

そこいら中で老若男女が上を見上げて溜息を漏らしていたり、お酒の入った人々の話す声が重なり合い喧騒とする中、何故か僕らは一言も喋らずに歩いていました。

僕のすぐ左を隣を歩いている彼女は、降り注いでくる桜の花びらを、一枚一枚目で追つていて、それに夢中なようで、僕はと言うと、右手に流れる川を埋め尽くすかのように浮かぶ桜の花びらの行く末に気を取られていました。

今日は風が強かったせいか、かなり多くの桜の花びらが地面を埋め尽くしていましたが、桜の木々にはまだ余りあるほどの花があり、花見客の目を魅了しています。

そうして、ライトアップされた桜と、人の流れに酔いしれながらしばらく歩くと、僕らの目的の店が川の向こうに見えてきました。

すかさず、僕は彼女の腕に軽く触れ、その店を指差しました。そして、店の近くに渡る橋に差し掛かりました。

そして、僕らがその橋の中腹まで来た時です。

突然、その橋に突風が吹きつけ、橋の上に積もっていた大量の桜の花びらを持ち上げました。その風は僕らを中心に渦上に取り巻き、桜の壁が僕らを包み込み、あつという間に竜巻と化した桜の花びらはくるくると舞っていき、やがてそれは夜空に消えていきました。

僕と北村は、突然の出来事に顔を見合わせました。

「すげー！」「すごーい！」

二人同時に目を輝かせながら、驚きの声を上げると、僕らを取り巻いた桜の竜巻を見ていた周りの人達からも、冷やかしにも似た歓声と拍手を貰いました。

だから、僕らは声を上げて笑いながら、目的のお店の方に歩いていきました。

お店に着き暖簾をくぐると、店内にはすでに賑わっていて、かなり人がいました。熱気に頬を煽られながら店に踏み入れると、あわただしく動いている店員の視線が注がれて、僕らに笑顔を向けてきました。

「いらつしゃい！」

僕らは予約である事を近くにいた店の女の子に伝えると、しばらくレジの前で待たされました。

店内は少し薄暗い感じで、大人の居酒屋の雰囲気をかもし出しています。でも、カウンターの手前にディスプレイの囲炉裏があつて、そこだけイミテーションの炎が光り明るめな感じになっていて、何故か囲炉裏の上には大きなするめが何枚かつるされています。そ

して、それを囲むかのように、お客が座れるようになっていて、すでに埋め尽くされていました。カウンターの中では三人の板前さんが忙しそうに動いているのが分かり、自然に僕の目はそちらに移ってしまいます。

どうしても気になってしまつたのですが、隣の北村の目線に気が付き、何と無く違う方を見ていると、係りの人から声をかけられ、僕はカウンター席に案内されました。すかさず、僕は生ビールを頼みます。

「さっきの桜吹雪、すごかつたな」

僕がそう言つと、北村もうんうん頷きながら、ジャケットを脱いで椅子に掛けました。

「ねえ！あんなの初めてだよ。桜に取り囲まれるなんて、今年はきつと良い事あるかもよ」

何だか含みを持たせたような北村の言いようが、僕の心を軽く揺さぶります。

「何かおかしな気分だな。居酒屋でお前と酒飲むなんて」

僕は隣に座っている北村の方を見ました。北村はお絞りで手を拭いています。

「何、今更？もしかしておじさん化してる？私達はまだ若いよ」

「いやいや、そういう事じゃあなくてな。なんだ、小さい頃から知つている奴と酒が飲めて嬉しいって事」

彼女は目を細めながら、お絞りで口元を隠しました。

「まあね、今日はあんたが落ち込んでるんじゃないかと思つてね。幼馴染としてはほつとけないというか、まあ、こんな時は飲むしかないんじゃない？」

彼女がそう言っていると、注文したビールがやってきました。よく冷えたジョッキに、決め細やかな泡と黄金の液体が注ぎ込まれています。

僕はジョッキをぶつけ合いました。

「お疲れ様！」

お互いにそう言うと、ビールを喉に流し込みます。

ほろ苦い、しかし切れのよい刺激が舌と喉を震わせ、胃袋の中に注がれてゆきます。

僕は一気に半分飲んで、ジョッキを音を立てて、カウンターに置きました。

「美味い」

僕は息を吐き出しながらそう言うと、それが北村の耳にも聞こえたらしく、彼女は僕の顔をまじまじと見てきています。

「なんかしみじみ言うねえ」

「え？」

北村は、ジョッキを両手で持ちながら、その中に視線を移していません。

「どうしたの？あんなに頑張ってたのに、仕事辞めちゃうなんて」

僕は残りのビールを飲み干します。そして、落ち着いた感じで口を開きました。

「まあ、あれだな。やりたい事が出来たって言うかな。思い出したというか」

北村はいぶかしげそうな顔をしてこちらを見えています。

「なんか頼もつぜ。適当に頼んでいい？塩辛とか好きだっけ？ここは、とにかく魚が旨いんだ」

彼女は黙って頷き、僕は店員さん呼び止め注文しました。適当にお刺身とか焼き物とかを頼んみ、そして、自分の為にお気に入りのお芋焼酎を頼みました。

店員が言ってしまった後、僕は手に持っていたお品書きをあらためて開くと、彼女に僕の頼んだ焼酎を指差しました。

「北村、この焼酎覚えてる？」

僕がニヤニヤしながらそう言うと、彼女はお品書きを覗き込み、笑い出しました。

「これ、あの時真ちゃんのうちで飲んだやつじゃない！」

「そうなんだよ。マジびっくりでしょ。酒飲むようになって知った

けど、幻なんだよね、この焼酎。だって俺、この店でしか飲んだことないもの。しかも、この値段！」

お互いに目を合わせます。

「高い。こんなにするの、このお酒。私達、あの時結構飲んだよね？そりゃ、真ちゃんのお父さんも怒るよねえ。でも、最近でしょ？こんなに注目されたのも」

僕は頷きます。

「そうなんだよ。真ちゃんの親父さんは相当酒好きだね。あの頃は流通もしてなかっただろうから、たぶん鹿児島から直接取り寄せたか、酒蔵まで買いにいったんだろ。しかし、あんな呑み方したなんて、もつたいなかったぜ。それに、あのワイン。料理人になつて知つたけど、まったく知らないって言うのは恐ろしいな」

「え？あのワインもいいやつなの？」

僕は大笑いに首を振ります。

「いいなんてもんじゃないよ。マニアならどんなにお金をつけるかわからない代物なんだから。しかも、82年物はビンテージだし。とても、あんなふうに飲む代物じゃなかったね」

「炬燵であつたためた」

あの時の禄ちゃんの姿を思い出し、僕達はこみ上げてくるおかしさを堪えられませんでした。しばらく、僕はお腹を抑えていましたが、唐突に北村が喋りだしました。

「禄ちゃんも去年結婚したんだって。それも・・・」

「米山とだろ？」

間髪いれずに僕が言いました。米山順子と禄ちゃんが去年結婚した事は、お袋から聞いていました。僕は仕事で式にはいけませんでしたが、北村は出席できたようです。

「順子もお酒好きだし、あの二人はお似合いだよ。結婚式の順子は本当に綺麗だった。私泣いちゃったもん」

北村はそう言つてビールを一口飲んで、溜息をつきます。それを見て、僕はホッケの開きをつつきながら、何でも無いかのように口を

開きました。

「その、お前はどんなんだ？大学の時の彼とは、うまくいってんの？」

僕がそう聞くと、彼女はきりつとした目でこちらを見てきました。びくつとした僕の耳の傍で、彼女の大声が響きます。

「彼とは別れたわよ！卒業したら、なんか人が変わったみたいになっちゃってさ、あまり会えなくなっさ。仕事し出したら、私の事ほっとくんだもん。信じられなくなっちゃってさ。別れたの」

「そ、そうかあ。それは悪い事聞いちゃったな。あつ、そうだ、なんか頼む？すいませーん」

僕は後ろにいた店員のお姉さん呼びました。なんか、押しではいけないボタンを押してしまったと思っっていると、北村が僕の腕をつかんで引っ張ってきました。

「そんな事よりさ！今日は違うでしょ！」

「ビールを一つ。後、黒霧島も」

北村そつちのけで店員と話していると、彼女はさらに引っ張ってきました。

「聞ってるの？！あなたが会社を辞めたから、今ここで話を聞こうとしてるんじゃないの。分かってるの？その為に今日は来たんだから」

彼女が大きな声でそう言うので、店員さんも僕の方を見てきます。

僕はばつが悪い笑みを浮かべながら、彼女の方に向き直ると、店員は静かに去っていきました。

「どうして辞めたの？」

彼女は少し顔を赤らめながら、口を尖らせています。

「だから、やりたい事が出来たんだって」

「やりたい事って何よ？」

「それは、今ここでは言えないんだけど、大切な事なんだ」

「いいじゃん。私に言ってみてよ」

「まだ、言える事じゃないんだ。いずれ言っよ」

彼女はまたいぶかしそうな顔になって、僕に詰め寄ってきます。

「あつそう！まあ、何したいのか分からないけどさ。あんたの事だから、どうせ詰まんない事考えてるんでしょ？」

「何！？お前がどう思うと構わないけど、俺にしてみりゃあ生まれながらから叶えたい事なんだ。今までして来た事が全て無意味になるうとも、これからどんな闇に突き進んで行こうともやってみたいことなんだよ」

カチンと来ていた僕はさらに続けました。

「確かに、仕事を辞めないで自分を偽ってれば、皆に認められるような人間になれたかもしれない。それに、定職があれば安定した生活を送れるかもしれない。でも、自分の中で、自分の心に本当にやりたい事が溢れてきたら、どうしたって無視するなんて出来ないんだよ。だって、自分だけには嘘はつけないだろ？その時を逃したら、一生後悔するに決まってるんだ。例えうまくいかなかったって、今しなけりや意味が無いんだよ」

いつの間にか飲み物が運ばれていました。北村は黙っています。

「誰になんと言われようかね。とにかく、俺は始めようとしているの」

僕は一口グラスに口をつけました。自分でそう言ってみて、やっぱり、心の底から熱いものが沸きあがってきました。

改めて、自分が「ラブ・ハンド」を好きだと言う事が実感できます。

僕がそう思つて、手の中に納まっているグラスの中の氷を転がして見つめてみると、僕の耳に、今まで聞いた事のないくらい柔らかかな北村の声が聞こえました。

「そんなにしたい事なの？」

僕は思わず彼女の顔を見てしまいました。

「もちろん」

僕は大きく頷きました。

「うまくいくか分からなくても？」

「そうだな、まあ、頑張るよ。一人で出来るか分からないけど、でも、一人だつてやれるだけやるんだ」

「そっかあ。ふーん」

「そう」

僕がそう言つてうつむくと、一瞬の間を置いて、不意に北村が声を上げました。

「武のやりたいことつて、もしかして私が思つてるよりスケール大きい？」

僕は彼女のほうを向き、大きく頷きました。

「たぶんね」

すると、彼女は驚くほど優しげな表情で、丁寧にゆっくり喋ってきました。

「そうかあ。武、私が考えてたより本気なんだね。そうかあー。でも、私思つんだけど、スケールの大きい事は一人で何かするより、皆で力を合わせた方がいいと思うよ。あんた見ると、何かしでかしてかきそうな予感はあるけど、一人で出来る事なんてたかが知れてるんだからさ。一人の言った言葉より、沢山の人の言った同じ言葉の方が通用するのが、世の中つて言うものなんだから。今のあんたにそんな事出来るの？」

彼女は真面目な表情で僕の方を見えています。

言われてみれば、今の僕に「ラブ・ハンド」を広げる力なんてありませんでした。

考えてみれば、僕の力なんて世間から見ればちつぽけなもので、世間を動かすほどの影響力もなければ、資産もなく、せいぜい、消費経済の中の一消費者に過ぎず、一票の投票権を持つ一納税者でしかないのです。

北村が言つた事は、僕の現在の状況を確認する事において、軽く衝撃的でした。

「それは・・・、そうだなあ」

それ見た事かと言うような表情を浮かべて、北村は口元を緩めまし

た。僕の弱気が伝わったようです。

「そりゃ、そうよ。皆誰だってそういう事考えるけど、初めは大体の人が自分の力を分かっていないんだから」

「でもさ、何とかならないかな？俺、どうしてもやりたいんだよ」

北村が鋭い口調で聞いてきます。

「だから、あんた、何がしたいのよ？それ言わなきゃ、私だって何とも言えないわね」

「それは、今は言えない。でも、確かにお前が言うように、俺一人で何とかなる問題ではないかも。でも、もし出来たとしたら、何て言うかさ、俺に取っちゃあパラダイスというか、実現したい社会を作るといふか・・・」

すかさず彼女は突っ込んできました。

「実現したい社会？何、あんた社会になんかしようと思ってたの？ほんとに？私、てつきり自分の会社でも立ち上げたいのかと思っただもしかして、会社と社会、言い間違えてる？」

僕は首を振ります。

「いや、会社じゃなくて、社会の方。広めていきたい事があるんだ」

「ほんとに？それは何なのさ？」

僕は彼女の眼を見ながら、少しの間考えました。

今だったら言ってもいい気分になっていて、と言うより、むしろ彼女に伝えたいと思いました。ただ、僕が「ラブ・ハンド」の事を言っただけで他の人に理解されたいわけがないので、それが僕を躊躇わせていました。ここ何年間、僕は他人に「ラブ・ハンド」の事を話したりした事はなかったので、いざ言うとなると、なかなか言葉にならないのです。

「言ってみなよ。私に話せないのに、誰かにそれが伝わってくわけないじゃん。ここだけの話にしとくから。言ってみてよ」

彼女は僕の肩まで顔を寄せて、小さな声でそういいました。僕は、一つ、軽く深呼吸して、ゆっくりと喋り始めました。

「じゃあ、言うよ。俺な、最近の女の人があまりに痩せてるってい

うか、細すぎる気がしてな。って言うか、女の人の腰あるだろ？それの、その腰についてるお肉があるだろう。それを皆もつと強調した方がいいと思うんだよ。全ての女の人達がだよ！女の人達は、腰にお肉をつけるべきで、細くなる必要はないと思うんだ。だけど、今は細い方が言いように思われてるっていうか、皆細くなりたがってるっていうか、無理してるっていうかさあ。見てて前々自然じゃないっていうかさ！だから俺はさ、それを、もつと皆に知ってもらおうというか、広めていきたいというか。とにかく、そう思ったんだよ！」

僕は頭に浮かぶ限りの言葉で、気持ちを声に乗せました。喋りながら、自然に僕の目は遠くの方を見てゆきます。言葉にしてみても、やはり自分の考えは間違ってるような気持ちに成り、そして自信満々に僕は北村の方を向きました。

しかし、北村はかなりドンと引いていて、まじまじと僕の方を見ながら、口も少し開いているようでした。そして、僕が言い終わったんだと察すると、半分くらいあったビールを全部飲んだ後、勢いよくテーブルにジョッキを置きました。

「信じられない！そんな事の為に、あんたは会社辞めたって事？あんた、何考えてるの！小学校の時から馬鹿で変態だと思ったけど、こんなに馬鹿で変態だとは思わなかったわよ！ああ！なんか腹立ってきた！ホント信じられない！こんなやつのがに心配してたなんて会社辞めたって言ったからどんな事だと思って、仕事場から急いできてやったっていうのに、残業も断ってきたって言うのに、あんた私の事、馬鹿にしてるの！」

いきなりの北村の剣幕に、僕はただ聞いているしかなくて、すぐには言い返えず事が出来ませんでした。

彼女は顔を真っ赤にして、息も荒くなっています。

その剣幕が伝わったのか、周りで飲んでいるお客達も、こちらを覗いてきました。

「お、落ち着いてくれって。何でそんなに怒るんだよ？」

僕の言葉聞いた途端に、彼女はきりつと、こちらを睨んできます。

「何ですって！」

「いやいや、違うんだよ。俺が悪かった。ごめん。だから、落ち着いてな。いや、何て言うか、あれだ。お前がいてくれてよかったよ。ほんと、ありがとう。な！だから、頼むから落ち着いてくれよ。あれだ、その、こんな事を言ったのはお前だけだし、誰かに話したのも初めてなんだ。お前位なんだよ、俺がこんな事相談できるのも。その、怒る気持ちも、わからなくないんだけどさ、おまえも女だもんな」

「当たり前でしょ！馬鹿！あんたは昔から女心がわかってないのよ！」

「い、いや、それはそうだけどさ。だけどね、落ち着いて聞いてくれよ。お前の言う通りかもしれないけど、誰かは理解してくれるかもしれないじゃん。世の中広いんだし。俺は、今は自分の気持ちに正直でいたいんだ。やれる事はやってみたいんだよ」

僕は彼女の眼を真剣に見ながら、何故か自分の目に涙が溢れそうになっっていました。

すると、彼女は力なく僕から目を逸らし、呟くような声を出しました。

「仕事はどうするのよ？何して生活していくの？」

彼女は僕の方を見ないで、小さくそう言いました。

「バイトすれば、何とかなるよ。貯金もいくらあるし」

「また、コックをするの？」

僕は首を振りしました。

「いや、コックは時間が持てないし、カフェかコンビニとかかな」
彼女は僕の方を見てきました。なにやら悲しそうな表情をしています。

「料理に未練はないの？あんなにがんばってたのに。これからまた頑張れば自分で店持ったりできるのに。才能有りそうだし、何年もやってきたでしょ？」

僕はまた首を振りました。

「後悔して無い」

「お金だつてあまりもらえなくなるよ。それでもいいの？」

僕はゆっくり頷きました。

「お金は生きていくだけあれば、それ以上は今は必要ないよ。それに、どうやらお金を作る才能は俺にはなさそうだし。それに、コックやってもお金持ちにはなれやしないよ」

「でも、お店持つのが夢じゃなかったの？だから頑張っていたんでしょ？」

「夢はさつき言っただろう。まあ、初めて言ったんだけど。とにかく、俺はやってみるんだ」

僕がそう言つと、彼女は力なく目線を手元に落としました。

「そう。そこまで言うなら、私がどうこう言う問題じゃあないわね。でも、まあ、あんた一人じゃどうにも出来ないと思し、何て言つていいか分からないけど頑張つてね。わたしは力になれないけど、せいぜい仲間でも見つける事ね」

「どうしたらいいかな？」

「知らないわよ。ネットで探してみたら。世の中、同じ事考えてる人がるかもね。たぶんいないと思うけど。まあ、よく考えてみなよ」
彼女の言葉に、僕の頭のコンピューターが反応しました。

確かに、世界中のどこかに同じ考えを持つ人たちがいるかもしれない。おおっぴらに言えないだけで、こっそりと思つてる人もいるはずです。

そんな人でも匿名のネット世界では言葉を発しているかもしれないじゃあないですか！

僕は彼女の両腕をつかみました。

「それはいい！俺、早速調べてみるよ！やっぱりお前に相談してよかったよ。なんか、遠くに出口が見つかったみたいだ。ありがとな！おっ、この払いは任せとけ。お礼だから。すいません、お愛想
願ひします」

僕その言葉に、北村は驚いたように固まりましたが、すぐ腕を振り払って大きく溜息をつきました。
そんな彼女を尻目に、僕の頭の中では、一瞬の火花と共に次の計画が練りあがっていくのでした。

ラブハンドの由来（前書き）

いや分かっているんです。くれぐれも実際に調べたりしないで下さい。悲しい結果になりますので。いや、そっち方面から閃いたわけでは……。

ここまで付き合ってくれた方は分かってもらえると信じています。

ラブハンドの由来

次の日の朝、僕はさっそく家電量販店に行つてデスクトップのパソコンを購入しました。ちょうどサービス期間中で、インターネットへの接続も無料でやってもらえるらしく、それ無しでは僕の計画も始まらないので、大枚叩きました。が迷わず加入申し込みました。何日かしてインターネットの接続の工事もすむと、その日の夜、早速検索エンジンを使って女性の腰肉について調べてみる事にしました。始めは何をどう調べていいか迷いましたが、とりあえず、「女性の腰肉」と打ち込んでクリックしてみました。

すると、検索結果は一万件以上ありましたが、ほとんどが美容関係のようですぐに検索をあきらめました。

落胆しましたが、まあ、予想もしていましたので次のフレーズ「女性の外見」で調べてみると、今度は何件かヒットしました。「女性の外見」というフレーズが乗っているサイトが画面に何件も並べられていて、僕は一番上にあつたサイトをクリックしました。しかし、そのサイトの内容は僕の思っていたのとは違うもので中年女性向けの下着のサイトだったので、すぐに画面を戻し、大体どれも同じ様な女性のコスメに関する事が多かったので、よく吟味したうえで今度は別のサイトをクリックしました。

今度現れたのは、どう見てもアダルトサイトで、個人の女の人が運営しているのか、その人の夜の生活を赤裸々につづつたものが画面に現れました。目を向けると、現実に起きた事とは思えないような信じられないほど赤裸々で、いやらしく、心苦しくなるような、そんな話がかかれていて興味をそそられましたが、今は関係ないので今度にまた見る事にして、次のサイトを開いて見ました。

すると、今度はやはり、男性が運営する男性に向ける、男性のためのサイト、「女性の評価論塾」が出てきました。

これは、男性達が女性の外見に関するありとあらゆる事を討論する

サイトらしく、何やら色々な分野の女性の外見に関するテーマが書かれていました。要するに、男達画自分のフェティズムを遺憾なく発揮して、討論、意見交換、見せびらかす事が出来る場所で、同じ思考の連中が同じブロックで一つのテーマに沿ってチャットしたりする場所でした。

例えば、巨乳好きの人達は「でかパイ論」ブロックでとか、足フェチの人は「足と足」ブロックでとか、二の腕狂いの人達は「2の、二の腕」ブロックの中で、自分の思いを炸裂できるようになっていました。

僕は若干興奮気味になりながら、もつとよく調べてみると、「女性の腰部」ズバリのブロックはありませんでしたが、「桃尻女と、小尻娘」ブロックに並んで「すべてのポツチャリ好きへ」というブロックがあるのを見つけて、すかさずクリックしました。

クリックしてみると、画面が変わり、見るからにポツチャリすぎている娘の写真が前面に出てきました。そして、その下あたりに、「コミュニティ投稿欄」とか、「チャットルーム」とか書かれていたので、とりあえず投稿欄をクリックしてみると、ポツチャリ好き達からの色々な投稿が羅列されて、そして写真付きのそれには様々な事が書かれていました。

世の中には色々な嗜好の人がいるらしく、見るも耐えないようなブヨブヨな体つきの女の子が好きでたまらないという人や、百キロの女の人に押しつぶされたのを自慢する人、今まで付き合った女の子の体重の合計を競っている人達もあり、「すべてのポツチャリ好き」達のあらゆる声がかかっていました。僕は圧倒されて、またメニュー画面に戻りました。

そして、「ヘルプ」をクリックして解説を読んでもみると、どうやらこのサイトでは会員になるとサイトの住人達と直接やり取りも出来る、自由に投稿を載せる事も出来るということでした。ただ、わいせつな写真や表現は載せる事が出来ない決まりになっており、発見され次第、退去処分になるという事でした。

僕は迷う事無く、すぐさま会員登録しました。多少お金が掛かるようでしたが、僕はこのサイトを足がかりにする事にしたのです。にわかに興奮冷めやらなかったのですが、その日はとりあえず登録だけしておいて、登録を済ますと、また検索画面に戻りました。そして現実の世界に引き戻されるかのように、今度はバイトの求人情報を探す事にしました。家にいながら何でも出来るや、と思いながら、僕はマウスを動かすのでした。

何日かして、僕は求人サイトで探したバイトの面接に行きました。とりあえず、家から近いのと、なかなか時給のいい事もあってレンタルビデオショップの店員になる事にしました。料理以外の仕事は初めてだったので面接に少し緊張しましたが、何しろ人手不足らしくその場で採用されてしまい、僕は店員として週末から働く事となりました。やけにあっけなく決まったので、幸先いいなあと思いつながら家路に帰り、部屋につくと早速また「女性の評価論塾」のサイトを開きました。

それまで、投稿欄などを探りながら様子を見ていたのですが、今度はこちらから「ポツチャリ好き」達とコンタクトを取ろうと思い、そのサイトのチャットコーナーに加わる事にしました。

チャット上では、すでに何人かが書き込みをしていて、その中の誰かの出した意見、「若い人の脂肪とある程度年を重ねた脂肪、どちらがいい脂肪であるか？」と言う内容で議論しているようで、大体の人は若い張りのある脂肪の方に軍配を上げているようで、その意見が多く書き込まれていました。

僕はどんどん加わっていく意見を目で追いながら、早く自分も書き込みをしなくてはと思いましたが、僕はその寸前で躊躇してしまいました。

その時、まだ自分のハンドルネームを決めてない事に気が付いたからです。

画面上には、この住人の色々なハンドルネームが溢れていて、もちろん名無しの人もいたのですが、「ドラム缶ねえちゃん」とか「

セルロースハム」とか「脂男爵」とか色々個性溢れるものが多くて、ほとんどはインパクトのあるハンドルネームを持っているようでした。

別に付けなくてもチャットには加わるのですが、それではこの住人に相手にされませんし（実際に、名無しの書き込みは冷やかしがほとんどでした）、自分でもやっぱり盛り上がり欠けてしまっています。

なので、僕も何かこれといった名前を考え出さなくてはとしましたが、瞬時には何も考え出せませんでした。しばらく頭ではハンドルネームを考えて、目では飛び交う意見を追っていたのですが、しだいに頭の中で考えがあふれてしまいそうになったので、僕はいったんパソコンから離れて、冷蔵庫にお茶を取りに行きました。

いったいどんな名前にしたらいいのだろうか？

一言で僕の思いを伝えられるものといったら何だろうか？

今まで考えても見ませんでした。ここで何の変哲の無いハンドルネームにするのは止めたいと思いました。どうせなら格好いい名前にしたいし、何しろ、僕の事を世間の人に分かってもらわなければならぬ。初めの一歩なのです。

ここだけは譲れるものではないと思いつつも、しかし、やはりいい考えは浮かんできません。

僕は少しずつ苛立ちを感じながら、ペットボトルに入った冷たい緑茶を喉に流し込みました。

名前と言うのは僕を一言で表すでしょうし、自分で決めるのなら尚更です。

「ドラム缶ねえちゃん」なら、その人の好みはハンドルネームを見るだけで分かってしまうし、実際、この人はそのような女性が好きようでした。この人が送ってくる投稿には立派なドラム缶ねえちゃん達が多くいたからです。

僕としても、これが小田切武士の好みの体型だっというのを、皆に知らしめたいのです。

でも、その日は特に思いつくこともなく、ベットの上で考えているうちに眠ってしまいました。

次の日も、僕の頭の中はハンドルネームをどうするかで一杯で、部屋の中を真っ暗にしながらパソコンの画面を見つめながらも、いいフレーズがないかしきりに考えていました。「女性の評価論塾」だけじゃなくて、他のサイトも見ながら、いいアイデアがないか探していました。ただ、かなりの数を検索してみましたが、これだというアイデアを僕に与えてくれるものはなく、分かった事と言えば、あそこまでポツチャリした女性の事を議論しているのは「女性の評価論塾」だけだと言う事位でした。

まあ、僕が調べた限りではありませんが。

他にも、「男の評価論塾」と言うサイトもありまして、そこでは女性達の熱い意見が飛び交っているのは確認したのですが、内容までは見る気になれませんでした。

僕は一つ溜息を吐きながら、テレビのスイッチをつけました。それまで、パソコンの画面だけしか見ていなかったため、一息入れようと思ったのです。テレビ画面の右上に、もうその日の残り時間が六時間ほどだと言う事が現れていて、自分が一日中パソコンと向き合っていた事を何気なく思い知らされました。

思えばご飯も食べてはいません。

僕はテレビを消し、玄関のドアを開けて、近くのスーパーまで夕食を買い出しに行く事にしました。

アパートの階段を下りてみると、ちょうど正面に赤く夕日が浮かんでいて、そのオレンジの光がまっすぐ僕の目の奥を貫きます。それが、暗がりになっていた僕の脳味噌をいきなり刺激してきたので、僕は一つくしゃみをしてしまいました。おかげで、僕の頭の中のものもやかも吹き飛んでいったようなのですが、奥底にある黒々とした重石は取れないでいました。

まあ仕方ないや！とスーパーに歩いて行こうとすると、いきなり後ろから声がしてきました。

「ラブ！ヘアンドウ！ラブ！ヘアンドウ！」

僕はビツクリして後ろを振り返りました。

すると、そこには一人のおじさんと、一匹の黒い犬がいました。すぐにそのおじさんはアパートの隣に住む大家さんで、黒い犬は最近見かけるようになった大家さんの愛犬だと分かりました。

大家さんはしゃがんで自分の犬と同じ目の高さで、何かをしようとしていました。

犬の片足を、自分の手にもってじっと犬の方を見えています。

犬はと言うと、きよるきよるしながら、たまに僕の方を見たかと思うと、ぜんぜん反対の方を見たりして落ち着かない様子でした。

大家さんはこの犬に何とか自分の方を向かせようとしていて、目が合ったらまた声を上げていました。

「ラブ！ヘアンドウ！聞いているのか？ラブ！」

毛並みもよくて、利口そうな目をくりくりさせているその犬は、口から血色のよいピンク色の舌を出して、長くてふさふさの尻尾を無邪気に左に右に振っています。

しかし、大家さんの言葉は理解していないようでした。

飼い主の大家さんは大きいため息を吐くと、ポケットの中からスティック状の犬のおやつを一本取り出して、その黒い犬に与えました。

犬のラブちゃんは一瞬でそのおやつを食べてしまうと、またもや舌を出しながら尻尾を振って、大家さんの顔を見上げます。

すかさず大家さんはしゃがんで、犬の前に自分の手のひらを出し、

「ラブ！ヘアンドウ！ラブ！ハンド！」

と、そこら中に響く位の声を出しました。すると、犬のラブちゃんは、ゆっくりとその黒い毛に覆われた前足を上げて、大家さんの掌に乗せました。

それを見た瞬間、大家さんの顔に満弁の笑みが浮かび、犬とつないだ手を上下に振りました。

「やれば出来るじゃないか」

大家さんは大はしゃぎでそう言いながら犬の首の辺りを搔くと、犬も嬉しそうにその手に身をゆだねていました。そして、ポケットから取り出されたおやつをむさぼっていました。

僕はそれを見ながら、ほのぼのとした心地になって、またスーパーの方に足を向けました。

黒い毛のあの犬は、僕の好きな犬種のラブラドルレトリバーで、時々僕にも懐いてきてくれました。僕が首の辺りを書いてやると、機嫌がいい時はお腹を見せて横になったりしてくれていました。その時分かったのはどうやらこの犬はメスだと言う事で、顔は男っぽいのに僕らのような一物がついてないなあ、と思ったものでした。しかし、大家さんのあのハンドの発音は、日本育ちの彼女の耳には聞き取りづらかっただろうなあ。ラブちゃんにお手を教えるのに、大家さんは外国のトレーニングビデオでも見たのかなあ？と思いつながら、僕は商店街のアーケードを通りがかりました。

上を見上げると、空は暗くなりかけていて、Ｔシャツに突っかけ姿の僕を、きらびやかだけど寂しげな電灯の明かりが照らしていました。

商店街には買い物をしている主婦達が自転車に乗って往来していて、ゆっくり歩く僕を尻目に、急ぎ足で駆け抜けていきます。すれ違わずに後ろにしがみつくように乗っている小さい子供と目が合いますが、それもつかの間、彼女達はすぐに遠くに離れていき、人ごみに紛れた僕は、ご飯時でにわかな盛り上がりを見せる店先を覗きながら、お目当てのスーパーにたどり着きました。

店に入ってまず一番最初にある野菜コーナーや鮮魚コーナーは早足で駆け抜け、迷わずお惣菜コーナーに行きます。お目当てはお弁当なのです。料理人だったとはいえ、家で自分で何かを作る気にはなれないでいたので、最近はおつぱらこのスーパーのお弁当ばかりです。僕は手ごろなお弁当と飲み物を買って、スーパーを出てアパートに向かっていきました。

そして、アパートに通じる道に差し掛かると、遠くであるラブちゃ

んと、今度は若い女の人がいるのが目に飛び込んできました。アパートに近づくに連れて、女性の高い声はつきりと聞こえてきました。

「ラブ！パパにはしてくれないのに、どうして私にはしてくれないの？さあ、いくよ。ラブ、ハンド！ラブ！ハンド！」

しかし、犬のラブは笑ったように舌を出しながら無反応です。すると、困ったような顔をしながら、彼女はしゃがんでラブちゃんの頭をぶるぶる揺らしました。僕は入り口に差し掛かると、後ろから彼女を見ました。彼女は大家さんの娘で、僕の一つ上の階に住んでいるようにたまに見かけました。年は僕より少し上だと思えますが、顔は大家さん似のブルドック顔の人でした。しゃべった事はなくて、そこまで興味も無かったのですが、このときは目を惹かれてしまいました。

どうしてかと言うと、しゃがんだ彼女のＴシャツが捲れ、ジーンズの上にぷっくりとはみ出た腰のお肉が可愛らしく顔を覗かせていたのです。

まさに、僕が好きな腰のお肉の形をしていました。

僕は思わず立ち止まってしまい、その部分だけを凝視していると、犬が僕に向かって一つほえてきました。

慌てて顔を伏せ軽く会釈すると、彼女も同じように返してきたようでした。去り際にその顔を見てみると、こめかみに汗をたらしていて、お手にかなりてこずっているようでした。ブルドック顔だけにあんないい腰肉があるんだなあ、と思いながら階段を上ろうとすると、外から彼女の声はまた響いてきました。

「ラブ！ハンド！ラブ！ハンド！」

と、甲高い声が聞こえてきます。いつになったらラブちゃんはハンドを覚える事やらと思つて二階にさしかかった時、いつぞやと同じ様な電流が体を貫き、僕の頭のコンピューターにスイッチが入りました。そして、その衝撃で体の筋肉が毛羽立って、僕は階段の途中で立ち止まってしまいました。

「ラブとハンド」

要するに、「愛と手」

「愛のある手」

「愛のあるものをつまむ手」

「愛のあるものを手がつまむ」

「愛のあるものが手でつまむところ！」

その場所とは腰の肉、すなわち腰の肉とは「ラブハンド」

「腰の肉の部分＝ラブ・ハンド！」

僕の頭の中で、言葉が間欠泉のように噴出してきて、頭の中を飛び回り、そして、一本の糸に繋がってゆきました。

そうだ！腰の肉は「ラブ・ハンド」なんだ！

肉のつまみ具合、ここに対する敬愛を表現すること、そして、そのかわいいネーミングといい腰肉に対する愛称としてぴったりではありませんか。

そして、これと同時に、それまでの僕の悩みも解決する事となりました。

僕は使うハンドルネームはこれ以外にはありません。

「ラブハンド」

そう、この時、僕はこの「ラブ・ハンド」という言葉を思いついてしまったのです。

買ってきた弁当は台所に置いたままにして、早速パソコンの前に座り、「女性の評価論塾」にアクセスしました。そして、「すべてのぽっちゃり好きへ」を開き、チャットコーナーにカーソルを合わせてクリックしました。

ありえない(前書き)

ここら辺は読み飛ばしてもかまわんですたい。

ただ、これからが面白くなってくんです。よろしくですー！

ありえない

チャット上では、「足フェチと肉フェチ、どちらが女性にとって有益か？」という議論をしていて、僕は早速書き込んでみることにしました。

ラブ・ハンド：「はじめまして。ラブハンドといます。僕は肉フェチのに軍配を上げます。何しろ、女性はそうじゃなきゃ魅力がないじゃあないですか！」

脂肪男爵：「おっ、新入りはこっち派らしいぞ。いいぞう！」

脂肪遊戯：「やっぱり、ポツチャリの方がいいって事だよな。うん」
足首命：「何いってんだよ。こちらら、三十年も足ばっか追いかけてんだ。太い大根足にのさばられたくないっていうの！」

ドラム缶ねえちゃん：「大根足の何が悪いってんだ。馬鹿野郎」

足首命：「豚好きの気違いやろうめ！ドラム缶なんて廃棄処分にしちゃまえ！」

ドラム缶ねえちゃん：「大体『足首命』ってセンス悪いよな。何世代前って感じだよ」

フット猿：「君達は何を言おうと、いい足の持ち主は、いい女って昔から決まってるんだよ。どこの本にぶくぶくたるんだお腹の持ち主がいい女だって書いてあるんだよ」

足首命：「そうだ！そうだ！」

ラブ・ハンド：「いいお腹の持ち主は、いい女ばかりですよ！知らないだけなんだ！」

脂肪男爵：「いいぞ！いったれ！」

ラブ・ハンド：「確かに、いい足を持った女の子はいいもん持っていると思います。しかし、いいお腹をしてなくてはそれもまったく意味がない。要するに宝の持ち腐れなんだ」

ドラム缶ねえちゃん：「足はなくとも、それはそれでいいぞ」

フット猿：「足だけ綺麗ならそれで良くない？余計なものはいらないと思うけど」

ラブ・ハンド：「足だけで余計なもの入らない？何にもわかってないよこの猿は！体の美しさは体幹で決まるんだよ。お腹はその中心でしょうが。それなくして、足も手も顔もつながっていかないんだ」

フット猿：「何だと！何だお前はいきなり割り込んできて」

足首命：「たしかに、うざいな、こいつ」
脂肪遊戯：「確かに。お腹より二重あごだろう。うん。大体、ラブハンドって何？」

脂肪男爵：「そうだよ。ラブハンドなんて聞いたことないけど」

ドラム缶ねえちゃん：「確かに、初めての書き込みにしては度が過ぎてる気はする、ky？」

足首命：「昔からいるメンバーだぞ、俺達は！」

ラブ・ハンド：「ラブハンドっていうのは、腰の肉を意味しているんだ」

フット猿：「腰の肉？ぜんぜん意味わからない？馬鹿？」

脂肪遊戯：「確かにわからん。うん」

ラブ・ハンド：「だから、腰肉を持つと気持ちがいいだろう？その感じを一言で表したらこうなるの！」

ドラム缶ねえちゃん：「確かに腰の肉は持つと気持ちのいいものだが、それがどうしてラ

ブ・ハンドになるのか不思議だ。まあ、俺は太ももの肉も決の肉も好きだけどな

足首命：「ドラム缶狂いが！」

ドラム缶ねえちゃん：「ほめ言葉？」

フット猿：「大体、肉好きは独逸もこいつも頭がいかれてるんだよな。それに比べて、足好きはスマートって言うかクールっていうか」

ラブ・ハンド：「ラブハンドを好きになって何が悪いってんだ！」

脂肪遊戯：「落ち着くんだな。うん」

脂肪男爵：「なんか熱いね、新入りは」

フット猿：「やっぱ肉は暑苦しいや」

ラブ・ハンド：「お前に俺のラブハンドに掛ける情熱をわかってたまるか！」

ドラム缶ねえちゃん：「お肉を愛する気持ちはわからんでもないな」

足首命：「ドラム好きがまた増えたな」

ラブ・ハンド：「僕は別にドラムは好きじゃないって。あくまで、ラブハンドが好きなの。」

ドラムだとイメージが違うんだよな」

ドラム缶ねえちゃん：「馬鹿にしてんのか？ドラムを馬鹿にしてんのか？」

フット猿：「仲間割れか？腹は三段に分かれちゃうってか？」

脂肪遊戯：「ラブハンドってやっぱり意味がわからんね。うん」

ラブ・ハンド：「だから、健康的な腰の肉だっっていつてるでしょうが。想像してみればわかるでしょう？」

足首命：「想像したくないなあ、そんなの」

フット猿：「俺も」

ドラム缶ねえちゃん：「俺も」

脂肪男爵：「なんか話がずれてきたな。しらげちゃった。俺もう現実に戻るわ。アディオス」

脂肪遊戯：「まあ、そんなに熱くなられてもな。うん。俺もバイバイ」

足首命：「新入りがでしゃばるから悪いんだ」

ラブ・ハンド：「……………」

フット猿：「かき乱しといてからに。俺も肉には付き合い切れんわ。さらば！」

足首命：「ご飯食べてきます」

ドラム缶ねえちゃん：「今度ドラムを馬鹿にしたら許さんぞ。では

ドラム缶修行に行つてきます」

僕はこのやり取りに頭にきながらも、疲れてきてしまったので、ベ

ツトにへたり込みました。そして、初めてやってみたチャットに幾分落胆してしまいました。

もっと、自分の意見に賛同してくれる人がいるかと思って、理解者を獲られるかと思っただのに、これではまるで逆の方向に進みそうです。どうやら、ポツチャリ好きの人にも嫌われてしまったようですし、「ラブハンド」も受け入れられてはいないようでした。

なにやら前途多難な幕開けに、ご飯を食べる僕の喉はうまく物を通そうとしなくて、暗くなった部屋が僕の気持ちを落ち込ませていくのでした。

次の日の朝、自転車に乗ってバイト先に出勤しました。

かなり天気がよくて、新しい仕事に就くには気持ちのいい空気の中を駆け抜けながら出勤すると、すでに来ていた店長のおじさんとバイトの女の子に案内されるままに店の奥に連れられていかれました。控え室に着くと店長に渡された制服に袖を通して、早速仕事に取り掛かることになりました。

レンタルビデオ店の仕事はまるで経験した事の無い事ばかりで、覚える事も沢山あって徐々に緊張してしまいました。なので、真剣に店長さんの言うことを聞きながら動いていたので、昨日のチャットの事なんか頭には浮かぶこともなく、あれやこれやと仕事を教えてもらううちに僕のコンビにバイト初日は終わってしまいました。

まあ、慣れない事をして新しい人と働くとか疲れするもので、部屋に帰るとぐったりしてベットのの上に飛び込みました。その日はまったくパソコンなんかにも目もくれないでいましたが、横になりながら天井の木目を眺めていると、自然とチャットでの事が頭によぎります。さすがにあのサイトを開こうなんて気にはならないのですが、パソコンの画面に出てきた自分を批判するような皆からの書き込みが頭に浮かんでくると、納得のいかない気持ちが出てきて、僕のピユアなところが焦げだしてきます。

まあ、初めてだからあんなもんか、とも思うのですが、すごく悔しくなってしまうのです。今度は何とか皆に理解してもらおうと思っ

ているうちに、いつの間にか僕は眠ってしまうのでした。

次の日、遅刻すれすれで仕事場に飛びこみ、朝の九時から店長にいろいろ指示を受けながら、レジうちや棚の入れ替えなどしていたのですが、その日は、あまりお客が来なかった事もあってかかなり暇をもてあましていました。

店に着てから二時間もしていないうちに、僕はレジの前で立ち尽くしていることとなってしまい、調理場にいたときとはまったく違う時間の流れ方に戸惑ってしまいました。

まあ、仕事の分野が違うので仕方ない事なのですが、やる事がないような時間が流れてしまうと頭の中でまったく別なことが浮かんでくるもので、まあ、気になっていいる事と言うか、僕の場合はチャットでのやり取りが頭に浮かんでくることになりました。

やっぱり、あの失敗は、僕がいきなり話に加わっていったから話がこじれてしまったんだと、今になって思えてきました。

急に熱いものを飲み込もうとしたら口も喉も受けは容れる事は出来ないというもので、相手がびっくりしてあんな態度を取るのも無理はありません。

要するに、こちらから行くのではなく、相手がこちらを受け入れるのを待つ方がいいのかもしれませんが。

チャットだと感情もこもってしまって、いらぬ事を書き込んでしまふし、何しろ相手の好みもばらばらなところに自分の好みを押し付けてもうまくいきっこないものです。

こちらからアプローチしてみても、僕の好みを分かってくれる人と話してみたら道が開けるかもしれませんが、そうすれば、あんなに色々言われて悔しい気持ちになる事は無いのですから。

よし！今日帰ったら「女性の評価論塾」の投稿欄に僕の投稿を乗せてみよう！

投稿してみたら、興味を持った人からなんか反応があるかもしれない。

そう思うと、なんか気が晴れたような感じになってきます。

「よし！」

いきなり僕が気合を入れたものだから、レジの近くにいた店長がびっくりしてこちらを見てきました。その時、ちょうど僕の教育係の先輩がトイレに行っていたのが幸いでしたが、店長がこちらに来て何か言ってくるやっかいなので、レジの周りをハンドモップなんかで掃除したり、電子レンジの中なんかを吹くしぐさをしてやり過ぎました。

横目で店長を伺うと、特にこちらに来る様子がないのでほっとしていると、急にお客さんが入ってくるようになって、ちょうど戻ってきた先輩と僕はその対応に追われることとなりました。

やっと、仕事が終わってバイト先から自転車で家に帰る道すがら、僕は投稿する内容を考えていました。まあ、写真なんかがある訳じゃないし、何かを自慢したいわけじゃないのでシンプルにいいことは思っていて、大体的内容はすぐに浮かんできました。

アパートに着くと、隣の大家さんの家から顔を出しているラブちゃんを横目で見ると、彼女は大きな欠伸をしながら日向ぼっこしているようでした。

部屋に入るとすぐにパソコンの電源を入れて、「女性の評価論塾」にアクセスしました。

そして、コミュニティ投稿欄のページを開いて、早速僕の投稿を書くことにしました。

ラブ・ハンド：「僕は二十代の男なのですが、僕の女性の好みについて皆さんに意見を求めたくて、ここで書き込みをしています。僕の女性の好みというのは、主に腰の肉の部分なのですが、（これを僕は「ラブ・ハンド」と呼んでいるので、以下「ラブ・ハンド」と書きます）僕は女性のその部分を幼いころから求めてきました。回りの人たちからはあまり受け入れられないのですが、僕と同じ好みの人が世の中に入っているのではないかと思ったのでここで皆さんの意見

を聞きたいと思ったのです。同じ好みの人がもしいるなら、ここに意見を寄せてください。「ラブ・ハンド」について熱く語り合いましょう。」

そう書き込んで、僕は送信しました。返事は三日ごとの集計なので、三日後には誰かしらから意見が書き込まれるはずです。

まあ、サイトの中を見回しても色々な意見があるので、誰か一人くらいは同じ意見の人が現れるだろうと思いつつ、僕は冷蔵庫から冷たい緑茶を取り出して、一人にのみりしていました。

それから三日間は投稿の返事を期待しながら、せつせとバイトに励んでいました。

三日もすれば仕事の大まかな流れもつかめてきますし、一緒に働く人達の事も見えてきて、それなりに僕は溶け込んでいきました。

大体同じくらいの年の人が、少し若い人達がバイト先にはいて、一番先輩でも僕より一

二つ歳上のミュージシャン志望の男でした。

僕のシフトは朝から夕方までなのですが、一緒に組む人は大体決まっています、店長がミュージシャン志望の先輩と、もう一人少し先に入った女の子と一緒に働いていました。店長には、僕がかなりの頻度でバイトに出て来てくれる事もあってかよくしてもらえましたし、女の子もなかなか性格のいいおとなしい人で僕もやりやすかったのですが、ミュージシャン志望の先輩は一癖も二癖もあってなんとなくとっつきにくい感じでした。

いかにも、音楽やってるぞ的な感じで、しかも僕のあまり興味のない音楽を好きでやっているらしく、話は全くと言っていいほどかみ合いませんでした。

その先輩は「上鎌倉」という苗字なのですが、名札には「ケルベロス」とマジックで書いてあって、皆にもそう呼ばせていました。彼は舌に大きなシルバーのリングピアスをしていて、他にも働いている時は外しているのですが、バイトが終わって帰る時には耳が埋め

尽くされるくらいのピアスの輪をしてるような人でした。

ケルベロスさんに悪気はないのでしようが、肩まで伸びた艶の無い髪の毛を振り乱して、どんよりしてさえない目で見られると、なんかあまり気分のいいものじゃあなくて、しかも僕が仕事を覚えだしてくると、だんだん働かなくなる始末です。

でも、店長はなんか気に入ってるらしくて、いつも二人で仲良く話したりしていて、話の勢いがあつて大げさな人なので退屈する様な事はありませんでした。

そして何より、何故か僕の事を気に入ってくれているみたいで、まあたいていは自分の音楽論なのですが、いつも話しかけてきてくれたくれました。僕が何も言わずに話を聞いているのが気分がいいのだと思うのですが、それ以外は嫌な事をしてきたり、へんに偉ぶらないので、ケルベロスさんということもなれてはいきました。

まあ、しかし、僕の事を「ヘンドリックス」とあだ名してきた事にはまいりましたが……。彼が呼び続けていくうちに、店長を始め皆が「ヘンドリックス」なんて呼び出してしまったのは何とも言えず、僕が本当にギターを弾けると言う事はこの人には内緒にしておこうと固く誓ったのは言うまでもありません。

とは言え、バイト先は順調な滑り出しなので、サイトの方の返事もいい答えが返ってくるという思いながら、僕は待っていたのです。

しかし、僕の投稿に対する返事を見た瞬間、そううまくはいかないもんだと思い知らされてしまいました。

うーん、我慢、我慢（前書き）

この辺はまったくふりなんです。

よろしく願いします！

うーん、我慢、我慢

サイトを開いて自分の投稿欄を見ると、かなりの数の返事が来ていたので、否が応でも期待が膨らんできてすかさずクリックしました。すると、画面上に投稿に対する返事が羅列されたのですが、その内容はというとまあ、僕の想像とは違うものばかりでした。初めに来た返事からしてひどいもので、送り主はあの「ドラム缶ねえちゃん」でした。

ドラム缶ねえちゃん：「この投稿をしてきてお前は、ハンドルネームからしてこの前俺らの話に割り込んできたやつだろう。また、俺らの世界を乱しに来たのか！退散せい！二度と現れるな！」

これは、僕が投稿して一時間もしないうちに送られてきていました。つぎもドラム缶ねえちゃんからでした。

ドラム缶ねえちゃん：「俺は決意した。お前は追放処分だ！今俺が決めた。みんなにも呼びかけたいからな！」

脂肪男爵：「お前はこの世界に入ってくるな！」

脂肪遊戯：「お前はウザイ！お前は*****だ！おまえは*****だ！」

フット猿：「大体『ラブハンド』ってのが気に入らない！フェチの世界が穢れる！」

ドラム缶ねえちゃん：「消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！消えろ！黄色？消えろ！消えろ！この世界から消えてくれ！」

足首命：「まあ、あれだな。早いとこ投稿を取り消していなくなつたほうが君のためだな。そして、このサイトに二度と足を踏み入れないことだ。この、うんこが！」

くびれの人：「なんか知らんが、お前が悪い！出て行くんだ！」

プニッキ　：「君はここにはいられない。早いとこ出て行くことをお勧めするよう。」

足っこブラザーズ：「*****！*****めが！*****
*****の*****」

そこまで見て、僕は画面から目をそらしました。

まだまだ返事が何通もあるようですが、とてもそれ以上読む気にはなれません。どうやらこの住人には、相当嫌われてしまったようですし、反論を試みても不毛な争いになりそうな予感です。

正直、こんなにこのサイトの住人が閉鎖的だとは思ってもいませんでした。

少しくらい受け入れてくれる人が現れるかと思っていた僕の甘い期待は、十日もしないうちにすっかり打ち砕かれ、またしても世間に受け入れられない僕の好みを、恨めしく思ってしまうのでした。

それからというものの、僕はなんかやりきれなくなっていました、目の奥が濁る様な脱力の日々が続きました。

働かなくてはならないのでバイトには出ていたのですが、いつも気の抜けた上の空状態だったので、何回となく失敗をしてお客に怒られることもありましたが、バイトが休みの日も家にいるだけで、あれ以来パソコンにも向かわず、他に何かをしようとも思えませんでした。

でも、こんな自分に嫌気がさして、どうにかして気分転換をして気分を紛らわそうにも、何をしてもいいか思いつかないでいました。あまりの孤独感から来る寂しさを押さえられずに、あの北村に電話しようとも思いましたが（携帯電話の履歴を何度も見返しましたが）、あれだけ言ったのにすぐ弱音を吐くのも格好悪い、それだけは何とか我慢しました。

こんな時に、世のオジサン達は女の子のいるお店に呑みに出かけるんだらうな、何て思っただけで繁華街のそんなお店の近くまで行くので

すが、それまでそんな場所とは縁のなかつた（浮かびもしなかつたんです、なにぶん田舎者で）僕は店に入る事もしないまま寂しさを背負つたまま、コンビニで買ってきた発泡酒を開けるしかありませんでした。

一人で酒なんか部屋で飲んできると、否応無しに自分が孤立している現実を突きつけられてきてしまい、少し酔つ払ってはベランダに出て、暗くなった空を見ながら叫びだしたくなる衝動をあと少しの所で抑えては、部屋に戻ってベットに横になりました。

そして、天井を見ながらいずれ自分の考えが広まって、そこらじゅうで「ラブ・ハンド」が溢れている光景を思い浮かべながら、知らない間に寝てしまつたのでした。

そんな僕の気持ちを察してか否か、あのケルベロス先輩が声をかけてきました。バイトが終わって、近くにあるコンビニに二人で寄つた時の事です。

「ヘンドリックスさあ、今度の土曜にさ、俺らのバンドがライブすんだけど、お前、来ない？まあ、いろいろなバンドがいるから飽きないと思うしよ、まあ大半は俺らのファン？何だからさ！スゲー盛り上がると思うのよ。チケット安くしとくからさ、来いよ」

彼はそう言いながらB4サイズの薄っぺらい紙に印刷されたパンフレットを、僕に差し出してきました。ケルベロスさんがそんな事言つて来たのは初めてだつたし、急にだつたんで少しびっくりしたのと、ケルベロスさんのバンドがどんなんだか大体想像付いていた僕は、最初は乗り気がしませんでした。パンフレットを見る限りでは結構大きなイベントのようでしたが、先輩が持っている、いかがわしさが倍増して見えます。

僕が困つたような顔をしていたのを察したのでしょうか、ケルベロスさんは僕の首にシルバーのとげとげしいプレスレットをした手を回してきて、こう言ってきました。

「ヘンドリックスさあ、なんか最近元気ないしき、帰るときいつも酒買って帰るじゃん。俺様はそういうのすぐに気付いちまうのよ。」

お前、どうせ彼女がいるわけじゃなし、時間もてあましてんだろ？
おう？」

そう言われて、僕は小さく頷きました。

「ヘンドリックスさあ、そういう時は音楽つきやないぜ。しょうがない、お前は俺の後輩だから、半額の三千円に負けておいてやる」
僕はパンフレットを見て、先輩の顔をまじまじと見ました。

「わかったよ。知ってる。もともと三千円だよな。冗談だよ。よし、二千円でチケット売ってやるよ。安いだろう、何せ俺らのバンドが聞けるんだから」

「はあ」

「おお、そくだそくだ。何せ俺らのバンドのファンなんだから、そりゃあ、可愛い子がスゲーくるぞ。この前なんか盛り上がりすぎて上脱いでた奴もいたっけなあ。お前も家帰ってマス搔くより、俺らのライブ行ったほうがいいんじゃないかねえの。よし、お前は後輩だから、千五百円に負けといてやるから」

そう言うとケルベロスさんは、ピアスをジャラジャラさせながら僕の耳の辺りにやりとしました。

可愛い子が上半身をさらけ出すとか、本当にこの人のバンドにファンがいるのを見てみたいとかは別にして、まあ、何もしないよりはいいかと思ったので、僕はチケットを買う事にしました。僕が納得したように財布を開くと、ケルベロスさんは黒皮のジャケットのポケットから、チケットの束を取り出して、一枚ちぎってくれました。
「そくだ、ヘンドリックス。二枚買って、友達つれて来いよ。お前、ホントは彼女とかいるんだろ。ああん。絶対盛り上がるからさ。三枚でもいいぞ」

僕は苦笑いしながら、ケルベロスさんに千五百円を渡してチケットとパンフレットを受け取ると、さらに売り込んでくる彼を引き連れながら、コンビ二を後にしました。

別れる間に、先輩がつかい声で「土曜の夜だぞ！」って言うてくるのを背に受けながら、僕は自転車を漕ぎ出しました。

土曜日の夜はすぐにやってきて、その日のバイトが終わると、僕はパンフレットに書いてあったライブハウスに向かいました。

なんか、結構大きなライブハウスらしくて、ケルベロスさんが言うにはここでライブを成功させたバンドはメジャーになっていくんだという事でしたが、僕にはこのライブハウス自体がよく分かりませんでした。パンフレットを見てももちろんメジャーなバンドなんて見当たりませんでした。ケルベロスさんが言うには結構そこら辺では人気のあるバンドも入っていて（彼は自分達のバンドが一番人気があると、まず前置きしていましたが）結構客が集まるはずとの事でした。彼らのバンドは、二番目の出演で七時からでしたが、ライブ自体は六時から受付だったので、せっかくだから僕は始めから見る事にしました。

まあ、暇のなせる業とでも言いましょうか。

最寄の駅に着いて時計を見ると五時五十五分位で、僕はケルベロスさんに書いてもらった分かりづらい地図を見ながらライブハウスを目指しました。

彼が言うには五分で着くとの事でしたが、あまりにも解り辛い地図だったので、だいぶ迷って歩き回った末に、やっと目的のライブハウスにすることができました。

そのライブハウスは、駅の中心地にある飲み屋街や、風俗街を抜けて少し暗くなった通りに入って、さらに脇道を少し下って行った所にあつて、わき道に入るとすぐにそれらしき明かりに若者達がたむろしていたので、そこがライブハウスだとはすぐに分かりました。結構危険な臭いがする場所の中だったので少し警戒しながら時計を見ると、もう十五分は超えています。僕はへんてこな地図を書いた大森さんを恨みながらも、先に来ていた人達に紛れながらライブハウスのドアを開けました。

ドアを開けてライブハウスの中に入ると、すぐに激しいサウンドのBGMが耳を捉え、ドアのそばからステージまでかなりの人がいるのが目に飛び込んできました。思ってたよりも大きな所で、上を

見上げるとステージを取り囲むように二階席があり、狭い場所に小さなテーブルと椅子があつたりして、そこにもすでに人が座っていました。

ステージに向けられた照明以外は大きく明かりも無く、ドアに近い所はかなり暗かつたのですが、壁の周りに人がかなりいるのは見えました。それに、フロアーにも結構な人がいて、それぞれに同じ様なファッションをした人の塊がいくつも出来ていました。

僕は入つてすぐにいたチケット係の女の子にチケットを渡すと、ドリンク券をもらつてバーカウンターに向かいました。バーに行くまでにケルベロスさんの言葉通りの、肌を露出している若い女の子が何人も目に飛び込んできて、中にはかなり際どい服装の子もいたので、僕の中で彼の言葉の信憑性が少し上がりました。

そんな女の子達に目を奪われながら、タトウとピアスだらけの男や、まるでこの場所に似つかわしくない普通のオジサンの間を掻き分けるようにしてバーテンダーの近くまでいくと、チケットを渡してシャンディガフを頼みました。

髪を後ろで結んだバーテンダーは無表情に僕の注文を受けると、慣れた手つきでサーバーを操り、すでに封が開けてあつたジンジャーエールのボトルを手にとつて、プラスチックのコップに注ぎました。それを受け取り、フロアーのほうを向きながら一口飲むと、冷たいシャンディガフが喉を通つて、空っぽの胃袋に染み込んできます。

飲みながら、暗さになれてきた目で周りを見回すと、ここに来ている人達の様子がくまなく見渡せて、雰囲気伝わってきました。まあ、統一感はなくバラバラな感じなのですが、大方かなり若い人達ばかりで、女の子が大半のようでした。見た感じ女の子達はきつとひとつのバンドのファンのようでした。皆同じ様な格好をしていたからです。まあ、可愛い子もいればそうでない子もいて（大半は化粧や被り物をしてよく顔が見えませんでした）何やら楽しそうにおしゃべりをしているようでした。もちろん、男も沢山いて、これまた同じ様なファッションと言うか、明らかにケルベロス寄りの

グループがいたかと思うと、普通の大学生や、何人かのサラリーマン風のおじさん、それに若いカップルもいれば僕みたいに位置づけが難しい一人できている男もいました。

僕は彼ら、彼女らのその様子に興味を抱きながら、軽いアルコールの口に含んでいました。

すると、突然誰かが肩を叩いてきました。振り向くと、見知らぬ人がいました。

「おお、来てくれたかヘンドリックス。おお、もう飲んでるな。いいねえ」

声ですぐにケルベロスさんだとわかりました。しかし、それ以外はまるで見違えるようで、普段なら肩まで垂れ下った髪の毛がびっしりと固められて天高く伸びていましたし、化粧なんかもして目目の周りに塗りたいくらいアイシャドウがパンダみたいになっていて、唇も真っ赤でした。それに、いつもより派手にピアスをぶら下げている上、いつもみたいに破れた汚らしいジーンズじゃなくて黒いてかてかしたコスチュームをまとって、白くて細い足にはブーツを履いていました。

さすがに普段コンビニでいるより気合が入っている感じで、少しバンドをやっている雰囲気を感じました。

それに、彼のテンションもいつもよりさらに上がってるようで、声のトーンも違いました。

「俺ら、次の次だかな。始まつたらお前、最前列に来いよ。俺はベースだからすぐわかるって。おお、あれ見ろよ。俺のファンだけいいだろ」

かなり派手な格好をした色黒な女の子を首を振って示しながら、彼はニヤつきました。僕が目を凝らすと、太い太もを動かしたらすぐにパンツが見えそうなくらい短いスカートをはいている彼女が、同じようなファッションをした友達と喋っているのが分かりました。ただ、彼女達はここにケルベロスさんがいることを知らないのか、ずっと喋っているようでした。

「俺、そろそろ行くわ。このドリンク券やるよ。二枚もあればいいか。じゃあ、始まつたら盛り上げよろしくな。じゃあ！」
そういつて彼は券を僕の手にもねじ込むと、お礼を言うまもなくステージの近くのドアに入っていきました。
ステージを見ると、もう始めのバンドが出てきていて、音を調整していて、ボーカルの男の子がスタンドマイクの前に立って挨拶し始めました。

シャツにジーンズ姿の四人組で、大学生のような高校生のようない顔をしていて、前座ということもあつてかなり緊張してるようでした。何でも、トリを勤める「サンダ フラワー」の後輩らしくて、それでこのステージに出させてもらえたよう事を喋っていたのですが、「サンダ フラワー」の名前が出た途端、フロアーにいた女の子たちの何人かが歓声を上げました。どうやら、彼女達のお目当てはそのバンドらしいのが分かりました。

緊張気味のボーカルが挨拶を終え、他のメンバーの準備が終わると彼らの演奏が始まりました。少し前にはやったバンドのコピー曲でしたが、ボーカルの声があまりに才能に乏しすぎて聞いていて可哀想になってきました。ギターはがんばっているのは伝わりますが、なんともいえず、ドラムにいたつては明らかにリズムが違っていました。まあ、ベースはそこそこやっていたのですが、全体のまとまりは気の毒になるくらいなくて、見た感じボーカルの彼も爽やかでいいのですが、どうも女の子達には伝わらないらしく、フロアーの前はがら空き状態でした。

でも、彼らはそれから三曲演奏して、最後に大汗を書きながらボーカルの男の子が「以上です」と言うと、まばらな拍手の中ステージの裏まで引き上げていきました。

僕はほぼ空になったシャンディーガフを飲み干して、次の飲み物を頼みにバーカウンターに向かいました。

次はケルベロスさんの番なのですが、とても最前列に出ようなんて気にはなれないのですが、このまま盛り上がりの無いのも何なの

でとにかく酔っ払っちゃえと思い、少し強めのお酒を頼みました。

僕が「何か強いやつ」とさっきのバーテンに言うと、そのバーテンはさっきと同じように無表情でジンを取り出し、それを注ぎながら僕の顔を伺ってきたので僕が頷くと、彼はウインクしてコップの三分の一くらいまでジンを注ぎ、それからジンジャーエールを入れてくれました。

それを飲んでみるとかなり強くて、ほとんどジンの味しかない位でしたが、僕はそのバーテンに手を振ってフロアーに戻っていきました。

ステージにはケルベロスさんのバンドがすでに出てきていて、それぞれに楽器をいじくっていました。見るからにパンクな感じで、ボーカルはスキンヘッドに全身黒エナメル、関節という関節にシルバの棘を付けていて、同じ様なファッションのギターも筋肉ムキムキの腕にタトゥーを入れて、顔の表情がわからなくなるくらい化粧をした男でした。ドラムはかなり太っていて、エナメルのチョッキとズボンの間から腹の肉がはみ出していて、かなり大きなサングラスをしていました。

彼らは用意ができたかと思うと、いきなりボーカルの男がマイク片手に口汚い言葉をフロアーにいる観客に向かって浴びせかけました。いきなりだったので僕はびっくりしたのですが、その声と同時にバンドの正面に男たちが集まってきた、ステージの前で騒ぎ始めました。その騒ぎに乗せる形でボーカルがさらにのしりの言葉を浴びせると、前にいた男たちは更に騒ぎ出し、それにかぶせるようにけたたましい音が鳴り響きました。そして、ボーカルが女の子には聞き苦しいような内容の歌詞を、とても調和の取れてない音楽とともに吐き出し、大音量とハチャメチャなリズムに、最前列を占めていた男達がつねる様に乗って行きました。

その光景に啞然としながら僕は見ていて、これに加われとあの人は言っていたのかと思うと、頭の奥が痛くなりました。周りを見回してみると、前に出て男達の集団に加わろうとする女の子は一人もい

なくて、音楽すらまともに聴いていない有様でした。

ケルベロスさんがファンだといっていたあの娘も、明らかに無視しているかのような態度をとっていて、まるで初めからないもののように扱っているようでした。

ただ、ステージ上の彼を見ると、その状態を知ってか知らずかノリノリでベースを弾きまくっていて、自分の演奏に悦になっているように見えました。この音楽とノリは僕にはとても馴染めないと言うか、これでもいいのかなあなんて思っていました。彼らは最前列で盛り上がる男達を口汚くののしりながらも、四曲のステージを終えて、引き上げていきました。

何かに気が付いた！（前書き）

ありえない話が続いたっていいじゃないですか！

これからが面白くなりますから。

どじごよるしくー！

何かに気が付いた！

演奏が終わると、男達がステージ前から引き上げてくるのですが、そいつらの顔を見ると明らかに油くさくて、とがっついていて、幼くて、壁際まで来ると、仲間内でなにやら話し合っていました。これと一緒にになって盛り上がりたというのは、いくらなんでも難しいだろうと思っっていると、今度はぜんぜん趣の違うバンドがステージにあがるのが見えました。僕は気分の盛り上がりたまま、ステージの真ん中に立ってジンバツクで体を熱くしてゆくしかありませんでした。

それから何組かのバンドがステージに上がって演奏し、なかには僕も結構いいなあとおもうバンドもいましたが、全体としてはあまり盛り上がりたっている様子はなく、女の子達は明らかに最後のバンドがお目当てだという事が判ってきました。

もちろん、それまでのバンドのファンの子達もいて、そのバンドがステージに上がると前に出て行き声援を送るのですが、そんなに多くの女の子達ではなくて、大体の女の子はその子達の周りで聞いているような感じでした。

ただ、演奏順が進むたびに女の子達のファンは多くなっているようで、あまりの分かりやすさと正直さに、それを遠めで見ている僕はおかしくなりました。

確かに、女の子達が興味を示しているバンドの演奏はいい音を出していて、まあ、押しなべてボーカルの男は派手で見栄えがいいことは共通しているのですが、それを踏まえても何かひきつける雰囲気を持っているバンドには、女の子達も反応をしているのです。

一組だけ、女性ボーカルのバンドがいたのですが、彼女にはまた彼女のバンドの色に染まっている女の子達がついていて、ファンの子達が盛り上がりたっている様子を見て、その歌い手の子も盛り上がりたっているのを見ると、僕も気持ち浮き上がってしまいました。

そのバンドの大半は男のファンなのですが、もう少しお酒が入って

いたらそれに加わっていたかもしれない。

とは言え、まだ会場全体が盛り上がるようなバンドは出てきませんでした。でも、僕には明らかに何かを期待している空気が、終わりに近づくにつれて増してくるのが感じられました。

五組目のアコースティックギターの二人組がステージの裏に消えると、それまで壁際にいた女の子達が我先にステージの前に集まってきて、すぐにステージの最前列はファンの女の子達で埋め尽くされてしまいました。そして、彼女達は皆で次のバンドの名前をコールし始めました。

「サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！サーンフラ！」

女の子達の声がライブハウス中に響きます。

会場全体も彼らの登場を待っているかのように、皆がステージに注目し始めました。

僕も新しいジンバツクを手にしながら、ステージを注目します。会場の雰囲気は僕にも伝わってきて、なんだか僕も彼らのファンで彼らが早く出てきてほしいような気になりながら、ステージに出てくるのを待ちました。

彼女達の声は徐々に大きくなっていき、僕も自然とそのそばに歩み寄っていきます。すると、フロアの男達も同じように集まってきました。

すると、突然堰を切ったような歓声とともに、それぞれ楽器を持ってバンドのメンバーがステージに登場しました。女の子達がそれぞれにファンであるバンドマンの名前を叫びだして、何を言っているのかよく分らない位の音がこだます中、ボーカルの男の子が女の子達に手を振りながらマイクスタンドの前まで着きました。

その姿に、女の子達がさらに歓声を上げます。

ドラムとベースはもくもくと楽器の微調整をしていて、ボーカルとギターの二人は調節しながらも、あまりの声に僕には聞き取れなかったのですが、ファンの子になにやら声をかけていました。やがて

ボーカルの男がそれぞれに目配せして、準備が整ったのを確認すると、マイクに口を近づけて声を出しました。

「では一曲目歌います。ブラックセプテンバー」

ボーカルがそう言うと、ドラムの音がフロアー中に激しく鳴り響いて、それにつられてギターやベースも後を追って引き始めました。

ノリノリのサウンドに、会場の女の子達が熱を発しながら体を揺らし始めました。

雄たけびを上げる男もいて、僕の耳というよりか脳味噌に重低音が響いてきて、体の仲間でシェイクされました。ボーカルの力強くハリのある声が広がると、彼の声がそこに在るすべてに伝わり会場を包み込見込んでいきます。そして、サビに入ると、そこに在るみんなが激しく乗り出して、みんな手を上に張り上げてリズムに乗り出しました。

僕も、手に持っていたジンバツクを一気に飲み干すと、その中に飛び込んで一緒になって激しい音楽に身をゆだねて、もみくちゃになりました。

歌詞はよく意味がわからないのですが、激しい祝詞音リズムに会場で飲み込まれていって、曲が終わるとそこら中で叫びだし始めました。もちろん僕もです

「今日は集まってくれてありがとう。俺らもここに連れてうれしい」
会場にいる女の子達が歓声を上げます。

「終わりまでじっくり刻みつけてくれよな！盛り上がっていいこうぜ！」

フロアーに地響きがなります。

「次の曲に行きます。次の曲は、バトルフィールドラブ！」

ギターが一人で引き始めると、ボーカルがマイクを両手に抱え込むようにしながら声を出しました。そして、皆が音も立てずに聞いているなか何小節か歌うと、急にテンポが変わってドラムとベースが激しい音を出しながら加わってきて、一気にロックを響かせました。それと同時に、皆はノリノリになって拳を突き上げます。

僕は始めて聞く曲でしたが、ここにいる皆はやはりファンなのでこの曲もさっきの曲もよく聞いていたのでしょう、いいタイミングで声を合わせて歓声を上げます。皆の息もぴったしです。

その次のバラードになると、さっきまで激しく体を上下させていた女の子達も、聞き入っているのか動かないか、体を横に揺らして、ステージの上のスポットライトに照らされているボーカルの姿に釘づけのようでした。会場は完全にこのバンドの音、このボーカルの声にとらわれていて、彼がこの場を支配しているかのようでした。

かくゆう、僕も、彼らの歌に聞き入っていました。

激しい時には激しく、聞き入るときは聞き入り、バンドの曲に合わせて僕の心も波長を合わせているかのようで、歌詞の内容はよく理解できなくても、フィーリングが僕を盛り上げていました。

女の子達も同様で、最前列の子なんか、あまりのはじけぶり、その代わりように、見えていて驚きを通り越して笑いたくなるくらいでした。

ドラムを一つ叩く振動ががんがんに僕に響いてきて、ギターやベースの音が僕の頭の中を占領していくと、ボーカルの声が体中を駆け巡っていくのです。

こんなに音楽を体で感じた事は無かったので、僕にとってこれはかなり衝撃的でした。

改めて音楽を感じてしまったのかもしれない。

耳で聞くというより、全身で聞いている、そんな感じですよ。

はじけだしたこの感情が、僕の頭のコンピューターに激しい衝撃を与えてたのかどうかは知りませんが、またもや直感が僕を貫きました。

そして、周りを見渡してみても、そこにいるすべての女の子が、このバンドに陶酔しきっているのを目に焼き付けました。

周りのファンにもみくちやにされながら、女の子達が熱狂的に声援

を送っているのを見て、そして、だれかれかまわず体をくつつけながらも激しく動き回っているのを見て、僕にはこの力しか道はないように思えてきました。

この力なら出来る！

これなら、人の心を動かし、ムーブメントを作れる！

何のムーブメント？

もちろん「ラブ・ハンド」のです！

僕は周りが音楽につられて激しく手を振り動き回っている中、一人じつとしてただボーカルの顔を見ていました。

頭の中で僕のコンピューターが高速回転して、次々とイメージネーションを送り出していきます。

このバンドの音楽からとは、違う盛り上がりが僕の中に起こり、激しい感情が僕の足から頭へ駆け抜けます。

僕は乗りにあわせて天井に雄たけびを上げました。

これだ！

これはすごい！

やるぞ！

やってやる！

僕はさらに雄たけびを上げ、その場で狂ったように飛び跳ねだすと、それにつられるかのように周りにいて僕を見ていたの女の子達も、男達も激しく飛び跳ねだしてゆき、それが会場全体に広がってゆきました。そして、オーディエンスの歓声と体の躍動が会場を飲み込んでゆき、さらにはバンドの音までも飲み込んでしまうと、すべてから開放されたか、前列の一部が着ていた上着を剥ぎ取るのが見えました。

男達が大半なのですが、女の子も一人だけタンクトップに手をかけたのが僕にも見えたのですがその途端、異様な盛り上がりの中で押し潰されもみくちやにされてしまい、近くにいた何人かと共に床になぎ倒されてしまいました。

僕の上に人が重なってきて、床に体を打ちつけながらも、人の重さ

と発散された熱と体臭の中で、僕は一人笑い声を上げていました。演奏が終わり、バンドがステージから去ると、ステージ近くにいた観客達もまたちりぢりになっていきました。一部はステージ横に集まって、後から出てくるバンドのメンバーを待っているファンもいました。大半はさっきまでのライブ感を引きずりながらもライブハウスを後にしていきました。

僕もその波に乗るようにして出口に向かいましたが、回りの人たちとは違う高揚感を味わっているのは明らかで、外から入り込んでくる風が僕の汗ばんだ体を冷やすのを感じながら、さっき受けた衝撃を反芻していました。

これこそが、音楽こそが人にムーブメントを起こす鍵で、それは僕の閉ざされた扉を開く希望だという事が体と心が訴えていました。そんな事を思いながらライブハウスを出かけると、待ち構えていたようにあの人がいて、僕のほうに走りよってきました。

「お前見た？俺の言った通りだったろう！俺らの音楽も聴いたろうが！頭ん中がすっきりしたんじゃないやねえの？よかったろう？」

大森さんの顔を見据えながら、僕は声を張り上げました。

「最高でしたよ！今までもやもやしたもんが全部吹き飛んだようですよ！いや、マジ誘ってくれてよかったですよ。ありがとうございました！」

僕がそう言うと、大森さんは肩を組んできて耳元で笑いました。

「だろー！よかったろう！よし！これから皆で飲みに行くからお前も連れてってやるよ！」

そう言うと、手首についているとげを僕の首に食い込ませながら、彼は有無も言わず僕を引きずっていきました。

翌日、二日酔いでぐるぐるしている頭をさすりながら、僕はテレビをつけました。

テレビからはお昼過ぎの番組が流れていて、今日のニュースにコメントーターが何かを言っているようでした。僕は起き上がって冷蔵庫を開けて冷たい水を口に流し込むと、着ていた物をその場で脱ぎ

捨てて、シャワーを浴びました。

結構熱めのお湯が僕の頭を流れてゆくと、昨日の事がずきずきする頭に浮かんできました。あのライブの後でケルベロスさんとバンド仲間と、あの時一緒に演奏した何組かのバンドと飲みに出かけ、僕は彼らに派手に飲まされてしまいました。行った居酒屋の酒が安物だったのか、飲み合わせが悪かったのかだいぶ酔っ払ってしまい、今まで溜めてきた鬱憤をその場で撒き散らして、散々暴れ回った事が、断片的に浮かんできました。体をよく見て見ると、足も腕も痣だらけです。

そう言えば、「サンダーフラワー」の人達は一人もいなかったなあ。僕の中に、再び彼らのライブの映像が浮かんできます。

いきり立ったオーディエンス、響く音楽、飛び散る汗、その中の自分。そして、僕を突き抜けた感覚。

シャワーのお湯が僕の気持ちをはぐしているからか、昨日ほどの昂揚は起こらなくて、そう思ったなあぐらいな感覚しかありませんでしたが、確かに刻み付けられたものは感じました。

昨日の夜に感じた予感、僕の根底を確かに揺さぶっていたようで、今は確信に変わっていました。音楽の持っている力があれば、僕をしたい事を叶えてくれるかもしれない。でも、どうやって？

今の僕には、何のアイデアもありません。

タオルで体を拭きながら、また渴いた喉を潤していると、テレビからコマーシャルが流れているのが目に入ってきました。

コマーシャルでは、今一番人気のスーパーアイドルが出ていて、どうやら自分の部屋にいるようです。そして、その役では一人暮らしを始めて不安な日々を送っているようで、それを紛らわそうとブログを書き始めます。すると、大勢の見知らぬ人たちから応援の返事が来て、彼女は少し希望を抱き始め、そして、それから起こったことや感じたことをブログに書くにつれてすっかり元氣を取り戻し、さらに楽しくなっています。

とまあ、こんな感じでプロバイダーの宣伝がなされていました。

ただ、それを見て、僕の目は釘付けになってしまいました。

そう、また頭のコンピュータがスパークしたのです。

「それがあつたか!」

僕は裸のまま、すぐにパソコンに向かいました。

「ミュージック」と「ブログ」と「ラブ・ハンド」。

明らかに組み合わせられないようなこの三つのキーワードが僕の頭の中で組み合わさった時、考えられないような奇跡は起こるのかもしれない。

そんなこともあるんだ世の中(前書き)

そんなこともあるんです。信じましょう！

そうまずは信じませんと、始まりませんぜ！

そんなこともあるんだ世の中

早速僕はブログを作成しました。僕がブログに書いたことは、もちろん「ラブ・ハンド」の事です。まずはさわりと紹介だけを載せました。乗せ初めの頃はまったくいいほど反応がなくて、しばらく見てくれる人はいませんでした。

あのコマースシャルのようにはいかなかったようですが、これ位の事、今まで僕がされてきた扱いに比べたらなんて事ありませんでしたので、僕はなんとも感じていませんでした。

確かに、これまで幾度となく思い、考え、実行してきたことはまったくうまくいきませんでした。しかし、自分でやってみようと思いついた事には素直に従って、やってきたつもりでしたし、例えうまくいかなくても信じるのは自分の気持ちしかありません。

今回も、今出来る事をして行く他はない、それしか僕の頭の中にはありませんでした。

要するに、人が見てその人達を引き付ける様な事を、自分で作り上げ、表していくしかないのです。

そうして、自分を表現して、理解してもらおう。

きつと理解してくれる人がいると、信じて行う他は無いのです。

そんな僕に、ブログは絶好の機会を与えてくれるものでした。

要するに、僕の世界観を作れ、それを世に発表する場が与えられたと言う事で、そうなると俄然、僕の力の込めようも強くなってゆきました。

デジカメを使って町で歩いている女の子の腰辺りをとってランキングしたり、その写真一つ一つにコメントをつけました。そして、外国のサイトにアクセスして、いい「ラブ・ハンド」の写真があればそれを僕のブログに乗せて、世界地図を作成していきました。

まあ、主に欧米と南米が多いのですが、それぞれの腰を紹介したのです。

そして、近年激しさを増していく女性のスリム化をどうにかしたいというような文章を書いて、それに対する意見を求める欄も作りました。

そこにはかなりデフォルメはされていましたが、紛れもない本物のモデルたちの腰を羅列して、加えて、コルセットで絞り上げられた十九世紀の貴婦人の写真も貼っておきました。

これは、僕から見たらまさに悪魔の所業で、それをその時代の女性達が求めていたのが信じられないというようなコメントも載せておきました。そして、「ラブ・ハンド」の投稿欄も作って、いい「ラブ・ハンド」があつたら送ってもらい、月間ランキングを作るという事も忘れずに乗せておきました。

ただ、僕もいろいろ考えたのですが、この中に、僕が「ラブ・ハンド」を広めたい事、音楽を使ってムーブメントを起こすことは一切書かないようにしました。

まずは、知ってもらおう事から始めようと思ったのです。それに、そんな事を始めに書いてしまうと、怪しく思う人も要るだろうし、本当に好きな人がいても腰が引ける場合もあります。今までの僕の行動から見ても、あまりに熱く、急な働きかけをしてしまつて失敗した事がよく、いや全てだったのですから。

なので、ここは落ち着いて、焦らず、まずは知ってもらおうと思つたのです。

急がば回れの精神です。

そうこうしてブログを作っていると、まあぜんぜんアクセスはされないのですが、作ってる方は俄然盛り上がりつつきていて、どうしたら面白いのを作れるかと日夜考えるようになり、いいアイデアが浮かべば、早速それをブログに反映するようになりました。

そんな事をしながらも、音楽方面の事も考えていたのですが、ブログ作りに嵌って行くうちに、それも頭の隅に追いやられていき、四六時中考えているのはブログの事だけになりました。

そして、しばらくたってからのことでした。

僕がバイトから帰ってきて、いつもどおりパソコンをつけ、自分のブログを開いてみると、なんと誰かが僕のブログにアクセスしたらしく、観覧者欄に『1』が刻まれていました。僕は二度画面を見ましたが間違いなくて、一人部屋で叫び声を上げました。

そして落ち着いて何か書き込んでないか調べましたが、その人は開いてみて行っただけのようで何も痕跡はないようでした。でも、少しもがっかりなんてしなくて、むしろ喜びが溢れてきました。

今まで色んな事をしてきて、これほど前に進んだことはないのです。見ず知らずの人が、僕の考えを見てくれたのです。

僕にとっては大きな一歩でした。

僕は他にも誰か見てくれないかと祈りながら、パソコンお前に座っていました。そんなすぐには表れるはずもなく数字は変わりませんでした。

気を取り直して、この喜びをブログの作者コメント欄に書き込むと、僕はベットにもぐりこみました。

そして、翌日またバイトから帰ってきて自分のブログを開いてみると、アクセス件数がまた増えていました。そしてなんと観覧者からのコメントが載っていたのです。

「俺様を覚えているか？『女論塾』の脂肪男爵だ！こんなブログを書いているのはいつかの貴様に違いない！みんなに言いふらしてやる！」

どうやらあのサイトの連中に見つかってしまったようです。

僕は記念すべき最初のコメントがこんな感じなので、さすがに溜息をついてしまいました。

しかし、考えようによっては素直な意見をくれるかもしれません。

それに、広めてくれるなら有難い事です。

溜息をつくより、喜ばなくては。

僕はそのコメントを見て、変に勇気づけられてしまったようでした。

どんな内容にしろ、第一歩は踏み出せたのですから、いい事だ、そんな事を思つて、僕は意気揚々と、今日バイト帰りに見つけた貴重な「ラブ・ハンド」の写真をまたブログに載せては、作者コメント欄に新たな感想を書きました。

それから、またアクセス数が増えていき、それに伴つて「女性の評価論塾」の客人のコメントも増えていきました。

「脂肪男爵」は有言実行の人らしく、確かにあのサイトの住人からのコメントが、真にあそこの住人らしい内容で書かれていて、僕を非難するか、馬鹿にするか、あるいはブログの出来の未熟さを指摘してきました。

彼らのしつこさにはある意味すごいと思しながら、今度はすべてのコメントに目を通しました。どれも内容は似たり寄ったりなのですが、ブログの未熟さの指摘は正しい意見だと思つたので、それはすぐに取り入れて直していきました。

この世界では彼らのほうが先輩なのですから、意見を聞くに越したことはありませんし、正しい意見に素直に従わない理由はありません。

前なら腹を立てたかもしれないことでも、その言葉の奥の気持ちを読み取ってみればまた違うことも思えてくるもので、ちょっとした事に熱くならないでいる自分がいました。

しかし、僕の根底に流れるマグマは隠しきれようもありません。

冷静に熱くなつた僕は、少し挑発じみた事を彼らに提案してみました。

要するに、僕にそこまで言ってくるのなら、

君達の思いはどれ位のものなのか見せてみる！と。

それをこの場にもつてこいよ！と。写真を撮つて見せ付けてみるよ！と。

俺が評価してやろうじゃないのか！と。

僕は上から目線で、ブログに新たななる投稿欄を作り、客人達を刺激してみる事にしました。まあ、前回と違って、土俵はこちら側、い

わばホームゲームでしたので強気になれたからかもしれません。すると、それが相手の頭にきたのか、フェティズムの琴線に触れたのか、日ごろの見せたがりの性格が表に表れたのかどうかは知りませんが、その投稿欄を作った翌日には実に五十枚もの登校写真が送られてきました。

まあ、かなりの重複を含んではいましたし、明らかに意味を取り違えているもの、それに行き過ぎた女性の姿などもありましたが、大半の人が僕の趣向を理解してくれたらしくて、自分のお気に入りのお腹の写真を送ってきてくれました。

こうなると、僕としても気持ち返さ無い訳には行きません。気に入った二十枚の写真を取り上げて、と言うか僕の趣旨を理解してくれていたものがそれしかなかったのですが、全部の「ラブ・ハンド」にコメントと評価、そして僕のブログだけの称号をつけて、ランキングにしてブログに乗せることにしました。

この作業に、睡眠が気にならないほど、バイトの時間を惜しむほどに時間を費やして、ようやく完成したものを自分で見てみると、なんと間違いがたい達成感がありました。

そして、僕は感謝のコメントを作者コメント欄に書きました。

「今こうしてランキングを作ってみて、改めて自分が「ラブ・ハンド」を好きだと言う事に気付きました。僕の馬鹿げた問いかけに答えてくれた皆さん。皆さんの投稿無しにこれはなしえませんでした。それに、大方は僕の事を快くは思っていないと思うのですが、その人達にもお礼が言いたいです。皆さんの力が、このランキングを作り上げてくれました。ランキングには僕の好みが存分に入っているのですが、一つ、ひとつ大切に吟味してみたいです。カイザーになった人も、そうでない人も楽しく見てもらえたら光栄です」

カイザーというのは、僕が一番気に入った「ラブ・ハンド」の投稿を送ってくれた、「セルロースハム」さんに送った称号です。

要はグランプリです。

僕は書き終えて、ベットに寄りかかり、身を委ねました。

達成感からくる脱力感に襲われて、もう自分の出来る事はやれたなあ、と思うくらいの気持ちになっていました。ただ、この後、またどんな反撃を食らうかも分からなくて不安な気持ちもあって、もしかしたら、また良くない反応が返ってくるかもしれないと悪い予感が頭の中を駆け巡りもしましたが、それより何より張り詰めた糸が切れてしまったようになってしまって、それまでの疲労もあってか僕はベットに寄りかかりながら寝付いてしまいました。

夢の中で、今まで僕に関わってきた女の子がタンクトップにホットパンツ姿で僕の周りを囲んできます。

そして、お腹のお肉をつまみながら僕にアピールしてくるのです。

小学校の同級生やら先生、中学と高校の時の彼女、そして初めての女性、皆が僕めがけて飛び込んできます。

そして、何人もの女の子が僕に飛び込んで来た時、急に北村の姿が現れました。

「あああ。北村！」

僕はそう叫びながら、目を覚ましました。

時計を見ると、午前五時になっていて、暗い部屋の中でパソコンの画面の光だけが部屋を照らしています。

ブログを更新したまま眠ってしまったんだなあ、と寝ぼけたように確認しながら、僕は一つくしゃみをしました。

そして、今見た夢をおぼろげに思い出してみましたが、最後の北村が僕をにらんで仁王立ちしているところ以外、明確に思い出せませんでした。

思えば、彼女とは最近ハマったく連絡を取っていません。

北村は何をしているかなあ？と思いつながら、自分のブログに目をやると、画面がなにやら点滅しています。

見てみると、予想外の出来事が起きていました。

誰かが僕のブログに投稿してくると、画面上の小さな鳩が羽を振り

ながら僕に知らせてくれるのですが、その鳩が点滅していたので、僕は投稿欄をクリックしました。

そしたらなんと、あのランキングに対する返事が返ってきていたのです。

時計を見てみると、ブログを更新してか五時間くらいしかたっていないのに、もう反応が返ってきていました。

僕は驚いて返事の内容を見ようとしたり、次々に投稿を知らせる鳩が騒ぎ出し、あっという間に、十通の返事が返ってきました。

僕はやや興奮しながら、はじめの返事を呼んでみました。

「脂肪男爵です。なんか俺の投稿を載せてくれて（お前いいやつだな。）ありがとう。あんなに攻撃した俺の投稿なんて載せてくれないと思っただけど（実は期待してたけど）お前はちゃんと乗せてくれた。俺は（なんか恥ずかしいけど）恥ずかしいけどうれしかった（興奮した）また見つけたら送ってやるよ！（だから、もう一回やってくれ、第二回目、やってくれ）」

僕はこのよく分からない予想外の「脂肪男爵」からの返事を見ながら、体が熱くなり、神経網に電流が走るような興奮を覚えました。

「ラブ・ハンド」批判の筆頭のようなこの人が、まさかこんなことを言ってくるとは思わなかったのです。それに加えて、二回目もやれだなんて、何が起こったのでしょうか？

展開していつてます(前書き)

どんどん話が膨らんで、自分の世界から飛び出していきました。

一体どこまで良くなるだろう？

誰か教えてくださいね！迷子になったかも

展開していつてます

僕は勢いに任せて次の返事を読んで見ました。
次の返事はなんと「セルロースハム」さんからでした。

「カイザー」の称号ありがとうございます。もう発表がいつになるか待ちきれなくて、ずっとパソコンの前にいました。あなたなら僕の「ラブ・ハンド」の好さを判ってくれると思っていました。あれが撮れたのは奇跡としかいえないし、そのときの喜びようといったらありませんでした。それはあなたなら分かってくれるはずです。とにかく、初代カイザーとなったからには、これまで以上にいい腰を発掘していきたいと思います。次は今までに見たことないような「ラブ・ハンド」を送りたいと思います」

確かに、あのお腹を見たときには、「セルロースハム」さんの「ラブ・ハンド」に対する情熱を感じました。だからこそ「カイザー」の称号を与えたのですが、こんなに喜んでくれているのを見ると、僕も胸が熱くなってきました。

僕は震える手でマウスを操りながら、次の返事も、また次の返事も読んでいきました。皆投稿に採用した人達からなのですが、皆一様に喜んでくれていて、始めは僕に冷たい態度をとっていた人も、「脂肪男爵」さんのように僕に心を開いてくれましたし、それに加えてみんながみんな「セルロースハム」さんのように次の開催を期待していました。

と言うより、当然次もやるような感じで返事を返して来ていたので、僕としてはなんともいえない満足感を感じました。

僕は早速作者コメント欄に、今回の「ラブ・ハンド」写真投稿大会、「題して「ラブ・写」」の次回開催を宣言しました。

こうなると、僕の勢いは止まらないし、そして、ブログ内の勢いもそれについてくるかのように乗ってきました。

彼らが何回も僕のブログにアクセスしてくれたおかげか、「ラブ・写」も四回目になると、飛躍的にアクセス数が増加していききました。明らかに、「女性の評価論塾」の住人以外の人達もこのブログを見ていて、「ラブ・写」も六回目になるとぜんぜん知らないような人達からも投稿が送られてきて、その数はなんと六百通を越えています。五回目が二百通で、しかも同じ人からの重複も結構あったのに比べて、六回目は重複もあつたのですがほとんどの人が新参者で、それに加えてみんな僕の趣旨を理解してくれているのか、まさに「ラブ・ハンド」といえるものを送ってきてくれました。正直、これだけの量になると見るだけでかなりの重労働です。

僕は六回目の「ラブ・写」の審査に一ヶ月もかかってしまいました。僕も皆の情熱は分かっているので手を抜けませんでしたし、何しろ時間もなかったので仕方ありませんでした。

ただその間も、色々な人からメールが送られてきました。

「女性の評価論塾」の面々はもとより、初めてこれを見て「ラブ・ハンド」の存在を知って面白がつてみている人や、友達に進められてこのブログに投稿してくれた人、たまたま検索に引っ掛かつて見してくれた人、中には批判的なご意見を送ってくる人もいました。おおむねは僕の考えを理解してくれていて好意的でした。何ヶ月前に比べたら考えられないくらいの反響に、僕は踊りたくなくなるくらいうれしかったのですが、一人での作業にかなり苦労していました。バイトに行かなくてはならないし、そのころにはバイト先でも色々な事を任されるようになって、なかなか思うようにブログに向き合えない日もあつたからです。

でも、何とか六回目のランキングを作つて、七回目の「ラブ・写」の応募を募りました。

こうなれば行くところまでいくしかないでしょう！

僕はそう思いながら、ブログを更新したのです。

それから三週間後の締切日、僕がブログを開いてみると、「ラブ・写」の投稿数はなんと千件を超えていました。

これには僕も喜びと同時に、溜息が出てしまいました。こんな数の投稿を一人でさばくなんて、一日中パソコンと向き合ってもかなりの時間がかかってしまいますし、現実的に無理がありません。どうしようかと悩んで、正直な気持ちをコメント欄に乗せました。

すると、思っても見ないことに、皆からの励ましのメールが何通か届いてきて、「女論塾」の面々からも応援されてしまいました。その中でも一番嬉しかったのは、そのうちの一人、初代カイザーの「セルロースハム」さんからは貴重な意見を貰えた事でした。

それは、今までは僕一人が審査してコメントも書いてランキングを作っていたのですが、それを皆の投票で決める事にしようという事でした。

要するに、何枚かの作品を僕が選び、その後はみんなの投票でランキングを作っていくという事です。

皆からの投票数が多い人が、カイザーになれて、コメント付で投票すれば僕が書くよりもっと多くの人の意見も聞けますし、送った側も皆から認められるなら喜びも大きいだろうという事でした。

もちろん、これまで送ってくれた人は僕の事を信用してるので、これまで選んできた投稿に文句はないし、皆も僕のセンスは認めるところだけでも、こう規模が多くなつては僕の負担も大変なものだし、もし僕の意見に乗せたかつたら、皆が選んだ後に自分の意見を載せればいい、そうすればこれからもうまくいくだろう、と「セルロースハム」さんは意見を送ってきてくれたのです。

加えて、初めからこの「ラブ・ハンド」主催の「ラブ・写」に参加出来て、それがここまで大きくなった事が、自分の事の様に嬉しい旨を伝えてきてくれました。

僕はこれを見て、即決で「セルロースハム」さんの意見を取り入れることにしました。

この人なんて頭がいいんだろう！

この意見を見ただけで、僕はこの人はすごい人だと思いましたし、何しろ文面から滲み出てくる「ラブ・ハンド」への愛を感じました。もしかしたらこの人は、今や僕以上に「ラブ・ハンド」を愛しているのかもしれない。

それから、「セルロースハム」さんや他のメンバーからやり方、表し方などを相談していき、投票方式の「ラブ・写」の準備を進めていきました。なので、すぐに「セルロースハム」さんに言われたとおり、投票方式にする旨をブログに書き込み、二十作品に投稿を絞り込んでから掲載しました。

そして、一週間の受付期間、そして五日間の僕のコメント作成時間を経て第七回目の「ラブ・写」のランキングを発表するにいたったのです。

作成期間から感じていたのですが、この企画はかなりの成功を収めていました。

何しろ、七回目のシーザーの称号を受け取った作品の投票数が二百人を超えていて、全体では二千人以上の投票があったからです。要するに、この投票に二千人以上の人が加わったと言う事になり、それだけの人が僕のブログを見て「ラブ・ハンド」の存在を知ったと言う事なのですから。

これは今まででは、考えられない事でした。

それに加えて、「セルロースハム」さんの意見を取り入れたおかげで僕の負担も一気に軽減したので、僕自身も余裕を持つ事出来ました。

それは、やはりいい結果をもたらしてくれて、今までは「ラブ・写」だけにかなりのことを費やしていたおかげで、ブログ内の充実は置き去りになっていたのですが、今度はこれにも力を入れる事が出来ました。

歴代のシーザーの作品や、自分自身の作品、僕の「ラブ・ハンド」論、そして、投稿者同士で意見を交換できる場も作れるようになり

ました。

すると、投稿者同士の意見交換の場が出来る、皆色々な考えを書き込むようになり、それにはもちろん僕自身も加わり、しばらくしないうちに様々な意見交換をするようになりました。皆がそれぞれ色んな「ラブ・ハンド」にコメントを言い合って、楽しんでいるのと平行して、僕はそれとは別に「ラブ・ハンド・パーティー」と銘打って、僕と直接ディープな「ラブ・ハンド」論に着いて語り合う場を作りました。

要するに、ただ「ラブ・ハンド」を見たり、探したりして楽しむだけではなく、僕の長年の夢である、いかにしてこれを広めていくか、と言う事について話し合う場を作り、それを実現するためのメンバーを集めようと思ったのです。

僕のブログは、もちろん誰でも参加できていますが、「ラブ・ハンドパーティー」だけはパスワードを知っている会員だけが参加できるようにして、一般の人達は参加できないようにしました。

こういう事は、多くの人間が参加してはうまくいかない事を、長年の経験が伝えていましたし、初めてこんな事実行したいと僕が相談した「セルロースハム」さんの意見でもありました。

僕がこの人ならと思えた人は「セルロースハム」さんしかいなかった、真っ先に彼に相談したのですが、彼は見事に僕の力になってくれました。

その頃には、彼とはお互いのアドレスを交換し合っていて、二人だけのやり取りをしていたので、僕がこの話を持ちかけると、何の疑いもせずに力になってくれると言ってきたのです。不思議なもので、顔も年齢も職業も、家族構成すら知らない、ただ「ラブ・ハンド」が好きであるというだけの間柄でしたが、僕はこの人のことを信頼し、好きになっていました。不思議な事ですが。

とにかく、彼は僕の訴えかけた事に的確な答えを返してきましたし、そこに現れる彼の世界観は途方も無く大きく、パソコンの画面に現れる文字からは愛情溢れる人柄が滲み出ていました。

そして、なにより物事をよく知っているのです。

僕は、直接彼のプライベートな事は聴きませんでした。それでも信頼していましたが、本当の気持ちは伝わってきて、理解できていたのでそれだけで十分でした。

そんな「セルロースハム」さんに相談しながら、僕は秘密組織とでも言うべき「ラブ・ハンドパーティー」の準備を始めました。

まずはメンバーを集めなければなりません。

やはり、初めの頃から僕のブログにかかわっている「女論塾」のメンバーから集めようと言う事になりました。

こちらに関しては「女論塾」でも初期メンバーである「セルロースハム」さんに人選をお願いしました。

彼はかなり「女論塾」で多くの人達と関わっているらしく、信用の置ける人間をピックアップしてくれるとのことでした。

何しろ、今度はただ見せて面白がるのではなく、世の中を変えていかなければならないのですから、それにはあまり公には出来ないし、変に騒がれるのも都合が悪いので、慎重に事を進めなければなりませんでした。それに加えて、組織を作る時にメンバーの気持ちは揃っていないければ志がいくらあってもホットでも、うまくいくものじゃないと言うことを「セルロースハム」さんが強く言うので、僕はそれに従いました。

それから、二人で相談して、「ラブ・ハンド・パーティー」のメンバーは十人にする事にしました。

なので、僕と「セルロースハム」さんの他に、八人の人を集めなければなりませんでしたが、彼の働きかけもあってか「女論塾」から五人はすぐに決める事が出来ました。

彼からそれとなくこの五人にその旨を伝えてもらい、アドレスを聞きだして、後は僕が直接交渉に当たりました。

慎重に僕の気持ちを切り出し、僕の熱い気持ちをぶつけると、皆面白がってくれてすぐに話しに乗ってきました。皆、何か秘密結社的な感じと、こんな事を広められるのかという当たり前の不安があっ

たようですが、僕が心を開き、そして純粋な気持ちを訴えかけると、皆理解して、面白がってくれて、僕に力を貸してくれると誓ってくれたのです。

後はもう三人集めるだけでしたが、「セルロスハム」さんの話では、「女論塾」で信用できて、計画に力を貸してもらえそうなのはこの五人位だと言う事なので、僕は自分自身で残る三人を見つけなければなりませんでしたが、目星をつけている人達はいました。

その人達とは、この頃にはもう十回目を迎えていて、投稿者は二千名、観覧者にいたっては五千人に達していた「ラブ・写」の歴代のカイザー、その人達に当たってみようと思ったのです。

今までカイザーの称号を持つ人は六人。

初めの頃は決まったメンバーが送ってきていた投稿も、今では色々な人が送ってきていましたし、投票形式にしたからは初期のメンバーでもランキングに乗る事はなくなるほどでした。

まあ、様々な僕の知らない人がカイザーになっていたので。

その内の一人は、今度のランキングでもグランプリをとり、第五回でもグランプリを取っていて、二冠を達成していました。

この人なら、僕の気持ちを理解してくれそうです。

僕は早速、この人にコメントを送り、直接交渉する事にしました。

「プチ・ラブ」と言うハンドルネームのこの人は、明らかに僕の問題いかけに疑いの念を持っているようでした。まあ、回りくどく探りを入れながら親しくなっていこうとしたのですが、どうも反応が芳しくありませんでした。

あまり、僕と係わり合いになりたくないようなそぶりをしてくる一方、向こうからメールを送ってきたり、少しプライベートな話などには気持ちよく乗ってきてくれるのですが、これが「ラブ・ハンド」の事になると、彼は打って変わったような反応をしてきました。

とは言え、彼の作品の完成度はやはり他とは抜きん出ていましたし、かなり光るセンスを感じていましたから、僕としてはぜひメンバーに加わってほしかったので、かなり必要に説得していきました。

まあ、最終的には（「セルロースハム」さんには時期早々といわれましたが）自分の胸のうちを正直に訴えたのです。

すると、「プチ・ラブ」さんは始めかなり困惑していたようでしたが、かなり強気に僕が頼み込むと、一転力になってくれると言ってくれました。

これで、残るはあと二人と言う事になりましたが、この二人は案外すぐに決まってしまうました。

それというのも、どこから聞きつけたのか、直接僕のアドレスにメールが来て、ぜひ仲間に加わりたいと言うことを言ってきた人がいたのです。

人間一人じゃ何も出来ないよ（前書き）

やはりそれなりの大物が仲間にならないとね。

それだけの実力と面白さが無ければ人は寄り付かないんでしょうな

南無賛

人間一人じゃ何も出来ないよ

これには僕もびっくりして、かなり動揺しました。

何しろ秘密裏にことを進めていましたし、僕のプライベートなアドレスは限られた人しか知りえないはずなので、どこから漏れたんだろうと思ったからです。

一瞬、皆への疑いが頭に浮かびましたが、とにかく相談してみないことには始まらないと思い、僕は「セルロースハム」さんに連絡を取りました。すると、意外なことに彼は心配する事は無い、と返事を返してきました。

何と、彼の方にも同じ人からメールが送られていたらしく、彼が言うにはこの人は是非にでもメンバーに入れたほうがいいとの事でした。

僕は、彼の事を信頼していましたが、疑う事すら嫌な気分になっていましたが、これにはびっくりしました。

慎重にことを進めて行こうと言ったのは彼でしたし、誰にも知られていないこの計画を他の誰かが知っている事に何の疑問も感じないような馬鹿な人では無いと知っていたので、彼がもろ手を挙げてそう言ってきたのが本当に信じられませんでした。

なので、彼が僕の知らない所で何かことを進めているのではないかと、と言う不安が僕に沸き起こってしまいました。

もしかして裏切りなのか？

僕の頭の片隅に、そんな考えも浮かんできました。

そんな僕の心情を察したのか、彼はしきりに僕を安心させようとしてきました。

そりゃあ僕だって、安心はしたかったのですが、どうしたって彼の胸のうちの聞くまではそんな心境に離れませんでした。何しろ顔が見えない間柄なのですから。

パソコンの前で、僕は頭を抱え込みながら悶えました。

せつかくうまくいつているように感じられた僕の計画が、行きづまるかも知れない不安が全身を駆け巡っているのです。まだ顔も見えていない彼を想像しながら、一人で激しく罵っていました。

すると、パソコンに彼からのメールが届きました。

僕は、マウスを動かして、彼からのメールを開きました。

「君が疑うのも無理はない。ここまで来て、僕らの間で秘密を作ることは、よくないことだとは思っているが、どうか信じてほしい。むしろ、彼らに加わる事は、僕らにとつて計り知れない力を手に入られることになるんだ。それは保障するよ。でも、君に何の疑いも持たずに、僕の話を書いてくれというのは無理な話だろうし、今まで築いてきた君との信頼関係も壊したくない。だから、僕はここで自分の素性を白状するよ。それで、僕の気持ちを分かってほしいと思う。ここまできたら、君に自分の事を隠すことは出来ないし、そうする事で君の信頼を得られたらいいと思ってる。だからどうか僕の事を信じてほしい。僕らの計画のために。僕は正直に素性を明かすが、それでも君が僕の事を信じてくれなくてもいいと思っし、この計画が僕抜きで行われなくてもいいと思ってる。そして、それでも応援したいと思っっていることを付け加えておくよ。」

そのメールの後に、一枚の写真が送られてきました。

その写真を見て、僕は思わず身を乗り出してしまいました。

僕はこの人を知っていました。

ハンドルネーム：「セルロースハム」本名：今田完治。

その写真に写っていたのは、ITビジネスで成功し、いくつ者会社を所有してる車椅子姿の青年実業家でした。

今田さんは、この僕でも一度ならずとも目にしている、ビジネスの

世界で活躍している人間でした。幼いころに発病してから半身不随となりながらも、大学在学中にIT関連の会社を設立、独創性と驚くほどフェアな仕事に会社はうなぎのぼりの成長を遂げて、今ではいろいろな業種に携わるグループを作った立役者でした。ベンチャー事業を立ち上げたい若者にとってはシンボルのな存在でしたし、その生い立ちにもかかわらずやってきた事に、世間からの信望もある人でした。

僕は思わず唖ってしまいました。

この人だったら、今までのようなアイデアや助言も納得してしまい
ます。

あまりの衝撃に、ただ呆然と画面を見ていましたが、我に返ると早速返事を打ち込んで、彼の元に戻りました。正直な気持ちで、本当に彼が確かめるような返事を送ると、すぐに返事が返ってきて、本
当だからびっくりさせてすまないというようなメールが帰ってきま
した。

僕にはわかには信じられないから、少し時間をほしいと返すと、彼
はいきなり携帯の番号を送ってきて、掛けてきてほしいと言ってき
ました。

僕はパソコン画面の携帯の番号を食い入るように見つめながら、恐
る恐る自分の携帯電話のボタンをプッシュしてみました。

時計を見てみると、深夜の一時半でしたので少しためらったので
すが、興奮が僕と僕の指を後押ししたので、僕は「発信」ボタンを押
しました。

二回コールされた後、電話から声がしてきました。

「もしもし」

少し高い、以前テレビで聞いたことがあるような声がしてきました。

「あ、もしもし、あの、今田さんですか？」

僕は恐る恐る聞いてみました。

「そうですね。もしかして、「ラブ・ハンド」さん？」

僕は電話を耳に当てながら、大きくうなずきました。

「そうです。あの、初めましてって言うか、なんとと言うか、ほんとに今田さん？」

電話から大きな笑い声が聞こえてきました。

「そうですよ。紛れもなく、私は今田完治です。疑うのも無理はないし、そうしてきたのは僕の方なんですけど。間違いないですよ」

「マジで！ほんとに今田さんなんだ！信じられないよ。まさか、今田さんと、いや、まさか今田さんが「ラブ・ハンド」好きだなんてまた、笑い声が聞こえてきました。

「そっちの驚きですか。そうですよ。知ってはいるとは思いますが、あなたに負けず劣らず腰肉好きです。しかし、僕だけだと思ったのに、他にもそんな趣向の人がいたんでびっくりしたよ」

今度は僕が笑い声を上げました。

「僕は嬉しかったですけどね。しかし、まさかあなたが今田さんとは。だけど、それならいろいろ納得いくけど。あなたがいなかったらここまで来れたか分からないし。だけど・・・」

僕の不安そうな声を察して、彼が続けてくれました。

「だけど、いきなり知らない人からメールが来たのが信じられない？それに関しては、僕も信じられなかったけど、まず間違いなく、サプライズだよ！こんな事が起こるなんて、すごいだと思った。君ってすごいよね」

その言葉に、僕は訳が分からないまま黙っていました。
サプライズ？

今僕と話しているのが、あの今田さんだということ以上のサプライズがあるのだろうか？

彼は話を続けました。

「君も本当にびっくりすると思うよ。だから、君が本人に会うまで秘密にしときたかったんだ。こんな素晴らしい計画の立案者に敬意を表したかったし。何しろ、サプライズが僕は好きなんだよね。メンバーの十人はこれで揃う事になるし、早速会合の日取りを決めたんだけど、あちらさんはこの時期かなり忙しいみたいだから、日

取りはまた連絡するよ。少なくとも、二週間前には」

「あちらさんって、そういえば、二人なんですか？」

「そうなんだよ。ビックリする事に二人なんだ。これには僕もさらに驚いたんだけど」

「なんか、僕にはさっぱり分かりませんよ。頭がごちゃごちゃになってきた。それに、本当にあなたが今田さんなのかも確かめてないし。僕どうすればいいんですか？」

「よし。こうしよう。僕も君に会いたくなかった。やっぱり顔見て話さなくちゃね。明日は暇かな？四時くらいに僕の本社に来てよ。住所はまたメールで送っとくから。受付に言えば通すようにしておくよ」

「マジですか！？なんか緊張しちゃうなあ。受付には何て言えばいいんですか？まさか『社長の変態仲間の「ラブハンド」ですけど、四時にアポイントメントを取ったのですけど』なんて言うんですか？」

僕がそう言うと、抑えたような笑い声が受話器からこぼれてきました。

「相変わらずだねえ。それもそうだね。でも、まあその時間に来て、約束してるんだといえは、通すようにしとくよ。心配しなくていいよ。じゃあ、また明日。」

「はい。おやすみなさい」

僕は携帯を耳から話し、若干脂のついた画面を見ながら、静かな興奮を味わっていました。

翌日、僕は約束通り今田さんの会社に行きました。都心の一等地にあるビルの何フロアかが彼の会社らしく、一階にある総合受付の綺麗なお姉さんに話しかけると、すぐに電話をしてくれて、僕をエレベーターまで案内してくれました。僕は丁寧な対応にどきまぎしながらエレベーターまで行き、彼の会社のある階のボタンを押ししました。

エレベーターのドアが開くと、デカデカと彼の会社のロゴが壁に張

つてあり、その下に紺色の服を着た受付上が二人いました。

ぼやけた水色のカーペットが敷き詰められていて、エントランスの白い壁紙、壁際に大きくとられた採光性抜群の窓、いかにも大勢の人が働いてる雰囲気には僕はいたるところを見回しながら、二人の受付嬢が座っているテーブルまで歩み寄りました。

エレベーターのドアが開いてから僕の存在には気がついていただろう彼女達は、僕が約束の客だと分かったのか、僕が切り出す前に声を掛けてくれて、さっそく今田さんに伝えてくれました。

僕はただ頷くだけでしたが、彼女達から案内されるままにフロアーの奥に通され、一番隅にある部屋に連れて行かれました。

通された部屋は応接室で、静かな室内には、独特の家具の匂いがしていました。壁際には観葉植物が置いてあって、落ち着いた色のカーテンがかかっています。そして、部屋の中央には二人がけの、落ち着いたクリーム色のソファアが二脚、その間に重そうなガラスの四足テーブルがありました。

僕が柔らかく沈むソファアのすわり心地に幾分落ち着かなくなっていると、おもむろに部屋のドアが開き、車椅子姿の今田さんが現れました。

僕は慌てて立ち上がり、慌ててお辞儀をしました。

今田さんは秘書らしきスーツ姿の人に車椅子を押されながら、僕の座っていたソファアのすぐ隣まで進んできました。緊張しながら、改めて今入ってきた人の顔を見ながら、本当に「セルロースハム」さんが、あの今田さんである事を認識しました。

ここに来るまでに、何回も雑誌で見た人が、まさに僕の隣にいるのです。

上品なスーツを着こなし、きちつと磨かれた革の靴を履いて、車椅子に座っています。

「あの、お初にお目にかかります。」「ら・・・小田切です。まさか、本当に『セツ・・・今田さんに会えるとは』」

僕はしどろ、もどろしながら挨拶しました。今田さんはそんな僕を

見ながら、少し笑いながら手を差し伸べてきました。

「こちらこそ。『ラブ・ハンド』さんに会えてうれしいよ」

僕は、チラッと彼の後ろにいる人を見ました。

「あ、あの今田さん？」

「何言ってるんだい。『セルロースハム』でいいよ。そっこのほうが付き合い長いわけだし。まっ、言いくらいからいつか」

今田さんはそう言っただけで大きな声で笑いましたが、僕はちらちら、彼の後ろに立っている人を見ました。その人は柔らかく表情をしながら二人を見ていて、僕と目が合うと小さくお辞儀をしました。

「あつ、斉藤を紹介していなかったね。僕の秘書で、片腕で、相談役で、まあ、気の許せる人間だ。もちろん、君の事も話してある。

彼の前では僕は隠し事はしないんだ。信用していいよ。それに、僕が始めて投稿した写真を撮ったのも彼なんだから」

そう言っただけで、今田さんは笑いました。僕は今田さんの顔を見て、そして斉藤さんの顔を見ました。二人とも見るからに仕事が出来そうで、頭も切れそうです。身なりも僕なんかとは違って上から下まで高級な生地を使って仕立ててありました。

この場では、僕みたいな人間なら硬くなるほうが自然だと思いますが、二人の優しい感じが僕を和ませてくれましたし、二人の受け入れてくれるような目を見てみると緊張も解かれるようでした。

「初めまして。『ラブ・ハンド』です」

そう言っただけで、僕は斉藤さんに手を差し伸べました。彼も同じタイミングで手を差し伸べてきて、僕らは握手しました。

「さあ、座ってくれ。これで、僕の言っている事が信じてもらえたと思う」

「はい。あなたの事は信じています。しかし、この間のメールの・・・」

「それについては、今この場で話すよりも、直接本人に会ったほうがいいと思うんだ。百聞は一見にだよ。近いうちにメンバー全員を集めて第一回目の会合をしようじゃないか。スケジュールは向こう

サイドにあわせなければならぬけど、なるべく近いうちに調整してくれるそうだ」

「そんなにすごい人達なんですか？僕は今あなたにあって話をしているだけで信じられないのに」

「僕も、こんなことに成るなんて思いもよらなかったんだけど。僕達が思ってるよりも、ことは爆発的に飛躍しそうな感じなんだよ、これが」

「そうなんですか」

僕は大きな不安感に襲われてしまいました。何か、見えない重石が方に乗っかっているようです。そんな僕の様子を察したのか、斉藤さんが声を掛けてくれました。

「君は自信を持って、その日を迎えていいんだよ。君から発せられたメッセージが皆を動かしてるんだから。これは君の提案なんだから。掻くいう、この私もその一人だよ。」

「そう。初めて君のブログを私に教えてくれたのも、斉藤なんだ」僕は二人の顔を見ました。二人は穏やかに微笑んでいます。

「ここまで来たんじゃないか。まだまだ道のりは長いかもしれないけど、同じ志同士、頑張っで行こうじゃないか！」

今田さんはそう言っと、僕の肩に手を添えてくれました。

僕はその手を取り、力ずよく握り締めました。

「一緒に、頑張らましよう！」

その言葉に、今田さんはすぐ後ろにいる斉藤さんを見上げながら振り向き、斉藤さんは今田さんの方に手を添えながらまた静かな微笑を交わしました。

それから僕はそれぞれのメンバーに連絡を取り合い、その旨を伝えました。

今田さんの提案で、今田さんの存在も皆に伝え、まだ分からないメンバーの事も出来る限り伝えました。そして、第一回目の会合で、全員の出席を取り付けました。

ただ、かなりのメンバーが期待と困惑と不安を持っているようでした。

た。
まあ、無理はありません。僕だってそうなのですから。

みんな集まれ！（前書き）

さあ、メンバーが揃ったようです。いや、まだ揃ってないみたい？

楽しみですね。しかし、あの人が女の子だったとは……。

分かりましたか？

みんな集まれ！

しかし、僕と今田さんは自信を持って説得していき、皆の足並みを揃えていきました。

それから程なくして、今田さんから会合の日取りと場所が伝えられてきました。向こうのスケジュールが調整できたようで、一週間後の夜に集まることになりました。

しかし、その初会合の場所は、なんとも信じられない所でした。あるう事か、僕が以前働いていたあのホテルのレストラン。「ラ・フイギユール・ドウ・ランジュ」の個室でした。

あまりの偶然に、僕は送られてきたメールを何度も見返してしまいました。何度見てもその通り書いてありました。自分の前の職業はメンバーの誰にも言っておりませんでしたし、偶然としか言えないのでただ驚くだけでしたが、それに加えて、そのレストランの格を知っている僕は、まだ明かされていない二人のメンバーがやはりそれなりの人物であるということ思い知らされました。何故なら、あのレストランの個室を予約できる人達は、およそ僕らの住む世界とはかけ離れているのですから。あの個室は、他国の皇族や首脳陣、この国の財界人や政治家もよく利用しているのです。

僕は、その旨を今田さんに伝えましたが、彼は楽しみにしていき、それと返すだけで、少しも僕の気持ちや和らげてはくれませんでした。しかし、ここまでできたなら何が起こっても仕方ないと覚悟して、僕はそれぞれのメンバーに会合の日取りを伝えました。皆それぞれに驚いているようでしたが、大部分は当初の予定どおり、皆出席してくれる事になりました。

ただ、「プチ・ラブ」さんだけは、この期に及んで最後までなかなかいく事を決心してくれませんでした。

何を着てけばいいのだとか、そんな場所に行った事が無いから不安だとか、普通の居酒屋でいいじゃあないかとか、いろいろな難癖を

つけてきました。

まったく、この人だけは他のメンバーに比べてノリが悪いというか、扱いづらいというか、協調性が無い所を感じて面倒に思っていたのですが、彼のセンスは直感的に僕に必要なだと思っていたので、僕は根気強く説得しました。

その甲斐あつてか、どうしてもという僕の頼みを聞いてくれて、しぶしぶながら承諾してくれました。

こうして、第一回「ラブ・ハンド・パーティー」会合、「ラブ・会」の足並みがそろったのでした。

「ラブ・会」の当日は雨が降っており、駅に降りると色とりどりの傘が溢れていて、それらが大通りをせわしなく行き来をしていました。

僕も、この日の為に、普段着慣れない一張羅のスーツなんかを着込んで、足元の水溜りを気にしながら傘を指していました。そして、気温が少し高めで、モオワンとする程よい湿度を首筋に感じながら、待ち合わせ場所に向かいました。

僕は十分前に今田さんと待ち合わせていましたが、幾分興奮気味に十五分前に到着しました。でも、早くついたからか、昔の職場だったからか、なにやら落ち着けなくて、ホテルの入り口までくると引き返したくなる感情に襲われて、なかなか入れずにいました。

何ヶ月ぶりのホテルの外観を見ながら、あのころはこの場所に毎日通っていたんだなあ、と昔の記憶が呼び起こされます。

まさかまたこの場所に来るとは思ってもいませんでしたし、お客としてくるなんて夢にも思っていませんでした。

しかも、あのころ思っていた事が、この場所から始まるなんて。いやがおおにも、気持ちが高ぶってきます。

玄関付近を見て見ると、ドアマンは依然働いていたときの人もいれば、僕の知らない人もいました。彼は別段僕に築いていない様子で、ホテルに来るお客さんを迎えていました。

傘に落ちる雨音を聞きながら、あのベテランドアマンが僕を見たらどんな顔をするだろうかと思っっていると、すぐ後ろから声がしました。

「やあ、早いねえ」

振り向いてみると、今田さんと斉藤さんがいました。今田さんは自分で車椅子をこぎながら僕のよこに来ました。斉藤さんは少し大きめのチェック柄の傘を今田さんに向けながらついてきて、僕に軽く挨拶しました。

僕は少し安心して、今田さんの車椅子を押しながらホテルの入り口に向かいました。

「お二人こそ、約束の時間よりも早いですよ」

「いや、何。斉藤が早くしろ、早くしろってうるさいものだから」とすると斉藤さんは苦笑いしながら、

「何を言ってるんですか、一時間前にはもう落ち着きがなくなつて、私が準備できる前から急かしていたのはどこのどなたさんでしたっけ？」

と言ってきたので、三人は大きな声で笑いました。

そんな感じで僕らは入り口の屋根が在る所まで行くと、傘をたたんだ斉藤さんが、僕の代わりに車椅子を押すのを代わってくれました。ドアの近くまで来ると、丁寧な感じで若いドアマンが大きなドアを開けてくれて、僕らはその横を通り、風防に進みました。風防には僕も知っているベテランのドアマンがいて、にこやかな顔で僕らを迎えてくれました。

今田さんは軽く会釈しながら彼が開けてくれたドアを抜け、僕もそれに続きました。

通りながら、僕は彼の顔を見ていましたが、彼は僕に気付いてはいないようで、何もなかったように僕の後ろでドアを閉めました。

僕は少し拍子抜けしましたが、一緒に働いていたとはいえ何人もいる従業員の中で僕の顔を覚えていないのも無理はありません。

僕達はそのままホテルのエントランスのソファーに向かいました。

今田さんの話では、例の二人は少し遅れて来るとい事でしたが、「ラブ・ハンドパーティー」の面々は約束の時間になると徐々にやってきました。そして、今田さんはメンバーが到着するたびに、僕にその人達を紹介してくれました。どの人もしつかりと正装してきていて、見た感じ僕よりは結構年上の人ばかりのようでした。まあ、それは無理もありませんが、僕は気にせず、むしろ、皆が僕の若さに驚いているようでした。

メンバーとは今日初めて会ったのですが、見た目も雰囲気も様々でとても「ラブ・ハンド」が好きな人たちには見えませんでした。話してみてもそれはすぐに解消されました。

どの人も相当の「スキ物」で、おおむね性格の良さそうな人達ばかりでした。

僕らは自然に今田さんを囲みながら、「ラブ・ハンド」を含め、自分達に関する色々な事を喋っていました。何人かはすでに今田産に会っていたらしく、僕の事もかなり親しげに受け入れてくれました。まあ、この人達は「女論塾」の頃から今田さんとは親交がある人達なので、皆顔は始めてみても、話しているうちに意気投合していくもので、斉藤さんも含めて、皆であれやこれやと差し障りのない話をしていました。

しかし、そんな中で一人だけ、僕の待っている人が現れませんでした。

ロビーに備え付けてある、モダンなデザインに彩られた大きな時計が六時を指し示していても、まだその人は現れません。他のメンバーは例の二人以外は揃っているというのに、集まっている人を見回して数えてみても、一人足りないのです。

あの「プチ・ラブ」さんがまだ来ていないのです。

僕はそれらしき人がいないかと、入り口の方を気にかけて目を凝らしているのですが、そんな人はまったく現れません。彼には今田産の事も伝えてありますし、エントランスホールでこれだけの人が集まっていれば、すぐにそれだと分かりそうなものですから、誰でも

気付くとは思うのですが、五分立っても、十分立っても彼は現れませんでした。

僕は何も言わずに今田さんの顔を伺いました。すると、今田さんは黙って首を振りました。

僕が誘って、僕がこのメンバーに加えようと思った人が来ないので、僕の心は沈んでしまいました。同時に、せつかくのムードが、僕のために盛り下がると思いました。

それより何より、僕の体面が保たれな苦なってしまいます。でも、僕は力なく、時計を見る事しか出来ません。

僕は大きく息を吐き出すと、憤りにも似た気持ちを顔に貼り付けながら、斉藤さんや今田さんのほうを向き、諦めた様に腰を上げました。すると、メンバー達はそれに促されるように立ち上がり、斉藤さんは今田さんの車椅子を押して、最上階のレストランに通じるエレベーターのほうに向おうとしました。その時です。

「あの、『ラブ・ハンドパーティー』の皆さんですよね？」
後ろから、僕らを呼び止める声がありました。

振り向くと、綺麗に着飾った二十歳前後の女性がいました。エメラルドグリーンドレスを纏い、白いブランド物のポーチをお腹の辺りで持ちながら、僕のすぐ後ろで立っています。何人かが顔を見合わせましたが、一様に疑問を解消できないような顔をしました。

もちろん、僕もこの人に見覚えはありません。

目の前の女性は、上手に巻かれた栗色髪の毛を揺らしながら、大人っぽいマスカラの奥の瞳を不安げに大きく開いて、僕の顔を見ていました。透き通るような白い肌にはうっすらピンクのチークなのか、少し赤みがかっていました。

こんな綺麗で可愛い女性は、僕の知り合いにはいません。

僕は振り向いて、皆に目で合図を送ると、皆一様に首を振りました。なので仕方なく、一番近くの僕が彼女に言いました。

「確かに、我々は『ラブ・ハンドパーティー』の者ですけど、えー、

あなたは？」

僕の問いかけに、彼女はひとつ息を吸い込むと、小さな声で「よかったっ」と言った後、僕に向かって話し始めました。

「遅れてすいません。私『プチ・ラブ』と言います。あの、このメンバーの・・・」

その時、ホテルのエントランスに響き渡るくらいの驚き声が上がりました。

その場にいた他の人達が、一斉にこちらを振り向いてきます。

一番驚いたのは僕でした。

そんな僕らを尻目に、彼女は言葉を続けました。

「ちよつと、用意に手間取ってしまつて。それに、こんな場所来た事も無かつたから、さっきようやく決心して入ってきたんです。入ったら、あなた達が奥に行つてしまふのが見えたくて慌てて来たんですけど、今田さんの後姿も見えましたし。あーっ、でも間に合つてよかつたです」

彼女は屈託のない笑顔で僕らを見返してきましたが、こちらとしては何を言つていいか分かりません。今田さんを見ると、彼も斉藤さんと顔を見合わせていました。それに、他のメンバー達も何も言わずに、彼女の顔をまじまじと見ていました。

まさか、まさか「プチ・ラブ」さんが女性だなんて。

確かに勝手に男だと思つていたのは僕なのですが、やっている事がやっている事なので、まさか女性がああ投稿に加わつてきているなんて思わなかつたのです。

僕は信じられない気持ちでと彼女を見ながら、ようやく一つ言葉を発しました。

「ほんとに、『プチ・ラブ』さん？」

「そうですね、何か？」

「カイザーの称号を持つ？」

「そうですね。まあ、最近は送つてないですけど」

「僕が呼んだ？」

今度は彼女が、僕の顔を同じ様な表情で、しかし、嬉しそうな感じで見てきました。

「あなたが呼んだ？え！もしかしてあなたが『ラブ・ハンド』さん？！アーっ！」

彼女は、またもや周りにいる人の目線を僕らに向けさせる声を上げると、急に僕の手をとりました。そして、幾分息を荒げながら、僕の手を上下に振ります。

「キヤアー、初めまして！ほんと、信じられない！やっと会えましたね。今日はほんと迷ったんだけど、あなたが出来たって言っただし、あなたに会えると思ったから来たんですよ。もう、早く言ってくださいよ！」

彼女の成すがままになりながら、僕は心が動転していました。

彼女のこのはしゃぎようはいったい何なんだろうか？

理解不能な行動に、ただ、彼女の気の赴くままにしていました、今田さんが大きく咳払いしたので、僕は我に返りました。

「そ、そろそろ、時間だから行きましようか。ここにいと、周りの迷惑になるし」

今田さんのその言葉に、一同彼の後をついていきました。

何故か、「プチ・ラブ」さんは僕の腕に手を回しながら、小声で僕に喋りかけながら歩いていました。なので、僕はみんなの最後の方から、彼女と一緒についていかざるを得ませんでした。

レストランのある最上階に着くと、すぐ近くにあるエントランスから係りの人がやってきました。すると、まず今田さんが係りのものに自分お名前を告げ、そして、係りの人のあんないで、一同はレストランの奥にある個室に案内されました。

案内した係りの人は、僕もよく知っている人でしたので、彼は僕を見るで一瞬動作を止めて僕の方を見てきました。

僕は、何も言わずに彼に軽く会釈すると、驚きの表情を隠せないでいる彼の横を通りました。ただ、彼はプロなので、それ以上僕にかまうことなく、またいつもの仕事顔に戻ると、先頭に立ってみんな

を案内してきました。

内心、さぞかし驚いている事でしょう。

何しろ以前働いていて他、しかも自分が酒を奢っていた見習いコックが、業界の風雲児とも呼べる男と一緒に何人かと、綺麗な女性を脇に抱えながらやってきたのですから。

すかさず、「プチ・ラブ」さんが僕に聞いてきました。

「お知り合い？」

僕は何も言わずに、軽く頷きました。

個室に向かって歩いてみると、レストランのホールの様子が見えませんでした。

この時間でももうかなりの席が埋まっていて、サービスマンが忙しそうに働いています。レストランは以前と変わらず豪華で洗練された内装で、食べ物にきているお客たちも上品そうな人達ばかりです。

ただ、個室はまた少し離れたところにあるので、ホールのお客に悟られないようにいけるようになっていましたので、ここに来る要人たちは騒がれず静かに食事を楽しむことが出来ました。

まあ、超がつくほど高級なのは頷けます。

腕を強く締め付けられたので隣に目をやると、どうやら高級レストランの雰囲気「プチ・ラブ」さんも飲み込まれているようで、緊張した様子で僕の事を見返してきました。

「大丈夫？」

と僕が聞くと、彼女は軽く頷きました。そして、尋ねてきます。

「緊張しないんですね？」

「まあ、ある意味、ここは慣れてるから」

僕がそう言って笑顔を作ると、彼女は鼻の上に？マークを浮かべていました。

個室に入ると、十人掛けの長テーブルがあつて、それぞれの名前の入った席に座りました。今田さんは、ハイテク車椅子と言うか、そのまま車椅子のテーブルにつき、ボタンを押すと車椅子の椅子の高さが変わる車椅子だったので、そのままテーブルに着きました。い

つも、このような席につくことが多いので、特別に作らせたものと言ったことでした。

その隣に、僕。反対の隣には斉藤さん。「プチ・ラブ」さんは僕から少し離れた席だったのですが、僕の隣がどうしてもいいと言って聞かないので、僕の隣に座ってしまいました。幸い、隣の席二つは名前が入っていませんでしたので彼女は自分の名札と白紙の名札を摩り替えました。その様子に今田さんは少し困惑気味にしている、斉藤さんに何やら言うと、白紙の二枚の名札を隣同士にして、彼女の横の席にしました。

僕も、ほかの人も気が着きましたが、この白紙の二枚の名札は、これから来る例の人たちのためのものなのは間違いないありません。しかし、その他は皆決められた席について、しばらく誰も口を利きませんでした。改めて、このレストランの雰囲気と、今から来る人に緊張しているのです。今田さんさえも、斉藤さんと目配せをするだけで、口を開こうとはしませんでした。でもそんな中、「プチ・ラブ」さんだけは、小声ではありますが、いろいろ僕に話しかけてきました。この娘は、何と言うか回りが関係ないのか、自分しか見えてないのかわかりませんが、とにかくパワフルなのは間違いありません。僕の緊張感もお構いなしです。でも、それで彼女の本名が「柴^し田^{ばた}英子^{えいこ}」二十歳で、服飾関係の専門学校生、親は都内でアパレル関係の仕事をしていると言う事は分かりました。僕の方は、彼女が一方的に話しかけてくるので特に何も言わなくて（言えなかったのですが）、ただ聞いていただけでしたが、今田さんを筆頭に他のメンバーの緊張も伝わってきていたので、気もそぞろでした。すると、突然斉藤さんの携帯電話がなり、すぐに斉藤さんがそれに出ると、それを今田さんに渡しました。

大物登場！（前書き）

ドカーンと食らったらしいんだけど。

まあ、そんな事無いって思うけど、そうだったらしいな見たいな
これからどうなるのかなあ？

大物登場！

静かになった部屋に、今田さんの声だけが聞こえてきて、一同耳をそばだてました。

「はい。はい。全員揃っています。はい。では、お待ちしています。はい」

今田さんは携帯を耳から離すとボタンをひとつ押して、大きく息を吐き出しました。

そして、みんなが注目してるのを察すると、メンバーに向かって口を開きました。

「二人が今、ホテルに着いたみたいです。もうじき、ここに来るそうです」

そう言うのと、持っていた携帯を斉藤さんに渡し、僕の方を向いてきました。

「いよいよだ」

小声でそう言うてきたので、僕は何も言わずに頷きました。

この段階になると、さすがに皆の様子が「プチ・ラブ」さんにも伝わったのか、彼女はそれ以上僕に何かを話してはきませんでした。

それで余計に部屋全体をなんともいえない緊張感と静寂が包み、僕の胃袋も何かに締め付けられるくらい痛くなりました。

今から来る人たちとはどんな人なんだろう？

あれからずっと想像してきましたが、いまいちつかめませんでした。しかし、今田さんのこの様子はただ事ではありません。

一方で、今から来る人が実は全然大した人じゃなくて、拍子抜けするような結末が起きる事が何故か頭に浮かんできます。

何だ、僕達をこんなに緊張させて、今田さんも人が悪いなあ、と言って笑いあう光景が浮かびますが、いつもは穏やかに落ち着いている斉藤さんが、何回も時計を見ながら、頭の中でいろいろ考えているような様子を見てみると、やはりそれなりの人が来るのがびんび

ん感じられて、否が応でも僕の中で緊張が高まっていきました。どれくらい立ったでしょうか？

いや、それほど長い時間はたつてはいなかったのでしょうか、僕の中ではだいぶ時間がたったと思われた時でした。

個室のドアがおもむろに開けられ、人が入ってきました。

皆の目が一齐にそちらに向けられました。

恭しく頭を下げながら、あの年配のサービスマンが扉を閉めます。

金縁の金具で縁取られた、重厚感溢れる白い扉の前に、そして、僕らの前に、二人の人物が立っていました。

一人は恰幅がよく、ダブルのスーツをどっしりと着こなした白髪交じりの髪の毛を清潔そうにふわりと撫で付けていて、色黒の、いささか油の乗った顔にある細く鋭い目がこちらを向いていました。

この人の顔は僕もよく知っていました。

この人は、この国の与党の幹事長、森田哲司その人でした。

そして、同じく隣に立っている同じくらいか少し上くらいの年の、白髪のおじさんは、上から下まで黒で統一しており、それが細身の体によくフィットしていて、ところどころで光るアクセサリーがセンスを感じさせました。そして、しわの刻まれた額の舌に、深い黒色のサングラスをしていました。

見た限り、この人を僕は知りませんでした。隣にいた女性はすぐに気がついたようでした。

「間宮修一!？」

彼女は僕の腕を強く引つ張りながらそう呟きました。僕はその名を聞いたことがありませんでしたが、次の彼女の一言で自体が飲み込めました。

「シュウイチ・マミヤよね、あの人?!」

シュウイチ・マミヤ……。

日本を代表する世界的デザイナーの名前で、世界中のコレクションに出品されている、人気も知名度も一流のブランドでした。かくゆづ、僕自身のの財布もシュウイチ・マミヤのものでした。兄貴から

の二十歳の誕生日プレゼントが、こんな形で繋がるなんて思いませんでした。

「でも、もう引退したって、うちのパパが言ってたのに。ねえ？日本にはもういないとか、ねえ聞いてる？」

彼女の声をよそに、二人は静かにお辞儀をしながら自分達の席に着きました。

彼女の隣には幹事長の森田さんが座り、その隣に間宮さんが座りました。僕も含めて、一堂現れた人のあまりの衝撃に声も出なくて、ただお辞儀をするだけしか出来ませんでした。ただ、隣にいる英子ちゃんだけは、まじまじと二人を見ながらニコニコしていました。

「お二人とも、お忙しい中、この会に出席していただいて、本当にありがとうございます」

今田さんが、皆を代表してそう言いました。すると、テーブルの全員が席に揃ったので、何人かの給仕たちが僕らのグラスにシャンパンを注ぎまわりました。僕のグラスに注いでくれたのは、お世話になっていたメートル・ドテルで、目が合うとウインクしてくれましたが、他のサービスマン達は僕を怪訝そうな顔をしていました。「いやいや、こちらこそ、どうしても出席したいと言う無理なお願いを聞いてくれて感謝しています。今田君の計らいもあって、皆さんは我々が来るまで、我々の存在を知らなかった事と思いますが、なにぶん、プライベートな行動が難しい身ゆえ、こんな形になってしまったことをお許しく下さい」

そう言つて、森田さんは頭を下げました。

「実を言つと、この申し出は僕が行ったもので、彼に話を持ちかけたのも僕なんだ。その点で言ったら、僕も皆さんに迷惑をかけてしまったと思う」

間宮さんもそういつて、首だけでお辞儀をしました。

「イヤー、あまりのことにびっくりしましたけど、二人なら問題ないですよ。ねえ、皆さん？」

僕はお偉いさん達二人が揃っていきなり頭を下げたもんだから、慌

ててしまつて、言葉を発しました。僕の言葉に、一同声を出して頷きました。

「しかし、まさかあなたたちのような人がこのメンバーに加わると思いませんでした」

二人は頭を上げて、僕の方を見てきました。森田さんは少し寂しいような表情をしながら、何かを言いかげようと思いましたが、今田さんの声がそれを遮りました。

僕の隣で、今田さんがシャンパンの入ったグラスを持ち上げています。

「何はともあれ、メンバーが揃つた。では、第一回「ラブ・会」を始めようではありませんか。乾杯のほうは、創設者でもある「ラブ・ハンド」こと小田切君にやってもらおうと思つのですが・・・」

そう言つて今田さんは僕の方を見てきました。すると、森田さんと、間宮さんも、もう一度確かめるように僕の方を見てきました。ですが、僕は大慌で、それを断りました。

「この会は今田さんなしでは成り立たなかつた。だからあなたがしてください。皆、異論はないですよねえ？」

すると、皆は僕の意見に乗ってくれたので、乾杯は今田さんがする事になりました。

今田さんは仕切りなおすように一つ咳払いすると、目の前にグラスをかざしました。

「では、第一回「ラブ・会」の成功と、十人のメンバー、そして「ラブ・ハンド」の繁栄を願つて！乾杯！」

皆、声をそろえてグラスを掲げました。

それと同時に、絶妙なタイミングで給仕たちが食事を運んできてくれて、食事が始まりました。食事が始まるとそれぞれに、思い思いのことを話していて、「ラブ・ハンド」をどうしようなんて事は隅に置かれ、まずは出てくる最高級な料理と、素晴らしく香りたつワインを楽しみました。始めは幹事長や、カリスマデザイナーに遠慮していた面々でしたが、隣にいた英子ちゃんが二人に屈託なく話し

かけて、場を和ませてくれたせいも、それともワインのせいも、僕も普通に彼らに話しかけていました。まあ、この場に肩書きなど不要、そんな集まりではないのですから、いくらお偉いさんとは言えそんな事で話をしないのは損と言うものです。今田さんや、斉藤さんは分をわきまえてか控えめな感じでしたが、失うものなど何も無い僕は別です。気がついたら、ほんとに親しく話をしていました。それに釣られてか、他のメンバーも色々話しに加わってきました。さすが政治家や世界を相手に自分を表現してきた二人です、興味を根こそぎ持つていかれるような色々な話を持っているので、二人の話にみんな盛り上がりました。やはり、色々な事をしてきた人の話には説得力があり、面白いものです。話の中で、この二人が幼馴染で、小学校から高校まで一緒であることが分かりました。二人は無二の親友だったのです。いろいろなエピソードを聞いているうちに、二人のたどってきた道も少しながら分かってきました。

森田さんは父親も政治家なのでその道を選び、間宮さんは社長の息子でありながら、高校卒業とともに日本を飛び出しフランスに渡ったということでした。聞いていて、まったく性格の違う二人なのですが、間宮さんがフランスにいつている間も親交があったようで、それから今の今まで友達関係が続いていると言う事でした。

興味深い話をいくつも聞いているうちにデザートまでがあつという間に過ぎていき、今日は「ラブ・ハンド」が目的で集まった事を、僕もすっかり忘れかけるくらい話に耳を傾けていた時、不意に、コーヒーを口にした森田さんが語りだしました。

「私にも子供がいてね、息子と娘なんだが、君達より一世代上だろうか。それぞれに二人の孫がいるんだ。そう、一番上の孫は、もう高校生になっていてね。女の子なんだが、小さい頃は本当に可愛くて、私にもよく懐いてくれた。目に入れても痛くないとはああいうことをいうんだな、私はそう思ったよ。そして、まあ、彼女も大きくなったんだが、ある時から私の前に姿を見せなくなつた」

森田さんはそこで一度言葉を切りましたが、コーヒーを一口含むと

言葉を続けました。「その子は娘の子なんだが、様子を娘に聞いても埒が明かない。思えばそのころ娘夫婦は折り合いが悪くて、父親の私にかまう事が出来なかったのかもしれないだろうが、私も妻も急がしかったし、すぐにはそれ以上踏み込む事はしなかったんだ。その頃は、選挙が迫っていたから仕方なかったんだ。ただ、それでも娘と孫の事は心の隅にかけていたんだ。だから、選挙が終わると、すぐに彼女たちの家に行ったよ。当選したのに娘は顔を出さないし、久しぶりに孫の顔も見たかったからね」

僕は様子の違う森田さんの口ぶりに、ごくりと唾を飲み込みました。「私は一人で彼女の家に行った。一階のリビングには電気が着いていたが、二階は真っ暗だった。私がチャイムを鳴らすと、娘が出てきたんだが、ひどく疲れきっている様子で、私の顔を見るなり、あれは、あれは泣きだしおった。私は訳が分からないまま娘を諭すと、娘は泣きながら私に『助けてください！』と言った。聞いてみると、孫の事だった。私は階段を駆け上り、孫娘のいる部屋のドアを開けたんだ」

森田さんの目は明らかに潤んでいました。

「そこには・・・、そこには・・・、変わり果てた姿の孫がいたんだ。痩せて細って、まるで骸骨みたいになってたんだ。彼女は力なくベツトに据わっていた。私の顔を見ると大きな声で『出てって！』と言って布団の中に入ったんだ。私は呆然として、孫の傍に駆け寄ったが、孫は布団をかぶったまま何も言つきはしなかった。そのうち娘が上ってきて、私を一階に連れてもどしてから、事情を話してくれた。何ヶ月前からか、気付いたらあんなふうになっていた。世間体が怖くて病院にも連れて行けないし、学校も休ませてる。たぶん、ストレスが原因だと思つたと娘は言つてた。孫は中学に入つてから急に太りだしたらしく、それを気にしていたようなのじゃが、娘は気にも留めなかったようなんだ。何しろ、自分の夫の事で精一杯だったし、私の選挙の事で気が気ではない日が続いたんだらう。そうするうちに、ほおつておいたら、孫は痩せだしたし、安心してい

たよつなのじゃが、それが急激に進んでいって、気付いたら、気付いたら見るも無残な姿になっていたんだ」

そう言いながら、森田さんは完全に泣いていました。すると、彼の肩に手を乗せながら、間宮さんが言葉を引き継ぐように続けました。「それで、こいつは、俺の所に相談に来たんだ。こんなプライベートな話を相談できるのは俺しかいなかったらどうからな。それに、その手の現象はいつもモデルたちと向き合っている俺にはぴんと来たんだ。彼女達の体へのこだわりは半端じゃあないからね。それに、同じような話もよく聞いていた。要は無理やりやせようとしたってことさ。いろいろ、手を尽くすうちに、こいつの孫娘は俺を信用してくれて、病院に行くようになった。今もまだ入院しているがな。しかし、初めの頃は見ちゃあいられなかったよ。こいつの孫娘ということもあるが、若い娘があんな姿になるなんて。今みたいに食べ物に困らない時代にだ。そして、同じ時期に俺が可愛がっていたモデルが死んだ。自殺だった。俺には子供がいない。結婚した事はあがるが、どうも子供には恵まれなかった。俺はモデル達を自分の子供のように思っていてね、まあ、若い頃は恋人と思っていた時期もあったが、この頃じゃあそんな気持ちも起こらなくてな。若い世代はみんな子供みたいに思っていたんだ。皆、いい子達だったが、心までは救えなかった。彼女達のエスカレートする痩せる、スタイルを維持するという気持ちを、俺はどうしても抑える事が出来なかった。そして、彼女達の何人かには不幸な事が起こったんだ。どうしようもない事だったんだが、ファッションに携わる者として憤りを感じたんだよ。しかし、自分がやって来た事と言えば、それを助長するに近い事だらけだった」

間宮さんは唇をゆがめると、また、言葉を続けました。

「私は自分に、腹が立つた。そして、第一線からは退いたんだ。

そんな事があつた後、俺はスポーツジムで斉藤君と知り合ったんだ。三ヶ月前くらいにね。そして、君の事を知った」

そう言つて、間宮さんは僕の顔を鋭い目線で見てきました。森田さ

んも目を赤くしながら、僕の方を見てきました。

「私は、自分のせいで孫をあんなにさせてしまったと思っている。間宮も同じだ。どうにかして償いたい。もう、他の女の子にこんな思いはさせたくないんだ。少なくとも痩せ過ぎになるような女の子は見たくないんだよ。それには、君の思いつきは十分に私達の目指すものに近い。なら協力するのが筋だろう。だから、私たちは君に力を貸したいと思ったんだ」

そう言つて、幹事長は僕の手を両手で握りました。すると、それに間宮さんが手を載せてきました。

僕は目元、目の奥、胃のあたりが熱くなるのを感じました。

そんな僕の肩に、今田さんが手を添えてきます。英子ちゃんは泣きながら、僕の空いているほうの手をとりました。気が付くと、皆が僕の周りに集まつて来ていました。

「こんなに強い気持ちが集まれば、かなわない事はないですよ！皆の力で、世界を変えましょう！悲しくなる世界ではなく、笑いたくなる世界を！我々には出来る！いや、やりましょう！」
僕らはそこで、改めて一つに纏まりました。

六十を過ぎた親父が心を開き、若い人達が情熱を込めた所に、女性達の力が加われば、世の中、何か起らない方が不思議です。

そんな気分の中、僕達は、一つの目標を目指し、連携をとりながら、それぞれに活動していく事を誓い合いました。

そして、皆の気分も盛り上がった事に乗せる形で、僕は今田さんに日ごろ温めていた事を話しました。

要するに、若い力を動かすには音楽の力しかない事、それを成し遂げるために自分は音楽活動をしていきたい、と言う事をです。

すると、今田さんはしばらく考え込みながら、一つ二つ頷くと、斉藤さんの方を向きました。隣にいた斉藤さんは僕の顔を見ながら少し困惑していましたが、無言で頷きました。

「実はね、私もそう思っていたんだ。君には言っていなかったけど」
その言葉に、僕はびっくりしました。

「そうなんですか?! 本当に?」

「ああ、色々斉藤と相談はしていたんだが、何しろ、若い人の心を動かすことは非常に難しい事だが、それをしないで僕らの願いを実現することは出来ないからね。斉藤の人脈を使って動いていた最中だったのだけど、君も同じ事を考えていたとなると話は具体的に進めざる得ないね。よし、これは斉藤と君が進めていったほうがいいと思う。皆さんも、お聞きになったでしょうが、小田切君はその方向で行くと言う事になりました」

皆、拍手で答えてくれました。すると、今田さんが選んだ五人の内の一りで、ハンドルネーム「イソギンチャク」さんが声を上げました。

「じゃあ、私はメディアで働きかけましょう。私は某テレビ局でプロデューサーをしているので、何とかそちらの方面で進めて行きたいと思います」

「じゃあ、私は周りの女の子の意見とか、学校方面で活動してみるわ。あと、お父さんにもそれとなく働きかけてみます」

英子ちゃんがそれに続いてそう言うと、穏やかな声で間宮さんが口を開きました。

「よし、お譲ちゃんと私はファクション部門を作るとしようか。私の持てる限りの力を使って、こちらの方面は何とかしよう。お譲ちゃん、手伝ってくれるかい?」

その言葉に、英子ちゃんは目をキラキラさせながら、幹事長と間宮さんの間に割り込みました。

「はい! 私、精一杯がんばります。よし! なんか楽しくなってきた」

そう言って、彼女は声を上げて笑いました。彼女の若さに困惑気味の森田さんでしたが、落ち着いたようにしゃべりだしました。

「もちろん、政治の方は私に任せてくれ。各省庁にいろいろな働きかけが出来ると思う」

「幹事長にそう言ってもらえると、心強いです。よろしくお願いし

ます」

今田さんが頭を下げながらそう言いました。

「いや、君に頭を下げたて貰う事はないよ。私がしたいから、私のもっている力を使うまでなんだから」

「それでも、そう言ってもらえると、本当にありがたいです」

「今田さん、人にありがたがっている暇はありませんよ。何しろ、この会のまとめ役はあなたなんだから！」

僕は隣の今田さんに大声でそう言いました。

彼意外にこの会のまとめ役にふさわしい人はいないし、彼にはその力があります。

「な、何を言ってるんだい、小田切君。そもそも、発起人は君じゃあないか。君がふさわしいよ」

慌てたように今田さんがそう言いましたが、僕は彼の目を力強く見つめました。

「何を言ってるんですか。あなたがいないで、ここまで来れたはずがないんだから、あなたこそふさわしいですよ。確かに、思いついたのは僕かもしれないけど、ここまで膨らませたのは僕だけの力では出来なかつたでしょ？それに、僕にはこれだけの人をまとめる力はありません。皆さんも、同意してくれると思います。ねえ？」

皆は一様に微笑を浮かべながら、僕達のやり取りを聞いていたので、僕の問いかけにはすぐに力強く頷いてくれました。

「それに、小田切君にはこれからやってもらいたい事が山ほどありますから、ここは社長が引き受けたほうが得策だと思えます」

斉藤さんが耳元で、今田さんにそう伝えると、彼は少し考え込みましたが、僕の顔をしっかりと見て、ゆっくりと口を開きました。

「僕に任せたら、どれだけ事が大きくなるか分からないけど、それでもいいの？僕がやると決めたら、本気になっちゃうよ」

僕はなんか嬉しくなって、今田さんの手をとりました。

「それでこそ、僕はあなたに任せます」

その言葉に、隣にいた森田さんも同意しました。

「私も、君がやる方がいいと思う。何しろ、私や間宮も加わるんだ。ボンクラ爺さん達を世話できるのは、若い人には酷というものだよ」そう言っつて、にやりと笑うと、僕達にウインクしてきました。

「ほんくらはお前だけだろう！しかし、まあ、引退したとは言え、俺は自分の世界で出来る事は事はしっかりやるつもりだけだな。だから、なんだ。皆のまとめ役は、今田君、君がやったらいいんじゃない？」

間宮さんはそう言っつと、メンバーの顔を見渡しました。すると、メンバー全員が拍手と共に、今田さんがこの会の会長になる事を認めました。

今田さん自身は少し困ったような顔をしていましたが、納得したように一人頷くと、皆の顔を見ながら照れくさそうに笑いました。

「じゃあ、僕が引き受けます。その代わり、あくまで調整役です。表の顔は、小田切君になっつてもらいますからね、それだけは譲れない。何しろ君が作っつたんだから。森田先生も間宮さんも表立っつて目立つのも困るだろうし、他の皆もおおびっつらに活動するのは気が引けると思っつからね。私はあくまで君のサポート、会のまとめ役。もちろん、その仕事にっつては全力で頑張るつもりです」

今田さんはそう言っつて、僕の手をとり強く握り締めました。僕は、改めて嬉しく思っつましたが、これから起こるだろう事が彼の手から伝わっつてくる気がして、急に少し不安になりました。

何と言っつか、自体は大きく動き出っつていっつて、大きな波に流されていく感じと言っつか、自分の力では制御できない風を感じたと言っつか・・・。よく分らない感情が、僕に期待感と不安感の合わさっつたようなものとして起こっつたのです。

突然の告白（前書き）

お気づきの方は・・・いらっしやいませんよね。すみません

実はもう第二部に突入していました。ああ、気が付いた方はいるだろうけど、過去の話から、現在進行形になっているんです。さあ、皆さんも一緒に彼と同じ時を過ごし、成長を見守りましょう！
— 体ラブバンドはどうなるのだろうか！

突然の告白

しかし、僕はただ、今田さんの細いつぶらな瞳を見つめながら、無言で頷きました。

その夜、英子ちゃんと幹事長、間宮さんは先に帰りましたが、残りのメンバーは二次会に繰り出しました。お酒を飲みながら、仕事の話をするのがこの国のやり方ありますし、さすがにあれだけの大物達が同席して、しかも豪華なフランス料理店の中とあっては、気も緩められず、緊張しっぱなしになってしまっていましたので、メンバーの男性陣は砕けた気持ちで話す事も出来着なかったのでしょうか。なので、今田さんの知り合いの落ち着いた感じのお洒落居酒屋に来ると、皆自分らしさを取り戻したのでしょうか、楽な感じで自分達の話をするようになりました。

そして僕も、それまでちゃんと喋っていない他のメンバー達とも話す事が出来ました。

メンバーに本当に様々な業種の人達がいて、年齢もばらばらでしたが、さつき起こった事や、これから起こす事の話をする時は、僕にそんなの事を感じさせないくらい、誰もが正直な気持ちで話してくれました。

一人は出版関係に勤めていて、そちらの方面で働きかけをしてくれる事になりました。そして、さつき声をかけてくれればよかったと思っただけですが、商社に勤めている人もいて、その人はエンターテインメント分門を担当しているらしく、僕の活動をそちらの方面からサポートしてくれる事になりました。大手ゲーム製作会社の社員もいて、この人はかなりのネットワークを持っているという話でしたが、どちらかという消極的な感じでしたので、出来る限り関与していきたいと言う事でした。

そして、もう一人はデザイン事務所を開いている人でした。この人は今田さんとかかなり親交があるようで、彼ととても仲良くしていま

した。僕の事も昔からの仲間というような感じで迎えてくれて、なんか兄貴分というか、豪快な人でした。今田さんは、これでも繊細なデザインをするやつなんだよといっていました。僕には信じられませんでした。

彼に、その事を言つと、

「それはよく言われるんだけど」

と言つて、話を続けました。

「そつだ、今日ご飯食べたホテルあるでしょう？あそこの通りをずつといくと、デパート改装してたでしょう？」

僕は頷きます。

デパートは僕がホテルを辞める時位から改装し始めていて、もう仕上がりに近くなっていました。じっくりとよく見た事は無いですが、通りに面したショーウィンドーがお洒落で繊細で、見る人の足を止めているようでした。

「あと、地下鉄の駅の中も最近様変わりしただろう？」

地下鉄の駅の中にさまざまなショップが入るようになり、内装もそれぞれの駅の雰囲気に合わせて、至る所で様変わりしていました。

「それがどうかしましたか？」

彼はおもむろにグラスに口をつけて、一口飲むと、僕の目を見て言いました。

「それ全部、俺の事務所で受け持った、俺のデザインなの。だからまあ、あれが俺のデザインって事かな。分かった？」

目を丸くして驚く僕の様子を見て、その人は大笑いしながらまた酒を飲みました。

そんな彼を見ながら、何と色々な人がこの「ラブ・ハンド」に関わり始めたんだと、二重の驚きを感じ、同時に、動き出した歯車のきしむ音を耳の奥で感じながら、僕はグラスを煽ったのです。

それから、僕の生活は少しずつ変わっていきました。

まず、斉藤さんと一緒に話し合って、これからの活動を決めてゆきました。

その話し合いの中で分かった事なのですが、斉藤さんは学生時代バンドを組んでいて、地元では結構人が集まるほど人気があったのですか、色々な事情があつて活動を止めたようでした。そして、服装も髪型も改めて今田さんの会社で働く事になったそうです。しかし、そのころ知り合った仲間とは今も親交があるようなので、まずはその方面から動き出す事になりました。この斉藤さん、いつも今田さんと一緒に時しか会っていなかったのですが、彼と二人きりになる事はそれまで無かつたのですが、話してみるとまた違った印象を感じました。昔バンドを組んでいただけあつて音楽には詳しいですし、見た目とは裏腹に結構碎けた人でした。スーツを纏い、きっちりと乱れていない髪形からは想像つかないのですが、昔はやんちゃな事をしていた話を聞いたり、その片鱗を見たりする度に、僕は斉藤さんの人となりが好きになりました。それに、かなりの人脈と言うか、いろいろな人を僕に会わせてくれました。普段おとなしいそうに見える彼でしたが、僕に紹介してくる人には、まったく彼と違う趣味のお友達や、見た目にいかつい人など、僕が普通に暮らしていたら和えないような人達ばかりでした。僕はすごく恐縮するばかりでしたが、そんな人達としゃべる彼は普段とは違う、はしゃいだり大きな声を上げたり、まったく別人の様に見えました。でも、そんな見ているだけで楽しい斉藤さんに会う度に、僕は彼の面白さに引き込まれてしまったのです。この人なら一緒にいい仕事、「ラブ・バンド」を広める事ができそうだと思うたのに時間は掛かりませんでした。

ただ、問題はありました。主に僕の方に……。

「ラブ・会」は今田さんに任せていられるようになったので、すぐに僕は音楽に全部の力を込める事が出来る環境ではありません。もちろんバイトは言っていました。それ以外はギターを片手に曲を作り、常に歌詞の事を考えながら過してはいました。

なのですが、やっぱりすぐにいい曲なんて思いつかなくて、ギターを抱えながら悩む日が続きました。詞の方は何の効果か知りませんが、何か幾らでも思いついてノートに書き出せていけるのですが、曲はそうは行かなくていいフレーズなんて出来ないし、人気の歌手の歌に似たような曲をいつの間にか作っていたり、作業は難航していたのです。

そんな事を斉藤さんに相談すると、何故か彼は黙って僕を外に連れ出し、彼の車に乗せたかと思うと、おもむろに走り出しました。僕は何かを尋ねる事も出来ないまま斉藤さんの隣で彼の様子を伺っていました。彼は特別何かを話す事もしないで、ただ、車を走らせます。否応無しに不安が胸の辺りを占領してきましたが、それを払拭できないまま斉藤さんはある建物の駐車場に入っていました。

そこは、都心のだ真ん中にあるマンションで、かなり大きな地下駐車場の入り口があり、僕らは高級車が何台も止まっているその駐車場に車で乗り付けました。

斉藤さんは車から降りると、後を追うようにして慌てて車から飛び出した僕をエレベーターのところまで連れて行きました。そして、オートロックの扉の前の呼び出し口を操作して、

「斉藤です」

と一言言いました。

すると、何の応答も無いまま扉が開いたので、僕らはそのまま中に入っていました。

マンション内は綺麗な内装が施されており、まるで高級ホテルのエントランスの様です。

インテリアの飾られたエレベーターホールでエレベーターが来る間、僕は斉藤さんの顔をうかがっていましたが、彼はいつもと同じように僕に微笑みかけるだけで、このマンションで何をするのかも、誰に会うのかも何も言いませんでした。

ただ、乗り込んだエレベーターの中で、

「君の気持ちは分かってるよ」

と一言だけ口にする、僕の肩に手を置きました。そして、最上階のボタンを押しました。しばらく昇っていたエレベーターが最上階に着くと、エレベーターの扉がチャイムと共に開きました。扉の前には、一つだけドアがあつて、どうやらその階にはそこしかドアが無いようでした。斉藤さんはおもむろにそのドアのチャイムを鳴らしました。

すると、しばらくしてそのドアが開いて、一人の男性が顔を出しました。

「おお、来たか。まあ。入ってくれ」

その男の人はそう言つて、ドアを開け放つと、僕らを招き入れました。

斉藤さんは僕を安心させるかのように微笑むと、中に入っていきました。

殺風景な玄関で恐る恐る靴を脱ぎ、ピカピカ光る滑りやすそうな廊下を通つてリビング二通いるドアを開けると。そこにはいきなり大パノラマが広がりました。

かなり広いリビングには、ソファと液晶テレビが置いてあつて、その向こうのかなり大きく取られた窓からは都心の町並みが見えなくなるくらい広がつていたのです。遠くにある山々の連なりも、もちろん富士山も、流れる川もいくつも見え、関東平野が一望できました。

僕が窓の近くに寄つて、その光景に目を奪われていると、さっきの男性が声をかけてきました。

「まあ座つて、茶でも飲めや」

振り向くと、斉藤さんはソファに座つて、その人に出されたコーヒーを持っていたので、僕も慌てて隣に腰掛けました。その男性は低いテーブルを挟んで僕らの正面に座ると、コーヒーを飲みながら僕の顔を見てきました。

「こいつか。君が言つていたやつは」

その人は落ち着いた低い声でそう言いました。

僕にはわかにか緊張しながら、出されたコーヒを一口だけ飲み、正面にいる男の人の顔はとも見れないので、斉藤さんの横顔を見ました。

「そうです、田代さん」

「ふうん、そうか。まあ、お前が人を連れてくるなんて隆一以来だからな。まあ、見てくれも悪くなさそうだが、いいもの持ってるのか・・・、どうなんだ？」

「聞いてみてくださいよ」

「まあ、それもそうか。君、名前はなんていうの？」

田代と呼ばれるこの男性が、僕に聞いてきました。

「小田切です。小田切武士です」

「ふん。俺は田代つてもんだ。武士か。ふん。で、曲は作れるのか？」

そう言つて、彼は僕をじろじろ見てきました。

「曲つて言う曲は作れないです」

「ふん。詩は？」

「いくつか書きました」

「そうか。楽器は何か弾けるのか？」

「ギターが出来ます」

「そうか」

そう言つと、彼はソファアの背もたれに深く座りなおしました。

そして、隣に備え付けられていた木箱からタバコを取り出して、火をつけると大きく煙を吐き出しました。

「よし。そこにギターがあるから歌つてみる」

彼がそう言つて指差した所には、エレキギターとアコースティックギターが幾つか置いてありました。

僕は何が起こつたのか理解できなくて、斉藤さんに助けを求めようと彼を見ると、彼は黙って頷くだけでしたので、僕はびつくつとしながら立ち上がつてギターを取りにいきました。ギター置き場に行くまでに、ちらりと隣の部屋のドアが開いていて中の様子が見えた

のですが、隣の部屋はスタジオみたいになっていて、いくつかの楽器や機材、部屋の隅にはグラランドピアノもありました。

僕は横目でそれらを見ながら、何本ものギターが置いてある所まで行きました。

ぴかぴかした、雑誌で何度も見たことのある（雑誌でしかお目にかかれないうような）ギター達が勢ぞろいしていて、僕はどれを手にとっていいか迷ってしまいました。でも、一番右側にあったアコースティックギターが一番光っていたように見えたので、迷わずそれを手にしました。そして、そのギターのベルトに首を通し、弦をはじいてみると柔らかな音を奏でてみました。最初の感触は悪くなくて、どうやら、こいつは僕の手にもじっくりと馴染んできます。

僕はこれに決めて、また二人の方に戻りました。

「そこに椅子があるから使ってくれ」

田代さんはそう言つて、近くの椅子を持ってこようと思いました。先に斉藤さんがその椅子を僕に渡してくれました。

すると、斉藤さんは椅子を渡しながら、

「この前、僕に聞かせてくれた奴、あれを弾きなさい」

と小声で言つて、僕に小さくウインクしてきました。

僕は席に戻る斉藤さんを目で追いながら、その椅子に腰掛けて、ドキドキ唸りを上げる心臓を必死で押さえながら、そのギターの音を調節しました。

そんな事をしながら間を取りながらも、「この前」の事を思い出していました。

それは、斉藤さんの家に遊びに行った時の事で、独身でおつまみもご飯も作ってくれる人がいない彼の為に、僕が腕を振るって料理を作り、二人で飲んだ日の事でした。その日は二人とも結構酔っ払っていて、気分が良くなつた斉藤さんがバンド活動していた時の昔話をしていくうちに、何のスイッチが入ったのか知りませんが突然キーボードを持ち出して弾き始めたので、僕も近くにあったギターを借りて斉藤さんに合わせて演奏したのです。

そのうちに二人とも気分が盛り上がってしまつて、僕は適当に歌詞を作つて歌いだしていました。すると、斉藤さんも面白がつて、二人が知っている曲をやるうと言い出したので、僕らは昔のバンドの曲を弾き、僕が歌い、斉藤さんがコーラスをしました。

かなり酔つ払つている事もあつて、もう、なんかすごく気分が盛り上がっていました。

そんなもんだから、曲が終わると勢い余つて、僕は一人でギターを鳴らしながら、高校生の時練習していたバラードを歌いだしたのです。

それを聞くと、斉藤さんは頷きながら、

「武士の声はいいな。うん。いい。はははは」

と言つて、そのままうとうとしてしまつたのでした。

斉藤さんは、そのときの曲を、今やれと言つています。

音を調節できたので、僕は田代さんと斉藤さんを見ながら、一つ息を吐きました。

何がなんだかよく分かりませんが、僕の歌声が聞きたいつて言うならやるしかないでしょう。

なんか、このギターの音色も僕をその気にさせてきましたし、緊張のせいか、余計に気分も高まつてきました。

「じゃあ、歌います」

僕はそういつて、弦を弾かせました。

部屋にアコースティックギターのやわらかくて静かな音色が響きま

す。

僕は歌いだしました。

この曲は、高校生のときはやった歌手のバラード曲で、あの由香先輩にカラオケでも歌つた曲でした。歌いだすと、そのときの自分が思い出されてきます。

もうあれから何年も時がたつてはいるのですが、断片的ですが、あのころの光景が思い出されてきます。そう、由香先輩の事も。恋人を大切に思う切ないサビの部分に、あの時の気持ち重なつてきます。

自然に間奏部分では、ギターを強く握り、弦もはじかれます。もう、後はただ歌い弾くだけでした。

ここがどこだろうと、目の前にいる人が誰だろうと、関係なくて、僕はただ歌っていました。そして、歌い終わると、なんだか気分が良くなってきたももう一曲歌いたくなってしまう、何も言わずに二人が見ていたのをいい事に、続けて次の曲を弾いてしまいました。

このギターの音色のせいかもしれませんが、今日の自分の声はなんか調子が良くて、部屋で悩みながらギターを弾いていた事も忘れさせてくれました。

ちよつとアップテンポな二曲目を終えると、僕は噴出してきた額の汗を拭いながら、一つ息を吐くと、ギターを見つめました。

なんていいギターだ。すると、田代さんがおもむろに声をかけてきました。

「ふうん。なるほどな、斉藤は、斉藤だったか」

田代さんの声に僕は頭を上げました。

「よし。おまえは俺がプロデューズしてやる。すべて任せろ。曲は俺が仕立てるから、歌詞はお前が作ってこい。いいやつは採用する後、体をもつと絞って来るんだ。それじゃあ、ツアーの耐えられそうもないからな。しばらくは、ボイストレーニングして、基礎を叩き込んでやる。覚悟しろよ。まあ、俺に目をつけられたのが運の尽きだと思って諦めるんだな。よし、まあとにかく決まった。ちよつと待ってる、着替えるから。飲みに行くぞ！後、そのギターはお前と相性がいいみたいだからくれてやるよ」

そう言うと、田代さんは奥の部屋に行ってしまいました。僕は啞然としながら、斉藤さんの顔を見ました。

「え？一体どういう事ですか？」

まったく理解できないでいる僕が彼に尋ねると、

「そういう事だよ。まあ、スタートはここからって事かな。武士はあの人に言われた通りに頑張るんだ。そうすれば、うまくいくから。僕達がしたい事もね」

斉藤さんはそう言って、僕の背中を叩きました。

「先に行つて、下で待つていてくれ！」

田代さんの大声が聞こえたので、僕らはそれに従いました。

エレベーターに乗り込みながら、僕は斉藤さんに話しかけました。

「なんか、ほんと、ありがとうございます。よく分からないけど田代さんが面倒見てくれる事になりましたし、斉藤さんのおかげです」とすると、斉藤さんは照れくさそうに笑いました。

「いや、僕は自分の出来る事をしたまでさ。それに、田代さんをその気にさせたのは君自身だ。そこばっかは、僕にどうする事も出来なかった。まあ、確信はあったけどね。本当に不思議だが、何かが君を導いているのだろっね。話していた時はこんな面白い歌声を持っているなんて思わなかったし、それより何より、こうして僕らが繋がっている事さえ不思議だよ」

「本当にそうですよね」

「まあ、それでも事は動き出したんだ。それに、社長の様子も、君と繋がってから変わっていったし」

「今田さんが？」

すると、斉藤さんはいつになく真面目な横顔で、口を歪ませました。「そうなんだ。君には話していなかったけど、社長は、今田は僕の腹違いの兄なんだ」

突然の告白に、僕は言葉も出ませんでした。

バンドするようになったのか。へー（前書き）

段々成長する足がかりをつかみ出しましたね。

ビックになるのだよー！うん、頑張れ！

バンドするようになったのか。へー

二人が兄弟だなんて。しかし、似てるところもなくはないと言えませんが、衝撃的でした。

「でも、なんで・・・」

「僕は愛人の子なんだ」

僕は一瞬息を呑みました。

「初めて社長と出会ったのは、まだ僕が大学生の時だった。まあ、いい加減な暮らしをしていたんだけどさ、突然車椅子の男に離しかけられてさ。そのころ社長は事業を始めたばかりだったと思う。父親の顔を僕は知らなかったんだけどね、その父親が亡くなったみたいで、社長はいろいろ調べて僕の存在を知ったらしい。まあ、名のある人だったみたいだから、父親も。ただ、その時の僕ときたら色々反抗していたんだな。素直にそれを受け入れるわけには行かなくてね。何しろ、いきなりだったから。でも、社長は言ってくれたんだ。『血の繋がった弟の君と一緒に生きて生きたい』ってね。まあ、それ以来僕は社長の下で働くことにしたんだ。兄と慕うことはなかなか出来ないけど、社長として慕うことはすぐ出来る。何しろ、器の広い人だから」

「そうだったんですか・・・」

「ただ、最近の社長は前に比べて、なんて言うんだろう、生き生きしてると言うか、楽しそうに見えるんだ。体の事もあってか、お金を稼いだり、会社を大きくしたり、そういう事にはかりに力を注いでいた人だから。趣味と呼べる趣味もなかったし、前は今みたいな感じじゃあなかった。でも、どんな巡り合わせか分からないけど、君という人に会ったわけだよ。どうも、自分自身の特殊な嗜好も露になったみたいだから、社長も過ごしやすくなったみたいだし。悪く言えば、いいおもちゃを与えられた子供に戻ったって感じかな」

斉藤さんは笑いました。

「僕はおもちやっつて事ですか？」

二人で笑いながらロビーに出ると、斉藤さんは車を表に回そうと、一人で駐車場に歩いていきました。

そして、そんな彼の後姿を見ながら、また、この人に親近感を感じる僕なのでした。

それから、僕は田代さんの元で指導を受ける事になりました。

田代さんは何人ものトップアーティストを育てて来た音楽プロデューサーでしたが、手がけた作品の名前を聞けばすぐに分かるというような感じで、自分自身で表立って活動するタイプの人ではないようでした。でも、顔が知れ渡っていると言う意味では、世間の知名度は低いといってよい田代さんでしたが、この人の下で鍛え上げられて活躍したアーティストは数え切れないほどいて、業界人なら誰もが血眼になってこの人の下に自分の売り出したい人間を送ろうとするらしいのですが、そのアーティストが田代さんのお眼鏡になわなければ仕事を引き受けてくれない事もあってか、限られた人しか田代さんとは仕事をする事が出来ないと言う事も後で聞いて、なんだか恐くなってしまったのは言うまでもありません。何しろ、そんな事、会ってから知ったわけですから。

それに、田代さんが「隆一」と言っていた人が、数年前に新星のごとく現れた「北川隆一」だと言う事も後で知りました。「北川隆一」はその年の新人賞を独占して、一躍トップアーティストの仲間入りをした人で、翌年には確かCDの売り上げ枚数で、その年のトップファイブに入ったこともある歌手でした。最近はこのメディアにも顔を出さなくなっていました。僕も何曲か持っていましたので、その「北川隆二」を引き合わせた斉藤さんの感性にも改めて信服してしまいました。

こうして徐々にでしたが、田代さんの上辺の情報を知っていった僕でしたが、田代さんの本当の厳しさはこの後、いやと言うほど知る事になりました。

とにかく妥協と言う言葉を知らない人なので、ギターからボイスト

レーニングから、常にレベルの高いものを求めてくるのです。

「馬鹿野郎！てめえのそんな糞みたいな音じゃな、人の心を動かしゃねえんだよ！もつと気持ち込めて弾けよ！」

とか、

「はー。お前はカラオケボックスで歌ってたほうが世のためだな。歌ってのは一瞬の音を求めるんだよ。ライブは一回限り！それを、その音を逃したらもう戻ってこないんだよ。レコーディングするんだってな、何回も出来ると思ったら大間違いなんだ！ライブでいい音出せないやつが、いい音録音できるわけ無いだろうが！死んじまえ！」

とか、ひどい言葉を何度も浴びせてきましたが、僕も必死でその期待に答えました。

不思議なもので、田代さんの言われた事を自分で考えて改善していくと、前よりも確かに良くなっていっているのです。それは僕にも分かりました。まあ、その時は本当に殺したくなるぐらいの闘士をむき出しにしていました。だって、ぜんぜん褒めてくれないのですから。まあ、しばらくはそんな調子で、基礎的な、単調な事を繰り返しているだけでしたが、僕にとっては大きな一歩を踏み出す為の事ですし、願っても無い、本物の人に手をかけてもらっていたので、少しも苦にはなりません。何より、田代さんは音楽に関する限り本物の力を持っているのですから、そのパワーの前には従う他は無いです。

そうして二ヶ月もした頃でしょうか、いつもどおり田代さんの家に行くと、スタジオの中三人の若者と一緒に、斉藤さんと田代さんがいました。

「武士！斉藤と話したんだけどな、お前はバンドとして売り出すことにした。俺と斉藤でメンバー見つけてきたから、こいつらと一緒に曲作れ！」

そう言っつて、僕に連れてきた三人を紹介しました。

一人はドラム担当の上村拓也、彼は去年解散したロックバンド「コ

「ロード」のドラムで、僕も雑誌やテレビで何度か見た事がありました。僕よりも少し年上で、三人の中でも最年長でした。ベースは斉藤さんが連れてきた人で、インディーズで活躍していたバンドから引つ張ってきた池内義和、そしてギターは田代さんが育ててきた人らしくて、まだ二十歳になったばかりの九条勇次。

正直、その場では気まずい雰囲気がありました。

何しろ、いきなりでしたので、戸惑ってしまったのです。心の準備くらいさせてほしいのですが、田代さんはいつもいきなりの人でした。それに、上村さん以外はデビューした事もないですし、僕もそうでしたが他の二人も気後れしているのがすぐに分かりました。きっと、皆いきなりここに連れてこられたのでしょう。

しかし、そんな僕達三人の気持ちを察したのか、上村さんから僕達に言葉をかけてくれて、斉藤さんも交えて話していくうちに、何と無く他の三人も落ち着きを取り戻せる感じでした。とは言え、お互いに胸に抱えた動揺は持ちつつ、訳が分からない状態なのは確かで、いったいこれからどうなるか皆不安の色は隠せませんでした。

そんな僕らの気持ちを察したのかどうか、田代さんは大きな声でどやしつけてきました。

「俺が選んだメンバーだ！間違いは無い。ためしに一曲やってみろ！」

そういつて僕らに譜面を渡してきました。それは、最近みっちり田代さんに叩き込まれていた練習曲で、それが少しアレンジされていて、歌詞もついていました。

「田代さん、この歌詞・・・」

これは、僕が田代さんに渡したうちの一つでした。

「まあ、少し使えそうだったから練習用に作ってみたまでだ！別に何でも良かったんだけどな！それより早く用意しろよ！おい！お前らも準備しろよ！曲は事前に渡してあったから練習してあると思うけど、下手な演奏したら承知しねえぞ。一時間やるから音出してみろ！急げ！」

田代さんの喝に、僕たちは急いで準備して、音を出してみました。いきなりのスタートでしたが、僕はこの曲をかなり弾き込んでいたから、特別動揺もしませんでした。なので、スタジオの隅のお気に入りの場所に陣取ると、ギター片手に壁に向かって座りました。そして、リズムを刻みながら曲に自分の歌詞を乗せてみました。メロディーを奏でて譜面を見ながら、声を出して音を合わせていきます。自分の作った歌詞に曲が乗るのは初めてなので、それだけで嬉しくなってしまう。

僕がそうして声を出していると、次第に他の人の音も聞こえてきました。

上村さんはさすがにドラムを叩くとしっくりしていましたが、ベースの池内さんは少し上がっているようで、指が震えていると言うか音が少しぶれているようでした。

しかし、驚くべきは九条君で、かなりハイレベルのギタリストでした。

ギターソロの部分は彼の担当になっていましたが、僕が聞いてもかなり難易度が高い演奏でしたが、彼は難なくやっていました。

思わず僕は振り向いていました。正直、圧倒されたのです。そして、どうやら他の二人もそれは感じていたようです。

「おまえら！」

しばらくすると、田代さんの声が響きました。そして、彼が手を上げて皆を制した後、彼の合図で上村さんがドラムがエイトビートを刻みました。演奏を止めた三人は、中央に集まり、田代さんの顔を見ました。

「いい感じになったら、勇次！お前が音を鳴らしてやり始める！いいか！」

田代さんに言葉に九条君は頷き、僕らの様子を伺いました。

僕は彼の目を見ると、任せるように頷き、すぐに視線を上村さんと池内さんに向けました。すると、二人も準備できたように僕に頷き返してきました。上村さんはリズムを刻みながら、噴出した汗もそ

のままに不思議な笑みを浮かべています。

四人は上村さんのエイトビートに乗りながら、一緒になってリズムを刻んで呼吸を合わせます。すると、九条君がおもむろに体を揺らしながら、エレキギターの弦に手を伸ばしました。同時に、スタジオに彼のギターの音が響きます。そして、それに上村さんのドラムが続き、ベースの池内さんの音が重なりました。僕も自分のギターをかき鳴らして、スタジオに四つの音が重なります。

そして、僕は歌いました。

皆のサウンドが僕を後押しして、信じられないくらい自分の中でテンションが高くなり、それは声に反映されます。僕の熱は、他の三人の熱と混ぜ合わされ、噴出す汗と共にスタジオ中を満たしました。初めてにしては、恐ろしいくらいに気持ちのいい波長が流れ出してきた、それがさらに僕を気持ちよくさせます。それにしても、歌いながらも、九条君のギターには参りました。どんなにやったらこんなになるんだろうと言うくらいに切れがあり、響かせます。それに、上村さんの安定感、池内さんも演奏が始まりだすと俄然乗ってきて、ファンキーなサウンドを出していました。

曲が終わると、斉藤さんが一人、手が千切れるくらいの拍手していました。

「初めてとは思えないな。波長が合ってるし、バランスもいいよ。思った以上と言うか、武士の声も前と段違いだよ」

すると田代さんが、機嫌がいいんだか、悪いのか良く分からない表情を浮かべながら、

「俺が組んだんだから当たり前だ！それより、メシ食いいくぞ！お前らついてこい！」

と言って、一人で部屋を出て行きました。なので、皆慌てて楽器を置くと、初めて音あわせした余韻の浸るまもなく、田代さんの後に続きました。

僕が一番最後にいた斉藤さんの顔を見ると、彼は肩をすくめて首を振ったので、観念して皆の後に続けました。

「お前ら、食え！」

田代さんは皆を近くの焼肉店に連れて行くなり、かなりの量の肉を次から次へと注文すると、勝手にビールを頼んで僕らを圧倒しました。そして、乾杯もそこそこにテールを埋め尽くさんばかりの肉を来た片っ端から焼き始め勝手に肉を焼き始め、ビールを飲み始めました。

「お前ら、腹減ってんだろ！明日から地獄見せてやるんだ。今、肉食つとかないと、死んじまうぞ。ほら、勇次、お前も若いんだからいっぱい食べろや！遠慮すんなよ」

僕と池内さんは久々の肉とあつて、焼き上がりと共に早速箸を伸ばしました。九条君は未成年ではありましたが、勝手に注文されたビールを片手に、おとなしそうに座っていて、上村さんは斉藤さん張りの酒豪なのか、田代アンと帰すかのように、ビールのジョッキを次々と空にしていました。

一度音合わせしたからか、それとも皆の性格か、さつきまでの不安も警戒心もどこへやらで、僕らはそれから色々な事を話し出しました。

上村さんは昔から斉藤さんと知り合いらしくて、その縁で田代さんとも繋がっていたようで、去年バンドが解散した後は田代さんにずいぶんお世話になったようでした。「コロラド」の大ファンであった池内さんが上村さんの事を尊敬していると言いだし（彼は皆より少し早めに酔っ払っていました）、「コロラド」がとにかくすごいと力説するのを僕は軽く交わしつつ、上村さんと肩を組乱して顔を真っ赤にさせる彼はベースの音同様とてもファンキーでした。こんな池内さんは斉藤さんがかなり前から目をつけていた人らしく、彼はすぐく斉藤さんに感謝していました。今田さんと独自で音楽で事を進めようとしたときに見つけた人だと、小声で斉藤さんが僕に教えてくれました。

九条君は田代さんの秘蔵っ子で、彼の友達の息子だと言っています。

たが、親子と思えるほどに、田代さんは九条君のことを可愛がって
いました。何しろ、小さい時からギターを買い与えて育ててきたと
言うのですから、そのつながりは深いものがありそうです。九条君
はあまり喋らなくて、どこか人見知りしている感がありました。が、
僕は彼のギターテクに惚れてしまったので、文句無く好きになりま
した。そのことを彼に言うのと、照れくさそうに笑いましたが、ど
こな自信ありげなようでした。

僕とメンバーの様子を見ていた斉藤さんも、満足そうにしながらピ
ールを飲んでいたので、僕と斉藤さんが知り合っていたいきさつ
を皆から聞かれると、彼は隣にいた僕の顔を見ながら、どこかはぐ
らかすような感じで偶然知り合ったような事を言いました。僕はま
ったく違う事を喋りだした斉藤さんを伺っていました。僕らの計
画の事は彼らに話さない方が懸命だと思っているのを察したので、
僕も斉藤さんの話に合わせて合わせるようにしました。どう考えてもそちら
のほうが懸命です。

なので、僕らの話には三人は納得したように頷きましたが、横目で田
代さんを見ると、じっと僕の方を見ていたので、僕は静かに視線を
そらしました。

もしかしたらすでに斉藤さんが田代さんに話していたのかもしれない
ですが、田代さんの鋭い眼光に見据えられると嘘をつく自分がいや
になりそうですし、隠し事は田代さんがいつも嫌っていることだと
知っていたから、話しかけられたら困ってしまいます。

でも、そんな僕らの話しをしばらく何も言わずに聞いていた田代さ
んでしたが、斉藤さんが長々と僕との作り話をしていると、話して
いる途中にもかかわらず、珍しく口を挟んできました。

「まー、どんないきさつだろうがいいよ。肉が焼きすぎになっちな
うぞ。早く食っちゃえ。いいか、お前らはどんな偶然にしる、俺が
目をつけちゃったんだ。俺がめんどろみってバンド組んだって事は
だな、組んだ瞬間からバンドになってるって事なんだ。分かるか勇
次？お前らもだ！今まさに同じ釜の飯を食ってんのだってそういう

意味なんだ。分かるか？だから余計な事考えずに、みっちりしごいてやるから俺の言うこと聞いてりゃいいんだ」

皆何も言わないで、田代さんの言葉を聴いていました。

そついいながら田代さんはまた焼肉をつつきだしたので、皆もさっきまでのムードもそこに黙々と肉を焼きだしました。

まあ、なんにしる僕は田代さんの言葉にすくわれた感があったのですが、斉藤さんの苦笑いやメンバーの横顔を見ながら、何かが始まる予感を感じていたのでした。

僕らのバンドはそれから毎日のように田代さんの家に行き、音を合わせていきました。いきなり集められたメンバーでしたが、音を合わせる度に不思議なほど呼吸があっていきました。自分達のオリジナル曲はまだ出来ていなくて、田代さんが作っていた何曲かを練習するだけだったのですが、やりこんでいくうちに自分達の波長がどんどん合わさっていくのを皆が感じていました。何しろ、一日中音を合わせているんですから、当然ご飯なんかも一緒だし、家に帰らなくて田代さんの家に泊まっていく事もしばしばでした。まさに音楽漬けという感じでしたが、誰も不満なんて言わなくて、むしろ楽しんでいました。池内さんと僕なんかはバイトもあつたりして、昼間は少し抜けなければならなかったのですが、残りの二人はそのまま残って色んな話を話したりしていたせいか、年の差を感じさせないくらい仲良くなつていて、上村さんが面倒見のいい兄貴、九条君がシャイで無口だけど、兄をよく慕っている弟みたいな感じになっていました。

田代さんは他の仕事をしていないのか、断っていたのかは分からなかったのですが、毎日僕らに付きっ切りになって、あれやこれやいつも通り口うるさく言ってきていましたが、そのせいもあってかぼくらのモチベーションは保たれていたと言えました。

そつじやなきや、とてもやりきれないところがありました。何しろ、ここでバンドを作ったのはいいですが、まだライブも行っていないので誰も僕達の事を知りませんし、デモテープを作るにも自分達の

曲もまだなくて、当然レコード会社の所属にもなっていないのです。楽器から離れると、少しでしたが目の前の道が見えない不安感がメンバーの中でも出てきているようでしたし、僕も同じ心境でした。まあ、僕は目指すべき大きな目標がすっかりと見えていましたし、昔の事を思えば今の方がどれだけに進めているかと思えば、少しは希望を見出せていたので、それだけで幾分楽な気持ちでいられたと思います。それでもまったく不安が無いとは言いませんでした。ただ、上村さんはこのバンドに何らかの予感を感じているらしく、いつも何かと不安を口にする池内さんや、バンド以外にもいろいろなことを思案している九条君の相談なんかを聞いているようでした。さすがは、元「コロラド」のドラマーだとは思いましたが、彼も不安感は一緒らしく、いつだか田代さんにいつ動き出すのか聞いていました。

上村さんのその問いかけはメンバーの気持ちと同じだったので、皆田代さんの答えに耳を立てました。田代さんもみんなの気持ちは分かっているらしく、珍しく口元をゆがめて笑い声でこう答えてくれました。

「まあ、あせんな。俺に任せろって。然るべき時に、然るべき所で俺がデビューさせてやるからよ！そんな心配するより、お前ら曲作れよ！まずはそっからだ。わかったか！」

田代さんはそう言っただけで、僕らを残してどこかに出かけてしまうのでした。残された僕らは、お互い顔を見合わせながら溜息をつくのですが、こればかりは田代さんに任せしか出来ない事なので、黙ってしまっしかありませんでした。

それに、確かに曲作りには難航していたのです。

大切なのは幼馴染！（前書き）

バンドのメンバーも続々登場！

国家ら一気に恥ずかしくなっていくますからご注意を！

大切なのは幼馴染！

僕は詩を作ることだけに専念して、他のメンバーに曲は任せていました。僕もいくつか造っては見たのですが、田代さんを納得させるできればとても無いようで、たいていは池内さんが何度も曲を作ってきては田代さんに効いてもらっていましたが、そのたびにぼろくそに言われて、いつも書き直させられていました。池内さんはそれでもまあへこたれずに頭を絞って、時々風呂場から叫び声をあげながらも、曲作りをしていました。そんな様子を見ていた上村さんは、幾度と無く気分転換に池内さんと二人だけでどこかに出かけてきては、二人でぐでんぐでんになって帰ってきました。

九条君はそんな二人を介抱しないでほおってしまうので、いつも僕が二人の面倒を見なければなりませんでした。

まあ、僕らはそんな日々を送っていたのです。

そうそう、「ラブ・ハンド」の方は、今田さんの力でさらに大きく展開していて、僕のブログを飛び出し、いくつかのサイトに拡大されていきました。僕のブログで使っていたコーナーを、それぞれひとつのサイトとして扱いだしたのです。今田さんが本格的に携わるようになってから、飛躍的にサイトの知名度は上がっていきました。それには「ラブ・ハンドパーティー」の面々の協力があったのは言うまでもありません。少しではありましたが、巷に「ラブ・ハンド」と言う言葉が浸透しつつありました。

「久しぶりに会ったら、ずいぶん様子が変わったねえ」

北村愛子が待ち合わせ場所に来て、開口一番の僕にそう言いました。もうやや冬の気配が訪れていて、街を歩いている人たちの服装も、

だいぶ様子が変わってきていました。寒くなるに連れ人寂しさに襲われたせいもありましたし、曲作りにも少し行き詰っていた僕は、何気なしに北村に連絡を取っていました。

久しぶりに北村と話すと、彼女はすぐに会う約束をしてくれたので、僕はまた駅で待ち合わせをしたのです。

「そうかな」

僕の言葉と一緒に、白い息も口から漏れました。北村は、紫の色のマフラーを首から垂らし、暖かそうなベージュのコートを羽織っていて、黒の同じような生地のスカートを履いていました。北村も白い息をしゃべるたびに出していて、ブーツとスカートの間が少し寒そうだったので、僕はすぐに近くのカフェに入りました。北村は前にあつたよりも幾分髪を短くしていて、可愛らしい耳が少し赤くなっていたのが、隣で歩く僕にも見えて、なんか前と違う印象を感じさせました。

「なんか、若くなった気がするね、それに痩せた？」

彼女はカプチーノを注文しながら、そう僕に言ってきました。

僕は池内さんの服を借りてここに来ていて、彼のコーディネートとそのまんま受け入れて出掛けて来ていました。池内さんは相当なおしゃれ好きで、お金もあまり無さそうなのに色々服を持っていたので、なにぶんお金の無かった僕は事あるたびに彼に服を借りていました。池内さんがどこで見つけてくるのか分からないのですが、彼の服のセンスはかなり良かったので、気前のいい彼に甘えていたのです。まあ、僕も田代さんにいわれてからシェイプアップと筋トレにかなり励んだおかげで、彼の服のサイズに体を収められてきたこともあるのですが。僕は注文したダブルのエスプレッソを受け取りながら、彼女の顔を見ました。隣で待っている彼女の横顔を改めて見ていると、化粧のノリが良くないのか、化粧を厚めに塗っているせいなのか、少し疲れているように見えました。どこか満たされて無い雰囲気があって、僕は幾分心配になりました。

「仕事は順調なの？」

僕がそう言つと、北村はさつとこちらを向いて、少し間を置きました。

「まあね。まだ、ピアノ教室でバイトの身だけどね」

彼女の目は少し空ろい気味で、どこか力無さげに僕を見てきました。すると、ちょうどカプチーノをカフェの店員に渡されたので、彼女はそれを受け取るとすぐに、フロアーのテーブルに向かったので、僕は少し気まずさを感じながら、彼女に付いて行きました。

「それより、あんたの方はどうなったの？あれから結構経つたけど、まだ馬鹿な事を頑張つてんの？」

少し意地の悪い言い方をして、彼女はカプチーノのミキシングされた泡の部分の口に含みました。そうしながら、コーヒーカーップに口をつけると、目は僕の方を伺っています。

今日の北村はなんか機嫌が悪そうです。

「おお、なんか思いもよらない感じになってさ。すごい事になりそうなんだ。何しろ・・・」

僕が今まで起きた事を喋ろうとすると、いきなり彼女は言葉を挟んできました。

「はいはい。いいつて、いいつて。久々に私に会つたからって、そう強がらなくても。どうせうまくいってないんでしょ？」

「いや、だからさ。まあ、なんて言うか、今は少し行詰まっでは入るけど、ずいぶん進んだ・・・」

すると、また言い終わらないうちに北村は僕の顔の前で手を振りました。

なんか馬鹿にしたような顔をしながら、僕を見えています。

「何んだよ」

「分かつた、分かつた。どうせ大した事にはなつてないんでしょ。あんたの事は小さい頃から知ってるんだから、顔を見ればなんとなく分かるんです。で、どうしたの？お金でも必要になった。あんたの事だからギャンブルって訳じゃあ無さそうだけど、はつきり言つてみなよ。いや、私が言つてあげる。ずばり、変な女に引つかかっ

て、だまされて変なものを買わされたんでしょ！最近よくあるもんね。ローンとか組まされてさ、寂しさにかられてそんな女になびいたあんたが悪い。まあ、頼れるのは私くらいしかいないものね。で、いくら必要なの？金額によつては相談に乗らないでもないよ」

北村はそう言つて椅子の背もたれに寄りかかると、疑うような、可哀想なものでも見るような目で僕を見てきました。僕は啞然としながら彼女が言い終わるのを聞いていましたが、あまりの突拍子も無い彼女の推察に怒りよりも、おかしさが込み上げてきました。

「何言つてんだよ、お前は？」

すると、彼女はテーブルに肘をついて、僕の方に顔を寄せてきました。

「この前おばさんと話した時、最近ぜんぜん連絡が取れなくて、武士が何をしてるか分からなくて困るつて言つてたんだから。おばさんには内緒にしとくから、言つてみなさいよ」

「お前、まだうちのお袋と連絡取つてんのかよ？」

「何、悪い？私は女としておばさんを尊敬してるだけで、あんたとはまったく関係ないわよ。おばさんはすごいいい人だし、相談も乗つてくれるし、大人の女性として目標になる人なの」

その言葉に、僕は口に含んだコーヒを噴出しそうになりました。

「大人の女性？！お袋が？」

北村は目を尖らせています。

「まあ、あんないいお母さんから、あんたみたいな馬鹿息子が生まれてきたのが信じられないけどね。おばさんに対する神様からのハンディよ、あんたは。上の二人のお兄ちゃん達はちゃんと結婚して、綺麗なお嫁さんもらつて立派なのにな！」

「兄貴達と俺とは関係ないだろうが！それに、ハンディつてどういうことだよ！なんで・・・」

「あんたの所のおばあちゃんも、あんたが立派な料理人なるのを見届けないうちは死ねないつて、いつも言つてるんだよ。知つてた？」

「うーん。頼むから、ばあちゃんの話はするな。それより、何だ。」

お前こそどうなんだ？なんか疲れてるようだし、何かあったんだろ？」

僕がそう返すと、北村は口をつぐんで、静かになってしまいました。僕はこの隙に形勢逆転しておかなくてはと思い、北村が口を開く前にしゃべりだしました。

「俺だって、昔からお前の事知ってたから、すぐに察しちまうよ。いつもより苛立ってるし、何か違うもん。どうしたの？小田切さんに言ってごらんよ」

彼女は少しむすつとしながら、またカプチーノをすすりました。

「別に。あんたには関係ないじゃん」

「まあ、そういうなって。俺は心配なんだよ、お前の事が。俺の方は、徐々にだけど進んでいるんだ。かなりの人の協力も得られてきているし。ここじゃあいえないけど、お前も聞いたら、まじびっくりして越し抜かすような人と一緒に作業してるんだ。それに、今俺はあれだ、バンド組んで活動しよう準備中なんだ」

僕の「バンド」と言う言葉に、彼女は敏感に反応してきました。

「バンド組んでるの？あんたが？嘘でしょ？」

「嘘じゃないよ。見ろよ、指にタコ出来てるだろ。マジ、ギター弾き過ぎつてくらい、練習したらこうなっちまったんだ。ほら」

僕は北村の目の前で右手を広げました。

「信じられない。あんた楽器なんて弾けたっけ？見た事無いよ」

「お前の知らない俺だっているんだよ」

「そんな事言ったって、あんたとギターの組み合わせって」

「ギターだけじゃないよ。ボーカルも俺なんだ」

北村が目を丸くして僕の方を見えます。

「あんたが歌うの？！昔から声だけは大きかったけどさ、学校の合唱じゃないんだから、大声出せばいいってもんじゃないんだよ」

「いつの話だよ。ちゃんと、ボイストレーニングだっているし、田代さんっていう音楽プロデューサーにもついてやってるんだから。そりゃ、毎日怒られっぱなしだけだよ」

「音楽プロデューサーって、あんた騙されてるよ。間違いない。いくら払ってるか知らないけど、すぐに辞めたほうがいいよ。絶対騙されてる」

「お前な、俺の事はいいけど、田代さんの事そんなインチキ臭く言うのは許せないぞ。あの人はスゲー人なの」

「だって、信じられないもん」

「何！あつそう！じゃあ連れてってやるよ。嘘じゃないから。そんなに遠く無いから、今から一緒にスタジオ行こうぜ。俺もそこまで言われると、腹立ってきた。ちゃんと見せてやるから、付いて来いよ。見ればお前も納得すると思うから」

僕はそう言っただけで立ち上がりました。そして、彼女の腕を少し乱暴につかむと、困惑気味の表情を浮かべる彼女を立ち上げさせました。すると、彼女は僕の手を乱暴に振り払うと、椅子の上に置いてあったバックを手に持ちました。

「いいわよ。連れて行きなさいよ。ちゃんと見てあげるから」

僕は頷くと、何も言わずに彼女を連れて店を出て、駅に歩いてゆきました。

田代さんのマンションは地下鉄の駅から少し歩いた場所にあつて、近くに有数の繁華街があるにしては静かなところがありました。待ち合わせた場所の駅からすぐだったので、僕らは電車の中でも、駅から出て田代さんの家に向かう間も、一言も口をきかないでいました。あまりに自信満々な僕に、北村も呆れて言葉が出なかつたのか、やはり、どこか得体の知れない場所に連れて行かれる不安感があつたのでしょうか。

どちらにしろ、田代さんのスタジオに行けば、北村だって僕の言っている事を信じてくれるはずです。

ただ、今日は久々のオフの日だと決めていたので、メンバーは誰もいない可能性が高かつたのですが、田代さんはいるだろうと思いな

がらマンションの前まで歩いていきました。そして、いつもどおりその中に入るうとする、入り口で北村が立ち止まったので、僕は立ち止まって振り返りました。

「ここなの？」

少し不安そうな口ぶりで、彼女はそう言うので、僕は安心したように彼女の手を引きました。

「ここだよ。入れよ」

すると、彼女は心配そうな目を僕に向けながら、かなり背の高いマンションの上のほうを見上げていましたが、素直にエントランスまでついてきました。

インターホンの前に来て、田代さんの部屋番号を打ち込むと、しばらくしてから九条君の声が返ってきました。

「あ、勇次？ 武士だけど、開けてくれる」

僕がそう言うなり、自動ドアが開きます。僕はすかさず少し離れて後ろにいた北村を手招きしながら、エレベーターまで歩いていきました。彼女は不安そうに周りを見回しながら、自動ドアが閉まらないうちに、僕の所まで駆け寄ってくると、そのままエレベーターに乗り込みました。

「すごいマンションね」

エレベーターの中で北村は小さな声で独り言のようにそう言いました。

僕は北村の顔を見下ろしながら、ちよつと口を緩ませました。

「そうだね。ちよつと緊張するよね、初めは俺もそうだった」

「ふーん。そうなんだあ・・・」

彼女は僕から目をそらしました。

「田代さんだけかと思ったら、九条君って、ギターの子なんだけど、彼もいるみたいだ。まあ、二人から話を聞けば、お前も納得すると思っよ」

彼女は少し間を空けた後、黙って頷きました。

エレベーターが最上階に着きアナウンスと共にドアを開くと、すぐ

に部屋からギターの音がもれているのが聞こえてきました。スタジオ
オは防音設備が整っているのです。ほとんど音は聞こえないのですが、
リビングで音を出していると良く漏れ出す事があるので、たぶん九
条君がソファアの上でギターを弾いているのでしよう。

ただ、最上階のワンフロアすべてが田代さんの持ち物なので、ド
アを開けっ放しで音を出しても誰も文句を言ってくる人はいません
でしたし、良くあることでした。

「誰かが弾いてるね」

北村は僕の顔を見上げて、バックを力強く握り締めていました。

「九条君だよ」

僕はそう言っていると、インターホンのボタンを何度も押しました。
たぶん、少し時間がかかるかなあ、と思っていると、すぐにギター
の音がやんで、九条君がドアを開けてくれました。

「おう」

と、僕が言っていると、彼はいつも通りすぐにリビングに戻りかけたので
すが、すぐに振り返って僕の後の方に目を奪われると、固まったよ
うに目を見開きました。

僕は北村を玄関の中に誘い入れると、彼女を九条君に紹介しまし
た。

「あつ、こいつは幼馴染の北村って言うんだけど、こちらは九条君
ね。何か、俺がバンドやってるっていうのが信じられないみたいだ
からさ、見せてやれば信じると思って、連れてきちゃった」

彼は僕の言葉を聞きながらも、目はずっと北村に向けていました。

「あ、九条です」

そう言っていると、彼は北村に頭を下げました。

「北村愛子です。すみません、練習中のところを」

北村が何かかきこまった感じでそう言っただけで挨拶すると、九条君は慌
てたように手を顔の前で振りました。

しかし、北村の声の変わりようは凄いものです。

「ぜんぜん。あつ、入ってください。あの、寒いし」

「田代さんいないの？」

僕は靴を脱ぎながら、田代さんの靴がないことに気が付きました。

「たーさんは出かけてますよ。午前中に僕が来たら、入れ替わりみたいに出かけていきましたよ」

「ふーん。田代さんは最近家にいない事多いもんな。何してるか知らないけどさ。池さんは仲間とツーリングだつて言ってたけど、拓さんは今日来るかなあ。来ないか、休みだもんな」

僕が九条君の横を通り過ぎ、リビングに続く廊下を歩いていくと、彼はブーツを脱ぐのに手間取っている北村を待っていました。

「勇次？」

僕がそう問いかけると、九条君は慌ててこっちに来ました。

「二人とも夜に来るかもとか行つてたけど、どうかなあ。それより、何かお茶とか入れたほうがいいかな？その、コーヒーとかの方がいいかな？」

「そうだねえ、まあ、別に入れなくていいよ。幼馴染だし」

「そう」

僕がリビングに続くドアを開けると、九条君はいそいそとキッチンに向かつて行つてしました。

すると、後ろからやつとブーツが脱げた北村が入ってきて、リビングに入った瞬間、観声を上げました

「あっー、すごい眺め！」

彼女はそう言うと、僕が初めてこの部屋にやってきたように、吸い込まれるように窓のそばまで駆け寄りました。

「武士、すごいよ！下に走ってる車が小さく見えるよ！海も見える」
北村ははしゃいだ様な声を出して、窓を前を行ったりきたりしていました。

僕はもう見慣れた風景でしたので、彼女にかまわないでソファアに座りテレビのリモコンを操りました。田代さんの大画面の液晶テレビは、自分の家では見られない迫力を僕にもたらしてくれず。

何時だかの夜、四人で上村さんが持ってきたエロDVD鑑賞したの

が思いでされましたが、今はニュースが流れていました。

「武士？」

北村が怒ったようにそう言ってきましたが、僕がテレビを見ていると分かれると、彼女は音を立ててと僕の隣に座ってきました。

「あの、紅茶入れたんだけど、あの、ミルクとか使いますか？」

そう言つて、九条君は紅茶を入れてやつてきました。

「わあ、素敵。ありがとうございます」

北村がそう言うと、九条君は照れたように顔を真っ赤にして、黙つてまたキッチンに戻っていきました。そして、今度は深皿にクツキーやチョコレートを入れて戻ってきました。

「まあ、美味しそう。九条さんつてよく気が付きますねえ、武士と違つて。いただきます」

「そりゃ、どう言う事だよ。こんなやつにお茶出す必要のないのに。でも、ありがと、勇次」

九条君はなぜか顔を赤らめながら、微笑みながら北村を見ていました。

北村も僕と話すのとは違つたトーンで九条君に話しているので、僕はまったく女の切り替えの速さは、と思ひながらカップを持ち上げました。

「九条さん、こいつから聞いた時は信じられなかったんだけど、ほんとにバンド組んでるの？」

唐突に北村が口を開きました。

九条君は北村のほうをしつかりと見ながら頷きます。

「本当ですよ。武さん、マジですごくいい声してますし、他のメンバーだって皆すごい人達なんです。まだ活動らしい活動はしてないんですけど、近いうちにたーさん、あつ、田代さんつていうプロデューサーがデビューさせてくれますから」

「まだ未定だけどね」

「でも、たーさんそのために最近動き回ってるんですから」

「そうなの。遊びまわってるうじゃなかったの？」

「違いますよ。武さんが思う以上に仕事にはまじめな人なんですから。それに……。まあ、僕らが曲作らない事には始まりませんけどね」

九条君はそう言うと、ひとつため息をつきました。

「九条さんってギター担当なんですよ？」

「あ、あの、勇次でいいですよ」

九条君は顔を真っ赤にしてそう言うと、紅茶のカップをテーブルの上において、立ち上がってスタジオの方に歩いていきました。

北村は嬉しそうに彼を目で追っていて、途中で僕と目が合うとはにかみました。

「彼、可愛いじゃん」

僕はなんと言っていていいか分からなかったのでほったらかしていると、九条君がアコースティックギターを抱えて戻ってきました。そして、彼は一つ咳払いすると、おもむろにギターを引き始めました。

部屋にギターの音が響き渡り、誰もが聞いた事ある七十年代のギターリストの名曲が、僕らの目の前にいる九条君の指から紡ぎだされま

す。

そして、僕と北村の鼓膜を心地よく振動させました。北村は聞き入っているようなのが、静かに目を瞑りました。それを見たのか、九条君はいつになくうれしそうに弦をはじかせています。なんだか、この場にいちやいけなない雰囲気なのか？と僕が思う前に、九条君がその曲を弾き終わると、すかさず北村が手を叩きました。

「すごい！勇次君プロみたいだよ。ほんと上手だね。聞き入っちゃったもん」

北村の言葉に、彼の顔が紅潮していくのがよく見て取れました。

「ホントこいつはすごいんだよ。ちっちゃい頃から田代さんに仕込まれていた事はあるよ」

「いや、まだまだですよ」

そう言つて、彼は肩にかけていたギターを下ろしました。

「そうだ、北村もピアノ弾けるんだよ。高校の時、吹奏楽部でトラ

ンペットも吹いてたし。第一奏者だったよな、たしか」

僕の言葉に、北村がすつとんきよな声を出しました。

「そ、そうだけどさ。勇次君ほどうまくはないよ」

九条君は前のめり気味に、顔を上げました。

「北村さん、楽器出来るんですか？」

九条君の言葉に、北村がはつとしたような顔になりました。

「そうなんだよ。今も子供達ピアノ教えてるんだよ。なあ？そうだ、ちよつと弾いてみるよ」

僕が面白がるようにそう言うと、北村怒ったように僕を睨んできました。

信じられない！馬鹿！と顔に張り付いています。

「それ、いいですね！僕も聞いてみたいです」

九条君が、やや興奮気味に僕の気まぐれに乗ってきました。案の定、北村は困ったような顔をしながら、あんた余計なこと言わないの！とでも言いたげに僕の顔をまた睨んできます。

僕は彼女が嫌がっているのは察しながらも、面白くなってきたので彼女を煽りました。

「いいじゃん。勇次もこう言ってる事だし、向こうにグランドピアノがあるんだ。よし、お前が弾いてくれたらそれに合わせて、俺も歌ってやるよ。おお、何か面白そうじゃん！」

「いいよ。恥ずかしいもん」

「いいじゃん。減るもんじゃなし。俺もお前のピアノ聞いた事ないもん。」

「ぼ、僕も北村さんのピアノ、ぜひ！聞きたいです」

そこまで言われて根負けしたのか、九条君がなにやら熱をこもったような目で北村を見たせいか、北村はしぶしぶ頷きました。

なので、九条君は万弁の笑みを浮かべながら立ち上がると、北村を隣のスタジオの方に手招きしました。

それに促された北村が、僕を見ながら立ち上がったので、僕がすかさずウインクしてやりました。すると、あろう事か彼女は僕の脛を

思いっきり蹴ってきました。突然の衝撃に僕がもたえているのを尻目に、北村は九条君の後に続いてスタジオに入っていました。

「すごい！マンションの中に、こんな立派なスタジオがあるなんてあつ、グランドピアノ！教室にあるのより、ぜんぜんすごいやつじゃない」

むこうで北村の甲高い声が聞こえてきます。

僕は足を擦りながら、スタジオの中に入って行きました。

グローバル・O・グライダー（前書き）

本当にこんなバンドはいませんよ。

調べても無駄ですぜ

それよりも、御恥ずかしい限りですけど、若気の至りで許しても
らいたいです。

ああ、表現者としては駄目ですね。

グローバル・O・グライダー

グランドピアノを目の前にした北村の目はつきつきしていて、まるでゲーキを前にした子供のようでした。

「座って弾いてみなよ」

九条君が北村をピアノのそばで招き入れると、北村はすんなり椅子に座って、おもむろに蓋を上げました。そして、僕らの顔を交互に見ながら、屈託のない笑顔を向けると、静かに弾きだしました。

北村の細長い白い指が鍵盤の上で動き出し、両手がリズムに合わせて踊りだすとスタジオにピアノン旋律が駆け巡りました。モーツァルトのピアノ曲「トルコ行進曲」でした。

正直、僕はびつくりしました。

北村が昔から吹奏楽をしていて、音大でピアノを専攻していたとは知っていましたが、こんなに弾けるとは思わなかったのです。

彼女は顔を高潮させながら、真剣な表情でピアノを弾いていました。しっかり音楽を学んできている者の音がしています。

横にいる九条君を見ると、見た事のないような真剣な表情で北村を見つめていました。

北村が弾き終わると、彼はそれは大きな拍手をして、ピアノの傍に歩み寄りました。

「なんて言っただい、クラシックだね。何か、新鮮だよ、北村さん！武さんもそう思うよね！」

九条君にそう言われて、北村は照れくさそうに笑っていました。

僕はと言うと、何故か少し悔しい気分になっていて、複雑な気分でした。それは、自分が今や真剣になって追い求めている事を、彼女が簡単に出来ている事が心の中で認められなかったのかもしれない。

まあ、彼女はずっとそれを勉強してきた訳で、決して簡単に習得したのでは無いのですが、僕にとってはいきなりだったので、まさし

く衝撃的でした。それに加えて、今になって北村つてもしかして結構すごい？何て重いが頭に浮かんでできてしまったので、僕は慌ててそのもやもやをかき消し、冷静さを取り戻そうとしました。

「そのなんだ、北村、お前、結構出来るじゃん」

僕が強がってそう言つと、北村は一つ息を吐いて、なんでもないのでように肩をすくめました。

「まあね。あんたはぜんぜん知らなかっただろうけどさ」

そう言つて、彼女が笑つと、九条君がおもむろに口を開きました。

「あの、ちよつといいかな、武さん」

「うん、どうしたの？」

「あの、ちよつと聞いてほしいんだけど。僕の曲。何か今弾きたくなつちやっただ。き、北村さんも聞いて下さい」

そう言うなり、九条君は急いでエレキギターを準備して、ギターにコードを差し込みアンプの電源を入れました。北村もピアノから立ち上がり、こちらに来ました。

「九条君の曲？聞かせて、聞かせて！」

北村は興味津々の様子で、僕の隣にきました。

「俺も聞きたい」

まさか、九条君が曲作ってるなんて知りませんでした。皆に気が引けていてのか知りませんが、彼はそういう事はあまり言つてこなかったたので、もちろん初めて聞くことになります。

「歌詞は、この前、武さんが書いてきたやつを元にしたんだ」

「武士が詩を？それは気になるなあ」

北村がそう言つて僕の顔を覗き込みます。

「うるさいな。黙って聞いてろよ」

僕はそう言つて、九条君の方に向き直り、彼が弾き出すのを待ちました。

すると、彼は一呼吸おいた後、ゆっくりと演奏し始めました。

* 偉い人が言っていたっけ 時間は流れるように去っていく

時間は走っていくみたいに過ぎていくって

だから僕は走ってみたんだ　いつもただ歩いている道を
息を切らして走ってみたんだ

偉い人が言っていたっけ　人生は上を向いて歩いていこう
弱虫みたいに下を見て歩いて行くんじゃないって

それを知りたくて走ってみたんだ　これからと言う長い道を
この先に何があるかを　この目で見るために

ああ　上を向いて走るでもなく　ああ　下を向いて歩くでもなく
そう　ただ遠くを見て進んでいくんだよ

ああ　遠くの光　追いかけてさ　ああ　全力で走ってみたらね
ちよっとだけなんか　わかった　わかった　気がしたんだ

僕は曲を聞いた後、すぐに椅子から立ち上がりました。

「譜面あんのか！」

九条君はびっくりしたように僕を見ると、近くにあった譜面を僕に
渡しました。まだドラムとベースの音は書き込まれていませんでし
たが、ギターの旋律とメロディーは書き込まれているようでしたの
で、僕はそれを一通りそれを見ると、自分のギターにコードを差し
込んで、音を出しました。

そして、九条君を見ました。

「俺が歌うよ」

僕がそう言うと、九条君は黙って頷きました。

曲を聴いたとたん、僕はもう痺れていました。

自分の詩に、こんなメロディーが付くとは思ってもありませんでした

し、一瞬でこのメロディーに惹かれていました。もう、歌いたい気持ちが高まってしょうがないのです。

音を出す前に歌詞が一瞬で頭をめぐり、僕は一息つきました。そして、九条君に合図すると、彼はギターをかき鳴らし、僕もそれに続けて歌いだしました。

九条君のメロディーに乗って、僕の声がスタジオに響きます。初めて聞いたこの曲が、不思議なくらい僕に染み込んで来て、自然に僕も気持ちが高ぶってきました。多少間違えたって気にもならず、気持ちがこもった声が出てきます。

それに、サビの部分のメロディーが、僕の心の深い場所にあったマグマが、歌詞とごちゃ混ぜになりながら噴出してきて、僕は涙が溢れそうになりました。

曲が終ると、北村がもう声を上げて拍手してきました。

そして、歌いきった僕が額の汗をぬぐいながら彼女を見ると、もう一つの拍手が重なってきました。

「田代さん！」
スタジオの入り口のドアに寄りかかりながら、田代さんが大きな音を立てて、僕らに手を叩いていました。

九条君も田代さんを見ていて、振り返った北村は反射的に立ち上がりました。

「おい！誰の曲だ！勇次か？」

大きな声で田代さんが言うのと、九条君が恐る恐る頷きました。

「おい！……いいじゃないか！鳥肌立ったぞ！それに、武の感じも良かった。お前、あれを忘れるんじゃないやねぞ、分かったか！」
田代さんは嬉しそうに笑いました。

「よし！池や拓也、今すぐ呼ぶぞ！そうだ、斉藤にも連絡しとくか。よし、早速……。うん？そちらの譲ちゃんは？」

田代さんにそう言われて、北村がぎこちなくお辞儀をしました。

「北村と申します。武士の幼馴染で……」

すると、田代さんは慌てて大きく腕を振って、話をさえぎりました。

「OK! OK! 俺は他人の女の事には口出ししない主義なんだ」

「いや田代さん。こいつはただの幼馴染で・・・」

「いいつて、俺は急がしいんだ! それは後で聞く。こうしちゃうられねえなあ」

そう言つと、田代さんはリビングの方に戻っていきました。

いきなりの事に僕と九条君はお互い顔を見合わせながらも、にやりと笑つと、その場で腰掛けました。

「そう言えば、あんた達のバンド名ってなんて言つたの」

唐突に北村が聞いてきました。

僕は北村の方に振り向き、そして、九条君を見ました。

彼はにやりとしながら、僕を見他跡に、彼女を見ると、僕らは持っていたギターを同時に鳴らしました。

そして僕は言いました。

「グローバル・O・グライダー! 覚えておきな、愛子ちゃん!」

メジャーデビュー（前書き）

いやーこんな事ってあるんですね。

大丈夫なんだろうか　しかし、敏腕プロデューサーだなあ。

こんな人の近くにいたいよー

メジャーデビュー

「さあ、今日もどんどんリクエストを受け付けるよう。皆、どしどしメールを送って下さいね。じゃあ、今日の一発目をいってみよう！最近やたらにリクエストが増えてきた期待の新星！ドラマのタイアップから火がついた、赤丸急上昇中のバンド！『グローバル・O・グライダー』で『スーパード・サウンド』！轢きつけられるボーカル武士の声を聞いてくれ！」

レコード会社に向かう車の中で、いつものDJの流れた後に、僕らのデビュー曲が流れてきました。

連日、各メディアで、何度も、何度も流されている僕ら名前でしたが、未だに聞きなれない感じでした。自分のバンドの名前を聞くと胸の奥を、見えない手で擦られたようになるのです。

隣で寝ている九条君のいびきに混じって、僕らの歌が流れてきます。上村さんと池内さんと言うと、僕らの後ろの席で北村となにやら話しているようでした。自分達の曲が流れても皆が騒がなくなったのは、もう慣れてしまったからでしょうか？夕方の渋滞に捕まった車はゆっくり進んでいるようで、運転してくれている僕らの担当マネージャーの漆原さんが、肩越しに僕を見てきました。彼は僕らの曲のリズムに合わせて肩を揺らして、目と口元をにんまりさせるとまた前を向いてアクセルを踏み込みました。助手席にいる斉藤さんは夕日をまぶしそうに、しかめ面しています。

僕はカーテンの隙間に見える外の風景を見ながら、いつの間にかうとうとしてきたのですが、そうこうしていると、色々な事が思い出されてきました。

北村が田代さんのスタジオに来た日の夜、上村さんや池内さんも集まって早速、曲を作り上げていきました。

あの曲の題名は「遠くの光」。僕の素直な気持ちを書いたものでした。

僕と九条君がそれを皆の前で演奏すると、それぞれのパートを、その場であれやこれやと二人が足していき、それを田代さんの感性が纏めていきました。そんな僕らは、朝方まで眠気も感じさせないくらいに音を鳴らしていき、そして、一つの歌を完成させていったのです。正直言つて、僕らの曲を田代さんも巻き込んで、ここまで煮詰めたことをありませんでしたので、異常な興奮がありました。そうだからか、うまく音が重なって出来上がっていくのが手に取るように分かりましたし、いつにない集中感と結束力がバンドの中で起こっていたと思います。いつもは自分の曲ばかり弾きたがる池内さんも、この曲を聴いてからはめったに見た事の無いいまじめな顔つきでベースに向き合っていましたし、後で分かったのですが、九条君の曲作りのアドバイスをたびたびしていた上村さんは、前から作っていたんじゃないかと思えるくらいのアレンジをしてくれました。そして、何故か北村も帰らないで付き合ってくれて、田代さんの家の台所を借りて夜食を作ってくれました。

僕が明日仕事じゃないのか？と言つても目を輝かせてこう言つたのでした。

「こんな瞬間に、帰れる訳無いじゃない！いいからこう言う事は任せよ！」

しかし、何かを作り上げられていくときと言うのはどうしてあんなに時間が凝縮していくのでしょうか？

そして、どうして皆の力が合わさり波長が合った時、今まで全然出来きなかったものでも、あんなにも早く仕上げられるのでしょうか？これも田代さんの人を見る目なのか、僕らの力なのか、やっぱり偶然なのか、部屋中に冬の柔らかな太陽の日が差し込んでくる頃には、

僕らの初めての曲は完成していました。

もうすでに田代さんも北村も眠りについていて、深夜遅くに加わった斉藤さんと僕達四人は、斉藤さんの差し入れの缶コーヒーで朝の乾杯をしました。眠気と疲労感が不思議と笑気に変わっていき、やや乗りきれていない斉藤さんを残して、四人の不思議で不気味な大笑いが響き渡ると、笑い疲れた者から順に、その場に寝転んでいきました。

それからの曲作りは、面白いように進んでいきました。

九条君が曲を書き出すようになり、皆でそれを膨らましていく形に落ち着くと、歯車がかみ合ったようにスムーズに動き出したのです。九条君の音楽センスや曲は今や誰もが認めているので、池内さんも自ら「このバンドの曲は勇次じゃなきゃだめだ」と言って自分の曲はすべて引っ込めてしまいましたし、九条君自身がその気になって前と比べたら別人になってしまったと言ってくらい積極的に自分の曲を作ってきました。そして、それらの曲は完成度が高くて、どれもこれも僕らの心にピンピン来るものばかりでした。

そんな九条君でしたが、曲と同時にバンドにもたらしたものがあって、それがなんと北村でした。それまでそれほどバンドの運営なんかには口を挟んでこなかった九条君が、あの次の日に、田代さんに彼女をバンドのメンバーにいれる事をお願いしていたのです。

まあ、お願いと言うか、あれはもう脅迫に近いものがあったと思います。

何しろ、北村が入らなければ、バンドを辞めるとまで言っていたのですから。

でも、始めからいきなりの全力投球の九条君の言葉に、田代さんは戸惑いも見せずにこう答えました。

「そうか、いいぞ。なんだか知らんが、ピアノが出来るんなら、あの譲ちゃんにはピアノか、キーボードやらしてみよう。お前がそこまで言うなら、俺はかまわんぞ。」

こうして、プロデューサーの承認はあっけなく取れてしまい、その

様子を聞いていた僕ら三人も別に依存はなかったもので、流れるままにそれに頷き、拍子抜けしたような九条君が急にいつになく明るい声ではしゃぐのを見ていました。

きつとまだ本人の了解なんて取れてないだろうに、と思っていた僕でしたが、九条君が機嫌よくギターを鳴らしているのを見ると、声もかけずらい感じでした。

大体北村は加わるはずない、彼女を昔から知っている僕は、他の二人にそう言っていました。

しかし、あるうことが北村はあっさりOKしてきました。

それも、僕がその事を彼女に言うより先に、自分から田代さんの所にまた連れてってほしい、と言ってきたのです。

僕は意外な展開にやや驚きながらも、彼女を田代さんの家に連れてゆきました。そして、彼女の登場に驚きと嬉しさを交えた九条君にメンバーとして遺書にやっていきたいと誘われた彼女は、何か当たり前みたいに返事してきたのです。

それが言いすぎなら、待ってましたと言うか、私も一緒にやってみたいと言うか、そういう感じのノリで、北村が加わることになってしまったのです。

僕にしてみれば幼馴染がバンドに加わるのには抵抗がありました。

しかし、結果的にはそれでバンドは良くなったと言えました。九条君の曲も、北村のせいかどうか、今まで潜んでいた天才的な感性もあらわになってきましたし、しばしば彼が暴走気味になる時も、彼は彼女と話していると落ち着くようでした。

そんな二人に刺激を受けたのか、池内さんも田代さんの琴線に触れるような曲を書き出してきましたし、僕も以前よりも密な関係になった九条君と、色々話しながら詩を作っていくことが出来たので、曲の完成度が以前より高くなっていきました。

そんな皆を上村さんが大きくまとめられて、田代さんがケツを叩いてくれたのです。

こうして、小さな歯車がうまくかみ合い、大きな歯車を動かす、機

械が動き出すように、僕らのバンドの音は構築されていきました。そして、大方の曲が出来上がり、田代さんのスタジオでそれらを録音した二日後の事でした。

その日、朝早くから出かけていた田代さんから、スタジオに電話がかかってきました。僕が電話に出ると、田代さんのいつもの声が響いてきました。

「あつ、武士か？俺だけどな、近々デビューする事になったから、皆に伝えてくれ。夜には帰るから」

淡々と報告口調で話してきた田代さんの声と話の内容のギャップに、僕の脳はしばらくうまく歯車が合いませんでした。

「え？デビュー？」

僕はすつとんきよな声を出してしまいました。

「ああ、それと、レコード会社も決まったからな。クリスタルレコードだから。そう、上村に言っといてくれよ」

田代さんのいつものだみ声が、ずいぶん落ち着いた感じで聞こえてきました。

クリスタルレコード？何？あのクリスタル？

僕の混乱は増していく一方です。

そんな僕が何も言葉に出来ないでいると、田代さんは話を続けました。

「とりあえず、そう言う事だから。じゃあ、夜にな！」

田代さんはそう言うと、僕が何かを話す前に電話を切ってしまいました。

なので、僕は受話器を片手に持ったまま、しばらく何も考えずにいたのですが、後ろからメンバー達が近寄ってくるのが感じられたので、後ろを振り向きしました。

僕がしばらく戻ってこないの、何が起こったのかと見に来たメンバー一人一人の顔を見回すと、皆不思議そうな顔をして僕を見返してきました。

なので、僕は引きつったような笑顔で、声を出しました。

「俺らデビューするって。決まったって！」

僕の言葉がメンバーに伝わると、見る見るうちに表情が変わっていき、お互いの顔を見合わせながら、頭が理解していくと共に大声を上げていきました。

北村の切り裂くような叫び声に、僕や池内さん怒号が重なり、上村さんの大きな笑い声が包み込みます。九条君もいつもは見せないはしゃぎようを隠しもしないで、僕に抱きついてきました。そして、僕は所属会社がクリスタルレコードだと言うと、池内さんと九条君は、一瞬動きを止めた上村さんを見るなり、さらに声を上げました。当の上村さんは、信じられない顔をしながら僕の顔を見ました。クリスタルレコードは、「コロラド」の所属レコード会社だったところで、ボーカルと会社の意見が食い違ったために、その事務所にあこがれて残りたかった上村さんも含めメンバー全員が契約解消になってしまった事が、バンド解散の原因だと聞いていました。クリスタルレコードは大手だし、上村さんの話を聞いていた僕らは、彼がやるならまたクリスタルで、という気持ちを知っていたので、嬉しくて仕方ありませんでした。

「これで、やっとスタートが切れるな」

上村さんの言葉に、僕らは力強く頷きました。

「しかし、いつもの事だけど、田代さんもいきなりだなあ」

池内さんがはしゃいだ声でそう言うと、九条君が一人浮かない顔をしながら口を開きました。

「いきなりじゃないよ。たーさんはずっと前から準備していた。ほとんど曲待ちだったんだ。根回しから、なにやらずっと一人でやってきていた。前からあまり顔を見てない日がよくあっただろう。あれはそのためさ。それに……」

九条君は歯を食いしばって、下を向き、そしてゆっくりと僕らの顔を見てきました。

「たーさん。……たぶん、病気なんだ」

九条君は無理やり引っ張られてきたように、言葉を吐き出しました。

その言葉に、僕らはさっきまでの浮かれ気分を吹き飛ばされてしまいました。

「嘘っ……！」

北村が口元に手を持っていって小さくそう言うと、九条君は目を瞑りながら力なく首を振りました。

「少し前に、たーさんに言われたんだ。皆がない時にたーさん、風呂場で蹲っていてさ。誰にも言うなって言うからみんなにはいえなかつただけど、きつと深刻じゃないと思うんだ。きつと。それ以上何も言わなかつたから、詳しいこと聞けなかつただけど。でも……」

「そう言えば、斉藤さんもなんか変な事言ってた。最近の田代さんは怖いくらいに気迫が漲っているって、命を削っているみたいだつて……」

僕がぼつりとそう言うと、皆、黙って下を向いてしまいました。

すると、上村さんが口を開きました。

「親父さん、俺と二人で呑んだ時、言ってた。最後の花はでっかく飾りたいって、最高傑作は手に入れたから、でかい花火打ち上げたって。俺はまた酔っ払いのうわごとだとばかり思って流しちまつたけど、もしかしたら……」

すると、突然北村の声が空気を切り裂きました。

「皆、止めて！変な事言わないで！田代さん、いつもとぜんぜん変わってない！ぜんぜん変わってないよ！」

北村は上村さんの話をさえぎると、突然玄関に向かって駆けていきました。

突然の彼女の行動に、他の三人は目で追う事だけしか出来ませんでした。僕はすぐに彼女の後を追って部屋から飛び出していきました。

玄関を出ると、エレベーターの隣にある非常階段に出る扉が半開きになっていたので、僕は迷わず扉の外に飛び出しました。すると、冬の冷たい風が顔に吹き付けられて、一瞬目を瞑ってしまいました。

が、目を開けてみると、北村が手すりに寄りかかりながら声を出して泣いているのが見えました。

彼女が泣いているのを見るなんて、いつ振りでしょうか？

少し動揺しつつも、僕がそつと北村に歩み寄っていくと、僕の気配を感じたのか、赤く晴らした目の彼女が振り向いてきました。そして、そのまま彼女は僕の胸に飛び込んできました。

「田代さんが病気だなんて・・・」

北村は泣きながらそう言ってきました。

「何言ってるんだ。決め付けるなよ。まだ分からないじゃないか」

僕は彼女の取り乱しように飲み込む冷静さを必死で探しながらも、出来るだけ落ち着いた声でそう言いました。

「そうだけどおさあ、だって、皆の言う事 聞いてたらさ・・・」
彼女は喋りながら、また嗚咽を交えます。僕は慰めようとした言葉を呑みました。

確かに、最近曲作りとレコーディングに気を取られていて、田代さんの様子には注意をしていませんでしたが、よくよく思い出してみると、確かに田代さんは以前と少し変わっていたかもしれせん。

僕から見たら、あつたときよりもアグレッシブになって、鋭さが増しているように見えました。

それはもう、異常なくらいです。

ただ、それはバンドが出来上がっていったからだと思いましたし、田代さんは皆の前ではつらい顔なんか見せてなかったうえに、いつも僕らのケツを叩いてくれていた印象しかないので。まるで、自分は元気だとも言うように・・・。

それを思い出すと、僕も急に何か得体の知れない感情がこみ上げてきて、腕の中にいる北村を抱く手の力がこもりました。

「田代さん・・・今日、夜に帰ってくるって」

僕は自分にも言い聞かすように、口を開きました。

「いつも元気なお前が泣いてたら、田代さんビククリするだろ。なっ！だから、泣くなよ」

すると、北村は何度も頷いて、両手で涙を拭きました。

「そうだね。笑って、田代さんにお礼言わなきゃね」

そう言つて彼女は、涙交じりの笑い顔を僕に向けたかと思つたら、すつと僕から離れたかと思うと、何故か急に僕の脛を蹴り上げて、非常口のドアに入つていきました。

僕は訳が分からないまま、何もいえないままその場でもだえると、いなくなつた北村に悪態をつきました。

それから田代さんが帰ってくるまでの間に、僕は斉藤さんに僕らがデビューする事を伝えました。斉藤さんはすぐ喜んでくれて、たまたま一緒にいた今田さん共々僕らの門出を祝福してくれました。どうやら、僕らのデビューにも「ラブ・ハンドパーティー」の面々が絡んでいるらしく、そちらの方面も着々と進んでいるようでした。それに、詳しい事は分かりませんが、間宮さんと英子ちゃんの方でも動きがあつたような事を言っていました。皆それぞれに動き出しているみたいです。それだけ言い終えると、斉藤さんはすぐにこちらに向かつてくれるようでした。

北村の提案で、デビュー祝いをこの部屋でする事になり、僕らは大急ぎで準備に追われる事となりました。もうすっかり泣きやんでいた北村は、異様に張り切つていて、嫌がる上村さんと嬉しそうな九条君を引き連れ手、料理や飲み物の買出しに行き、僕と池内さんは部屋の掃除と小物の買出しに向かいました。メンバーは皆暗黙の了解のように、田代さんの事をそれ以上話題にする事もなく、ただ、自分達がデビューしたと言つ喜びに浸る事にしました。今はそれが一番なんだと皆思つていたので。

皆で頑張つた会もあり、田代さんが帰ってくるまでにはもうすつかり準備は整つていて、後は御大の登場を待つだけになっていました。そして、出来上がった料理を摘もうとするのを北村に怒られていると、エレベーターを見張つていた池内さんが慌てて戻ってきました。

「来た来た！」

彼の声に、すでに来ていた斉藤さんも含めたメンバーは、慌てて玄

関に集まりました。程なくして、玄関のドアが開き、スーツ姿の田代さんが入ってきました。

同時に、僕らがクラッカーを鳴らすと、田代さんは紙の屑にまみれ短い驚きの声を上げると、今まで見た事の無い様な万弁の笑みを浮かべました。

「どうだお前ら！俺に任せろって言っただろ」

田代さんが勝ち誇ったような顔を見てみると、僕の中で今までの色々な苦勞や、田代さんの今の状況や、単純な嬉しさが頭の中に同時に噴出して、尚且つそれが涙腺を刺激してしまつたので、よそうよそうと思つてはいたのですが、それをそのまま田代さんにぶつけました。

僕が泣きながら胸に飛び込んできたので、田代さんは一瞬びっくりしたようですが、驚くほど優しく僕を受け止めてくれました。

「武士、お前みたいなか物が飛び込んできたらこけるだろうが。

まったく困つた奴だ。まあ、歌声には感じられん繊細さが、お前の面白い所だけだな」

憎まれ口叩きながらも、田代さんは僕の背中を叩いてくれて、僕はなだめられるまま彼と一緒にリビングまで歩いていきました。

リビングには北村や僕やらが作った料理やら斉藤さんが持ってきたギンギンに冷やしたシャンパンやら、買ってきたビールがあつて、

田代さんはそれを見るなり声を上げて喜んでくれました。

「愛子ちゃんの手料理じゃあ、残す訳にはいかなあ。よし、今日はちぎれるまで食べるぞ。分かつたか、お前ら！」

すかさず斉藤さんがシャンパンの栓を音を立てて吹き飛ばしました。それを受け取つた北村が笑顔を浮かべながら田代さんの隣に行くと、グラスになみなみとシャンパンを注ぎました。そして、皆のグラスもみたしていくと、田代さんが片手にグラスを持って、皆の顔を伺いました。

「皆、今まで良く頑張ってきた。まあ、本当はこれからなんだけどな。まあ、とにかく、まずはデビューする事が出来た」

メンバーは顔を見合わせながら、あらためて喜びを分かち合っていると、田代さんはさらに言葉を続けました。

「あれだ、お前らの『スーパーサウンド』！あれが来クルのドラマの主題歌になって、それと共にお前らを売り出していく事になった」

それを聞いて、僕と九条君は腕と腕をぶつけ合いました。「スーパーサウンド」は僕らが二人で話し合いながら作り上げた初めての曲でした。それに加えていきなりドラマの主題歌？！皆熱くならざるをえません。

雄たけびがマンションに響きました。

「分かったからよく聞けよ！いいか、それまでの五ヶ月間、都内を中心にライブをすることにしました！もう、大体の大箱は抑えたから、ほかのバンドと一緒にではあるが、まあ、やる事になった。宣伝のほうはこつちでやるから、お前らは音楽だけに集中しろ！」

メンバー全員でそれに答えました。

「よし！では、俺達のスタートに、乾杯！」

「かんぱーいい！」

僕らはグラスを高々と上げ、それぞれに音を立ててぶつけ合い、そして飲み干しました。

僕は今一度、目の前にいる御大の顔を見ました。

どす黒い肌に黒ひげを蓄えている口は大きく笑っていて、がっちりとした体を震わせてグラスを空ける姿を見ると、とても病気だなんて感じられません。なので、やっぱり九条君の言葉は信じられませんでしたが、それでなくてもやっぱりこの人は自分にとって必要な人なんだと感じていました。

改めてこの人を偉大さを感じてしまいました。今一緒に音楽に携われて、彼の期待に応えられた事が嬉しくて、僕は田代さんの笑顔を見るとその全てが溢れ出してきました。

もう、僕に迷いはありません。

田代さんがここまで僕らを持ってきてくれたのですから、後は言わ

れたとおりに音に音楽に全力を注ぐ、それだけです。
今の自分の力のすべてを出していこう、田代さんの横顔を見ながら
僕はそう思うのでした。

スター街道爆走中！（前書き）

ロックンロールスターになって、一花咲かせてくださいな！

スター街道爆走中！

それから僕達は、デビューの喜びに浮かれる暇もなく、ライブ巡りに突入しました。

始めは都内のライブハウスで行われ、数組のバンドとの競演でした。僕らにとっては初ライブでしたが、田代さんの影響力と元「コロラド」のドラマー上村さんが活動しているバンドと言う事を知っている人達や、業界人や色々な噂を聞きつけてきた人、あと「ラブ・ハンドパーティー」の遠慮がちで控えめな宣伝の甲斐もあって、僕らの注目度はかなり高いものがありました。なので、初ライブにしては結構な待遇だったと思います。

僕や九条君はライブが初めてだったので、始まる前は緊張でがちがちでしたが、同じくライブ初挑戦の北村のあまりの緊張感のなさというか、肝っ玉のでかさと言うか、のんびりして落ち着いた様子に助けられて、僕ら二人は程よい心境でライブを迎えられました。九条君は北村と話しながら、徐々にリラックスしていったようですし、僕は北村が緊張してないのに僕がするなんて悔しいという思いから、必死でそれを乗り越えつつ、張り詰めたいい緊張状態に自分を持っていきました。

さすがに上村さんや池内さんは落ち着いた様子でしたが、皆に共通して言える事は、ライブをやりたくてたまらなく、うずうずしているとと言う事で、皆、逸る心を抑えられないかのように、冷静な炎を燃やしながら控え室で過ごしていました。

ただ、応援に来ていた斉藤さん一人だけが、かなり興奮していて、燃える魂を前面に押し出しながら、いつも以上に僕やメンバー達に声をかけてきました。

ライブが始まり、前の組の演奏が聞こえてくると、それぞれに楽器の最終調整をだし、僕は歌詞カードを見たり、挨拶の事などを考えていました。田代さんはライブハウスの関係者や、業界人らしき

人達と話していて、僕らの所にはあまり来ませんでした。他のバンドなんかも田代さんの事は知っているらしく、まるで事務所の社長にするみたいに挨拶したり、様子を伺ったりしていました。代わりと言っては何ですが、斉藤さんが僕の傍にくっついてくれて、僕にはポーカルのしゃべりも巧みじゃないと格好つかないとか、しびれる台詞をいくつか横で教えてきてくれましたが、僕の考えは決まっていたので、それは聞き流していました。

何しろ色々な想いが詰まったバンドではありませんが、ここまで来れたのは自分だけの力ではありませんし、今更格好いい事なんていつでも仕方ないのですから。

飾らない、素直な気持ちで、その場で思ったことを言いたかったのです。決められた感情なんて、くそっ食らえの精神でここまで来たのですから。それに、いくら緊張していたって、本当の言葉なら素直に声になるはずですよ。

僕はそれだけ決めて、完璧に頭には入っているのですが、歌詞を見る事に集中しました。

不思議なもので、皆で練習している時にはもう人の手に渡った気になっていた歌詞が、改めて読み返してみるとそのときの気持ちやら、作っていた状況、その時後ろで流れていた音楽とか匂い、思いついた場所なんかがい出されてきて、ふつふつと心の奥で火がつくのが感じられてくるのでした。

「グローバル・O・グライダーさん、準備お願いします」
ライブハウスのスタッフの声が聞こえてきました。

僕らは立ち上がり、その時には控え室に来ていた田代さんを中心に集まりました。

「まあ、いつもどおりやってこい。俺が確信してるんだから間違いない。風、起こしてこい！」

田代さんがそう言うと、僕はさっと前に手を出しました。すると北村が、僕の手に乗せてきました。そして九条君。何故か斉藤さん。苦笑いしながら池内さん。仕方ないと上村さんが、手

を合わせてきました。

そして、田代さんの顔を皆で見ました。

「おいおい、俺は勘弁しろよ」

と田代さんは言いましたが、僕らは無言の笑顔で懇願すると、しづしづ手を出してきました。

「グローバル！」

僕がそう言つと、皆は声を合わせました。

「おーおー！」

恥ずかしそうに頭をかく田代さん、鼻を大きく膨らませながらみんなの背中を叩く斉藤さん、そして、周りで見ている人を尻目に、僕は初めてのステージに向かいました。

「初めまして！グローバル・O・グライダーです！」

ステージの眩し過ぎるライトに照らされながら、僕はマイクを握りました。思っていた以上にお客がいて、僕らの音を逃すまいとして耳を張り詰めているように感じられて、僕は少し大きな気分になってしゃべりました。

「今日が僕たちのデビューですが、最高の音、聞かせますんで、耳に焼き付けてください。そして、盛り上がっていきましょう！」

僕はそう言つと、隣にいる九条君、池内さん、北村、そして最後に上村さんに目配せして、マイクを持ちました。

僕の合図を皮切りに植村さんのドラムが鳴り響き、曲は始まりました。

激しいサウンドの、ノリノリの曲「竜神」です。

* 苦し紛れの言葉だけ いつの間にもやら身についていた

心の奥で隠してる 僕の言葉は誰も聞けない

はぐらかすだけの笑顔じゃ 誰の心も掴めやしないさ

愛のこもった声だけが！！ 君の瞳を輝かせるんだ

退屈な毎日の中で起こる事も いつもどおりの日常さえも

Ah 吹き飛ばすほどのボルケーノ 君がきっかけて噴出すよ

未来と言うエッジが！ 僕の頬を切り裂いた！

過ぎ去った過去が今！ 目を光らせ吼えているんだ！

甲高い声で叫びだす！ 君の心を？ぎ取るよ！

鋭い牙で噛みつくんだぜ！ 僕の 心にいる 竜神よ！

曲が終わり、ギターの音が止むと同時に、ライブハウス中に歓声が響き渡りました。オーディエンスが僕の目の前で沸いていて、それを見た僕の頭も沸騰しました。

今まで感じた事の無い快感が僕の全身を駆け巡ります。

額に噴出してきた汗を拭って、僕は彼らに話しかけました。

「次は、僕らのデビュー曲になります。街角で聞こえるようになれば最高ですが、一足先にここで聞いてもらいます。『スーパーサウンド』、聞いてください！」

* ふつつつとこみ上げてくるんだ 僕の感情が溢れ出す時に
頭の中に流れてくる 誰も知らない音がある

ああ 苛立ちを感じながら ああ 尚早の時を過ごしながら
いつも追い求めている音がある

さあ すべてを投げ出して さあ 求め続けて彷徨いながら
もてるプライドを注いでも まだ掴めない音がある

一瞬の出来事なんだよ 頭の中で破裂するんだ

その一つ一つを手に入れて 鳴り響いた時の喜びが！

スーパー サウンド スーパー サウンド 頭の中で鳴り響くんだ
スーパー サウンド スーパー サウンド 君に聞かせたいこの歌を
スーパー サウンド スーパー サウンド 永遠に響くメロディを
スーパー サウンド スーパー サウンド 世界が変わっていく音が鳴る

僕が歌いきると、一瞬の静寂を迎えた後に、激しい感性が響き渡りました。

フロアーにいる全てのオーディエンスが、発狂にも似た声を挙げて興奮しています。

僕はメンバーの顔を見回しました。皆息を上げながら満足そうな顔を返してきて、袖にいた田代さんも僕を見て親指を立てました。そして、湧き上がる歓声が鳴り止まずに、僕らを包み込みました。僕は高揚しながら上を見上げると、ライトの光を目を焼き付けました。それから僕らは「最後の言葉」と言うバラードと、「遠い光」(これは僕らの記念すべき第一曲目です)の二曲を演奏して引き上げました。引き上げると斉藤さんが顔を真っ赤にして僕に駆け寄って「よかった、よかった」と繰り返しながら抱きついてきました。

田代さんは僕らを見ながら、にやりと笑うと

「まずまずだな。これからだぞ！」

とだけ言って、また関係者達の方に行ってしまいました。

ただ、顔が嬉しそうだったのは僕もメンバーも見逃しませんでした。

要するに、満足してくれたようです。テンションの高いままの僕は、メンバーにハイタッチしま栗、北村の前まで来ると、頭をもみくちゃにしてやりました。北村は声を上げながらはしゃぎましたが、僕の脛に二発、けりを食らわすのを忘れませんでした。

とにかく、僕らは初めてのライブを成功させることが出来たのです。それから、ほぼ毎日ライブのスケジュールが組まれて、都内はもとより、横浜、大阪、福岡のライブハウスをめぐりました。同時に色々な媒体を使って僕らの宣伝がされ、考えられない位の反響を受ける事になりました。それに伴って日覆うごとにファンが増えているのがはつきりわかり、一緒のステージに上がったどのバンドよりもオーデイエンスを沸かせていました。それは僕らの自信を確信に変えさせてくれて、僕らもオーデイエンスの熱風に当たるたびに、それを自分たちの力に変えていく事で、音楽の質を上げていきました。そうやって、僕らは激流のようにめまぐるしい、でも蜂蜜のように濃密の三ヶ月を過ごし僕らの歌を主題歌に使っているドラマの放送日を迎えたのです。

ついにギター！（前書き）

ラブハンドブーム到来！！！！

例のあの人も応援してくれているみたい！

さあ、これからどうなるのでしょうか。

うーん、CMの後で！しかし、長いな！

ついにギター！

「武士！起きろよ！着いたぞ！」

眠りに落ちかけていた僕を揺さぶる声がありました。

僕ははっとして目を開けると、シートの後ろから上村さんが僕の肩を揺さぶっていました。僕は飛び出すようにシートから起き上がると、スライドドアを押さえてくれていた漆原さんの横をすり抜け、先に歩いている九条君の後に続いてテレビ局に入っていました。今日は生放送で送る歌番組の収録だったのを思い出しながら、なれない感じにどきまぎしつつ、警備員のおじさんに挨拶しました。そして、漆原さんの後に続いて、テレビ局の中に入っていました。放送時間になつて、舞台裏の登壇口にメンバーと向かうと、今までテレビの中でしか見た事の無かった歌姫やバンドのメンバーがいまいました。もちろん、この番組に出るのは初めてな僕達（何人か知り合っている上村さんを除いて）は、一つの場所に固まって周りを伺っていました。

何しろ、生放送でしたし、テレビに僕らが出る事も初めてだったので、現場の雰囲気慣れる事なんてまるで出来ませんでした。

でも、なぜか僕は一人落ち着いていました。

何しろ、僕が求めていることはまだ実現していません。

むしろこれからです。この番組は絶好のチャンスでもありません。たし、メンバー達とは少し違った意味で意気込んでいました。

「始まります」

インカムをつけたディレクターの合図が聞こえました。僕達や他のゲストは舞台袖に順番に並べられ、彼の合図とともにスタジオに押し出されていきました。僕らの順番はちょうど真ん中あたりで、A Dさんに誘導されるがままに登壇口から飛び出すと、お客さんの手

拍子と感性とスタジオの熱気や証明の明かりを一気に感じながら、スタジオに流れているお決まりの登場曲とともに、僕らは司会者の待つステージまで歩みを進めました。

「初登場、グローバル・O・グライダー！」

名物司会者の紹介と共に、僕らに女の子のファンの甲高い歓声を送られます。

僕はこれでもかと言う位に堂々と胸を張りながら歩いていくと、彼女達に手を振って挨拶しました。同時に、隣にいた若い女子アナウンサーが僕らの紹介を始めます。

「今放送中のドラマ『四畳半ドリーム』の主題歌、『スーパーサウンド』が大ブレイク！いきなり音楽界に現れた超新星、今夜のランキングも注目のニューカマーです！」
正直悪い気はしませんでした。

そんな感じで全てのゲストが紹介されると、司会者がカメラに向き合いゲスト全員のショットが移ると、番組はコマーシャルに変わりました。その間に、ADさんに誘導されながら、僕らは設置されたひな壇のほうに移動しました。そして、また番組が始まると、ここで順番通りに他の歌手達が歌うのをゲスト達と一緒に聞いていきながら、僕らは自分達の番が来るのを待ちました。

順番を待つ間、僕はにわかに緊張しながら、事前に打ち合わせで聞かれた事を思い出していました。

打ち合わせでは、トークの材料を見つけるためなのか、メンバーの異性の好みを聴かれたのですが、その時に、他のメンバーはさておいて、真っ先に僕が思いのたけをぶちまけたせいか、ディレクターはメンバーの誰の話（メンバーは、ほとんど話らしい話はしませんでしたが）よりも僕の話に相当食いついてきました。そして、それを番組で使ってもいいなら、その線で進めていくような事を、そのディレクターもかなり面白がりながら言っていたので、僕は快く快諾しました。もちろんマネージャーや事務所サイドには内緒でという事で、なので、このベテラン司会者は、明らかにその話すんだら

うなあと思い浮かべていると、いまさらながら緊張してきたのです。何しろ、この番組は、ファンのみならず、日本中の人が見ているのです。

僕の今までの経験から言えば、僕の趣味は受け容れられる事は無いのでしたから、また拒否反応が起きる確率が高い訳です。何が起るか予想が付きません。

それに、実はこの事をメンバー（北村以外の）に言ったのも初めてでしたので、彼らの反応も心配になっていたからです。

楽屋での打ち合わせ中にその事を喋った後、明らかに北村は困惑したような表情を浮かべていて、何やら心配そうに僕の方を伺っていました。九条君はと言うと、何やらニヤニヤしながら僕を見ていて、池内さんと上村さんはこいつは何を言っただという感じでしたけど、その場で僕に深く突っ込んでくる人はいませんでした。

しかし、公の場で口に出したら反応が違ってくるはずですよ。

そんな僕を、池内さんを挟んで隣に座っている北村が、楽屋と同じような目で見てきました。本番中とは言え、僕の違う焦りを感じたのでしょうか？

僕はさつと目をそらして、今歌っているバンドの曲を聞いている観客に目を向けると、ADさんが僕らの出番を促しているのが見えま

したので、僕らは指示に従って司会者の隣の席に移動していき、打ち合わせどりの位置取りをしました。

「初登場、グローバル・O・グライダーです」

僕らの正面のカメラのランプがつくと、抑揚のない感じで司会者が僕らを紹介しました。すると、観客の拍手と歓声がおこり、僕達はそれに合わせて、カメラに頭を下げました。

「グローバル・O・グライダーのデビュー曲、『スーパーサウンド』は今週のランキングで何と初登場三位！有線部門では堂々の一位を獲得しています！」

大げさなくらいの女子アナウンサーの声に、僕らが身を仰け反らす

ほどに観客席が沸き、それに答えるように僕らはまた頭を下げました。

すぐに司会者が言葉を続けてきました。

「初登場二位、おめでとーございます」

「ありがとうございます」

僕らは全員、口を揃えてそう言つと、司会者に頭を下げました。

「デビュー曲がドラマの主題歌、そして、大ヒット。なんか出来すぎてるね」

サングラスをして目の表情はどうか分かりませんが、司会者の口元は笑っていました。

僕はマイクを口元に持っていきました。

「自分達でもビックリしてるんですよ！本当に信じられなくて。僕たちをプロデュースしてくれた田代さんにすごい感謝しています」

「あの田代邦彦さんがプロデュースを手がけているんですよ」

女子アナウンサーが話しに割り込んできました。

「そうですね」

「ほー。知らない人もいると思うけど、そりゃあすごいねえ。しかし、いい曲に仕上がってるよ。近頃、君達の歌を聞かない日はないもんね」

「ありがとうございます」

「ところで、ボーカルの小田切さんの女性の好みが少し変わってる。と伺ったんですが？」

女子アナウンサーの何事もないようなさりとした口調の質問に、メンバーの男達が笑いをこらえる音を耳で感じると、僕は頭を書きながら、申し訳なさそうに口を開きました。

「そうですね」

「デブ好き！」

間髪入れずに、司会者が笑いながらさういうと、会場やゲストが声を上げました。

「違いますよ。『ラブ・ハンド』です！『ラブ・ハンド』好きです」

僕は司会者の声にかぶせる様に、大声で声を張りました。

「要はお肉が好きなんでしょ？変わってるねえ」

そう言って司会者はニヤニヤしました。

「いえ、お言葉ではありませんが、ただのお肉じゃないんですよ。女性のお腹の周りについている肉、それがいいんですよ」

会場で笑い声がかかります。

「どこがいいのよ？要は脂肪でしょ？」

「脂肪は脂肪でも、皮下脂肪なんですって！ぷっくりとして張りのある、触って柔らかいお腹の肉の事ですよ！」

僕が幾分力を入れて言葉にすると、会場でさらに笑いが起きました。

「ふふあはは、面白いねえ君。いつごろから、その何だ、『ラブ・ハンド』好きになったの？」

司会者の問いに、僕は真面目な顔をして答えました。

「小学校の頃からです！」

スタジオ中に大爆笑が起きました。

スタジオ中を見回しても、笑っていないのは北村と僕くらいでした。

「ひふあははは、すごいね。その話は今度ゆっくりと聞きたいけど、歌ってもらわなきゃならないから、準備をお願いします」

司会者はお腹の辺りを押さえ、笑い出すの必死で堪えるかのようにしながらそう言うと、ステージのある方に手を向けました。僕らはそれを合図に立ち上がって挨拶すると、ステージに向かいました。

同時に、アナウンサーがカメラの前で僕らを紹介してくれます。

「今日のニューカマー、『ラブ・ハンド』で、あうっ、すいませんっ！『グローバル・O・グライダー』で『スーパーサウンド』ですっ！」

言い間違えた女子アナウンサーは顔を赤らめながら、すぐに司会者のところに戻ってゆきました。

頓珍漢な紹介をされましたが、ステージに立っていた僕は落ち着いていました。ステージに上ると、周りにいた観客の目が面白いものでも見るかのように僕に注がれていましたが、テレビであそこまで

言った今となつてはもう何も隠すことはありません。それに、僕は僕らのバンドの音に自信があるのです。後は心のまま歌うだけですし、心配していたメンバーの反応も悪くなくて、逆に面白がつてくれているようでした。

なので、ある意味コンディションは最高！気分は上場でした。

一人だけ浮かない顔の北村は気にしないで、僕はノリノリのドラムとギターとベースに押されて、気持ちよく歌いました。僕の中では突っかかりが取れてたせいか、くるんでいたシートが取れたみたいに開放感があふれていて、感覚という感覚が開かれ、何にでも繋がっているような気分でした。

隠す事など何もありません。

そして、ここで歌い終わった時のスタジオにいた観客の熱狂に、僕は一つの手ごたえを感じていました。

それから僕達のバンドは、各局の音楽番組に呼ばれて、そして、どの番組でも僕の「ラブ・ハンド」話を取り上げられる事にしました。なので、僕はここぞとばかりに「ラブ・ハンド」をアピールして、そして自分がいかに「ラブ・ハンド」を好きなのかを語りました。対外、みんな面白がつてくれて、ある番組では大物司会者の一人がそれに賛同してくれたりもしました。こうして、僕達のテレビ出演をきっかけに、「ラブ・ハンドパーティー」の面々も動き出し、すでに注目されていた今田さんのサイトがテレビの情報番組や検索ランキング番組に取り上げられたり、間宮さんや英子ちゃんも女性ファッション誌に「ラブ・ハンド」特集を載せるよう働きかけ、何誌かが大なり小なり「ラブ・ハンド」スタイルを掲載したりしました。また、メンバーのデザイナーが手がけた、「ラブ・ハンド」をモチーフにした、いくつものデザインを街で見かけるようにもなりました。クライアントをどうねじ伏せたかは分かりませんが、明らかにうまい具合に「ラブ・ハンド」がデザインされています。それに加えて、今田さんが膨らました「ラブ・会」（彼はサイトを通じて会員を増やしていき、今では一万人名近い会員が来ています）

た。)の人達がそれぞれに、この流れに乗じて「ラブ・ハンド」を知らない周りの人達に、「ラブ・ハンド」というものを広めていきました。

そして何よりの極めつけは、公式の場で森田幹事長もですが、総理大臣までが「ラブ・ハンド」という言葉を使ってくれたのです。

ここまで来ると、「ラブ・ハンド」の知名度は飛躍的に広まっています、それに伴って僕らのバンドの人気も高まっていきました。

何しろ、表立って「ラブ・ハンド」を口にしたのは僕が初めてですし、ネットでの表の顔も僕でしたから、テレビで知った人が色々な情報を周りで聞いていくうちに、改めて「ラブ・ハンド」という価値観の発祥源が僕だと言う事を知っていくと、自然と僕のバンドを知る事になり、僕の音楽に興味がなかった人達も、つながりを感じてくれて僕達のバンドの曲を聞いてくれるようになったのです。

さらに、ここまでの人物が言葉を発するようになったからか、今の女性のスタイル、要は中学生や小学生のダイエット、痩せる事を煽るファッションに対する疑問、そして、現実に起きているそれを過剰に求めすぎているモデルを筆頭にした女性達の事などが、栄養士や料理人、女性問題活動家や、本気でそんな事を考えていなそうなテレビのコメンテーターなどを煽るようになり、結果的に、それが日本中の女性達の心の中に、様々な風を吹かせることになりました。

また、ホームページやこれに加わっている人達の真摯な意見、もちろん僕のインタビューや放送などが一部の女性達の反響を呼び、それに乗っかる形で、ファッション業界でも、腰をアピールするデザインンの服が店頭に並びだしたのです。まあこれは、間宮さんや英子ちゃんの仕事かけのお陰で、すでにながりの用意は整えられていた(火がつくのが少し早いようでしたが)ので、比較的スムーズに行われていったのですが、間宮さんの凄い所は、この日本のファッションの動向に、ヨーロッパのデザイナーを巻き込んだところでした。間宮さんクラスの人だから成しえた事なのでしょうけど、ヨーロッパの

名だたるブランドが腰を強調するデザインの服をつくり、モデルもそれなりにふくよかな人を使ってファッションショーを行い、日本だけでしたが腰を強調したデザインの服を店頭で販売してきました。この日本限定と銘打ったそれらの服は、流行り物が大好きな人達の中に留まり、さっそくその人達が一斉に買い求めると言う事がおきました。銀座のブティックに、「ラブ・ハンド」デザインの服が飾られ、それを求める人ばかりが見られるようになりました。

予想もしなかったのですが、その中には何人か有名人もいました。有名人はテレビに映りますので、そんな服を着た人達が映画の試写会や、バラエティ番組に出ますと、それを昼のワイドショーが取り上げたりして、お昼の時間にもテレビで「ラブ・ハンド」が取り上げられるようになったのです。

当然、その時間帯のテレビを見ているのは主婦の皆さんです。

この現象は、ある程度お肉の付き出した奥様方に思わぬ影響を与えました。なんと、そんな奥様連中から率先して、腰を強調するような服買い求め、それを着始めたのです。しばらくしないうちに、街の風景の中に、ちらほらとそんな女性を見かけるようになりました。ただ、流行りに敏感なのは若い女性達も同じ事で、色々な情報源を持つ彼女達の何人かは、流行先取りを意識したのか、あまりのダイエツトに疲れてしまったのか、皮下脂肪の大切さに気が付いたのか、それとも僕のバンドに影響されたのか、腰を強調した服を着だし始めたのです。

まあ、この頃になると、僕達のバンドを聞きに来るファンの女の子は、誰もかれも僕の趣向を尊重してくれていて、ライブを行うと女性ファンは必ずと言っていいほど皆、「ラブ・ハンド」を強調する服装をしていました。

そして、そのライブが終わって、女の子がその格好のまま最寄の駅に集まると、腰を意識した女の子だらけになってある種異常な光景が起こるのですが、何と！それをまたワイドショーやらランキング

番組、色々な情報番組が面白おかしく取り上げていき、その様子を幾度となく番組で放送しだしたのです。

この現象もここまで来てしまうと、巷では「ラブ・ハンド」に対する女性の意見や、男性の意見が飛び交いだし、「ラブ・ハンド」に対する色々な議論が起こってきました。

大方の男性は、あまりお肉は出ない方がいいと思っっているようでした。大方の意見は「ボン！キュウツ！ボン！」が最高であり、それ以外は認められない。

と言うより、これはラブ・ハンドに対する偏見と言うか、ただのおデブさんの事だと思っっているようでしたが、本当の「ラブ・ハンド」スタイルはそうではありませんので、そこでまた議論が起こったりしました。

基本的に、「ラブ・ハンド」は健康的なスタイルなのですから。

しかし、女性達にしてみれば、無理なダイエットに励むより、お肉好きの男性を求める方がいい（やっぱり、定義の過大解釈がありません）と思うようになり、このように女性達がスタイルの定義を変えた段階になった時には、女性達には「ラブ・ハンド」と言う価値観は受け入れられ、浸透していきました。

こう女性がスタイルを決めてしまったら、男達はどうする事もできません。あきらめるしかないようで、男性側の理解者は徐々に増え、これは特に若い世代に浸透していき、ややがて、津波の様に各地に「ラブ・ハンド」という価値観が広まっていきました。

日本に「ラブ・ハンド」というムーブメントが、起こっていったのです。

グログラ！！！（前書き）

グラコロじゃないですよ。

しかも、これってちゃんと意味があるんですよ。フランス語なんですよ。

グロ・グラ 調べてみたら分かるんですよ。

なるほどってなもんですよ

グロケラ!!!

一方、僕らのバンドは、田代さんの精力的な働きかけや、人気に乗じて儲けようとするとするレコード会社のおかげで順調に活動できるようになっていて、溜め込んでいた楽曲を次々に世に送り出しました。それらの曲は、「ラブ・ハンド」ブームのお陰もあってすさまじい勢いで売れてゆき、瞬く間に僕らは音楽業界でスター扱いされる事となりました。

街を歩くと声をかけられ、今まで疎遠になっていた人やまつたく知らない人からの連絡などもあり、僕らは今まで生きていて味わったことのない感覚、有名人になった事を実感して、半ば、いや完全に浮かれていました。

何しろ話でしか聞いた事の無いような過密スケジュールを組まれ、寝る時間さえほとんどありませんでした。それでも、池内さんや上村さんは前以上に夜の世界に飛び込んでいましたし、九条君は前とは別人とも思えるように精力的に活動していました。九条君には女の子のファンが結構いて、彼にとっては今までの人生の中で考えられないくらいにラブレター（ファンレターとは別に）を貰ったり、プレゼントを貰ったりもしていました。それに加えて、自分の才能を世間に理解され、実際に結果を出している事に、音楽的な力という面と、自分の男としての魅力という面で相当な自信をつけたようでした。

こんな感じで、僕以外の男性メンバーは三人で夜の街に繰り出していき、それを僕と北村は一緒に見送っていました。もちろん僕も誘われてはいたのですが、僕は僕で「ラブ・ハンドパーティー」の面々と会い、色々と話して指示を出さなくてはならなくなっていたのでそんな時間はありませんでした。計画の第一段階が成功したとたんに、各方面から色々な案件が持ち出されてきて、今田さんが僕を交えて話し合うことを望んできたこともあったので、今まで任せて

いた事にも加わらなくてはならなくなったのです。

他のメンバーには、ほとんど「ラブ・ハンド」関係の事は、話してなかったのですが、まあ、彼らもあまり気にはいかなかったのですが、北村だけには色々な事を相談していました。北村も北村で、今までとまるで違う環境になったことに戸惑っていて、バンドの中では唯一の女性と言う事もあってか、幼馴染の僕に色々な事を相談してきました。

彼女は、バンドがうまくいっているのは嬉しいんだけど、自分が変わっていつてしまうようで怖いとか、このまま人気が出て行くと、メンバーの心変わりがあるかもしれないなんて事を、しきりに僕に言ってきました。それに、これは僕もそうなのですが、田代さんの健康の事も心配の種のようにでした。

最近の田代さんは、明らかに以前より痩せてきていて、顔色もよくありませんでした。でも本人はそれを口に出す事はなくて、僕なんかが心配して話をその事に向けると、急に不機嫌になって怒り出すのです。とは言え、今は田代さんの部屋ではなくて、レコード会社のスタジオを使っていたり、忙しくて中々会えないので、余計に彼の事が心配になっていました。前なら毎日のように会う事が出来ましたが、今ではほとんどメールか電話のやり取りなのです。電話口だと顔が見えない分、言葉で余計に聞いてしまい、その度に田代さんの声が跳ね上がります。

「お前に心配されなくて、俺の事は俺が一番よく分かってんだ！俺を誰だと思ってんだ！お前はそんなことより音楽の事を考えろってんだ！アルバムも出したばっかなんだし、それに、ツアーも始まるんだ！余計なこと考えてんじゃねえよ！」

それだけ言うと、僕が何も言わないうちに電話を切ってしまうのでした。それでなくても田代さんにここまでしてもらった僕は、そう言われると何もいえなくなってしまうましたし、田代さんの言うとおり、僕には余計な時間はなくなっているのです。

僕らのバンドは、初の全国ツアーに向けて動き出していたのです

僕らのツアーは、北海道から始まりました。

北海道のドーム球場が僕らのステージとなり、チケットは完売していました。当日の朝には少し小雨が降っていて、僕はホテルの窓から心配そうに雲行きを眺めていましたが、初ツアーに意気込むメンバーと、初めての北海道に楽しそうな北村を見ていると、緊張感も程よく感じられて、気分も上向いてきました。それに今日は、今田さんや斉藤さん、森田幹事長はさすがに呼べませんでした。、「ラブ・ハンドパーティー」の面々は間宮さんも含めて招待していましたので、かなり気合が入っていました。

会場に行く時間が近づくにつれて、メンバーのテンションも上がってゆきます。九条君は片時もギターを離しませんですし、池内さんは頻繁にトイレに言っては戻ってきました。上村さんも口数少なく、いつもだったらおべんちゃらを使ってくるレコード会社の人達もぼりぴりしたオーラを纏う彼らには話しかけても来ませんでした。でも、みんな気合が入りすぎて、ここでテンションを上げすぎないようにしてる事が、いっしょにいる僕には分かりましたから、そんな彼らに僕がする事と言えば、何もせず、ほおっておくくらいなものでした。

ただ、北村には違いました。

僕は一人だけ部屋の違う彼女の所に足を向けました。いつもは強がっている彼女でしたが、この所ライブ前はいつも必要以上にナーバスになっていましたし、飛び入りのな所があったせい、バンドが人気が出てからも北村は自分に自信が持てていないようでした。

彼女が思っていたよりも心配性なようなのが、最近僕にもよく分かってきたのです。

この頃は、彼女の事が前以上に身近に感じられていました。

「はい！」

僕がドアをノックすると、彼女の声と共に足跡が聞こえ、ドアが開きました。

「何だ、武士か。」

彼女はホツとした様な顔をしてそう言うと、僕を部屋に入れました。
「準備できたのか？」

「え？ああ、うん」

「何だよ。緊張してるの？ドーム位なんて事ないよ。規模は比較にならないけどさ、ライブはライブじゃん。いつも通りやれば大丈夫さ！自分達の音楽を皆に聴いてもらうだけ、ただ、それだけだろ？」
僕はそう言って、笑顔を北村に送りました。北村は少し口元を緩ませます。

「まあ、それはそうだけどさ。やっぱり大勢の人の前に出るのは緊張するよ。プラスバンドで全国コンクールに出た時も緊張したけど、その時は私以外にも大勢いたしね。大勢の中の一人だから気が楽って言うか、同じトランペットの子達もいたから。今度は私一人だからねえ。うまくいかなかったらすぐ分かつちゃうじゃん？」

僕はベットに腰掛ける北村の隣に座りました。

「何言ってるんだよ！一人じゃないよ。バンドなんだぜ。チーム、チーム。一人は皆の為、皆は一人の為。いわば運命共同体だぜ、メンバー全員」

僕がそう言うと、北村は窓の外を見ました。そして、片手で髪をかき上げると、また僕の顔を見てきました。

「ふふふ、何か、ちっちゃい頃のアンタ思い出しちゃった。馬鹿で、ちびで黒くて、バカで、何考えてるかよく分からん奴でさ。先生によく怒られてたし、言ってることも意味不明だったし」

北村の透き通った黒い瞳が、僕の心を覗いてきます。
彼女の少し赤らんだ白い頬が、少しとがった鼻が、僕のすぐ隣でいたずらっぽく動きます。僕は横目で彼女を見ながら、鼻で笑うように頷きました。

「中学の時も、高校の時も、いたいこいつはどうなるんだと心配だった。そしたら、あんた料理人になるって。もういきなりだったし、やっぱり何考えてるか、分からなくてさ。それも、辞めちゃう

し」

僕はなぜか痒くなつて、大きな声を出して笑ってしまいました。

「心配ばっかかけちゃうな、俺」

すると、北村は目を閉じ、かみ締めるようにゆっくり首を振りました。

「ううん。あなたには感謝してるんだよ。私、あなたに田代さんの所に連れていかれなかったら、今みたいに充実していなかったもん。今だから言えるけど、あの頃はほんと八方塞りだったの。教員試験は受からないし、その時付き合っていた人には振られるし、ピアノ教室で教える事にも疲れを感じていたの。もう、行き場がないって言うか。だから、ほんと、思いつきり音楽している今の自分が信じられないくらいなの」

彼女は一呼吸億と、言葉を続けました。「

「今でも色々戸惑つてしまうけどさ。このバンドに私が貢献してる事なんて些細な事だけどさ、今は楽しいって思うの」

北村の血色のいい唇が、動きを止めて、閉じられました。

何故か、その様子が、僕の心の暖炉に、火を灯しました。そして、僕の頭の奥がにわかに熱を持ち始め、小さな光がだんだん大きくなっていくのを感じました。

「俺も、楽しいよ。充実してる」

北村の整えられた眉が動き、その黒目がまたもや僕を探りように見えました。

「あんた好みの女の子、増えてきてるもんね」

「そ、そうじゃなくて、何て言うか。そうじゃない！」

「そうじゃないなら、どうなのよ？」

僕は何と無く言葉に詰まってしまいました。

そうじゃないけど、何て言うか、そうじゃない事で楽しくて充実して、安らげるというか……。自分の言った言葉が、何故か僕に押し掛かってきます。

すると、言葉の詰まった僕を突き放すように、彼女の声が飛んでき

ました。

「あつ、もうこんな時間になつてる！？準備しないと遅れちゃうわ！コンサート初日に遅刻なんて恥ずかしすぎだよ。あんたもぼけつと座つてないで、支度しに行きなさいよ」

北村が備え付けの時計を見て、急に立ち上がって動き出しました。「俺は向こうに衣装があるから、もう行けるよ」

「じゃあ、早く皆の所に行きなさいよ。私、ちゃんとお化粧していかなくちゃ」

北村はそう言つて、備え付けの鏡台の前に座りました。

「じゃあ、化粧終わるまでここで待つてるよ」

その僕の言葉を聴いて、北村がすぐにこちらに顔を向けました。

「ば、馬鹿ね！出てつてよ。あんたに化粧するところ見られたくないの！早く行つてよ。もう！」

そう言つと、彼女は立ち上がり、まだベットに腰掛けていた僕を、部屋の外まで追い払つてしまいました。

「先に行つて！時間にはロビーに行くから」

彼女はそう言うなりドアを閉めてしまいました。

僕は仕方なくその場から離れてゆきました。

しかし、彼女があんな気持ちでいたなんて、なんて言つか、知らなかった。

僕はそう思いながら、バンドマンルームのほうに歩いてゆくのでした。

コンサート会場には数えきれないほどの人達が押しかけていて人の塊を作っており、裏口にもかなりのファンが押し寄せていました。リハーサルを終えた僕らは、すでに本番用の衣装に着替えていて、いつでもスタートをされるように気持ちを持っていくことに集中していました。

でも、ちよつと気晴らしに表の様子を覗きに行くと、もう客席は満員に近い状態でした。前のほうには、何人かいつも見るファンの顔がいて、皆一様に、「ラブ・ハンド」スタイルでした。まあその子

達だけじゃなく、いたるところに、いろんな腰を強調する服の子がいました。

ここで見る限りでは、僕の思い描いたと売りの世界が広がっています。

僕は意気揚々としながら、一人浮かれ気分でしたのですが、そんな僕を見て隣にいた上村さんが、醒めた声で言ってきました。

「女の子のファンがいっぱいいるのはいいんだけど、どこか惹かれないのは俺が年取ったせいなのか？武ちゃん？」

僕は女の子達を指差しました。

「何言ってるのさ。夢のようじゃないの。大体、拓さんも最近、もてもててしょうがないって言ってるじゃん。いい思いしてるのは一緒じゃないの」

上村さんは頭を抱えながら首を振りしました。

「だめだこりゃ。でも、お前は俺と好みがかぶらないから好きだけどね」

僕らは、鼻を鳴らして握手しました。そして、ステージ裏に向かいます。

もう、開演間近。全員の準備出来ました。

「じゃあ、いつもの行こうか！」

僕がステージ裏にいる皆に大声で呼びかけると、バンドメンバーとスタッフが集まり円陣を組みます。

「グローバル！」

僕の声に続き、皆の怒号が響き渡ります。

「おおおーっ！」

掛け声の余韻を背に感じながら、僕らはステージに向かいました。合図と共にスタジアムの照明が落とされ、演奏用の照明に切り替わると、ざわざわしていたスタジアムに一瞬の静寂が訪れます。

しかし、それもつかの間、

「グーロ・グラ！グーロ・クラ！グーロ・グラ！グーロ・クラ！グーロ・クラ！グーロ・クラ！グーロ・クラ！グーロ・クラ！グーロ・クラ！」

僕らを呼ぶ声がスタジアム中に響き渡り、手拍子が鳴り響きます。僕はメンバーの興奮した顔を見回しながら、ステージに上がりました。

「グーロ・グラ！グーロ・グラ！グーロ！きゃあああー！！！」
歓声が僕らの体を吹き飛ばすかのように鳴り響きます。

僕は手を振りながら、マイクスタンドまで進んで行きました。マイクスタンドは丁度ステージの中央に設置してあるので、そこからはスタジアム中が隅々まで見渡せて、ステージから二階席まで人がびっしりといるのがよく分かりました。

スタジアム中のオーディエンスが総立ちして歓声をあげていて、僕に手を振っています。メンバーがポジションに着いたのを確認すると、僕はマイクを握りました。

「北海道の皆！グローバル・O・グライダーです！」
僕の一言に、オーディエンスが反応してきます。

「今日は雨が降りそうな天気の中来てくれて、本当に嬉しいです。傘を持ってこなかった人もいるかな？でも大丈夫！変える頃には止んでるよ。俺達の音楽と、皆の力があれば、雨雲なんて吹っ飛んでくぜ！皆！今日はそのつもりで盛り上がってくれよ！」

僕がそう言っただけで片手を天に指差すと、女の子達は同じように手を振りあげ、同じように天を指差し僕の名前を呼んできました。

「よし！皆の熱気が伝わってくるぜ！今夜は激しく燃えあがんど！
激しいのいくぞ！聞いてくれよ！『スーパースOUND』！」

僕がそう言い終わるか終わらないかのうちに、観客の歓声が響き、それと同時に、九条君のギターの音が響き渡りました。

彼の細くて華奢な指が減の上で踊り、照明のせいでピクがきらきら光っています。

僕は全身でリズムを取りながら、気分が高ぶらせ、同時にサウンドに呼吸を合わせていきました。次第にドラムやベースの音が重なり、音が激しくなっていくきます。

そして、僕は歌い始めました。

正直、これだけの人の前で歌うのは初めてではありましたが、異常なくらい気持ちよくて、脳に快感が吹き上げます。それはメンバーも感じているのか、僕のノリが感染したのか全、ての音が気持ちよく弾んでいるのが分かります。

その流れでサビになると、観客席からも歌声が聞こえてきて、僕は手で客の声を引き寄せました。

このステージからは、オーディエンス一人一人の顔がよく見えて、歌という系が、僕と観客を縫い付け、まるで僕もオーディエンスも一つの固まりなっていくようです。そうして、曇りひとつない盛り上がりがスタジアムを埋め尽くし、僕が歌い終わると、大歓声とともに収縮していきました。

それから僕らはどんどん演奏していきました。

今度のツアーは僕らのファーストアルバムを演奏するツアーで、その中には立て続けに出したシングルが入っていることもあり、よく知っている曲が多かったので、観客席が静かになることはありませんでした。

メンバー紹介の時の北村の恥ずかしがり方（彼女はいつも控えめだったので、テレビでも雑誌でもあまり目立つことはしませんでした）も面白かったですし、九条君目当てのファンは「ラブ・ハンド」スタイルじゃないという事や、会場にいる男性ファンは大方上村さんの「コロラド」時代からのファンだと言う事も、池内さんは、大勢の前だと結構照れ屋だということも分かりました。

それに、客席にいるファンは、僕の独りよがりなトークにも付き合い合ってくれましたし、ロックにもバラードにも申し分のない反応をしてくれました。それを肌で感じた僕らも、確信に近い手ごたえを得ていました。

そうして、予定していた最後の演奏が終わると、すぐに観客からアンコールを求める声が沸き起こり、僕はもったいぶったようにマイクを持ちましたが、内心は嬉しくて仕方ありませんでした。それと言うのも、僕は事前にアンコール曲を決めていて、それを皆にも伝

えていたからです。

それは、僕が作詞作曲した「好きな人に歌う唄」と言う曲でした。十二曲を終えて汗まみれの面々に目配せすると、皆準備OKとも言うように頷いてきました。僕は嬉しさを隠しつつ、アコースティックギターを持ちに行き、アンコールを叫ぶ観客の皆に語り掛けました。

「ありがとう。実はアンコールがなかったらどうしようかと思ってたんだ」

観客の声が止み、僕の声だけがスタジアムに響きます。

「でも、皆のその声を聞けて本当に嬉しいよ。最後の曲は今日初めて発表するんだけど、僕が曲を書いたやつです」

ファンの女の子が、喉から驚きの声を響かせます。

「ちょっといつものグロ・グラ・サウンドと違うかもしれないけど、アコギを手にして思いをつづつてみました。聞いて帰ってください。ああ、最後にしたくないけど、最後の曲です。『好きな人に歌う唄』！」

僕はそう言うと、北村を見ました。

彼女は一つ頷くと、ゆっくりと鍵盤に指を走らせます。

そうして、静まり返った会場にピアノの音と、ギターの音色が響いていきました。

* ビルの間に見えるのは 温かい風が吹いた日に 君と見た僕らの星

星の光が届く時間と あなたを思う時間は同じだと 君が笑って名をつけた

気まぐれな風が吹き 桜色の渦巻きが 二人の周りを包んだね

悩みはいつぱいあるけれど 君が笑ったたびにほら 心が晴れやかになっていく

君が言った言葉だけ　僕の心に刻まれて

君の温もりを感じている　それ以上何がいるんだろう
君を幸せにすることが　僕が幸せになること　なんだ

人は定められて生きるなら　君と二人で歩いてる今が
きつと正しい道なんだ

いつも隣にいてほしいから　この先何がおころうと

君を守り続けける　そう決めたんだ

最後のフレーズを弾いた後に、僕は優しく弦を指で押さえ、そして顔を上げました。

スポットライトが、すかさず僕の視界を奪います。しばらくの静寂。その静寂を一つの拍手が破り、それに二つ、三つと続いていくと、それは会場全体に広がって、やがてスポットライトに当たっていた僕を会場全体の拍手が包み込んでいきました。

「たけしー！！」

「グロ・グラ最高！」

「また来てー！！！！」

割れんばかりの拍手の中から、そんなファンの声がいくつも飛び交い、僕らはそれに答えるように手を振りながら前に並んで、同時に頭を下げました。

右側のファンに、正面の観客に、左サイドの応援団に、会場にいるすべての人に感謝の気持ちを表して、コンサートの幕を閉じました。北海道公演を終えた僕達は、その後の仙台、横浜、東京、大阪とライブに来てくれた観客を沸かせて、強行軍のツアーを精一杯頑張りました。どのコンサートも評判は上場で、会場は常に満席、チケットもすぐにソールドアウト、そして、会場には「ラブ・ハンド」スタイルの女の子が溢れていました。マスコミもこれを取り上げ、一

つの現象として大きく扱ふ事もあり、僕の実現したかった、「ラブ・ハンド」を世間に広めると言うことは叶えられていったのです。

僕は自分のやってきた事が形になり、世間に影響を与えたと言う事実に、かなりの満足を感じていました。だって、レストランを辞め、インターネットで頭を悩ませていた頃では考えられない事が今起きているわけで、小さい頃からの夢見てきた光景（一度に二万人のラブ・ハンド！！）も今となっては見る事ができ、僕自身の存在も世間で認められてきているのです。

こうなってくると、自分の中で特出してくる感情を隠せはしませんでした。

僕はいくらでも自分の思い通りにやりたい事が出来るし、色々な女性と触れ会う事が出来る。僕の影響力の影響力があればどんな事だつて出来る、僕の言葉が世間を変えていくんだ！ツアーが西に進むたびに、僕の中ではそんな思いが膨らんで生きました。今はツアー中でなかなか身動きが取れないし、空いている時間にもさまざまに仕事が入っていて、ちゃんとした自分の時間は取れてなかったのですが、このツアーが終わったら、きつと僕もオイシイ思いが出来るはずです。夜眠る度にそんな思いが頭占めて、その度に僕は焼け焦げるような期待感とこみ上げてくる優越感の波に揺られるのですが、気持ちよくそれに浸るとようやく、眠りにつきした。

田代さん……！（前書き）

悲しい場面です。

ぐつと心に染みるようにかけていたらいいなあ。田代ファンがいたら（いるんですが）泣いてしまつかも知れませぬね。

田代さん！！！！

翌日、僕らは次の日に控えた広島公演の為に、東京駅のホームにいました。

新幹線での長旅を九条君が望んだので、時間の掛からない飛行機では無かったです。まあ、電車での旅をメンバーは楽しんでいました。朝早い時間だったのですが、ホームにはスーツ姿の中年や、旅行鞆を持った若者の姿が見えて、こだますアナウンスの中、それぞれに電車が来るのを待っていました。

そんなホームで一際僕の目を引いた、三人づれの若い女の子達がいきました。何が僕の興味を引き付けたかと言うと、それは、彼女達は三人とも腰肉を強調した服を身に着けているのはもちろん、それがあまりに自然、当たり前だとも言うような感じで佇んでいる、そのさまにでした。

思わず、僕は掛けていたサングラスを少しずらして見入ってしまいました。

二十歳前後の彼女達は、キャミソールにジーンズ姿だったのですが、少しきつめに締めたベルトの上には透き通るような白いお肉がはみ出していて、そのお肉の上にきらきらする星のシールを張っていました。張りが合ってプツクリと、今にも弾けそうな彼女達の「ラブ・ハンド」は、その真価を存分に発揮していて、僕のは光って見えません。

そんな、お腹の肉を楽しんで、お洒落を施している彼女達の様子を見ていて、僕の中に嬉しさとともに、自然と男の感情も起きてきました。

正直、僕はバンドを始めてから一回も女性と夜を共にすることがありませんでした。

坂を転がる石のように、余計なものに目もくれず走り続けていたので無理もなかったのですが、夢を実現できた達成感と、女性を求め

る自然な感情が今ちょうど僕の中で融合してきたのでしよう。男だから無理はありません。

これが上村さんや池内さん、最近では九条君だったら、すぐにでも彼女達に声をかけて、後で連絡を取り合ったのでしよう。実際彼らはフアンの女の子達と飲みに行ったり、ライブが終わった後はよく夜の街に繰り出したりしていました。前からそっちの事は疎遠であった僕は、堅物と思われたか、興味が無い人間だと思われたのか、自然に誘われなくなっていたので、僕が女の子と遊ぶ機会なんて作られない状態でした。それに加えて、田代さんが同行してない今度のツアーは、運営するスタッフとのやり取りにも僕も加わっていないので、時間も無い、機会も無いのでは、遊ぶ間も無いのは当然でした。

ただ、男の欲望が無くなるわけではないので、徐々に高ぶる感情はこのツアーが終わってから存分に発揮しようとして、悶々とした日々を過ごしながら、欲望を抑えていたのです。

まあ、「ラブ・ハンド」がここまで浸透し、腰を強調する女の子が増えた今となっては、僕がその気になればいつでもそんな女の子は手に入れる事が出来る訳ですし、焦る事はありません。何しろ、僕は人気者なのですから。

僕は三人の女の子達を横目で見ながら、新幹線がホームに滑り込んでくると、すぐに気持ちを切り替えました。とにかく今はツアーのことを考えよう、やらなきゃいけない事は腐るほどあるのだから。そう思いながら、僕は新幹線に乗り込んで行きました。意気揚々と乗り込むメンバーと一緒にグリーン車の席に座りながら、広島ではどんな「ラブ・ハンド」達が待っているかと思いつかべて、僕は窓の外を見ながら悦に入っていました。

しかし、そんな僕の高揚感を、一つの電話が吹き飛ばしました。新大阪に差し掛かったあたりで、僕の携帯電話が音を立てました。携帯電話の画面には、斉藤と出ていて、僕は彼がコンサート前に激でも飛ばしてくるのかと思いつながら、にやけ顔で通話ボタンを押し

ました。

「あつ、斉藤さん？どうしたの？」

僕は向かいの席でふざけている池内さんを見ながら、そう言いました。池内さんはさつきからいろいろいな人の物まねをして、僕らを笑わせていて、今はスタッフフチーフの怒り顔を真似ていました。的を捉えている彼の表情に、周りのメンバーやスタッフは声を上げて笑っていました。

「武士」

斉藤さんの押し殺した声が聞こえます。

「どうしたんですか？」

「田代さんが……」

僕が話している横で、上村さんが何やら大きな声を上げました。

「え？何？田代さんがどうかしたの？」

最後の言葉が聞き取れません。

すると、斉藤さんのくぐもった声が再び僕の耳に、今度はしっかりと聞こえてきました。

「田代さんが倒れた。今病院にいるんだが、危険な状態みたいで、今集中治療室に入ってる」

「え？」

一瞬、斉藤さんが何を言ってるか理解できませんでした。

「今日の朝、クリスタルの光一君が田代さんの家に行ったみたいなんだけど、救急車がマンションの前に止まっていて。もしやと思つて駆けつけたら田代さんだったらしい。病院から俺に連絡があつてな。すぐ病院に駆けつけたんだが、すぐ手術になつたらしくて本人には会え無かつたよ。だけど、まあ、何とか一命は取り留めたようだ」

斉藤さんはその経過を淡々としゃべってきました。

僕はそれを聞きながら、僕の表情の深刻な様子を察した北村と目を合わせていました。北村は心配そうに僕を見ています。

僕はすかさず、隣にいた上村さんの袖を軽く引っ張りました。

自然、僕は大きな声を上げました。

「命は大丈夫なんですよね！」

斉藤さんの落ち着いた声が聞こえます。

「まだ、予断はできないようなんだ。でも、今は大丈夫だ。お前達には早く知らせたかったんだが、何しろ急だったもんだから、すまん」

僕は自分の肩の力が抜けていくのが分かりました。

「いえ……。ありがとうございます」

僕は力なく答えました。

「明日は広島のコンスアートがあるんだ。お前はそれをまず考えるんだ。いいな。田代さんの事は俺に任せろ」

「でも……」

「わかったな。じゃあ、きるぞ」

斉藤さんがそう言うのと、電話は切れてしまいました。僕は無言で携帯の画面を見つめました。

「どうしたんだ！？何があった？」

上村さんが僕の顔を覗いてきました。僕が顔を上げると、皆が僕の様子を伺っていて、一様に何が起こったのかと疑問の顔を貼り付けていました。

「田代さんが倒れたみたいなんだ」

僕の声に、北村がはつと声を上げ、メンバーの表情が曇りました。

「どんな状態なんだ？」

池内さんがさつきとは打って変わった顔で僕に聞いてきました。

「命は取り留めたみたいなんだけど……」

全員の表情がふと緩みます。

「まだ予断を許さないみたいなんだ。斉藤さんが病院にいるらしいんだけど、詳しいことは言っていなかったけど、集中治療室にいるって」

北村の表情が、すぐに驚きと不安に包まれるのが分かりました。

「俺、今から戻るよ。田代さんのところに行ってくる！」

僕は北村の肩に手を置くと、皆の顔を見ながらそう言いました。驚いたマネジャーが口を開きます。

「でも、明日は・・・」

「明日の昼前には戻ってくるから。ライブまでには戻ってくる。新大阪から戻れば、うまく行けば夕方前には向こうに着けるし。斉藤さんは任せろって言ってたけど・・・。俺、行くよ」

僕はいても立つてもいられなくなり、自分の荷物をまとめました。皆はその様子を何も言わずに見ていましたが、九条君が口を開きました。

「武さんが行くなら、俺も行くよ」

その言葉に上村さんも立ち上がりました。僕は二人を見て、そして僕は九条君の前に立ち、肩に手を置きました。

「勇ちゃんの気持ちも分かるけど、俺に行かしてくれ。メンバーがみんなライブ前にいなくなるのはよくないし、それに、勇ちゃんは今日会場セッティングの打ち合わせがあるだろ。それに、一人なら動くときも何とでもなるから。皆も心配だろうけど」

僕の言葉に、上村さんが九条君の腕を優しく引き寄せて、座らせました。

池内さんは俯いていましたし、スタッフの顔にも不安の色が浮かんでいていました。

北村を見ると、もう泣きそうになっています。

ずっと田代さんの事を心配してきた北村ですから、駆けつきたいのは山々なのでしょうが、今はこらえているようで、それが僕にはよく分かりました。

僕は北村のそばに近寄り、声をかけました。

「大丈夫さ。強い人だから」

北村は黙って頷き、自分の席に座ると、僕の左手を弱く握ってきました。

電車のスピードが徐々に落ちてゆきます。

同時に社内に車掌のアナウンスが流れ、もうすぐ新大阪につく事が

分かりました。

「東京行きは反対のホームですぐに乗れるようだから。会社の人間に車用意させといたから使ってくれ。これ、携帯番号」

マネージャーが僕に小さな紙切れを渡してきました。北村はすつと手を離し、窓の外を見ました。

「ありがとう」

僕はそれを受け取ると、左のポケットにねじ込みました。

電車がホームに滑り込んでゆき、ホームで立っている人の顔がわかるようになる、僕は皆の肩に触れながら、通路を歩いてゆきました。

九条君はブすつとした顔をしていましたが、よろしく頼むというように僕を叩き、メンバーや他のスタッフ達は心配そうに僕を見送りました。

ドアが開くと、人々の声やら電車の線路をきしませる音、ホームのアナウンスが僕の耳に飛び込み、感覚を揺さぶらせてきます。そして、人の波が押し寄せてきましたが、僕は書き分けるようにその波の中を走ってゆき、東京行きのホームを目指しました。

「来ちまったか・・・」

僕が病院に着くと、田代さんは一言、そう言いました。

僕が東京に着く前に意識を取り戻した彼は、その病院の特別病室のベットに横たわっていて、顔に覆われた酸素マスク越しに隣に腰掛けて僕を見ていました。何とか一命は取り留めたものの、白いシートに横になっている彼の姿は生気を失っていました。夕方の強い日差しでさえも、彼の体を溶かしてしまいそうです。

「当たり前です」

僕は田代さんの手を握りました。

その手は黒くよどんでいて、とても生きている人の手とは思えない

ほど力なく、前に僕を叱咤激励した手とは思えないほどでした。

「ばか、だなあ。来な、くても、よかった、のに」

田代さんは弱弱い声を、やっと出しました。生命をつなぐ機械の音が常に聞こえているので、耳を地被けなければ聞き取れないほどでしたが、この音が聞えなくなる時は彼の命が無くなる時、僕はしっかりと耳を立てて声を拾いました。

しかし、聞こうとするだけで、これがあの田代さんなのかという思いが胸にこみ上げてきて、自然に目元が熱くなってきます。

「ばか、だ、なあ。泣く、なよ」

田代さんの指が、弱弱しく僕の指を握ってきます。そして、驚くほどしっかりとした声を出してきました。

「お前らは、俺の最後の、作品だ。俺の、な。俺には、家族はいない。でも・・・」

田代さんは一つ息を吞みました。

「お前達がいる。お前、達は、これからだ」

そう言うと、田代さんは息を荒げて、力無く頭を枕に沈ませると、遠くを見るように天井を見上げました。

「もつと、見て、いた、かった。くそ。こん、なんじゃ」

そう言うと、田代さんの頬に一筋の涙がこぼれました。

「まだ、見ていてください。大丈夫。きつとまた見れますよ」

「馬鹿、だなあ。自分の、事は自分がよく、わかってる。俺は、・・・だめだ」

「何弱気になつてるんですか！田代さんがそんな事言うなんて」

「こんな、になれば、・・・」

田代さんは力なく口をゆがませて笑いました。

「一人・・・きりで・・・死ぬのは・・・一人・・・」

「何言ってるんですか！そんな・・・」

田代さんは僕の言葉を、やや大きな声で遮りました。

「武士。一人で、生きちゃ、だめ、つだ。いいか、大切な人・・・大切、にする・・・んだ・・・」

一瞬目を見開いた田代さんはすつと力なく目を閉じ、それに伴って、ベッドのそばの機械が音を立てました。僕は部屋の隅にいる若い看護師の方を振り向くと、彼女はすでに医者に連絡を取っていて、それがすむと僕を弾き飛ばして、田代さんの意識を取り戻しにかかりました。すぐに医師もやってきて、田代さんを蘇生させようと、両手に黒板けしみたいな装置で電気ショックを与えて、脈を取り戻しにかかりました。

田代さんの脈拍が、僕の目と耳に入ってきてきます。医師がもう一度電気ショックを与えると、僅かながら脈が戻りました。

「よし！」

医師がその声を上げると、何人かの看護師が田代さんをベッドに寝かしたまま病室から運び出して、そのまま連れて行ってしまいました。

僕はそれをなすすべもなく見ているしかなかったのですが、田代さんが病室から運ばれていくと、それについて行こうとしました。しかし、すぐに若い看護師が僕の前に立ち、それを遮りました。

「集中治療室で様子を見ますから」

その言葉に、僕はただ田代さんが運ばれていくのを見ているしかなく、これから何をしていいかも分からなくて、頭が真っ白になりながら、その場に立っているしかできませんでした。

その看護師は僕が落ち着いたのを確認すると、その場から離れてゆきました。が、入れ違いに、斉藤さんが僕の傍に駆けてきました。

「武士！どうしたんだ！」

彼は缶ジュースを持っていて手を強く握り締めて、僕にそう問いかけてきましたが、僕は答える代わりに、彼にしがみついて声を上げて泣きました。

泣くまい、泣くまいと心の中で何度も叫んだのですが、どうしようもない事に対する悔しさと、田代さんが死んでいくことの実感が抑えられなかったのです。

僕には何もする事が出来なくて、田代さんを救う事が出来ない。

今まで自分で手には入れてきた事も、何一つとして役には立たないし、一人の人間を救う力なんてない。

何かを変えようとしてきたのに、人の運命は変えることができなくて、むしろ、自分が変えようと思ったばかりに、人の運命を変えてしまった。

彼がここまで、死ぬまで体を酷使したのは、僕が彼と関わったからだ！

そんな事が浮かんできません。

泣きながら、僕の頭の中に色々な感情が噴出してきて、それが僕に、自分が無力であると言う事を、感じさせたのです。

そして、その晩、田代さんは息を引き取りました。

僕と斉藤さんと何人かの音楽関係者が、夜遅くまで病院の待合室にいたのですが、十二時も過ぎたあたりに担当の医師から田代さんの病状が急変した事を告げられてから、あっという間に亡くなってしまいました。

あなただけは強くいて！（前書き）

孤独な男はかっこいい、なんて幻想いつまでもっていたっけ？

でも、やっぱりそんな男が多いって思う今日この頃です。

孤独を知る人間こそ、人に優しくできるのでは？なんて、違いますね。

やっぱり始めは愛が必要なんです。ギブミーラブ

あなただけは強くいて！

田代さんに家族と呼べる人はいなくて、誰一人として死の間際には立ち会う事は出来ませんでした。が、病院側が配慮してくれて面会時間外の滞在を許可してくれた事もあり、霊安室に田代さんを見送ることができました。ストレッチャーに乗せられた田代さんは目を閉じられ、血の気のなくなった色黒の顔は二度と動く事は無く、彼の体からは生命の帳はもう起きませんでした。穏やかとはとても言えませんでしたが、何事からも解放された姿の田代さんを見て、僕の心はひどく隙間が開いたようになってしまいました。

しかし、涙は出ません。ただ、空虚なのです。

田代さんが死んだという事実は間違いなく僕の中で認識されていて、現実の感覚を刻み込んでいます。理解すれば理解するほど僕の心に空間ができてきてしまうのです。斉藤さんや、関係者の人達は携帯電話でそれぞれ誰かに連絡を取りに、外に出かけていきました。ただ、僕はと言えば、待合室のベンチに一人腰掛け、頭の中を空っぽにしていました。昼間は人でごった返し、患者や看護師の声が行きかうこの広い待合室も、夜中のこの時間は静寂に包まれ、遠くで光る非常口と小さな照明だけの薄暗い世界を作っていました。人の死を受け入れ、考えるにはいい空間かもしれせん。

僕はクリーム色のベンチの背もたれに体を任せて、白い天井を見上げました。

今まで、田代さんにしてもらった事や、田代さんの言葉、迷惑かけた事や怒られた事、酔っ払った日に介抱したり、馬鹿な話をし合っ
て笑いあった事など、良い事も悪い事も色々な光景が浮かんできて、そんな光景が浮かぶたびに、それがもう過去で、未来は無いという事がくつついてきて、改めて田代さんという人を考えてしまうのです。

田代さんは、明らかな成功者で、才能もあり、人徳も人を見る目も

持つていて、決断力は特にならずに抜けていましたし、限らない自信に溢れている人でした。確かに癖があり、風貌もどこか怪しく、鋭い目つきは人を不安にさせる事もあったでしょうが、音楽を愛していた点は誰の目にも明らかで、それだけでも尊敬に値することです。しかし、彼は孤独な人でした。

僕は今になつて、自分が田代さんにとつては、深い存在で無いという事が分かりました。いや、僕だけではない。他の誰もが田代さんとはそんなに深くまでは付き合つてはいなかったのです。確かに可愛がられた人は何人もいますが、彼を本当に奥底で支えるような人は、いなかつたんだと思えました。

特に女性は皆無といつていいでしょう。

少なくとも僕が知り合つてから、田代さんを支える女性には会つたことはありませんでしたし、その影すら感じませんでした。直接本人に尋ねる機会もありませんでしたし、いい年齢の大人にそんな事をかんぐる気もなかったのです。過去に何があつたかなど僕は知るよしもありません。

ただ、彼がただ一人、誰にも心を開く事無く生きてきたと言う事は、彼が死んだ今、初めて僕には実感できました。

「あつ」

考えてみれば、彼の最後の言葉を聞いたのは、僕です。

「一人で生きてはだめだ。大切にするんだ」

僕は小さく呟いてみました。

「一人で生きてはだめ」

田代さんは自分の事を言つたのでしょうか？

「大切にするんだ」

僕は口の中でそう呟くと、途端に抑えていたものがこみ上げてきました。

一人で死んでいく男の、最後の言葉は、誰か自分の片割れを求める悲痛な叫びで、今までの自分の人生に対する後悔にほかなりません。そんな気持ちの中で死んでいった田代さんのことを思うと、涙が止

まらないのです。

そして、これは僕に対するメッセージにも受け取れてきたのです。僕にとって大切な、自分の片割れ。

それは僕の中にまだ明確には表れてはいませんが、男として生き、死んだ一人の人間の言葉は僕の心に深く刻み込まれたのです。次の日の朝、看護師の好意で仮眠室に泊まらせてもらった僕は、夜勤明けの若い医師に起こされて目覚めました。時計を見ると朝の八時過ぎで、僕は慌てて飛び起きました。荷物をまとめてすぐに出ないと、用意してくれた切符で広島に向かうことができなくなるぎりぎりの時間でした。いつもの癖で携帯電話を確認すると、北村からの着信が十件くらい入っていました。マナーモードにして、ズボンのポケットに入れたまま脱ぎ捨てていたので、朝履き直すまで気付かなかったのです。僕は忙しなくお世話になった医師や看護師達に挨拶すると、呼んでもらったタクシーに乗り込み、さっそく、僕は北村に電話をしました。すると、彼女はツーコールしないうちに出ました。

「もしもし、北村か？」

「武士、大丈夫？」

心配そうな北村の声に心が和らいできます。

「北村、田代さんなあ・・・」

僕が切り出す前に、北村から喋りだしてきました。

「斉藤さんから電話あったよ」

北村の落ち着いたような声が聞こえます。僕は思い出したように胸が熱くなりました。

「田代さん、・・・あつという間だった」

「聞いたよ・・・」

「でも、ちゃんと意識があるうちに会えたんだ」

「間に合ったんだね」

「うん。俺・・・」

一筋の光が僕の頬を伝わり、僕はそれを隠すかのように鼻をすすり

ました。北村は黙って聞いてくれました。

「俺、田代さんの最後の言葉を聞いたんだよ。田代さん……」
どうしようもない熱さが、目から溢れて、僕は言葉を詰まらせました。

「武士、しつかりしなよ！」

北村の力強い声が僕の耳を震わしました。

「泣くな！田代さんは亡くなったけど、あなたは生きてるんだから。泣くんじゃないの！泣いたって田代さんは生き返らないんだから！」
僕は鼻を噉って、それを飲み込むと、吐き出すように声を出しました。

「だって悲しんだもん。目の前で、やつれた姿で、俺に話してきたんだ。俺に話してきたんだよ、一人で生きるんじゃないって、大切にしろってさあ」

「泣くな、馬鹿！あんなだけが悲しいんじゃないんだから」

北村の声も崩れて聞こえてきます。

「田代さんはもういないの。あんなばっか悲しくなるな。あたしだって悲しいのに、あんなばっか悲しくならないですよ。あんなは強くなくちゃだめ！泣いちゃだめだよ！」

僕は手の甲で涙をぬぐって、大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出しました。

「北村、お前、強いな」

僕がそう言つと、しばらくしてから北村は口を開きました。

「だって……、女だもん」

北村のはっきりとした言葉が、僕の気付かなかったところの心を、強く打ちました。

「ライブ、絶対間に合わせるから、待っててな」

僕が仕切り直しながらそう言つと、北村の少し張りのある声が答えてきました。

「うん。待ってる」

「皆にも伝えてくれよ。準備万端にしといてくれってな」

「分かったよ。あんたも気をつけてね」

「ああ、じゃあ、広島で」

「うん」

彼女のその言葉を聞いて、僕は携帯電話を耳から話しました。

タクシーの窓の外を見ると、きらきらした日差しを放つ朝日が僕の頬を照らし、濡れた心を乾かしてくれようでした。

その後、僕は開演時間前に何とか間に合ったのですが、時間ギリギリと言う事もあってメンバーとはちゃんと話をできないまま演奏に突入しました。

超満員で盛り上がっているファンを前にして、田代さんの死や疲れなんかを感じさせられなかったので、ただ何も考えず気力と勢いでコンサートを乗り切ったのですが、いつもだったら曲の間に何か景気づけのMCをしたりするのですが、今回はとても喋る気には成らず、ただ曲をこなす事しか出来ませんでした。

ライブが終わった後も頭が落ち着かず、メンバーとろくに話もしないでホテルに戻り、ベットに転がり込みました。とにかく混乱している頭をどうにかしたかったのですが、柔らかなスプリングのそのベットは僕を深い眠りにいざない、休ませてくれました。

次の日の朝、東京に帰る新幹線の中で、僕はやっとメンバー達と向き合って話すことができ、田代さんとの最後のやり取りも落ち着いて話す事が出来ました。

皆、一樣に神妙な面持ちで受け止めてくれて、色々聞いてくることも無く、ただ耳を傾けてくれました。僕が話し終えると、東京に着くまで何も言わずに座っていて、一人一人で田代さんの死を受け止めているようでした。

僕は北村ともそれ以上何も話をしなで、ただ、目でお互いの様子を感ずるだけでした。

ツアーが終わりもどつてくると、スケジュールを調整してもらって、僕らは田代さんの葬式に行く事が出来、最後のお別れをしました。

両親もすでに亡くなっていて、兄弟も妻子もいなかった田代さんの

お葬式はごく身近な人達だけで行われて、喪主は彼の遠い親戚にあたる人が引き受けていました。その人は生前に身近な親交がなかったようで、田代さん自身の事は何も知らなかったようですが、やはり身内が喪主に成ってくれた方がいいだろうと、斉藤さんが連絡を取ったようです。

実際には、式の手配や進行なんかは斉藤さんが取り仕切ってくれて、色々な所に連絡をしたようでした。式場には報道関係の記者なんかはいなかったので、世間に彼の死が知らされる事は無いのでしょうか、音楽業界の仕事関係の人達は彼の訃報を知らされて、式場に駆けつけてきてくれました。彼らは田代さんと一緒に仕事をして人達で、プロダクションの社長やレコード会社の関係者、中には以前彼がプロデュースした歌手やバンドなんかの姿もいました。お別れの挨拶をしていく大物達を見ながら、僕たちは改めて業界内での彼の存在を感じたのです。

出席者が彼にお別れを言っている時、僕は斉藤さんと一緒に最前列にいました。

彼の死に立ち会ったものとして、彼の近くにいたかったです。

僕は式に来てくれた人達に、喪主や斉藤さんと一緒に頭を下げていたのですが、彼らは僕の顔を見ると、声をかけてきました。

彼らは、一様に僕の前で立ち止まると、田代さんがいかに僕たちに力を入れていたかを伝えて来てくれました。

僕らをデビューさせる為に、彼がいたるところに必死で頭を下げ、その機会を作ってくれた事、それも、自分の病状を自覚していたのか、俺の最後の仕事だからと何回もすごんだそうです。彼と親しかった関係者からは、涙ながらにそう言われました。あんな田代は見ただ事無かった、そう小さく呟いて去っていく人もいました。

ある人は、田代が押したから君たちを使ってみようと思ったんだよ、とも言われ、そしてその人は僕の肩に手を優しくのせると、

「あいつの目は狂っちゃいなかったよ。君達はいいつの最後のバンドだ。それを心に刻んどいてくれ」

そう言ってくれました。

白髪交じりで足の悪そうなその老人は、僕の顔に強い眼差しを送ってきました。僕もそれに答えるように大きく頷き、その人の目をしっかりと見ると、その人は僕の肩をぽんぽんと叩いて、その場から立ち去っていきました。

後から、斉藤さんに、その人がクリスタルグループの会長で、クリスタルレコードができたばかりのときに、まだプロデューサーとして若かった田代さんと組み、クリスタルを大きくさせた人だと聞かされました。

それから、田代さんは火葬場に運ばれ、皆の見守る中、遺体は焼却炉の中に入れられました。焼却炉の小さい窓から赤い揺らめきが見え、田代さんの体がなくなっていくんだなあと思うと、斉藤さんに連れられて田代さんと初めて会った時の事が思い出されました。

あの日、緊張の中ギター一本で歌を歌い、それから彼のペースで事がどんどん運んでいき、気が付くとバンドが組まれ、北村と一緒になって活動したり、日本中の皆に自分の存在を知ってもらえて、しかも「ラブ・ハンド」を広める事も出来たのです。

彼がいなかったら成しえなかったし、男が命をかけて仕事をすることはどんな事なのか知りえなかったでしょう。

そして、それと同時に僕は感じてしまったのです。

僕は「ラブ・ハンド」を広めるために結果的に田代さんを死なせてしまった、その代償としている今の自分の求めているものが、引き合うものなのだろうか？

僕は「ラブ・ハンド」を求めて突き進んできたのだけど、自分の命を懸けてまで求めているのだろうか？

僕が本当に大切にしなければならぬものは何なんだろうか？

自分の欲望で、人の人生を左右してしまった事実が、僕にのしかかっていたのです。

自分の中で、今まで自分がしてきたことへの戸惑いが起こってきた。

しかし、スケジュールや世間、特にレコード会社は僕をほって置いてはくれませんでした。

「据え膳食わぬは男の恥」を実行できなかった男（前書き）

本当にやりたい事、大切な事って、何か制限されたり、いなくなったりしてから初めて気が付きませんか？

そうやって人は自分にとって大切な何かを見つけるんでしょうね。

主人公もトップアイドルを目の前にして、それに気が付いたみたいですよ！

「据え膳食わぬは男の恥」を実行できなかった男

レコード会社は、田代さんという枷がなくなった今、僕らのバンドに必要な介入してくるようになりました。今一番旬で人気もある僕らは、彼らにしてみたら金のなる木、放って置く筈も無く、すぐに新しいプロデューサーを擁立してきて、さまざまな企画を打ち立ててきました。そして、初の全国ツアーに何とか成功して一息ついた僕らを、彼らは容赦なく駆り立ててきました。僕にとっては、田代さんとの信頼関係があつたうえでレコード会社の事も信頼して繋がっていたのですが、彼がいなくなつてからのレコード会社のやり方には正直、ついていけないものがありました。

しかし、メンバーは乗りに乗っている自分達をさらに伸ばそうと躍起になっていて、それが音楽界の常識なのかもしれませんが、人気冷めない内にどんどんこちらから仕掛けていかないと駄目だとメンバーから言い聞かされると、僕は従うしかありませんでした。そして、否応無しに、メディアへの露出をさせられ、至る所でのライブのスケジュールを組まされて、僕は時間と仕事、人に追われるようになってゆきました。

その甲斐あつてというか、僕の心情とは裏腹に、日本中に僕らのバンドの名前が知れ渡り、出していく曲も大変な人数の人達が買ってくれました。CDセールスランキングの上位を飾る事も続き、それによって今まで持った事の無いほどのお金も手に入りました。

上村さんや池内さん、九条君も、今まで住んでいた所を引っ越して出来たばかりの長高級高層マンションに越してゆき、生活も一変したかのように派手になっていきました。

特に九条君の変わりようは凄まじく、初めて会った時の、引っ込み思案ではにかみやな所なんか微塵も感じさせない位に、横柄で高慢

になってゆき、以前とは考えられないくらいに大きな態度をとるようになっていきました。それに加えて、女性関係も乱れているようで、一人で暮らすようになってからは、とっかえひっかえ色々な女の子と遊んでいるようで、僕らがスタジオで音合わせしている時にも、派手な女の子を連れてくるようになっていました。田代さんがいる頃なら考えられない事でしたが、その事にいちいち何かを言う人は誰もいません。新しく僕らについたプロデューサーは、僕らの私生活にまで口を出すほどの影響力も持ちえませんでしたし、考えている事と言ったらレコード会社の顔色が自分の乗っている車の事ぐらいでしたし、マネジャーにしても僕らを機嫌よくさせる事しか頭になくて、虫のいい事を口にするか、根拠のない「大丈夫！」を繰り返すだけでした。

メンバーにしてみても、自分達も同じ様な事をしていましたし、田代さんという存在がバンドから無くなってから、お互いにプライベートな事に関心を持たなくなっていました。以前だったら一緒に寝泊りをしていた位だったから、プライベートもあつたもんじゃない関係だったのに、今では離れて暮らしている事もあつて、それぞれは仕事の話しかしなくなっていたのです。

最近の僕らは、音楽をしているとき意外は好き放題にしている感じがあり、日を追う毎にまとまりを得なくなっているのが、はっきりと感じられるようになっていました。

まあ、メンバーの女性問題を心配していた僕だったのですが、自分の意思とはかけ離れているところで、それは僕にも降りかかってきました。

それは、本当に最近、昨日の事でした。僕は何故か、人気のスーパーアイドルとホテルにいたのです。

事の発端は、ある音楽番組に出た時に、彼女もその番組と一緒に出演した事でした。僕達は新曲の発表と、二回目の全国ツアーの宣伝の為に呼ばれ、彼女は初めて出すCDのアピールに来ていました。

その時は、司会者を挟んで少し会話をした程度で、僕は直接彼女と

話をする事はなく、今ではバンドのメインスピーカーとなっていた九条君だけが色々な話をしていました。スーパーアイドルとして世間の男子諸君を熱くさせていた彼女は、その若い魅力をスタジオで振りまいていて、その場にいた男児の心を完全に酔わせていました。彼女の唇の動き、目の動き、ささやかな手振り、全てにいちいち男達は反応していて、僕以外のメンバーは近くに彼女がいるというだけで、日頃から見え隠れする狼の毛皮を頭からすっぽりと被っては、目をぎらつかせていました。

もちろん、他にも女性のアーティストはいたのですが、彼女の輝きは別格と言っていていいでしょう。それは僕も認める所です。それに加えて、番組中の彼女の一言が、いやがおおにもメンバー（僕を含めて）をヒートアップさせました。司会者の質問に、彼女は肩まである艶々の黒髪を右手で払い、透き通って曇り一つ無いふかふかの頬つぺたを少し赤らめ、ウルウルのグロスで煌めいているピンクの唇を動かしてこう言ったのです。

「私の好きなアーティストは、グローバル・O・グライダーです！」正直、僕は嬉しくなりました。大きな声で「マジで！！！」といった池内さんや、本気で彼女を見つめている九条君ほどではありませんでしたが。

ただ、僕の中ではそれが男女の関係になるなんて事は、その時は頭にはありませんでした。それほど、僕は思い上がってはいなかったのです。それに、テレビに映る人達の大概は、良くそんなおべんちゃらを言いますし、芸能人の番組上の言葉が、いったんカメラのフレームから外れると百八十度変わると言う事を今ではよく分かっていたので、それも彼女の番組上での言葉だと思っていました。でも、その日の収録が終わった後、彼女の言葉が真実である事が分かったのです。

きっかけは九条君でした。

収録後、九条君が勢い乗じて彼女に話しかけ、そのまま飲みに行く事になってしまい、彼女がメンバー（北村は断りました）も誘って

きて、僕も付いて行く事になったのです。

九条君が、よく他の女の子達と行っているお洒落なワインバーに僕らを連れて行き、はしゃぐ彼女を僕らが取り巻きながら、その店自慢のイタリアンと、一本でどこかのレストランで食事が出る位の値段のワインを三本ほど開けながら、僕らは話していました。

丸テーブルだったので、彼女の隣には九条君と上村さんが有無も言わず陣取り、彼女の正面には池内さんが鼻の穴を広げながら座りました。

僕は、九条君の隣に刺身のつまみたいに座りました。

正直、僕は彼女と特に話す事なんて無かったし、手打ちオレキエツテとシシリアンルージュを使ったトマトソースがあまりに美味しかった事もあり、彼女と言葉を交わす事はありませんでした。まあ、周りから見れば、九条君が一方的に彼女と話していたので、彼が壁となつて僕が会話に加われないんだろなあ、と思えたことでしょうけど。

何しろ、彼は身を大きく乗り出して彼女の視線を独り占めしていたのですから。

久しぶりに皆と飲んで、彼らの最近の変わりようがよく分かりました。

上村さんは前と打って変わって、自分の事しか考えないようになっています。池内さんは会話の厭らしさが露骨になっていました。でも、皆の会話は彼女を中心に盛り上がっていて、僕はそれを同じテーブルに着きながら、観察している気分になっていました。だから、店のクロウズの時間に近づくにつれて、僕はこのテーブルにいる人間の事がどうでも良くなりました。もちろん彼女も含めてです。しかし、何の作用が起こったのか、時間が経つにつれて、彼女の関心は僕に移っていったのです。

事あるごとに僕に話しかけてきては、彼女の会話に引き込まれようとしてくるのです。それでもまあ、僕が一言、二言喋ると、九条君がすぐに話題を変えてしまうので、話は続かないのですが、女の視線が

僕に当てられているのは、はっきり分かりました。

そして、お店の人にやんわりと閉店の時間を告げられ、お酒の入った九条君がごねるのを宥めながらお店からで皆で出て行く時でした。僕は彼女に手招きされ、無言で紙切れを渡されたのです。すぐに酔っ払った上村さんが僕らに飛び掛つてきて、店を代えて彼女と呑み行くと言い張つたのですが、彼女は幾分はつきりとお断りして、残念そうな顔を露骨に表す三人と、ピンク色の紙切れを握りつて理解不能になっている僕をその場に残し、彼女はタクシーに乗って去っていきました。酔っ払った勢いで夜の店に向かつていく三人がいなくなる、僕はタクシーを捕まえて、そして、車内に入ってから、恐る恐るその紙切れを開くと、そこには彼女の携帯番号とメールアドレスが書いてあって、一緒に「連絡してね」の文字と大きなハートマークが書いてありました。

もちろん、その場ですぐメールを打つたのは言うまでもありません。一瞬の迷いもありませんでした。何しろ、日本中の男のハートを蕩けさすスーパードールが、僕を誘ってきているのです。間違いない、明らかに僕に好意を持っているのです。何もしないほうがおかしいと言つものでしょうか？

それから何度かメールを繰り返し、そして、僕らは二人きりで会う約束をしました。

お互いスケジュールは詰まっていたので、日にちを調節するのに苦労しましたが、彼女の都合のいい日を聞いて、すぐにマネジャーにスケジュールを相談しました。

お互いに会おうと思っっている二人が会うまでの時間は短い、とは恋愛の方程式の一つなのでしょうが、僕らが会えたのは音楽番組で共演してから二週間は立っていました。

彼女の予定に、僕が合わせる形で会う事になったので時間がかかったのですが、約束通り、僕は彼女の指定する日に、二人きり出会うことに成ったのです。

そして昨日、僕は彼女と一緒に、海辺にある高層ホテルのバーにいました。

夜遅い時間までやっているそのバーで、窓から息を呑むほどの夜景を一望しながら、生のピアノ演奏と気の利いた老練のバーテンダーの操るシエーカーの手際のいい音を聞きながら、僕らはロマンティックな気分にはまっていました。僕はドライマティーニのオリ・ブを手で弄び、彼女は僕の瞳から目を離さないようにスクリュードライバーを楽しんでいました。彼女は、正直な胸のうちの僕に告白してきました。バンドの音楽がお気に入り、その世界観が彼女と合致している事、そして、僕のファンですと言う事を。

僕の隣に座る彼女はややゆったり目のドレスを着ていて、綺麗に磨かれたカウンターに肘をつけています。そして、幾分顔を赤らめさせ、長い睫毛の奥にある黒目をとろんとさせながら、僕に自慢のバストをくつつけてきました。それからほろ酔い気分の僕は、言葉で心を通じ合わせ、瞳で確認しあったのです。僕は黙って彼女を伴い、そのホテルのフロントに向かいました。夜中とあってフロントの辺りには人がなかったのですが、僕は彼女をエレベーターの近くに待たせ、とにかく部屋をとってくれ、とフロントマンに告げると、部屋のキーを受け取りました。そして、待ちきれない様子の彼女を伴い、エレベーターに乗り込みました。そこで彼女は思いがけず僕に抱きついてきて、僕に先制攻撃を加えてきました。

誰もいない密室で、彼女の熱い舌が僕の舌を翻弄してきます。

僕らはその勢いのまま、部屋に飛び込んでいきました。

「見て！」

部屋に入るなり、彼女は僕から体を離し、ダブルベットの前に立つと、ゆったりとしているドレスをゆっくりと脱いで、それを足元に落としたままにしました。

ベットサイドについているランプの光が、彼女のシルエットを浮かび上がらせます。

彼女の腰には、紛れも泣く立派な「ラブ・ハンド」が乗っかってい

ました。

彼女は腰に手を当てながら片方の膝を少し曲げ、僕にポーズをとって微笑みました。「あなたの探しているものって、これでしょ？」彼女の色っぽい声が僕の頭を打ち抜きました。

「あなたの為に、私こうしたの」

僕はゆっくりと彼女に近づき、その腰を両手に収めると、ぐっと近くに引き寄せました。柔らかい「ラブ・ハンド」が僕の手の中で熱を帯びているのを感じて、僕の呼吸は乱れます。そして、何も言わずに彼女の視線を捉えると、その唇に優しくキスをしました。

完全に僕に身を預けている彼女をベットに押し倒すと、僕は全身で彼女をむさぼりました。僅かに着ていたものを剥ぎ取り、全感覚を使って彼女の体を蹂躪したのです。

彼女の押し殺したような声が聞こえ、やがてそれはソプラノの合唱に変わっていきました。僕はすかさずギターのピックを手に取ると、エレキギターのコードをアンプに差し込み、彼女に激しいロックをぶつけました。

彼女の美声のキーが上がるにしたがい、僕はピックを操る指をネットクに近づけ、彼女の声に合わせます。そして、激しくかき鳴らす右手に、弦を操る左手が近づき、これ以上ない、もはや右手と左手がぶつかりかけた時、思いがけない事に僕の頭の一人の女の顔が浮かんできたのです。

その人の顔が頭を覆いつくした途端、僕の左手の指がもつれ、押さえてはいけない弦を押さえてしまい、うまくコードが弾けず、音が乱れました。

損名事は分からない彼女が、時々もらす吐息を聞くたびに、よけいに僕の頭の中に一人の女の顔が浮かんできてしまいました。

そして、それに伴い、僕に場違いな疑問が浮かんできてしまいました。

「この女は、俺の大切な人か？」

確かに、僕に組み敷かれているこの女性は、申し分のないルックス、

人気、性格はよく分からないけど、少なくとも僕を好きで、しかも、「ラブ・ハンド」を僕のためにくっつけてきています。この女は世間の憧れの的、皆のスーパーアイドル、何より僕が前から言ってきた最高の「ラブ・ハンド」を持つのです。

どう考えても、誰しもが羨む状況でしょう。

しかし、僕は彼女を目の前にして、なんと頭の中に別の女性がよぎってしまったのです！

「この感情は何なんだ！」

僕は不意にギターを放り投げると、演奏を止めました。

突然の僕の行動に、彼女は声を止め、しばらく訳が分からないかのように僕を見てきました。裸の僕の顔と、下半身を交互に見て、何かを言いたそうにしてしているのが分かりましたが、僕は彼女に何かをいう気にはなれませんでした。どう考えても男としてありえない状況なのは分かりましたが、僕のウッドベースがウクレレになつていくのをどうする事も出来ませんし、その理由を彼女には言える訳ありませんでした。

何も言わない僕を見ている彼女の表情は、だんだんと変わっていき、その目に涙をためると、大きな声を上げて泣き出してしまいました。僕はいたたまれなくなって近づこうとしたのですが、彼女の劈くような声がそれを阻止しました。

「来ないで！！！」

僕は一瞬怯みます。

「近付かないで！！帰ってよ！馬鹿！ホモ！インポ野郎！今すぐこの場からいなくなつてよ！！！」

可愛い顔を激しく軋ませ、思いつく限りの罵声を僕に浴びせながら、彼女は近くにある物という物を投げつけてきました。

僕は置時計やコップなどを避けながら自分の服を持つと、部屋の外に飛び出し、廊下で急いで着替えました。そして、どうしようもない自責の念や彼女に対する申し訳なさ、そして、さつき自分に沸き起こってきた感情にまわり付かれながら、僕はその場から急いで

走り出しました。

ホテルのフロントに行くと、さっきのフロントマンがどうしたのかとかんぐつた表情で僕の方を見ていましたが、僕は早口で車を表に回して欲しいと言ってカードを差し出すと、彼はさっと表情を変えて仕事口調になり、何も言わずに会計をしてくれました。

下を見て作業をする彼には僕が何者なのかは分かっていると思うのですが、彼は僕にそれ以上何も言わず、ただ「至急ご用意いたしました」とだけ言って電話でその旨を係りの人に伝えていました。

その間僕は携帯電話を取り出して、電話帳を操り、ある番号を探していました。携帯の右上には、今の時間が夜中の一時を過ぎていることがデジタル表示されています。

この時間には彼女はまだ起きているはずだ。そう思っているとさっきのフロントマンが僕に声をかけてきました。

「お客様、お車のご用意ができました。正面出口の前に止まっていますので・・・」

彼が最後まで言い終わる前に僕は、

「ありがとう！」

そう言って僕は正面玄関のほうに駆けていきました。

大きなガラス張りのドアが両側を開くと、僕がここにあのアイドルと乗り付けてきたシルバーのコンバーティブルが玄関の照明に照らされながら止まっていて、その傍らに笑顔を貼り付けているドアマンが、車のキーを手にしながら立っていました。

「どうぞ」

彼が僕にキーを渡してきたのでそれを受け取ると、僕は彼にポケットにあつたいくらをかをつかんで渡して、車に乗り込みました。

行き先はもう決まっています。

今までに感じた事の無い焦りと戸惑いと不安が、僕に一拳に押し寄せてきますが、僕にはそこに向かい、そこにいる人に気持ちを伝えなければなりません。

僕はアクセルを踏み込み、3000ccの騒音を立てながらホテル

から飛び出して行きました。

この時間、ここから彼女の家まで一時間もかからないでしょう。海辺にあるホテルから高速に乗り込み、比較的すいている道をかなのりのスピードで飛ばしていきました。コンテナを積んでいるトラック、いかつい走り屋や普通の車が、気持ちが悪る僕の車をふさごとくと躍起になっていて、それを交わそうと僕は彼女に電話をかけるまもなく突き進んでいました。前にいる車を抜くたびに、テールランプがスローモーションで僕の横をすり抜けていき、ぼくの心を騒ぎたたせます。

今から彼女の所に行つて、いったいどうなるのだろうか？

こんな馬鹿な僕を彼女は受け入れてくれるのだろうか？

もしかしたら彼女は家にいないかもしれぬ。

もしかしたら、僕の知らない男と……。

最後の話（前書き）

さあ、ラストです。

いかがでしたでしょうか？面白かったですか？理解不能でしたか？それとも、無関心？

何でもかまいませんので、感想などいただけたら幸いです。

長々付き合っていたいただきありがとうございます。本当に長いです
ね、しかし。

面白かったらいいんだけど。

こんな恋愛ありなんじゃ なんて

では、ありがとうございます！出演者、そして読んでくれたあ
なたに拍手！

最後の話

色々な事が僕の頭の中に浮かんできます。

考えて見れば、彼女に僕が知らないうちに男を作っていたって不思議では無いですし、僕にはそれをどうする権利もありません。

あんなに近くにいたのに、あんなに僕を支えて力になってくれたのに。

僕は最高だと思っていた「ラブ・ハンド」を手に入れた時になって初めて、彼女への気持ちに気が付いてしまったのです。

彼女の為に何かをした事なんて、今まで一度も無いじゃないか。

僕は何て馬鹿な男なんだ。

何で気付かなかったんだろう。

自分で自分を責めながら、彼女の大切さ、彼女への情熱が、堰を切ったようにあふれ出してきました。高速を降りてすぐに、僕は携帯電話を取り出し、彼女の番号を押しました。

ワンコール・・・、ツーコール・・・。

しばらくかけても彼女は電話に出ません。

焦る気持ちと、妙な不安が僕の心を一瞬で席卷します。やっぱりどこ別の所に行っていて、今は家にはいないのでは。今日、バンドはオフの日ですし、明日は来週のツアーの打ち合わせの予定です。

打ち合わせは昼間からの予定ですから、今この時間、どこかの男とどこかに行っていて、何かをしてもおかしくはないでしょう。

そう、僕のように・・・。僕はハンドルを握り、手に持った携帯電話が鳴り出すのを今か今かと思っただけでしたが、一向に彼女から電話はかかってこないようでした。ただ、車は彼女の家に迷わず走っていき、見慣れた風景がフロントガラスから見えていました。

あのコンビニ、あのラーメン屋、あのレンタルビデオや、あの本屋。最近に車を手に入れてから幾度となく彼女を送っていったか知りま

せんが、何でその時に僕は行動に移さなかったんだろうと、流れる景色が僕を攻め立ててきます。

お前は本当になんて鈍感な奴なんだ！何で、もっと早く彼女の大切さに気付かなかったんだ！もう遅いかもしれないぞ！臆病者！夜道に明るく輝く店の光が、僕にそう言っているのです。きつと、ずっと前から僕の心の奥には、しっかり彼女が刻み込まれていたのです。でなければ、あの場面で彼女の顔が現れるはずはありません。僕の本心はずっと前から彼女に満たされていたのです。でも、それを僕の恥ずかしさや、くだらない建前や、「ラブ・ハンド」を持つ女性が一番だなんて馬鹿な妄想、表面上での欲望が大切なものを覆い隠していて、自分の気持ちからも目をそらせていたのです。それが今日まで積み重なって、僕に見えてきたのです。色々なものを感じ、剥ぎ取られて・・・。

僕はもう一回彼女に電話をかけてみました。

ワンコール・・・、ツーコール・・・、スリー・・・、
「もしもし？」

僕の耳に、聞きなれた彼女の声が聞こえてきました。僕ははっと息を呑み、それを吐き出しました。

「北村・・・」

僕は彼女の声を聞いたこと自体に、体の神経が震えるのを感じました。

「今、近くにいるんだ」

北村は、いつもと違う声の僕に気が付いているでしょうか？

「どうしたの？何かあった？」

彼女に返事を返す前に、僕は彼女のマンションの目の前まで乗り付け、ブレーキを踏んで止まると、ドアの窓ガラスを下ろしました。二階の道路側のベランダを見ると、カーテン越しに明りが見えています。北村はどうやら家にいるようです。

「今、家の前にいるんだ」

受話器から彼女が歩く音が聞こえ、すぐに聞こえなくなると、カー

テンから顔を出す彼女が見えました。いつもなら頭の上に髪の毛をまとめていて、お団子状になっているのですが、今は髪を下ろしています。

彼女は携帯電話を耳にくつつけながら、片手でサッシを開けました。

「武士の車が外に見えるよ」

その声を聞く前に、僕は携帯を持ちながら車から降りました。

マンションの脇に生えている、夏の草花の匂いが僕の鼻を突きます。ボンネットに少し体重を預けながら、僕は北村に手を振りました。

彼女は携帯を持っていた手をベランダの手すりに乗せ、僕を見下ろしました。

「こんな夜中にどうしたのよ？」

彼女の声だけが、誰も歩いていない静かな通りに響きます。

「北村！その、何だ。今、大丈夫か？」

僕の声がマンションのオレンジが買ったタイルに跳ね返されて、暗い空に散ります。

「声が大きいよ。夜中なんだから」

「北村！お前、その・・・今ちよつといいか？」

「何でもいいけど、声が大きいよ！迷惑だからさ」

「北村、お前に話があるんだ！」

北村は口の前で慌てて手を振るしぐさをしました。

「馬鹿！何度も名前呼ばないですよ。今降りてくから、大きな声出さないですよ！ちよつと待ってて」

彼女はそう言うのとベランダから頭を引つ込めました。

彼女がここに来るまでに、激しい二拍子を刻む心臓を落ち着けようと、僕は何度も何度も深呼吸しました。生暖かい空気を吸い込み、鼻からゆっくり出すのですが、まったく落ち着く事など出来ず、手は汗で滲みまですし、張り裂けそうな胸は押さえが利きませんでした。今になって、自分が女の人に本気になって告白し様としている事が頭が理解してきて、僕の冷静な部分がしきりに警鐘を鳴らしていました。

お前は幼馴染に告白しようとしてるんだぞ！

北村がどんな顔するかわかるか？

大体、女の子を抱こうとした後に、北村に会うなんてどんな神経してるんだ！

いくら自分が好きでも、北村が自分の事をどう思ってるかなんてわからないだろう！

僕は星のない夜空を見上げながら大きく息を吐き、マンションの入り口の低い階段に、腰をかけて彼女を待ちました。

「武士！」

十分位した後、僕を呼ぶ北村の声が聞こえてきました。僕はすぐ反応して、立ち上がり彼女がいる所まで歩いていきました。

「お、おう！いきなり悪いな。寝てた？」

僕は彼女の一メートル手前くらいから、いつもよりぎこちない感じでした。彼女がぬれた髪の毛をいびつにまとめていて、Tシャツにショートパンツ姿で、白くてほっそりとした足の先には赤いサンダルを履いていました。

「うん。お風呂に入ってた。出てみたら着信があったの気付いたんだけど、電話しようとしたら、あんたからかかってきてさ」

彼女はシャンプーのいい香りを漂わせながら、僕のそばを通り、僕の車に近づきました。「そっか・・・」

僕は彼女の後に従いました。とっ、僕が一步踏みだした所で彼女は振り向き、僕の前で止まったので、僕らはぶつかりそうな位に近づきました。

僕の胸のすぐ近くから、彼女が僕を見上げてきます。

「話って、何？」

僕は彼女の綺麗な少し茶色が買った瞳を見つめながら、一つ、二つ間を置くと、彼女の腕をつかんで、車のほうに連れて行きました。

「ちよつと、車に乗ってくれ」

僕がそう言つと、彼女はいぶかしそうな顔をしましたが、黙って助手席に乗り込みました。彼女が乗ったのを確認すると自分も車に乗

り込み、横でじつと僕を見つめている視線を感じながら、キーを差し込むとアクセルを踏みました。

勢いで北村を車に連れてきたのはいいのですが、何を喋ればいいかなんて頭にはありません。

ただ、答えは分かっているのです。

彼女の事が好きだといえいいだけですから。

でも、二人きりになれたのにもかかわらず、いや、逆に二人きりになってしまったからこそ、思うような言葉を見つけれませんでした。

だから、僕らはしばらく何も喋らず、車も人通りも少ない夜の道路を走っていました。それでも、五分以上も沈黙のままの空気に、とつともなく不満そうに眉間にしわを寄せる北村の顔に、僕は耐えられなくなつて口を開きました。

「今日、何してた？」

僕のぜんぜん方向外れの言葉は、北村の眉間の皺も、この空気も和らげはしませんでした。

「別に、弟が昼ご飯一緒に食べようって言ってきたから、三人で駅中のガレット屋さんに行つてきたよ」

彼女はそう言つと、カーステレオをいじくりました。

「三人？北村、隆俊君の他に兄弟いたっけ？」

北村には大学を卒業したばかりの弟がいて、こっちで暮らしているのは知っていました。

「それが生意気に彼女連れてきたのよ。何か私に紹介したかつたみたい。私も結構有名になつたみたいで、彼女が会つた時ビックリしてたよ。私もファンですー！とか何とか言つてはしゃいでた」
そう言つと、彼女は軽く笑い声を上げました。

「まあ、いきなり彼氏のお姉さんがミュージシャンだつて分かつたらビックリするよ。この前さ、お袋が近所の高校生が家によく来て困るって言つてたもんな。それに最近じゃあ、何かと周りもうるさいし」

僕はハンドルを左に切って、広い通りに出ました。

「おばさん、私にも言ってた。何か、愛子ちゃんがテレビに出てるなんて信じられないってさ。うちの親なんか未だに有名になった自分の娘が許せないみたいだけどね。何の相談もしなかったって。武士のおばちゃんの方が物分りよくて好きだな。私がテレビで可愛く映ってるって言うてくれるし」

僕は、遠くを見ながら目を笑わせている北村の横顔を、じっと見つめて頷きました。

「俺もそう思うよ」

その言葉に、北村が反応して、いぶかしげな目を向けてきます。

「あんた、私達のバンドが出たテレビは見ないんじゃないの？」

僕は慌てて取り繕うかのように、言葉を繋げました。

「いや、その、俺が言いたかったのは、うちのお袋が物分りがいいってことの方」

僕は思ってもいない言い訳を、とっさに口にしてしまったことに後悔しました。

こんな取り繕い方じゃあ、僕が北村のことを可愛くないと思ってると感じてしまいます。でも、それは取り越し苦労のようでした。

「そうよね。あんたがしょうもない冗談言ってくるかと思っちゃった。確かに、おばさんは最高に物分りがいい人。何でも受け止めてくれるもん」

「そうかなあ？」

「あんた近くにすぎで気が付かないだけよ」

「……でも、実家なんて、ここ一年ぜんぜん帰ってないぜ」
北村は少し寂しげな表情を浮かべました。

「それは私もそうよ。今日の夜もお母さんから電話が来たよ。いつまでバンドなんかしてるんだって、お父さんが言ってるって。うちの親、警察官でしょ。硬いのよ。もう、二十五になるんだからってさ。それに……」

北村が、途中で口を閉じました。信号が赤で止まっていたので、僕

は彼女の顔を見ました。

「それに、どうしたの？」

彼女は僕の方をチラッと見て、また前を向き、ボソツとしゃべりました。

「いい人いないのかってさ」

僕はチャンスとばかりに、息んだのですが、後ろからクラクションを鳴らされてしまいました。いつの間にか、信号が青に変わっています。僕はあわててアクセルを踏み込みました。僕も彼女もシートに一瞬押し付けられます。僕はそのままスピードに乗って、道なりに車を進ませました。一瞬の気まずさが、僕らの間に会話を取り上げてしまい、車内はまた沈黙に包まれてしまいました。でも、そこはやはり僕から彼女に話しかけます。

「いるの？」

突然の僕の言葉に、彼女はピックと首を動かします。

「え？」

「だから、いい人だよ」

その時の僕は、軽い感じで言葉を発しましたが、内心では本気の気持ち溢れていて、もっともっと突っ込みたいという気持ちを必死で抑えていました。

北村の目が車道のライトに照らされて、きらつと光りました。そして、それがまぶたに閉じられます。

「うーん」

彼女は伸びを刷るかのようにシートに体を寄せます。

「いるのか？」

僕の中の叫びが、少し顔を出します。

「まあ、いいじゃない」

「よくないよ」

僕の叫びは、いまや首まで出掛かっています。

「何よ。そうだ。そう言えば、あんた話があるんじゃないの？
そうよ。話があるからここにいるんじゃない。何？何があったの？」

北村はいきなり話題をひっくり返してきて、僕を追い詰めるかのように言葉を迫らせてきました。北村が興味津々の顔をしてこちらを覗いてきます。

僕は改めて自分の目的を気付かされて、急に隣に北村がいるこの状況がリアルに感じられて、黙って前を向いてしまいました。

「何よ？悩みがあるの？言ってみなさいよ。詩が書けなくなったとか？」

僕は彼女の言葉に大きく首を振ります。

詩が書けなくなる事くらい、なんだって言うんだ！

「違うの？じゃあ、やつぱりあれでしょ？」

僕は彼女の顔を凝視します。え？彼女も僕の気持ちに気が付いていたのか？

「最近のメンバーに対する不満でしょ？私も気になってはいたよ。このところ、じっくり言っていないというか、あの三人、変わったよね」

僕は大きく溜息をつきました。メンバーなんてどうでもいいんだ。君さえいれば！

「え？違うの。それで悩んでいるかと思ったよ。その話かと思った。違うの？じゃあ何？髪の毛が薄くなってるって悩んでるとか？」

「そうじゃない！」

僕はたまらず声を大きくしてしまいました。彼女がビクとなってそれから僕の顔を凝視してきます。

「じゃあ、何よ！」

「俺、好きな人、好きな人ができた」

彼女が息を呑むようにして驚きます。

「だ、れ？」

僕は大きく息を吸い込み、そして声にしました。

「きたむら」

「え？」

彼女が一瞬きよとした表情になります。

僕はすっかりと彼女の方に向き、彼女の瞳をしっかりと見つめて口を開いたのです。

「北村！俺、お前の事が好きだ」

彼女は僕のその言葉を聞くと、体を硬くしてシートに張り付きました。でも、僕の方は走り出した気持ちがいちまっせません。

「今まで色々な事が会って、それで、気が付いたんだ！お前は俺にとって大切な人だって。お前が傍にいてくれた事で、俺がどれだけ救われてたかって事に、今更だけど気が付いちまったんだ」

僕は一つ息を飲んで、そして言葉を吐き出しました。

「俺、本気でお前の事が好きです」

僕はハンドルを握り、遠くにいるトラックのテールランプを視界に入れながら彼女の顔を見ないでそう言いました。すると、耳にか細い一筋の声が入ってきました。

「・・・」

「え？」

「止めて！」

北村が体を震わせています。

「え？」

「今すぐ車を止めて！」

彼女の声が車内いっぱい、僕の耳が吹き飛ぶくらいに張り裂けまします。僕は慌ててブレーキを踏みました。タイヤが道路と急激にこすれあい、車体は音を立ててきしみ、僕らはかなり前のめりになって、その場に止まりました。

後ろに車がいなかったのが幸いというしかありませんが、僕が無意識見後ろを確認する間に、北村はシートベルトをはずしてドアを開けていました。

「お、おい！」

僕が言葉をかける前に、北村はドアを大きな音を立てて閉め、車から出て行きます。僕は慌てて車を歩道に寄せて車を止めると、急いで彼女の後を追いかけてました。

「北村、待てよ！」

僕の声に、彼女は振り向きました。十メートルはあろうかという距離をはさんで、北村は立ち止まり、僕の顔を見つめてきました。

「どうし・・・！」

僕が言葉を発しようとしたとたん、彼女は突然走り出しました。

それに釣られて僕も走り出して、走って逃げ出す彼女を追っていきま

した。道路に設置された照明が、道路沿いの歩道を走る二人の影を作り出します。走り去る北村の背中を追って僕は全力を出しますが、彼女もかなりの速さで走っているのですぐには追いつくことができません。

いったいなんであいつは走り出すんだ？それに、俺もなんで走っているんだ？

俺達いったいどこに向かっているんだ？息を弾ませながらそんな事が頭に浮かんでできます。

アイドルとデートする為に着ていたブランド物のオーダーメイドスーツが腕を振るのに邪魔をしてきて、一着四万円もするYシャツに汗が滲んでいきます。道路に足を踏みつけるたびに、イタリア製の革靴が不協和音を出して、僕の脚速を乱すと、北村は急に曲がりだし、どっかの敷地に入っていきました。

僕はこの日のために新調したシルクのネクタイを首から剥ぎ取るとその手で投げ捨て、スーツの上着も投げやって彼女の後を追いました。

北村が入っていったのは芝生がかなり広がっている公園で、昼間だったら赤ちゃんを連れのお母さん達や犬の散歩に来る人達、子供たちやジョギングをする人達でいっぱいのもその場所も、この時間には誰一人いなくて静まり返っていました。

そこを照らす明かりは、何本か立っている電燈のものしかありません。北村はその芝生の上を入り口からまっすぐ走っていました。芝生に入った彼女は徐々にスピードが落ちてゆき、彼女の荒い息使

が僕の耳にも聞こえてきます。僕は全身を奮い立たせ、太ももの筋肉を全開にして彼女に追いつくと、彼女の動く腕を掴んで、それでも尚前進する体を引き止めました。

「離して！」

女性の高い声が、静かな公園中に響きます。

「離さない！」

僕は息を弾ませながら、北村を自分の体に引き寄せました。

途端に、僕の顔、正確には左ほほに衝撃が走ります。

北村が肩を上下させながら、息を弾ませています。後ろに纏めてあった髪の毛も、今は解けて広がっていました。

「ばか！」

北村は大きな声でそう言いました。僕は曲げた膝に片手をつき、左ほほをさすりながら北村を見ました。

「ばか！ばか！ばか！ばか！」

北村は繰り返すという、涙声になりました。

「何で、あんな所であんな事言い出すの！夜中に来ていきなり連れ出して、いきなり車に乗せて、いきなり告白してきて！信じられないよ！」

僕は上半身を起こし、肩で首を流れる汗をふき取りました。

そして、北村の傍にそっと寄っていききました。

「私、こんな格好だし、お化粧だつてろくにしていな、気持ちの準備だつてしてきてないのに！」

彼女はそう言うと、ぼろぼろ涙を零しました。僕は彼女の前に立ち、優しく両肩に手を触れました。

「髪だつてばさばさになっちゃったし、泣いちゃってるし、どうしてあんたはいつもそうなの？」

僕は彼女の髪を軽くかきあげ、彼女の顔をよく見えるようにすると、涙で一杯のその頬を親指でぬぐいました。

すると、彼女は子犬のような目で僕を見てきました。

「好きだ」

僕は彼女の睫毛にキスするように彼女の目を見つめて、そう言いました。すると、彼女は鼻を噉って、視線を下に向けてると、唐突に口を開きました。

「何で？」

「何でって、俺は自分の本当の気持ちに気がついたんだ。大切な人は誰でもない、君しかいないんだ」

彼女は目を伏せたまま、また聞いてきました。

「何で？」

「俺の事分かってくれる女は、お前しかいない」

僕がそう言つと、彼女は、僕の胸を思いつきり拳で叩きつけてきました。

「私は何でって聞いているのは、どうして好きな人に告白されるのに、こんな状況なのかって事！もっと色々考えなかったの？レストランに連れて行くとか、夜景を見に行くとか、ロマンチックな演出は色々あるのに、どうして深夜いきなり車に連れ込んで、いきなり告白してきたのよ？」

僕の脳味噌は、その言葉の意味を瞬時に読み取ることができませんでした。そんな僕をしり目に、彼女は小さく笑顔を作っていました。「ほんと、私じゃなかったら、絶対断られてるよ。」

北村は僕の腕の中でそう言ってきました。その目はもう泣いていません。

「え？それって・・・」

「大馬鹿男」

「俺の事、好きって事？」

「バカ、もうほんとバカ！・・・そう言ってるじゃん」

「ほんと?!」

僕の顔の下から見上げる北村の目が、一直線に僕を捕らえて離しません。

彼女は僕の胸に頬を押し付けてきました。

「私も、武士の事、好きだよ」

彼女の鼓動の高鳴りが、僕の皮膚を伝わって、僕の鼓動と重なります。

「ずっと、好きだった。初めて会ったとき、そう、小学校の時から・・・長かったな」

「長かったな」彼女が最後にそう呟くように言うと、僕も同じ気持ちが出てきました。僕も彼女の事に気が付くまでずいぶん時間がかかったし、色々な事を経験してきました。こんなに近くに大切な人がいたのに、それに気が付くまでどれだけ遠回りをしたのでしょうか？

「ねえ、私でいいの？」

顎の下から、彼女が不安を僕にぶつけてきます。

「私、その、武士の好きな『ラブ・ハンド』ないよ」

僕は体を少し離し、彼女の顔を自分の顔の正面に向けました。そして、彼女の不安そうな目を打ち消すように見つめます。

「俺の最高の『ラブ・ハンド』は、お前のだ」

彼女の目が輝き、顔の表情が柔らかく崩れます。僕も自分の気持と自分の言葉が、真に一体となって口から出てきた事が嬉しくなり、勢い感情が高ぶります。

「一生、俺だけの『ラブ・ハンド』でいてくれるか？」

僕がそう言うと、彼女は大きく頷きました。そして、嬉しさを押しさえられない表情を貼り付けている僕に、しっかりとその身を寄せてきました。

彼女の体の温もりを、僕はこの両腕で力いっぱい受け止めます。

そして・・・、僕は、彼女の両方の腰の肉を親指と人差し指で摘みました。

すると、彼女の見た目では想像させないようなその柔らかい触感が、僕の指先からダイレクトに脳みそに伝わってきます。

がッン！！！！！！

それと、同時に僕の顎に衝撃が走りました。北村が僕から体を離し、一瞬きりつとした目を僕に向けると、すぐに笑顔になって、顔先で人差し指を立て左右に振りながらこう言ってきました。

「ほんと女心が分かってないね。でも・・・好きだよ」

それから僕達は、来た道に戻ってゆきました。

助手席に座る北村は、いつもの北村だけど、運転席の僕は、いつもの僕では無くなっています。彼女の横顔が、これほど眩しく見えた事があつたでしょうか？

そんな僕は、彼女の部屋に着くなり、今度こそ最高の「ラブ・ハンド」を今までの分を取り戻すかのように堪能しました。それはもう、二十年分！

北村の部屋の窓から朝日が顔を出し、部屋中を照らし出しています。僕は欠伸をかみ殺しながら、まだ寝ている北村のお腹に顔を乗せ、最高の「ラブ・ハンド」がどんなものであるかを頬で感じながらテレビをつけると、テレビからアナウンサーの声が聞こえてきました。「今、全米で『ラブ・ハンド』現象が巻き起こっているというレポートがN・Yから送られてきましたが、今度はヨーロッパからの報告です。パリの根本さん、よろしく願います！」

僕はテレビを消すと、また北村のお腹の上で、至福の時間を過すのでした。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3230i/>

ラブハンド

2010年10月28日08時30分発行